

# ドラゴンクエスト9 AngelsTale2

彩波風衣

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

以前こちらで連載していたDQ9小説の続編です。

内容としては配信クエストにオリジナル設定やストーリーなどを絡めて長編らしく仕上げた話です。

フィリスたちの物語を、もう少しだけ見守ってくださいませ。

pixivにもあります、こちらもどうぞ！

(<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=1247728>)

## 目次

00	「あれから」	1
01	「再会の海」	9
02	「リツカと夢の宝物」	21
03	「王の悩み」	32
04	「ルイーダの秘密」	42
05	「ふしぎな宝石の謎」	54
06	「ロクサーヌのお願い」	66
07	「謎の古文書」	80
08	「セントシュタインとルディアノ」	91
09	「ルディアノ会合」	101
10	「真相への道」	113
11	「国の罪」	124
12	「未来への道」	135
13	「ベクセリアの真実に近づく」	142
14	「名もなき王の怨」	150
15	「王よ、眠れ」	159
16	「ガナンとベクセリア」	169
17	「地図を求めて」	177
18	「宝石のチカラ」	187
19	「サンデイせんぱい？」	197
20	「カデスの星をめぐる」	205
21	「妖精の伝」	214
22	「ある女の謎」	224
23	「世界の命運をかけた戦い」	235

24	「衝撃の真実、ここに」	245
25	「星ふぶきの夢」	254
26	「宿王をめざせ！ 前編」	264
27	「宿王をめざせ！ 後編」	274
28	「旅を続ける理由」	285
28	「旅を続ける理由」	297
29	「泉にて」	309
30	「語り部の語る乙女」	319
31	「竜の涙をもとめて」	328
32	「微睡みの魔獣」	338
33	「竜もどき・アルマトラ」	349
34	「グビアナの動乱」	358
35	「地図をめぐつて」	372
36	「草原は暗雲に包まれて」	382
37	「まだ、すべきこと」	395
38	「伝える思い」	406
38	「伝える思い」	417
39	「女神の祈りと破壊の神」	428
40	「破壊の神を討て」	440
41	「星は、またたく」	451

## 00 「あれから」

それは、一人の天使の物語でした。

天使はとーっても高い高い空にある、小さな世界に住んでいました。

天使たちは人には見えないけど、人のために働いていました。

人の「ありがとう」の気持ちのために、人のために働いていました。

その一人の天使も、例外じゃないです。

そしていつしか。

その一人の天使は、世界のために戦うことになったのです。

天使から人間になって、世界を救うために戦ったのです。

天使であることをすてて、人間にならないと、世界のために戦うなんてできなかつたから。

だから、その天使は人間になったのです。

世界のために。

もう、その天使は人間で、天使はみんななくなっちゃったから。

だーれも、天使のことを知りません。

だから、この戦いや運命があつたことなど、誰も知りません。

さて、それから……どれほどの月日が経つたのでしょうか？

昔話………あるいは、伝説になっているかもしれない。

でもね、実は。

まだ、半年しか経っていないって知ったら………

あなたはどうするの？

賑やかで安定して発展を続ける平和な国、セントシユタイン城。

そこにはひととき大きな宿屋が存在しており、そこには各地からいろんな人が訪れるという。

「……………さて、とーちやくつ！　ここがセントシユタイン城で一番の宿屋ですよっ！」

水色の髪をひとつに束ねた少女が、老夫婦を呼ぶ。老夫婦は、目的の場所に到着できたことに安心しているようだった。

「ふう……………ようやくたどりつきましたねえ……………無事にここまでこられたのも、この人達が守ってくれたからね」

「ありがとうのう……………」

そういつて、老夫婦は宿屋に入つていった。その後ろ姿を見送つた少女は、満足げに笑っていた。

「護衛は完了……………つと。　今回も任務完了といったところだな、フィリス！」

「ああ」

「おじいさんとおばあさんを無事に送り届けることができ、よかつたわね」

「そうですね」

水色の髪に赤い瞳の少女、その名前はフィリス。　剣術の腕は天下一品。　男勝りで気は強いが、同時に強い正義感と他者を思いやる勇氣と優しさを持っている。

金髪に青い瞳の男性の名前はイアン。　己を鍛えることと、その力で仲間を守り抜くことを信条としている武道家である。　その竹を割つたような兄貴肌で、このパーティを支えている。

桃色の髪に紫の瞳の少女はクルーヤ。　その魔道の才能は並大抵のものではなく、魔力を自在に操るのを得意とする。　また、明るく人なつっこい性格から多くのものに好かれる。

緑色の髪に茶色の瞳の青年はセルフイス。　礼儀正しく、信心深く慈愛に満ちた少年であり、その真剣かつまじめな姿勢から、賢者とし

て認められている。

「じゃあ私達もこのまま、この宿屋に入っちゃいませよ」

「そうだな……ここにくるのも久しぶりだし、リツカ達に顔を合わせ  
ておくのも悪くねえだろ」

この4人はある目的の元にあつまり、この世界を旅してきたのだ。  
そして、今も旅の傭兵や何でも屋という名義で旅を続けながら、依  
頼を聞いては困っている人達を助けているのである。

今日の依頼は先ほども言ったとおり、ベクセリアの町から老夫婦を  
無事にこの町まで護衛することなのである。

「この宿屋も、以前にもまして賑やかになってきているみたいですね」  
「元気にしてるかしらっ」

そう言つて4人はその宿屋に入っていく。その宿屋の受付には、  
赤いバンダナを頭に巻いた、ファイリスと年の近そうな少女が挨拶をし  
てくる。

「はい、いらっしやいませ……あ、ファイリス！」

「よ、ひさしぶり〜！」

「あらファイリス、久しぶりね」

そして、隣にいた青い髪の女性もファイリスに声をかけてきた。

二人の顔を見たファイリス達は、笑顔を浮かべて彼女達に声をかけ  
る。

「久しぶりだね、リツカにルイーダさん」

バンダナの少女はリツカ、このセントシユタインの宿屋の若女将に  
してファイリスの親友である少女だ。まだ年若いものの、非常に働き  
者であり、彼女の営業しているこの宿屋は細部まで気配りが行き届い  
ており、非常に評判がいい。

そして、青い髪の女性がルイーダ。この宿屋にある酒場を切り盛  
りしては多くの冒険者から情報を集めたりアドバイスを送るのが仕  
事である。今ファイリスのパーティが完成し共に歩めるのも、才能を  
見抜く能力に長けた彼女の手腕によるものである。

「このところ顔を見せたり手紙も届かないから、なにをしているの  
か……って気になっていたところよ」

「わりいなルイーダさん、オレ達まだ旅を続けてるもんで……手紙とかそういうの忘れがちなんスよ」

「……………とはいえ、噂は届いているわよ」

噂？ とファイリス達が首を傾げると、ルイーダはクスクスと笑いながらその噂の内容を説明する。

「最近、世界を旅する4人組が色んな人から依頼を受けて、多くの人々を助けている……………って噂よ。私、その話を聞いたとき……………貴女達のことだつてすぐにピンときたわ」

「……………カンがするどいことで」

「だつてそういうことができる人達つて、貴女達ぐらいなものでしょう？ それに加えて腕もたつていうんだから、なおさらよ。あのパーティ編成をオススメした時からかなりの時間が経過したとは思っていたけど……………ここまで成長するとは、さすがの私も想定外だつたわ」

その話を持ち込まれ、4人はこのパーティ編成になったときのことを思い出した。ずっと一緒にいたから忘れていたが、このパーティ編成になったことは成り行きであったことや、あれから随分な時間が流れていたことを、改めて実感する。

「……………そっか、もうそこまでの時間が流れたんだっけ？」

特にファイリスには思うところがあつたようだ、そう返事をした。

そしてすぐにリツカに話を向けてこの宿屋に泊まりたいと頼む。

「そうだ、リツカ。あたし達もこの宿屋に泊まりたいなつて思うんだけど……………部屋つてあいてる？」

「あ、うん！ ちようど4人用の部屋があるけどそこでいい？」

「おう、頼むぜ！」

そうして4人は宿屋にチェックインをすませた後、リツカが用意してくれた部屋に集合して休息をとることにした。

「次はどこにいきましょうか？」

「そうだなあ……………久しぶりにウォル口村までいくのも、いいんじゃないか？ あそこも最近どうなったか気になるしさ」



そのとき4人で話し合うことはといえば、この旅の次の目的地のことである。特にこれとつて目標はないが、自由に世界を渡り歩くことをただ楽しむのが、今の彼らの旅のスタイルである。

「まあ、どこにいらおうとも……リツカはいつも通りに、あたしを迎え入れてくれる……ホントにありがたいことだよ」

「だな……ありがたいぜ」

そして、フィリスはベッドに寝ころびつつ、ふとあることを思い出す。あのとときのルイーダの言葉が、急に思い出を振り返りたくなる……ある種のキツカケであったかのように。

「にしても」

「ん？」

「あたしが人間になってから、もう半年しか経ってないなんて……ウソみたいだ……つい最近のように感じるよ」

実はフィリスは、見た目は10代の少女のように見えるが、実は人間ではない。その正体は、この世界を人知れず守り助けてきた神に誓い存在……翼と輪を持つ守り人の一族……天使なのだ。だが、今の彼女はそのどちらもない。ある事件に巻き込まれて天使の翼と輪つかを無くし、以降は人間の姿で旅をしていたのだ。その最中に出会い運命をともしることになったのが、今の仲間達だ。

「……しかし、天使界と天使……この世界から消えてなくなっただけじゃなく、誰もその存在を覚えていないなんて……驚いたぜ……」

「イアンツ！」

「……つと、わりい……流石のオレも無神経だったぜ……」

「気にするなよ、事実なんだってあたしもわかってるしさ」

そして、多くの運命が絡まっていく中。フィリスはこの世界を滅ぼそうとする巨悪と戦うことになった。しかし、そのためにはフィリスは天使としての自分を切り離し、人間にならねばならなかった。

その選択に対し、フィリスは巨悪と戦うことを選んだ。彼らの協力もあって、フィリスはその巨悪を打ち破ることができた。ただ、その代償として自分は天使ではなくなり、彼女の仲間である天使も故

郷である天使界も、すべて夜空に輝く星となったのである。

「ですが、僕は……」

「セルフィスも、気にするなって。あたしはここにいる仲間達だけでも……あたしをわかってくれれば十分だ」

それだけではない、この世界の人々の記憶から天使が存在していたことに関する記憶や伝承が、すべてなくなっていたのである。旅の中で各地にある天使像からも天使の名前は消えていた。まるで最初からなにもなかったかのように。人々はその像が存在する理由もまったく覚えていなかった。

「まあ問題はないさ、元々守護天使って……信じる人と信じない人つてのはまちまちだし……あたしはまだ、どこで落ち着けばいいのか……わからないだけだしな……」

「……ファイリス……」

それゆえ、今天使と呼べるような存在は、ここにいるファイリスだけである。彼女とともに道を歩んできたイアン達はふつうにファイリスが天使であることを知っており、かつ記憶は残っている。だがそれで運命が変わることはないし、誰も天使のことを思い出すことや興味を示すこともないだろう。自分達がそれを語ったところで、ただの作り話でしかないと思われるのがオチだ。

「……なーんてな。あたしは旅は好きだから、ずっと旅をしてたってかまわねーし！」

「……そっか」

「ほらほら、あんたらもヘンに暗い顔するなよ！ どうあろうとも、みんなはあたしと一緒にきてくれるんだろ？ だったら明るく前向きになっっていこうぜー！」

「……そうですね、暗い顔は悪運を引きつけます。だったら貴女のご意志にあわせて明るくならねばなりません」

「あはは、ホントセルフィスって真面目だなあ！」

そんなファイリスのために、イアンもセルフィスもクルーヤも、彼女と旅をし続けるという道を選んでくれたのである。彼女がこのパーティのリーダーであることで、3人はそれぞれで彼女のためにで

きることをする、従うことを決めている。だから今も、フィリスが明るくいこうと声をかけたことで明るさを取り戻したのだ。

「ねえ、フィリス……リツカだけど、今大丈夫？」

「ん？ リツカ？」

そんなとき、この部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。ノックした相手は、リツカである。

「どうしたの？」

相手がリツカだったので、フィリス達は迷い無く扉を開けてリツカと向かい合う。そのときリツカはその手に、少しだけしわくちやな手紙を持っていた。

「さっきね……この手紙を、ツオの浜にいるトトって男の子に届けたいっていう人が泊まりにきたの。私が届けてあげたいところだけど、ツオの浜がどこにあるのかわからないし、ここを離れるわけにもいかないんだ」

「へえ」

「でも、世界を旅してきたフィリスだったらその場所がわかるかもしれない。だからこのお手紙を……ツオの浜にいるトトって男の子に渡してほしいの。いいかな？」

「なんだ、そういうことなのか」

リツカがなぜこの時間に自分達を尋ねてきたのか、その理由に納得したフィリスは笑ってうなずく。

「いいぜ、この依頼……あたし達が引き受けるよ。ちょうどツオの

浜も、トトって男の子も知っているしな！」

「ありがとう！ じゃあお願いね！ そのためにも今夜はゆつくり……おやすみなさい！」

「ああ、おやすみ！」

リツカもフィリスが依頼を受けてくれることに安心したらしい、笑顔を浮かべて彼女に手紙を託し、立ち去っていった。

「次の依頼、きたな」

「ああ。ま、退屈しなくていいけどな」

「それなら、明日に備えてもう寝ちゃいませよ！」

そう4人は次の目的地をツオの浜に決めて、明かりを消しそれぞれのベッドで眠りについた。

「ツオの浜か……懐かしいな」

「オリガちゃんも元気にしてるかしら……」

「会えたらいいですね」

「……………そういや、ツオの浜に流れ星が落ちた……つて噂があるのを聞いたな……」

「ふーん？」

「……………お前あまり感心しめてねーな……」

イアンが酒場で聞いたという噂話をフィリスは適当に聞き流しながら、眠りについた。明日また、自分たちに届いた依頼を果たすために。

## 01 「再会の海」

フィリス達はリツカの依頼を受けたことにより、ツオの浜を訪れていた。一度訪れたことがある場所であるため、ルーラの魔法で一瞬でくることができた。

「お手紙をありがとう、フィリスさん」

「無事に届けられて、よかったよ」

リツカの依頼それは、ツオの浜にいる少年トトに宛てた手紙を預かったから、それを自分の代わりに届けてほしいというものだった。前途の通りフィリス達はツオの浜には行ったこともあるし、トトという少年のことも知っているから、その依頼を引き受け、そして今、その手紙をその少年に届けたところなのである。

「この手紙の内容あまり大きな声でいえないし、パパにも教えてあげられないけど……でも、大事にするよ」

「……そうか……」

その手紙を見たトトはそれだけを言った。フィリス達は自分達は役目を果たしたこともあって、それ以上は深くは関わらなかつた。

「そうだ、オリガに会ってあげてよ。きっとフィリスさんの顔を見たら

、喜ぶと思うよ」

「ああ。せっかくだから、オリガのところにも寄っていくよ」

「またね！」

「またな」

そう言葉を交わし、トトと別れたフィリス達はある少女の元へ向かった。彼女の家に向かうところには、その少女の姿があった。

「やあ、オリガ」

「あ、あなた達は……あのときの……！」

その少女は、オリガ。フィリス達は旅のさなかで彼女と出会い、このツオの浜での出来事を解決させたのだ。その後オリガはこのツオの浜で、漁師として生きることを決めたのである。

「お久しぶりです、みなさんお元気そうですね」

「へへ、まあな。 オリガも元気にしてたか？」

「はい、まだ見習いで失敗ばかりですけど……あたし、みんなと一緒に漁にでるようになったんですよ！」

「へえ!? そいつはすげえや！」

自分達と別れてからオリガがどうしていたか、今はなにをしているのかを知ったフィリス達。 そうして懐かしさ故に思い出話をしていた一同だったが、そこでオリガはふとある話をフィリス達に持ちかけてくる。

「それで、フィリスさん達に聞いてほしい話があるんです……」

「話？」

「はい」

オリガは真剣な顔をしながら、海にでたときに見かけた、あるものについて話し始めた。

「実はあたし……漁にでたとき……海の中に大きなカゲをみたんです」

「大きな、カゲ？」

「あれはきつと、本物のぬしさまだと思うんです。 もしそれが本物ならあたし、どうしても……その本物のぬしさまに会ってみたいんです！」

本物、とわざわざ言っているのは、彼女達は以前にぬしさまと出会ったときのことがあるからだ。 だがそれは、女神の果実の力によりぬしさまと化した、オリガの亡き父だったのだ。 その時のことを話を聞いて思い出し話をする。

「前のぬしさまは確か、オリガちゃんのお父さんだったのよね……」  
「うん」

「……もしかして……話っていうのは、あたしにそのぬしさまを探す手伝いをしてほしい……というわけなんだな？」

そうフィリスがオリガが自分達になにをはなしたかったのかを悟り、そのことを問いかけると、オリガは眉を下げる。

「……すみません、その通りなんです」

「そっか、ならいいぜ！ 引き受けてやるよ！」

そうしてフィリス達は、ぬしさまにオリガを会わせるという依頼を引き受けることにした。そのためにも、まずはどうすればぬしさまに会えるのかその方法を探し出す必要がある。

「なんとかして、ぬしさまに会う方法を見つけましょう」

「お願いします」

「まかせときな！」

そして、数時間後。

「ぬしさまを呼ぶスタイルって、こんな感じでいいのよね？」

「ああ、そしてそれを身につけるに相応しいのは……クルーヤだな」

「確かに似合ってますものね……」

様々な情報を集めていった結果、かつてこの村でぬしさまの巫女をつとめていたという老婆の霊から、ぬしさまを呼べるかもしれないと、呼び方を教わった。

「旅の間でも思ってたけど、お前……幽霊はふつうに見えるんだな」

「みたいだな……あたしって天使とか人間の前に……元々そつちの力が強かったのかもしれない」

その老婆の霊から話を聞いたのは、フィリスだけだった。彼女はもう天使ではないが、死した魂をその目に見たり話を聞いたりすることができるようだ。事情を知っているイアン達は、その情報や話を聞いているフィリスの様子を見てもすんなりと信じられるし受け入れられる。だがなにも知らない人が見たら引く光景だろう。

「ここで、いいんだよな？」

「ああ、見晴らしもいいことだしな」

とりあえず、呼ぶ方法として教わったことといえば、みずのはごろもにうみなりの杖、そしてみかがみの盾を身につけて、見晴らしのいい場所で祈れというものである。それらの装備はクルーヤが身につけることとなった。そして、ぬしさまを呼ぶ場所としては村長のプライベートビーチが選ばれた。

「じゃあ、あたし……ぬしさまを呼んでみます」

「わたしは、そのそばに立ってみるわ」

そこにフィリス達とオリガが集まり、ぬしさまを呼ぶ体制に入る。まずはオリガが全員の前にでて、膝を折り祈りの言葉を口にする。

「……………ぬしさま。もしおられるのなら……………お姿をお見せください……………」

オリガがそうつげ、クルーヤも祈りの体制に入った直後のこと。

大きな水しぶきがたち、大きな魚のようなものが海から飛び出した。

「うおおお!?!」

「まじで出てきたかつ!」

その姿にはハッキリと見覚えがある。以前に遭遇したぬしさまと同じだ。ということはこのぬしさまは本物だろう。彼らがそう確信を得たその時だった。

「グルル……………グルルルル……………」

「な、なんだ!?!」

「こ、これは……………少し危ないかも……………?」

目の前にいるぬしさまはうなり声をあげており、こちらに今にも飛びかかりそうな勢いが伝わってくる。それで一同は身の危険を感じた。

「グルアアアーツ!」

「きやあああ!!」

「うわあああ!?!」

うなり声をあげながらぬしさまは飛びかかってきた。それにたいし一同は驚きの声を上げつつも、オリガを守るようにしながら戦闘態勢に入る。

「スクルト!」

先頭に立ったフィリスがぬしさまの攻撃を盾で防いでいる間に、セルフィスはスクルトで仲間達を包み込み防御力をあげる。そしてイアンはぬしさまに突っ込むと拳をたたき込んだ。

「ぐえ、かた!?!」

その皮膚はかたく、イアンも驚く。その一撃はぬしさまにはさほど効いていないようであり、ぬしさまは平然とした様子でイアンに



タツクルをしかけて吹っ飛ばしてしまう。

「うおおお!!」

「イアーン!」

すぐにイアンはフィリスが受け止め、セルフィスとクルーヤがその隙にイオナズンを放ってぬしさまを攻撃する。

「ぐはっ!」

だが、反撃で津波が襲いかかってきて、彼らは水圧にのまれ水浸しになってしまった。

「ぐっ! この一撃を決める、しかねえ!! フィリス!」

「ああ!」

そこでイアンはフィリスに声をかけると、フィリスは一直線にぬしさまに突っ込んでいき、はやぶさ斬りを繰り出す。イアンもそれに続いてぬしさまに突っ込むと、氷結らんげきを繰り出してぬしさまに大ダメージを与えた。

「必殺の連続攻撃、だぜ!」

その連続攻撃がいい感じに決まったようだ、ぬしさまはその場に倒れた。

「ぜえ……………はあ……………!」

荒い呼吸を繰り返しているのは、今も突然として襲いかかってきた衝撃が彼らの中に残っているからだ。

「い、いきなり襲いかかってきて……………ビックリして、戦ってしまいました  
たが……………」

「だ、大丈夫よね?」

「オリガ、無事か?」

「……………は、はい……………」

とりあえずオリガは無事なようだ、と一同が安心したとき、ぬしさまが起きあがってきた。

「ほぎやあああ!」

「おきたわっ……………もしかして……………仕返しされるかも!」

「あうう……………どうかお許しを、お許しをおお!」

突然起きあがったぬしさまに驚いた一同は、必死に命乞いをはじめ  
る。

「ぬああ？ わしゃ〜なんで、こんなところにおるんかいのお？」

「へ？」

「おかしいの〜気持ちよう寝てたのにのう〜」

ぬしさまから聞こえてきたのは、なんとも脳天気で気の抜けた声。

そして間の延びた台詞。 そんなギャップに戸惑いながら、オリガ  
はそのぬしさまに問いかける。

「あ、あの、ぬしさま〜」

「そうじゃあ、わしゃぬしさまじゃ〜。 いやあ、いじめたりしてすま  
んの〜…わしやちよつと寝ぼけとつたわあ〜」

「寝ぼけてたあ!?!」

「ええカンジのかっこうをしとるもんで、ついジャレついてしもうた  
んじゃ〜」

なんと、あの攻撃は寝ぼけていたぬしさまの寝相というべきもの  
だったのだ。 衝撃の事実に対し、必死に戦っていた4人は呆然とし  
ていたが、その一方でオリガはぬしさまの前にて話しかけた。

「あの漁で大きなカゲを見て、もしかしてぬしさまかなと思ったので、  
あたしがお呼びしました」

「おおう、そうじゃったか〜。 実はわしも、おまえさんを探しとつた  
んじゃよ〜」

「え、あたしをですか?」

「うむ、これじゃ。 これをおまえさんに渡そうとおもつとつたん  
じゃ〜」

そう言つてぬしさまはその大きな口の中から、光る小さなものを取  
り出した。 オリガはそれを拾い上げる。

「それは？」

「これ……漁師のお守り……?」

「そうじゃ、おまえさんの父親が……大事にもつとつたやつじゃ。

これを渡せなかったことを、おまえさんの父親は…最後まで気にか  
けておつたからの〜」

そのお守りは、オリガの父の形見だった。それをぬしさまはずつと持っていたのだ。

「その想いがわしを動かしたんじや。確かにわたしたぞく」

「そうですか、お父さんが……………。ありがとうございます、ぬしさま」

オリガが礼を言うどぬしさまはうむうむとうなずいたように動いた後、思い出したように話を続けた。

「そうそう、迷惑かけたお詫びにこいつもやるわあ。海の中で見つけた、こいつもやるぞおくく」

そういつてぬしさまはさらに、あるものを取り出す。それは金色に光る果実だった。

「これは……………」

「それじゃあ、わしやあ海の底へ帰るとするかのかく」

「あ、ども……………」

その金色の果実は、かつて自分達が集めていた女神の果実だった。フィリス達はこれをくれたぬしさまに礼を言うと、オリガは果実を見てフィリスに告げる。

「その金色の果実は、あなたにあげます。あたしには必要のないものですから……………」

「あ、ありがとう」

「でも、よろしいんですか?」

セルフィスは確認の意味を込めてオリガにそう問いかけると、オリガはうなずいた。

「あたしは大丈夫。このお守りがあるから……………」

「……………オリガ……………」

「じゃあ、先に帰ってますね!」

「あ、ああ」

そういつてオリガは一足先に帰り、フィリス達はその女神の果実を見つめた。

「女神の果実……………」

それはいつ作られたのだろうか、その果実が実るはずの樹は真の姿

を取り戻し存在しないはず。だがそれは間違いなく、女神の果実だ。その女神の果実を見つめて戸惑うフィリスに、仲間達は言う。

「フィリス、それは貴女が食べてみて」

「え……でも……」

「いいからいいから」

「願い事を言ってみろよ」

「……………」

3人はフィリスに、女神の果実を口にすることを勧めていた。それはきつと、フィリスのことを気にかけていたからだろう。その女神の果実の力で、彼女に少しでも楽な思いをしてほしいのだ。

「……………あたしの、願い……………か……………」

「誰か、会いたい人とか……………思い浮かべたら？ わたし達は……………それがあなたの願いだと読んでも……………」

「……………」

イアンも、セルフィスも、クルーヤも、すべてフィリスの思うがままにしようとしている。それを感じたフィリスは、女神の果実を見つめた。

「あたしは……………あたしは……………！」

フィリスは自分の願いに、正直になつたかのように、女神の果実にかじりついた。その次の瞬間、女神の果実は光を放ち、フィリスを包み込んだ。

「……………！」

「……………え……………？」

その光がやんだ瞬間、彼女の耳にある声が入ってくる。その声を聞いたフィリスは、現状に追いつけず戸惑う。

「ハロー、フィリス。アタシが見えてる？ アタシの声が聞こえる？」

そして、目の前にいる、金髪に小麦色の肌の、羽の生えた女の子の存在に気づく。

「え、あ……………さ……………サンデイ……………？」

フィリスは、目の前にいるその存在の名前を口にした。その名前

に対しその存在はにっこりと笑って頷くと、彼女に告げる。

「フィリス、おつかえりー！」

「……………」

「あ、おかえりってのはヘン？ まあいいや。とにかくまた会えて嬉しい……………」

「……………」

「……………って、フィリスだいじよぶ？」

サンデイはフィリスの顔をのぞき込んだり手を振ったり、声をかけ続けていた。と、次の瞬間。

「さ、サンデイー！」

「うわっ！」

気付けばフィリスは、サンデイに抱きついていて。フィリスに抱きつかれているサンデイは、どこかまんざらでもなさそうだった。

「やっぱり、会いたかったのは彼女なんですな」

「ああ」

その様子を仲間達はみていたが、直後にあることに気付く。

「あれ、というかわたし達にも…………サンデイが見えてるし…………声も聞こえる?！」

「あの世界樹の朝露の効果が、蘇ったんだな。フィリスが女神の果実を食べたことで、あの朝露の効果がまた、オレ達の中に復活したんだろう……………」

「女神の果実の奇跡、なんででしょうか…………?！」

クルーヤが驚き、イアンが仮説を立て、セルフィスは首を傾げる。

そうして再会を味わっていたが、やがてサンデイはフィリスの腕から解放され、話を盛り上げていく。

「あれからずっと、うしろをつけてたのにさっぱり気付かないしさ。フィリスってばにぶすぎ！」

「え、マジ!?」

「マジマジ！」

あれから半年間、サンデイはずっとフィリスの後をついてきていた

のだろう。それに気付かないままフィリスは、ずっと天使の時代を断ち切り人間として生きているんだと、感じていたのだ。自分の天使だった証を知る存在が、そんなに近くにいたとは知らずに。

「ほら、こっちこっち！」

「待てよサンデイ、なにがあるってんだ?！」

そんなことを感じながら、4人はサンデイについていった。そしてたどり着いたのは、仄かに光を放つあの木の元でありサンデイが呼ぶとそこにあの金色の乗り物天の箱船が、空から現れる。

「て、天の箱船だ！」

「じゃあ……まさか……」

「そのまさか」

サンデイはフィリスらにウイंकをすると、着地をした天の箱船の扉を開けてそこにフィリスらを入れる。そのとき視界に入ったのは、ある人物。

「よう、フィリスにそのご一行。久しぶりだな」

「アギロさん！」

「アギロの旦那！」

そこにいたのは、天の箱船の運転手である男性・アギロだった。

彼との再会にはフィリスだけでなく、イアンも喜んでいた。

「女神の果実でオレに会いたいと思うなんて……泣かせるねえ」

「ちよつとテンチョー！ フィリスはアタシに会いたいわって言ったんですけどー！」

「ははっ、どっちでもいいじゃねえか。こうしてまたフィリス達と会えて、オレは嬉しいぜ！」

「ああ、あたしも二人に会えて嬉しいよ！」

アギロもまた、フィリス達とこうして再会できたことを喜んでるようだった。そうして再会を喜び合っていた一同だったが、そこでアギロはある使命のことを思いだし口にする。

「なあ、フィリス。お前は人間の世界の守り人になれ……と女神セレシアから言われたんだったな」

「うん」

「守り人の使命を授かり、そしてお前に少し天使の力が帰ってきた……。だから今、お前やおれの姿が見えるようになった……。」  
アギロは、ファイリスのほうをむいて話を続ける。それは、自分達の姿が見え天の箱船に乗れるようになったと知ったときに決めたことを、彼女に告げるために。

「こうなったからには、オレもお前の守り人の使命のために、なにかしてやりたいと思った。そこで、オレはこの天の箱船を……お前にも任せることを決めた！」

「へっ!？」

「ちよ、マジすかテンチョー!！」

「ああ、マジだ」

天の箱船のこともアギロはファイリスにまかせるといいつつ、ある話を持ちかけてきた。

「世界をねらうヤツは、まだどこかに潜んでいるってハナシだ。そして、本当の神も……。」

「それは、グランゼニスのことか？」

「ああ」

女神セレシアがいうには、グランゼニスは死んではいない、この世界のどこかにいるとのこと。その真相は分からないままだが、その真相にも少しは近づけるだろうかとファイリスは思った。そんなファイリスに対しアギロは話を続ける。

「そして、世界をねらうヤツを探し出すには、地図が必要だってハナシだ」

「地図?」

「ああ。その地図で世界を巡り、世界をねらうヤツを倒すのが……ファイリスの守り人としての使命だ」

アギロの言葉に対し、ファイリスは使命……と呟いた。天使達は星空の、自分は人間の、それぞれの守り人となったその意味を、果たすときがきたのだと悟ったかのように。

「おっと、オレ達を忘れるなよ!」

「ファイリスにはっかり、守り人との使命を押しつけさせないわ!」

「僕達も、彼女とともにその使命を背負い……ともに果たします」

「イアン、セルフェイス、クルーヤ……」

そんなファイリスの気持ちを讀んだのだろうか。これからの冒険にも、3人は彼女の旅に同行するつもりだろうか。その気持ちだが、ファイリスにとってはとても嬉しいことであり、そして心強いものだった。

「おう、もちろんお前達にも期待しているぜ！」

アギロも、彼らがこの守り人としての使命に関わることを受け止めているようだ。そうして一同の気持ちがあまくまとまったところでファイリスは中心にたち、号令をかける。

「よし、じゃあ守り人として再出発だ！」

「「おーっ!!」「」」



## 02 「リツカと夢の宝物」

ツオの浜でオリガとともにぬしさまを探し出したファイリス達。

そこでファイリスは女神の果実を手に入れ、それを口にする。

「まさか……またサンデイと一緒に旅ができるようになるなんて、おもわなかったよ」

「でも、また見えるようになった力を得たって、ファイリスがあたしやテンチョーと会いたいと願ってくれなかったら、意味ないヨツ！」

「そう、だからこれは女神の果実の力だけじゃない……ファイリスの本当の願いが生んだ結果なのよ」

その結果、ファイリスはかつて旅路をともししていたサンデイと、天の箱船の運転手である男・アギロと再会をすることができた。彼らの姿が再び見えるようになり、天の箱船を操り今までより広い場所を旅できるようになったのだ。それはファイリスだけではなく、仲間達も同じことだった。

「それがわかって……あたし今、すっごく嬉しいよ……」

「ファイリスさん……」

もう彼女は同族である天使と会うこともなければ、彼らとともに星になることもなかった。そして、彼女に翼と輪が戻ってくることもない。しかし、それでも彼女は暗い顔をしない。その理由はもつとも会えたらいいと思っていた者達との再会が叶ったからだろう。

そして、その願いは自分の中で強いものだったと知れば、嬉しさもますというものだ。

「とりあえず、リツカの宿屋にかえて、あの手紙を無事に届けたことを報告しようぜ。 ついでにそこで休んだり、次の依頼をさがせばいいや」

「そうですね……そうすればアギロさんの仰ってた、地図の秘密もわかると思いますし。 それに……あの宿屋には酒場も搭載されています」

「そっか！ 酒場なら情報が入ってくること、間違いなしよね」

一旦、リツカのまつ宿屋に帰ろうということでの話はまとまった。そこで一晩やすんだ後に、フィリスと仲間達の新しい旅はまた始まるのだ。そのためにも、親友のいる宿屋で鋭気を養いたいところである。

「よし、そうしたらまた守り人としての再出発だな！」

「ああ」

そう声を掛け合い、彼らはセントシユタイン城へ帰って行った。

そうして4人はセントシユタイン城にある、リツカの宿屋に帰ってきた。

「やありツカー！」

「……………」

「リツカ？」

フィリスはいつものように挨拶をしながら宿に入ったのだが、リツカは顔をうつむかせて黙っていた。そのかわり、隣にいたルイーダがフィリス達に気付き、リツカの肩を軽く叩いて姿勢をしつかりとさせる。ルイーダに肩を叩かれたリツカは背筋を伸ばして我に返り、訪れた客に接客をしようとする。

「あ、いらっしやいませ……………つて、フィリス！ おかえりなさい！」

「あ、ああ……………ただいま。 とりあえず、リツカから預かった手紙はトトに送り届けたぜ」

「そうなんだ……………ありがとう」

そうお礼を言つて笑いかけてくれたが、やはり元気がない。いつもの元気が感じられないことからフィリスはリツカのことか心配になり、彼女に問いかける。

「どうしたんだ、リツカ？」

「……………え……………」

「なんか元気ないぜ？ 悩みでもあるのか？」

リツカはそう問いかけてくるフィリスにたいし、大丈夫だよと返すが、その横でルイーダが咳払いをする。

「る、ルイーダさん……………」

「このままため息を何度もつかれちゃ、宿の仕事どころじゃないでしょ。ここは思い切って、フィリスに話をしなさい」

「……………」

「リツカ」

話をしているものか、と迷いを見せるリツカにフィリスは微笑みかけながら彼女の名前を口にした。それを見たリツカは意を決し、自分がなにを悩んでいるのかを打ち明けることにした。

「……………ねえ、フィリスは……………今も旅をして……………満足してるの？」

「ん？」

「私……………最近思うんだ。今のままでいいのかな……………って……………」

リツカの言葉を聞いたフィリスは首を傾げる。

「ほら、私って……………今はこの宿屋を切り盛りしているでしょ？」

「ああ」

「宿屋の仕事は、朝から晩までお客様の相手をして、掃除や洗濯に追われる日々なんだ……………」

「だろうな」

「今の宿屋のお仕事も好きだけど……………私と同じ年頃の女の子はおしゃれしたり遊んだりしているのに……………私はホントに、このままずーつと宿屋の仕事を続けるだけでもいいのかなって、思っちゃったんだ……………」

「うーん……………そういうの気にしたりするんだな……………？ あたしもリツカとそうかわんないはずなんだけど……………まわりの女の子を見ても、あまり気にしてなかったな……………」

「フィリスは普通じゃないもんね」

「おい、それはどういう意味だ？」

クルーヤの言葉に対しフィリスがツツコミを入れると、リツカは話を続けた。

「そんなとき……………倉庫の整理をしていたら、お母さんの手紙が入った箱が出てきたんだ」

「手紙？」

「うん、読んでみるね」

そういつてリツカは例の手紙を取り出し、彼女たちにも読んで聞かせた。

「親愛なる娘 リツカへ。」

今は病に伏せか弱い貴女ですが、いずれ立派な女性になると母は信じています。

そんな願いを込めて母は、同封していた地図の洞窟に、貴女へのやさやかなプレゼントを用意しました。

もしも貴女が何か息詰まることがあったら、そこへいつてみてください。

でもくれぐれも、ムリはしないでくださいね。

母より

それが、手紙に綴られていた母の言葉の全文らしい。その手紙に書いてあった地図も、リツカが持っているようだ。

「実はね……お母さんの手紙と一緒にこの地図が入ってたの」

「地図？」

「うん、これなんだけど……」

そういい、リツカは手紙に同封されていたという地図を見せる。

そこには、ある町の近くにバッテン印が打たれているものだった。

「手紙に書いてあった地図、て……これのことだよな……」

「それは間違いないですね」

その地図を見て、イアンはふとあることを思い、ファイリスに確認をするかのようにこっさり話しかける。

「……まさか、例の地図か……？」

「わかんねえ……」

これが、アギロが語っていたという地図の一枚なのだろうか。そんな疑問を抱きつつ、あまり公にしないためにリツカの話に引き続き耳を傾ける。

「私、その地図の真相と、お母さんのプレゼントを確かめにいきたいんだけど……さすがに一人じゃムリかなーって思ったんだ」

「そういうことなら、あたしらの出番じゃねーか？」

「うん、だからフィリスとみんなに、一緒にきてほしいんだ」

これが次の依頼だ、と確信を得たフィリス達は、彼女とともにこの地図にある母の贈り物の真相を確かめることにした。

「よし、一緒に冒険にいきましょうぜ、リツカ！」

「あなたのことはしつかりと、わたし達が守るよ！」

「貴女には指一本ふれさせません」

「オレ達がいれば、大丈夫だぜ！」

「ありがとう……フィリス、みんな！ あなた達がいてくれれば怖いものナシだわ！」

「行ってもいいけど、今日はもう遅いし……フィリス達も帰ってきたばかりで疲れているでしょ？ 明日、決行したらどうかしら」

「そうと決まれば、なんだかやる気出てきたかも！ 精一杯もてなすね！」

「ああ！」

そう話をまとめた翌日のこと。フィリス達はリツカと共に、彼女の持っていた地図のポイントに向かい、そこに入り口を発見し入った。ちなみに発見した場所は、エラファイタ村の近くだ。

「まさか、こんなところにあつたなんて……」

「ああ、オレも知らなかったぜ」

「さあ、洞窟探検のスタートよっ！」

「おう！」

世界を旅してきた一行も、ここにまさか洞窟が存在するなど知らなかったことだ。一度みたことが、通ったことがある道でも視点を変えれば新しい発見があるということなのだろうか。そう思いつつ洞窟の中にはいるとそこは、遺跡のような構造をしており迷宮のようだった。

「とはいえ、不安だなあ……」

「心配いらねーよ」

こういう探検をしたことがないため不安を覚えるリツカの頭に、イアンは手をおきながら彼女に笑いかける。

「どんな魔物に襲われようとも、オレのそばにいれば大丈夫だから…安心してオレ達についてきな」

「い、イアンさん……」

「ふふ、頼もしいわねイアン！」

「からかうな」

クルーヤにたいしそう返すイアンを横目に、フィリスはリツカに笑いかけた。

「とにかく、あたしからはぐれるなよ。魔物がきたら隠れる……

いいな？」

「……うんっ！」

「さて、参りましょう」

「ああ」

そうして4人はリツカを守りながら、洞窟を奥へ進むこととする。途中ではやはりというべきか、魔物が何度もおそつてくるがフィリス達はそれに全力で立ち向かい、戦えないリツカを守っていた。

「イオナズン！」

「マヒャド！」

先ほども、目の前に出現したアイアンブルドーの群を魔法攻撃で一掃したところである。周囲にいた魔法攻撃がいつさい効かないスライムマデユラという魔物は、物理攻撃が得意なフィリスとイアンが倒した。

「なんか……この洞窟にいる魔物、地上のよりやたらと強くない!？」

「ホントだな……」

ここまで戦ってきた魔物は、今まで相手してきた野良の魔物とはケタ違いである。自分達は戦いたいには手だれていると思っていたのだが、それは自惚れでしかないのかもしれない……そう思ってしまうほどだった。こうして戦い、生き残れているだけでも運がいい。

「けど、あたしらはここでくたばれねーぞ」

「わかっていますよ。 受けた仕事は最後までやるべきですし……僕達が倒れたら、あの子を守る人はいなくなります。 さあ……そのためにも今、回復しますよ」

「お願いね」

そういつてセルフイスは仲間達にベホマラーをかけ、全員の疲労や傷をいやしていく。 だが、その直後。

「きゃああ!?!」

「リツカ!?!」

リツカに今、飛び出してきた魔物が襲いかかろうとしていた。

「あぶねえ!」

イアンはすぐにリツカと魔物の間に割って入り彼女を庇うと、片腕で魔物の攻撃を受け止めてそこからけりを入れて吹っ飛ばし、壁にたたきつける。

「ばくれつ拳!」

さらにここにばくれつ拳をたたき込み、魔物を倒した。 自分ごとを守りながら目の前で魔物を倒してみせたイアンに、リツカは呆然としていた。

「ケガはねえか?」

「う、うん……ありがとう」

「無事でよかったぜ」

リツカが無傷であることを確認したイアンは安心したようであり、白い歯を見せてにかつと笑った。 そのイアンの顔に対しリツカはきよとんとしていたが、すぐに笑ってうなずき返した。 そんなとき、ファイリス達が二人に駆け寄ってくる。

「リツカ、イアン! 大丈夫か!?!」

「うん……イアンさんが助けてくれたから平気だよ」

「そっか、よかった!」

二人にけががないとわかったファイリスとセルフイスとクルーヤは笑顔になり、先へ進もうと促す。

「よし、さつきみたいないな危ない目にあわないように……とつとこんな洞窟を攻略して、捜し物を見つuckerぜ!」

「うん」

イアンもリツカも、フィリスを筆頭に歩き出していた。

「……………なんか、怪しいんですけど……………あの二人」

そんな二人に対し、サンディは曰くありげに笑っていた。

そうして洞窟の奥にたどり着いたフィリス達だったが、そこには衝撃の魔物が待っていた。

「ハアアツ！」

そこに待っていたのは、複数の生物の姿が合体したような、奇抜な姿の魔物。彼らはその魔物の姿をしばし凝視していたが、魔物に気配を気づかれた瞬間におそわれ、戦いを余儀なくされた。

「びつくりしたああ！ 洞窟の奥にはあんなバケモノがいるのねっ!?!」

「ああ、洞窟の奥で宝を守る番人……………ってか？ ありがちパターンってワケかよ……………」

なんとかその魔物は倒したものの、まさか洞窟の奥であんな魔物と戦うとは思っていなかった4人は、勝利してもなお心臓がバクバクと音を鳴らしていた。

「リツカ、大丈夫か!?!」

「うん、私は無事だよ！」

「よしー！」

フィリスは戦いが始まってからずっと物陰に隠れていたリツカに呼びかけ、こちらへくるようにうながす。彼女達の目の前には、あの魔物が敗れ消滅したら出てきた宝箱が置かれていた。

「さて……………多分これが、リツカのおふくろさんが用意してたプレゼントトってヤツだな」

「そうですね……………あけてみてください。 貴女の手で」

「あ、うん！」

フィリスとセルフィスに促され、発見された宝箱に手を伸ばし、あける。するとそこには、しっかりと編まれたセーターが一着、入っていた。



「これって……手編みのセーターだ……今の私にぴったり……」

リツカは母のプレゼントの正体を知り、その話題をフィリスにも降る。

「ねえ、フィリス見て！ このセーター……わたしにぴったりなサイズなの！」

「みたいだな……でも、なんでそのセーターがこんなところに……？」

「これが、リツカちゃんのお母さんのプレゼント、ということなの？」「きつと、そうなのでしょう……」

「あ、待ってー！」

全員が、リツカの母の贈り物の正体にたいし首を傾げていると、そこでリツカがあるものに気付く。

「どうしたの？」

「手紙も入っていたんだ。 さっそく読んでみるね」

そういつてリツカは、セーターと共に入っていた手紙に気がつき、それを読み上げる。

「親愛なる娘 リツカへ。

貴女がすすくすすくと育っていく姿を想いながら、このセーターを編みました。

思わせぶりな手紙の割に、こんなみすぼらしいものでごめんなさい。

病にふせっていた私には、こんなことしかできなかつたのです……。

病弱な母を……許してください。

でも……貴女がここまでたどり着けるようになるなんて、母はとても嬉しいです……。

何か不安を抱えている貴女に、母からいえることはただひとつ。

失敗をおそれずに、自分のやりたいことをやりなさい。

母はいつだって、貴女の味方ですよ。

直接話を聞くことができず……心苦しいけど、母はいつまでも……天

国で貴女を見守っています…。

リツカ……………そばにいてあげられなくて、ごめんね。

母親らしいことを何一つ出来なかった……………私を、許してください……………」

最後の方は、リツカは鼻声になつて言葉が途切れ途切れになつていた。

「う、ううう……………」

その理由は、リツカが涙を流しているから。手紙とセーターに込められた亡き母の思いを知ったから。その愛情の深さにふれたから。

「……………ありがとう、ありがとう……………お母さん……………」

「……………リツカ……………」

「……………そう、そうだね……………私、なんで宿屋を継いだのか、忘れかけてたよ……………」

リツカは、自分の夢を改めて確認した。何故その夢を持ったのか、何故今も宿屋を続けていたのかを。

「私の夢は……………私のために全てをなげうったお父さんと……………こんなに私を愛してくれたお母さんの思い出が詰まった、あの宿屋を守っていくこと……………」

そう語るとリツカは立ち上がり涙を必死に拭うと、顔を上げた。

「……………私、もう悩まない。お父さんとお母さんの宿屋を……………きつと、世界一にしてみせるわ……………それが、私の幸せのためだから」  
「そっか、吹っ切れたならいいよ」

「貴女が立ち直れたのであれば、僕達も嬉しくなりますしね」

気持ちを吹っ切り、改めて立ち上がったリツカをみて、フィリスは笑って彼女にいう。自分はいつまでもリツカの親友であり、味方である。

「またなにかあったら、いつでもあたしらを頼れよ！あたし達はリツカの夢を応援したり、助けたりしたいんだからな！」

「ありがとう、頼もしいよ……………フィリスは！」

「……………けどさ、たまには年頃の女の子みたいに、おしやれしたっていい

いと思うぜ。 平和な世の中なんだし……誰も止めるまねはしねよ」

「…………ふふ、なんだかフィリスがそれを言うのってヘンだね」

「……………うっさいな……………あたしはいいんだよ」

そう女子同士で盛り上がっているのを、イアンとセルフィスは見守っていた。

「とりあえず、リツカの依頼の達成と…………最初の地図攻略成功だな！」

「そうですね……！」

地図の攻略、ひとつの依頼達成を感じた一同は、ここに長居は無用と判断して、帰ることにした。

「さ、帰ろうぜ。 宿屋でみんなが待っているだろうし……………さー！」

「うん！」

そう呼びかけるフィリスに、リツカは笑顔で答えて。

### 03 「王の悩み」

リツカの悩みを解決させる依頼を受け、解決させたファイリス達は、宿屋に帰還しそこで休んでいた。

「私、もう吹っ切れたわ。私の夢はこの宿屋を世界一にすることよ！ そのためにも、もっと頑張る！」

「うん、リツカが元気になってくれて…あたしも嬉しいよっ！」

翌日、リツカはファイリス達にいつもの元気な笑顔を見せてくれた。

そこには自分の将来や今の自分の在り方に悩んでいた時の、暗さは見あたらぬ。

「とはいえ、悩みが吹っ切れても…冒険は当分いいかな？ ファイリス達があんな冒険をいつもしていたなんて、ビックリしちゃったなあ」

「へへっ、まあ慣れればどうってことないさ」

「そうそう！ また困ったことがあれば、いつでもあたしらを頼ってくれよ。用心棒でもなんでも、なってやるからな！」

「うん、頼りにしているね！」

そう言葉を交わしたあとで、ファイリス達はリツカの宿屋をあとにした。

「さて、次の目的を探すとするかな！」

「ああー！」

気を引き締め直し、新たな依頼を求めて彼らは歩きだそうとした、そのときだった。突然兵士数名が姿を現しファイリス達に声をかけた。

「おお、ファイリス殿とそのご一行！ この国にいらしたのですね！」

「えっ？」

「我々は、セントシュタイン城の兵士団。セントシュタイン王様から、貴女達を探してくるように命を受けていました。この国にいたとは実に運がいい！」

「セントシュタインの？」

「それで、あたし達に何の用なんだ？」

セントシユタイン王の命令で自分達を探しにきたのであれば、なにもないわけではない。あの時のように困ったことでもあるのだろうか。

「実はセントシユタイン王様より、貴女達に、ご依頼があります」

「依頼？」

「はい、お話は王より直接お聞きください。確かにお伝えしました！」

フィリス達にそれだけを伝えたと兵士達は城に帰って行った。その場に残されたフィリスはきよとんとしつつも、仲間達に声をかける。

「……まあ……城もすぐそこだし、行ってみようぜ」

「ああ」

「ええ」

「はい」

全員、まずは王から詳しい話を聞くべく、城へ向かう。彼女達の来訪を知っていた兵士達は彼女達を城内へ通し、玉座の間に案内し王と面会させる。

「国王様、お久しぶりです！」

「おお、よくきてくれたな！」

「お久しぶりです、皆さん」

「フィオーネ姫様も、お元気そうですね！」

まずは、王とフィオーネ姫に再会の挨拶をするのであった。

「………悪夢、ですか………」

「うむ」

挨拶もそこそこに、フィリス達は王が自分達を探してまで依頼した話に耳を傾けた。そこには、王が長年悩まされているという、あの病のようなものことであった。

「わしは以前より悪夢に悩まされておつてな………。それがこのところ特にひどいのだ。城のものに薬を取り寄せてもらったりもし

たのだが、まったく効かん……………」

「……………それって、結構ヤバイかも……………」

「以前は……………あの黒騎士のせいかと思っておったのだが、その事件が解決しても……………一向になおる気配がない」

「じゃあ黒騎士とは無関係、ということか……………」

いずれにせよ、王はこの悪夢に何度も悩まされ、苦しめられているらしい。平常を装ってはいるものの内心は、藁にもすがるおもいなのかも知れない。

「もしかしたら、世界を旅してきたおぬし達であれば……………解決策が見つかるかもしれん……………とわしは思ったのだ。褒美ははずむゆえ、わしを悪夢から……………解き放ってはくれんか？」

王様の依頼は、自分が悪夢をみないように済む方法を見つけようというもののようだ。フィリスはそれをきき、仲間はこの依頼を受けるかどうかを確認する。

「どうする、みんな」

「どうするもこうするも……………王様の頼みを聞かないわけにも、いかねーだろ」

「そうよ」

「そうですよ」

「だよね」

仲間達の返事を聞いたフィリスは頷き、代表して王の依頼を受けると彼に直接告げる。

「わかりました、そのご依頼引き受けましょう！」

「おお、やってくれるか！ おぬしならそう言ってくれると思っておったわいー！」

「フィリス様は、その道にお詳しいんですね!？」

「いいえ、さっぱりです！」

「だああー!!」

フィリスがハッキリとそう言い切ったので、玉座の間にいた全員が派手にずっこける。仲間達も例外ではない。

「でも、これまで旅してきた場所を探せば、手がかりくらいはつかめる

「はずですので！」

「う、うむ……………そうだな。　わしは待っておるぞ……………それと！」  
「え？」

立ち上がり玉座の間に腰掛け直しつつ、王はある情報を彼女に提供する。

「手がかりがないわけではない」

「ホントですか！」

「先程挨拶にきた旅の商人に聞いたのだが……………ナザムという村に、夢に詳しいものがあるそうじゃ」

「……………ナザム村って……………」

「ああ」

ナザム村。　そこはかつて、ファイリスが仲間とはぐれ迷い込んだ村だ。　今でこそ村人は余所者を歓迎するようになったものの、それはファイリスの働きによるもの。　それまでは過去の誤解により、いっさい余所者を受け付けない閉鎖された村だったのだ。

「とりあえず、ナザム村にいつてみましょうか」

「そうだな」

「……………」

悪夢を払う手段がその村にあるのであれば、自分達はそこへ向かうべきなのだろう。　そう判断した彼らは動き出したが、セルフィスは一人、黙ったままだった。

「セルフィス？」

「……………え？」

「どうしたんだよ、黙っちゃまって……………なにかあつたのか？」

イアンにいわれ、セルフィスは自分がなにを考えていたのかを打ち明ける。

「……………少し、王を取り巻く……………禍々しい気配のようなものを探っていました……………」

「え、お前そんなのわかるのか？」

「僧侶時代はなんとなく感じる程度だったのですが……………賢者になったことで、力が増したようです……………」

「じゃあ、あの悪夢の真相がわかるの？」

クルーヤのことにはとりあえず頷くものの、セルフィスは半分カンのようなものですがと前置きした上で、感じ取った気配のことを話す。

「王の悪夢の正体は……ある種の呪い、やもしれません」

「の、呪い？」

「ええ……まるで、王の悪夢はただの悪夢ではない……なにか、伝えるべきことがあるかのよう……王が悪夢をみるのは理由があるからではないかと……その気配をみて、感じ取りました」

セルフィスの話を聞き、3人はごくりと息をのんでしまった。

「それ、王様に言う？」

「……逆に聞きますが、言えると思いますか？」

「ムリだな」

あつさりと言い切るフィリスにたいし苦笑しつつ、セルフィスは話を続ける。

「それに、もしその悪夢を呪いだとしても……その正体を探ることは今は難しいでしょう。正体がわからないとなると、そのお祓いの方法もわかりませんし……それは僕にもまだ出来ないことです」

セルフィス自身も、そういつた気配を感じ取れるようになったのはつい最近のことのようだ。まだ正体をしりそれを取り払うまでの境地には達していない。それに、なにも正体が判明していない状態で万が一、王の悪夢が呪いの仕業であることが知れ渡ったら、トラブルに発展してしまうだろう。

「詳しいことがわかるまでは、悪夢を払うその方法を試してみるのも、有りかもしれませぬ……」

「そうかしら……」

「まあほかに方法もないんだ、やろうぜ」

「だな」

王の話を頼りにナザム村を訪れたフィリス達。ナザム村のことはイアンとクルーヤは話でしか知らなかったものの、今はすでに余所



者嫌いの村…と呼ばれていた面影などどこにもなかった。とりあえず、とフィリス達は夢に詳しい人物を捜し、そして見つけることに成功する。

「どくどくへドロとけんじやのせいすいをまぜまぜして……私のドリームパワーを注入して！ 小瓶に詰めてぎゅぎゅつとフタして………はい、お・し・ま・い！ 名付けてドリマイザー！」

その人物とは、ドリマという女性だった。悪夢のことを相談してみたところ、フィリスに用意してもらった材料を使って、悪夢を払う飛躍のようなものを開発した。

「ど、どりまいザー？」

作り主の名前が付いた、そして材料が材料だけに怪しい薬を開発してもらった。それにたいしフィリス達は訝しげにその薬が入った小瓶を見つめる。ドリマはそんなフィリス達の反応に反して、にこにこ笑いながら話を続ける。

「寝るときに、小瓶のフタをあけたまま枕元に置いてみて。そしてから悪夢なんて、どっかにとんでっちゃうから！」

「と、とりあえず……これでいいかな……！」

これを渡せば王の依頼は達成したことになるだろうと思った4人は、その小瓶を受け取る。その際、ドリマはその薬についての注意事項を彼らに伝えた。

「そうそう、間違っても飲んじゃダメよ？ し・ぬ・か・ら♪」

「………」

こんな危険物を王様に渡して大丈夫なのだろうか。4人は不安におそわれる。とにかく、これ以外に方法は思いつかないので、そのドリマイザーをもってセントシユタイン城に帰る。

「王様、ただいま帰還しました！」

「おお、待っておったぞ……して、どうだった!？」

玉座の間へ向かい王にあい、結果を報告する形でドリマイザーをさしだす。

「ふむ、ドリマイザーというのか。これを飲めばよいのか？」

「わー!!」

「ダメダメダメダメッ!!!」

使い方を誤ろうとしている王様を全力で阻止し、正しい使い方を教える4人。これは飲み物ではなく枕元に置いておくものであると知り納得した王は、早速その小瓶のふたを開けてみる。

「!!!」

「おげえええ……なんだよ、このニオイ……!?!」

「悪臭? いいえ……違うわ……もっと別のなにかよう!」

「た、確かに……悪魔であろうと鬼であろうと逃げ出しそうな気がするが……むむう……」

ふたを開けた直後にその部屋に、何ともいえない臭いが漂った。

それによりその部屋にいた全員が顔を一気に悪くした。王もしばし、それを使うべきか渋ったが、ふたを閉めつつ頷いた。

「こ、このにおいの中で眠るのは勇気があるが……せつかくフィリス達が持ってきてくれたんじゃ。……試してみるとしよう……」

「無理しないでください! 効こうがそうでなかるうが、むやみにオススメするつもりはありませんから!!!」

フィリスはそういうが、王は大丈夫じゃと言って頷いたのでそれ以上はなにもいえなかった。あのドリマイザーが、トラブルを起こさなければいいのだが……とフィリスは焦りを顔に出す。

「あううう……大丈夫なのかなあ……?」

「仕方ないですよ、今はあのドリマさんって方を信じましょう……」

そうセルフィスは告げつつも、王にあることを尋ねる。それは、王が見るといふ悪夢の内容だった。

「ちなみに、王様。今更になりますか……悪夢というのはどのような内容のですか……?」

「……それがな……。夢の中で、黒い大きな人影のようなものが現れて、こう囁くのじゃ。……帝国の支配から逃れたくば我が力を求めよ……。とな」

「帝国……?」

「帝国の支配などと言われても、わたしにはさっぱりじゃ。気味が悪

くて仕方ない……………」

帝国、というワードに心当たりのある4人は反応する。もしその悪夢の中に出てくるそのワードが、自分達の知る帝国と関係があったらどうなるのだろうかと思っただのだ。

「わかりました、どうかご養生を……………」

仲間達をおさえつつ、セルフィスは、そうこたえるしかなかった。

そうして、王の悪夢問題解決に一つだけ手助けをしたフィリス達は、ついで感覚でセントシユタイン城にいた人々から依頼を受けては、解決していった。ほぼ、おつかいのようなものであったが。

「途中でまほうのせいすいを求められたりもしたもののね」

「ええ。 おかげであのおじいさん、インクで汚れて読めなくなった箇所を読めるようになった……………って言って喜んでいましたね」

「おまけに、行方不明だったという、古文書の破れたページも見つけられたし！」

城に使える学者の老人、イロホンの依頼。そこにはセントシユタインの歴史を知るには重要なピースがかけていたので、それを埋めるものがほしいというものだった。それにたいしフィリス達は二手に分かれて解決したのである。そこには、セントシユタインのほかルディアノという国の名前が出てきており、懐かしい名前に目を細めつつも、双方の関係を知るために、動き出していることが感じ取られた。

「……………うーむ……………」

そしてまた、途中で悩ましげな声を上げるあらくれを発見したので、声をかける。

「おや、どうしたんですか？」

声をかけられたことに気づいたあらくれは、フィリス達の顔を見て明るい声を出した。

「おー！ あんたは確か、以前に黒騎士事件を解決させたという冒険者達じゃねーか！」

「……………そんな風に思われてるのな、あたしら」

「して、困った様子でしたが……なにかあったんですか？」

セルフィスがそう問いかけてみると、あらくれは実は……と事情を彼らに打ち明ける。

「この井戸を潜った先……そこにある奇妙な隙間が気になって、その隙間をぶち壊して、トンネルを作ってみようって思ってるんだ」

「やればいいじゃんか」

「いや……実は、それを可能にするには……黄金のツルハシって道具が必要でな……」

「黄金の、ツルハシ？」

あらくれの話に出てきたそれに、ファイリス達は心当たりがある。

「ねえ、そのツルハシって……この前魔物を倒したら偶然手に入った、アレのこと!？」

「たぶん。なあ、そのツルハシって……これのことじゃないか？」

そういいながらファイリスが取り出したのは、以前リツカと宝の地図の洞窟に潜ったときに遭遇した魔物……スライムマデユラを倒したときに偶然落としたもの。その姿はまさに、黄金のツルハシと呼ぶに相応しい代物だった。

「おお、それこそまさに黄金のツルハシ！ まさかあんたらが持ってたとは!!」

「いや、完全にグーゼンなんだけどな」

「偶然でも必然でも、どっちでもいいや！ オレにゆずってくれないか!!」

「ああ、いいぜ」

自分達が持つていてもこのツルハシは役に立たないが、彼にとっては重要なものであることに違いない。そう思ったファイリスはツルハシを潔く、そのあらくれに渡した。

「サンキューー！ これで謎の隙間を壊して、奥に進むぞー！」

念願だった黄金のツルハシをあらくれは嬉しそうに持ち上げると、その洞窟を掘りに行ってしまった。

「これが世紀の発見につながるといういわね」

「そうですね」

がんばって開通作業に取り組み始めた荒くれを見送った直後、フィリスはゾクリと身を震わせた。

「……!?!」

「どうしたの、フィリス?」

「なんか、悪寒がしたと思ったんだけど……きつと気のせいだな!」

そういつて彼女は、セントシユタイン城の依頼を達成したことを宣言するのであった。

## 04 「ルイーダの秘密」

それは、セントシユタイン王の依頼をきいたあとのこと。  
宿に戻り一服をしようとしていたフィリス達に、リツカが相談を持ちかけてきた。

「今度はルイーダさんがため息を……？」

「うん」

彼女が気にしているのは、この宿屋にある酒場を切り盛りしている女性・ルイーダのことだった。

「なんか……遠い目のため息をついたり、私がどうしたんですかって聞いても……こたえてくれないし……心配なの」

「へえ……あの人そんなことするんだな……」

「イアンツ」

「ねえ、フィリスだったら……ルイーダさんの秘密を聞き出せるんじゃない？ それで、どうしたらルイーダさんが元気になるか、考えてほしいんだ」

リツカの願い、それはルイーダの悩みを聞いて解決させること。

それを一同は、依頼として受け取る。

「そうだな、あたしもリツカの話聞いてたら気になったし……やってみるよ」

「じゃあこれも、依頼として引き受けましょう」

「そうね！」

「よし、じゃあ早速……ルイーダさんに話を聞きにいきましょう！」

そう声をかけて依頼を達成するために、フィリスはまずルイーダに話を聞きにいきましょうとする。だがそれを、イアンが制した。

「待て、フィリス」

「イアン？」

「ここはオレが聞いてくる、お前達はここで待っていてくれ」  
「え？」

突然そう言い出したので何事かと思えば、イアンは一人でルイーダ

の元へ向かい、声をかけた。

「ルイーダさん」

「あ、イアン…どうしたの?」

「なに、リツカがあなたのこと心配してるみたいだから……気になっただけでさあ」

「……………」

最初はいつものように対応していたルイーダだったが、イアンの言葉で自分の心情を察知されたと感じたらしい。普通ならリツカには心配をかけた、心配かけてゴメンとでも言いたいが、その度胸は今のルイーダにはない。相手がイアンであればなおさらだ。

「まあ……イアンは今じゃ立派な冒険者だものね、はなしていいかも」

「お、いいんですかい?」

「……………むしろ私がはぐらかしても、貴方はなかなか察しがいいもの。私が話さないと、許さないでしょうね……………」

ルイーダは、イアンがあまりにも察しがよくかつ他人の隠し事に敏感な姿勢をよく知っている。だから、ルイーダはここ最近で自分になにに思い悩んでいるのか……その理由を白状することにしたのだ。

「……………私がちよっぴり元気をなくしていたのは、貴方達がリツカをつけて、冒険にでたのを知って……昔を思い出したからよ」

「ああ、このあいだの……………」

「……………実はね、私かつては……………貴方と同じ世界をまたに掛ける冒険者だったの。そして、私には当時……………いつも一緒に旅をしていた一人の仲間がいたの……………でも、その人とはあることがキツカケで、別れることになり、冒険者をやめて酒場を開くことにした……………」

「えっ」

まさかルイーダに、そのような大事な人がいたとは。そして、冒険をやめるほどの別れを経験しているとは。相当ショックだったのだろうか。ルイーダはさらに、その人物のことを語る。

「その人の名前は……………ミロ。別れたのは……………風を愛する人たちが生きる地だったわ……………」

「……………」

「私がこの酒場にいるのは、その人との約束なのよ…………だから、この酒場を離れられない。でも、この前あなたとリツカが冒険にでたのを見たら…………そのときを思い出してしまったのよ……………」

「…………そうだったのか。オレってば…………バチアタリつすかね……………」

イアンがそう申し訳なさそうに言うと、ルイーダはいいのよ、と返しつつイアンに告げる。

「あなたは、今の仲間を大事にしなさい。せつかく、いいパーティーなんだから」

「…………うつす……………」

ルイーダに対しそう返したイアンは、フィリスの元に戻った。

「あ、イアン…………どうだった？」

「…………ああ、実はさ……………」

イアンはルイーダから聞いた話を、フィリス達に同じようにした。話を聞いたフィリス達は、ルイーダの過去を知り、解決するにはどうしたらいいかを考える。

「…………そうなんだ……………」

「それで、ルイーダさんが冒険をやめるキツカケとなった場所は、風を愛する人達がいる場所…………なのよね？」

「ああ、そんなことを言っていたぜ」

「…………風……………」

そのワードがフィリスには引っかけり、今までの旅を思い出す。そしてやがて、ある場所のことを思い出した。

そうしてフィリスがルーラの魔法で向かったのは、カルバド大草原の中にある、遊牧民の集落だった。

「カルバドの集落？」

「風と聞いて思い出したんだよ、……………」

そう思い出しながら語っていると、どこからか馬の嘶きが聞こえてきた。



「ヒイン！」

「うおっ!？」

その嘶きに驚いていると、馬に乗っていた人物が馬の上から声をかけてきた。その人物はファイリス達を知っているし、ファイリスもその人物を知っている。

「ファイリス、それにみんな……!？」

「ナムジンさん!？」

その人物とは、遊牧民族の族長・ナムジンだったのだ。思わぬ再会にナムジンは驚きながらも、馬から下りてファイリス達に声をかけてくる。

「まさか会えるとは……なにかあったのかい?」

「ああ、実はさ……」

とりあえずファイリス達は、ルイーダとミロのことをナムジンに尋ねる。すると、ナムジンの口から思わぬ返答がかえってきた。

「その名前は、私も聞き覚えくらいはあるよ」

「ホントに!？」

「ああ……私よりも父上の方が詳しい。そちらに話を聞いてみては、どうかな」

「わかった、そうする!」

そうしてナムジンの話を受け、ファイリス達は彼の父である前族長・ラボルチュに話を聞くことにする。

「まさかのビンゴだったな」

「うん」

「……しかしまさか、あなた方からその名前がでるとは思わなかった。

　　もしか、知り合いか?」

「まあ、しりあいつちや知り合いだぜ」

そう対話をしている間に族長のパオに到着する一同。ナムジンはそこにいた父ラボルチュに帰還を告げつつ、ファイリス達がきていることや彼女達が尋ねたいことまで全部伝えてくれた。

「ラボルチュ様」

「まずは、久しぶりだな」

「ええ、お久しぶりです……実は今回、ルイーダさんとミロさんという2人の話を聞きたくて、おたずねしたんです」

「あなたは、なにか知ってるんですか？」

「ファイリスがそう言うのと、ラボルチュはうむと言いながら頷く。

「知ってるものにも……ルイーダ様とミロ様は、我ら遊牧民の英雄だ」「え、英雄!」

まさかそう呼ばれる存在だったとは。思わぬ情報に4人は思わず口を開けてしまう。そんな4人のリアクションをよそに、ラボルチュは話を続ける。

「ミロ様とルイーダ様は……野の花をなでる初夏の風のように……ふらりとこの草原に現れた。明るく強く、そして美しい2人は、すぐにオレ達と心を通わせた。集落には笑いが絶えなかつたよ」

「……だが……その楽しい日々は、長くは続かなかつた」「えっ……どうして……」

そんな楽しい日々が突然終わってしまうことがあるのか、戸惑うファイリス達に2人は話を続ける。

「……あるとき……魔物の大群が集落をおそい、ミロ様とルイーダ様は、我ら遊牧民とともに剣をとった。魔物の大群は追い払ったものの……その時ミロ様は子どもを庇い、命を落としてしまわれたのだ……」

「えっ……」

「その亡骸はのちに、ルイーダ様が手厚く葬ったと聞く。これが、この地の英雄……ミロ様の話だ……」

「ミロ様は今もどこかで、集落を見守ってくださっている……我ら草原の民はそう信じているよ……」

想像を超える真実に対し、ファイリス達は言葉を失った。その心の傷が原因でルイーダは旅をやめて酒場を始めたのか。それで一カ所にとどまったのか。とりあえずルイーダの過去を知ったファイリス達は、ラボルチュに礼を言い、ファイリスはナムジンに、あることを問いかける。

「なあ、あなたは知らないか？ ルイーダさんがミロさんを葬った場

所の……ヒントとか……」

「いや、わからない。そもそも、そのときは私もまだ幼く……力がなかったから……話でしか知らなかったからな……」

「……そうか……」

誰にも、ルイーダがミロをどこに埋葬したのかがわからないらしい。ファイリスは頭を抱えた。そんなファイリスに、サンデイは問いかける。

「なに考えてたワケ？」

「いや、そのミロさんが埋葬された場所に行けば、幽霊に会って話をすることが、ワンチャンでできたんじゃないか……と思っただけだ」

「なるほど、その手があったか」

「どうかしたのか？」

「なんでもないっす」

サンデイがほかに見えないのでそうはぐらかす横で、イアンが考え込んでいた。

「ルイーダさんに……そんなことがあったなんてな……」

「なんだかんだでイアン、ルイーダさんを気にしているのね」

「……別に、そんなんじゃないよ」

そうはなしている間に、日が暮れていたらしい。ナムジンはこの集落で休むことをすすめてきた。

「もう日が暮れている。この集落に用意されている宿屋で休むといい」

「そうしたほうがよさそうですね、手がかりはまた明日……探すことにしましょう」

「ああ」

そう会話をし、4人は宿屋に向かうべくパオを出て行った。

「つて……待って……」

「どうしたんですか？」

「あそこー！」

そんなとき、ファイリスは遠目に女戦士を発見した。雰囲気からして、周囲の遊牧民とは明らかに違う。

「…………誰かいるけど、他の人と違うな……………」

「行ってみましょう！」

「はい！」

その女戦士が何者なのか、一瞬の間でだいたいの憶測がついた4人は走り出した。

「あのー！」

「えっ？」

その女戦士に声をかけようとしたら、逆に声をかけられた。4人の反応から、自分の正体を知っているのだと気づき、女戦士は話しかけ続ける。

「声が聞こえるということは、私の姿が見えるのですね？」

「うん、見えます」

「貴女達のお話は聞いていました……………私がルイーダの友人である、ミロです！」

どうやらこの女戦士の幽霊こそが、ルイーダの亡き旧友・ミロのようだ。ミロは、彼らがルイーダの知り合いであることを問う。

「貴女達は……………どうやらルイーダを知っている様子……………」

「ああ、知ってるぜ。オレ達のパーティーをくませてくれたキツカケの人なんだしな」  
「……………」

この4人に一緒にいくように勧めたのがルイーダである。その情報を知ったミロは表情を曇らせた。そんなミロに、フィリスは問いかける。

「それで、ミロさんは……………あたし達にはあんたの姿が見えることを知って……………どうしたいんだ？」

そのフィリスの問いかけがキツカケとなり、ミロは顔を上げ意を決し、彼女に頼みたいことを告げる。それは、自分をこの世に縛り付けている未練の話。

「……………実は私、彼女に謝りたいことがあるのです！」

「謝る？ それって……………ルイーダさんを残して先に逝ってしまった

こと……ですか？」

「それもありますが……私は命を落とす直前、彼女にこう言いました。

悲しまないで。それよりも冒険の素晴らしさを……たくさんの人に知ってもらって……と。」

ルイーダはその言葉を受け止め、多くの旅人達が集まる……あの酒場をはじめました」

「そうか、それである人は……」

だから冒険者の集まる酒場を切り盛りし、パーティーをくませて冒険に繰り出したりアドバイスを送ったりしていたのだ。彼女の経験がそれを実現させている。

「たくさんの人に……冒険の素晴らしさを知ってほしいというのは本当です……しかし！ 彼女自身がそれを忘れてしまったては、意味がありません！」

「ミロさん……」

「お願いです、旅のお方……。彼女にもう一度、旅の素晴らしさを思い出させてはもらえませんか？」

ミロの願いを聞いた一同。特にイアンが、反応を見せる。

「それがルイーダさんの悩みを解決させる方法、なのかもしれねえな……」

「イアン……そうだな。ミロさん、あんたの願いを引き受けるよ！ だから、あんたがどこで眠ってるのか教えてくれ！」

イアンとフィリスの言葉を聞いたミロは、礼をいい自分の埋葬された墓地の場所を教える。

「ありがとうございます！ ……彼女が私を埋葬し……墓を建てたのは、ジャーホジ地方の陸地なんです」

「ジャーホジ地方!？」

「なんて……場所に……」

「そこまで一緒にきてください。ほかの方法では見失いますから、船を使って……」

「あ、ああ……わかった！」

ジャーホジ地方はここから北方にある、あれた地だ。そんなところまで行ったのかと色々言いたいことはあるのだが、そこを指摘すしかないのであればいくしかかない。

「が、がんばるぞー！」

「ああー！」

そう決めた4人は、船のとめてあるポイントに向かうことにする。

「フィリス？」

「あ、ゴメン！ 急用でできたからあたしらこのまま集落をでてくね！」

また近くにきたら遊びに来るからっ!!」

「え」

その途中でナムジンに遭遇したが、手早くそう説明をするとそのまま走り去っていった。

「…今度ワビの品でも持って行ってあげましょ」

「う、うん」

申し訳なきような顔をしているフィリスに、クルーヤはそうアドバイスを送る。

「……………思ったより普通にたどり着けたわね……………」

「ちと長かったけどな。 んで……………」

そう話をしながら船にたどり着き、イアンが船を操縦して船を北へと進めた結果、彼らはジャーホジ地方の荒地地に到着することができた。そこで4人は、ミロの名前が刻まれた墓石を発見する。

「これがきつと、ミロ様のお墓なのでしょう」

「そう、私のお墓です」

セルフィスの言葉を肯定するかのようになり、ミロが姿を現した。

「ミロさん」

「旅の方、そのお墓をよく調べてみてください」

そういわれたので、フィリスは墓をじっくりと見つめてみた。すると、墓のそばの土が少し盛り上がっているのが見えたので、そこを掘り返してみると、布にくるまれたペンダントが出てきた。

「……………ペンダント……………?」

「そのペンダントこそ、私とルイーダの友情のあかし……………私達はお

揃いのペンダントをつけ、いろんな町や人を見てみたいって……冒険に胸を躍らせていました」

「いろんな町や人を見てみたい……冒険……」

その言葉を聞いて、フィリスはかつての自分の姿を思い出した。

自分もまた、その好奇心や言葉に胸を躍らせていた時期があったから。

「しかし、私が命を落としたとき、私から……そして悲しい旅から決別するために……ルイーダは自分のペンダントを、ここに置いていったのです」

「……」

「……旅の方、お願いです。そのペンダントをルイーダの手に返してあげてください」

「ミロさん」

「そして、旅はすばらしい。そう友が言っていたと……お伝えください……」

「……必ず、伝えるよ」

ミロの願いを聞いたフィリスはそのペンダントを握りしめ、これを必ずルイーダに渡さなければならぬ、と気を引き締めた。

「にしてもこの世界って……大事なペンダントを石碑や墓に隠す習慣でもあるのだろうか……」

「え?」

「いや、こっちの話」

ミロの願いを聞き、ペンダントを手にした4人は、セントシユタイン城に帰ってきた。宿屋に入った一同はすぐに、早起きをして酒場の営業準備に入っていた、ルイーダに声をかける。

「ルイーダさん」

「あら、フィリスにイアン……突然出て行ったからどこにいったのかと思ったわ。それで……どうしたの?」

「実は、あんたに渡したいものがあってね……これだよ」

「え……なに……!?!」

フィリスが例のペンダントを見せると、ルイーダは驚く。なにしろそれは自分のかつての所有物であり、フィリスたちがそれを知っているはずがないのだから。

「ど、どうしてそのペンダントを……?!? ミロのお墓のことは、誰も言っただけなのに!」

「信じられないかもしれないけれど、オレ達にはわかるんすよ……亡くなった人の心が。……それを通して……」

「まさか、ミロが!? そんな、ありえないわよ」

「まあ、そう思うのが普通ツスよね。でも、事実ですよ……彼女が貴女に、伝えたい言葉があることも……」

イアンが中心となり、ミロの遺言を代弁する。旅はすばらしいもの……という言葉を引き出したルイーダは目を細める。

「……旅はすばらしい、か。なつかしい……あの子がいつも私に言っていた言葉……。夢を見ているような話だけど、本当のことみたいね……」

「あのさ、ルイーダさん」

そこでフィリスは、自分が腰に装備している剣をルイーダに少し見せる。

「あたしも、大事な人……師匠を目の前で失いました。今あたしが持つてるこの特別な剣は、彼の形見です……」

「……」

「あたしの話なんか……参考になるかはわからないけど……」

もしあたしがこの剣を手放したり……志半ばで旅をやめて、強くなる理由を見失ったら……失った悲しみで思い出をかき消そうとしたら……それでこそ師匠を本当の意味で……失うことになると思うんです。だから、あたしは今も旅を続けて、教わったことを胸に進んで……そして、強くなりたいっておもっているんです」

「……フィリス……」

フィリスの話聞いたルイーダは、自分の胸に手を当て、ペンダントを握りしめて淡々と語る。

「私、悲しい思い出から……逃げていたのかもしれないわね。旅



はすてきなものだったのに……その悲しみで、今まで楽しかった、すばらしかった思い出を……塗りつぶしてしまった。よかったことを……なかつたことにしてしまっていた……」

フィリスの話に自分のことをあてはめながらも、ルイーダは自分が長年なにを思っていたのか、なにを抱えていたのかを徐々に受け止めていき、やがて顔を上げた。

「私、そのうちまた旅にでもでてみようかしら。今平和だから、そのうち……実践してみたいわ」

「いいじゃねえですか。そんなときや、オレ達が同行しやすぜ」

イアンがそういうと、ルイーダはお願いねと言ってクスリと笑った。

「ありがとう。私の大切な宝物、持ってきてくれて……」

「へへ、どういたしまして」

そう話をしながら窓を開けると、そこに風がはいつてきた。

「んっ」

少し強いが、あたたかくて気持ちのいい風。その風は姿形はないものの、なんの風なのか……フィリスたちにはわかった。

「きつと、ミロさんかもしれないわね」

「ああ、あたしもそうだと思うよ……」

きつと立ち直り、過去から克服できたルイーダをみて、ミロは昇天したのだろう。もし生まれ変わったらそのときはまた、ルイーダとミロが友として同じ道を歩めればいい。

「近いうち、ミロさんのお墓に皆で……お花を手向けましょう」

「……ああ……」

## 05 「ふしぎな宝石の謎」

実はルイーダの過去を探る冒険は徹夜で行っていたため、4人は宿屋で昼まで熟睡していた。翌日目を覚ました一同は、ことの顛末を依頼人であるリツカに話した。

「そんなことがあったんだね」

「ああ」

「ルイーダさんの話をきいて、悩みが解決してよかった！　フィリスたちも、ルイーダさんの話を聞いてくれて…ありがとう！」

そういつてリツカはフィリス達に、今回の依頼を達成したお礼と褒美を兼ねた特別なデザートをもらった。それはリツカお手製フルーツタルトであり、4人はそれをわけあって食べていた。

「うーん！　甘くておいしいー！」

「ああ！　これなら旅の疲れが一気に吹っ飛ばぜ！」

わいわいとフルーツタルトを食べる4人、その傍らでリツカとルイーダは話をする。

「わたしも、いつかルイーダさんが安心して冒険に出かけられるように、この宿屋をもっと立派にして…守れるようにならなきゃ…！」

「そう言ってくれるのね…うれしいわリツカ。　ありがとう」

思えば自分の悩みが解消され、再び冒険への思いを抱くことができたのは、自分の異変に気づいたリツカがフィリス達にそのことを相談したからだ。ルイーダは自分の周りにこんなに味方がいたことを思い出しながら、フィリス達に近づく。

「そうだわ、今回の件のお礼に…あなた達にこれをあげるわね」

「え？」

そう言つてルイーダがお礼として差し出したのは、赤い宝石のようなものだった。

「キレイ…でも、これはなに？」

「宝石のカケラ、だと思うわ」

「宝石のカケラ？」

宝石であることはともかく、そのカケラとはなんなのだろうか。疑問符を浮かべるファイリス達に、ルイーダは話を続ける。

「昔、ミロと一緒に旅をしていたときに見つけたものなんだけど……途中で鑑定をしてもらったところ、宝石のカケラだということが判明してね。」

ずーっと忘れていたのだけど……あなた達のおかげで思い出したから……これを、お礼にあげようと思ったの……」

「そっか、さんきゅーなルイーダさん」

とりあえず報酬ということ、彼らはその宝石のカケラを受け取る。すると、そのカケラを凝視をしていたリツカが、口を開いた。

「そうだ、そのカケラ」

「なに？」

「似たようなものを、ウォル口村で見たことがある気がする」

「まじか！」

驚くファイリスにたいしリツカはうなずくと、どこでみかけたのかを教える。

「たぶん、今もあの宿屋にあるかもしれない。」

「気になるなら、いってみたらどうかかな？」

「ああ、じゃあ行ってみるよ！」

そうやって4人は、自分達が食べたものをきっちりと片づけた後で、セントシユタインの宿屋を飛び出しウォル口村に向かったのであった。

「いつもいつも、あわただしいわね」

「そうですね……でも、あの方がファイリス達らしいなあ……」

「なつつかしーな、ウォル口村」

リツカの話聞いたファイリス達は無事にウォル口村に着いた。その村の中でファイリスは懐かしげに目を細めて、そうつぶやいた。

「そういえば……ファイリスってこの村の守護天使だったのよね」

「ああ……師匠と一緒に守ってたんだ。あの事件が発生したのは、

あたしが彼からその地位を受け継いだ……直後のことだったんだ」

フィリスは天使時代のことを思い出しつつ、自分が墜落した後のウォルロ村の様子と今のウォルロ村の様子を見比べる。

「流石にあれから、かなりの時間が経ってるから……村の中はきれいになってるな！」

「……確かに、あのときはあの大地震の影響でボロボロだったからな……。あのあとで、村の人達ががんばって立て直したんだろう」

ボロボロの状態だったウォルロ村を見たことがあるイアンも、そうつぶやいた。そして、本来この村にきた目的を果たすために、彼らは宿屋を探していた。

「あれは……」

そんなときフィリスは、見覚えのある老人と金髪の少年をみつけ、声をかける。

「ニード！ それにリツカのおじいちゃんじゃん！」

「んあ？ 誰だ……このニード様の名前を呼ぶのは……」

名前を呼ばれたニードはそう言っ振り返り、そしてフィリスの顔を見て驚く。

「つて、フィリス！ フィリスじゃねーか！」

「久しぶりだな！」

「ああ！」

そう再会を楽しむフィリスとニードの間に割り込むようにして、リツカの祖父も懐かしげに目を細めて挨拶をしてきた。

「ほう、久しぶりじゃのう……フィリス！ リツカの旅立ちを見送って以来だが……元氣そうでなによりじゃ……」

「リツカのおじいさんも、元氣そうでよかったです」

「そしてそちらは……」

リツカの祖父はフィリスと一緒にいるイアン達に目を向けた。

それでフィリスは、あのあと自分に仲間が出来たことを2人が知らなかったことを思いだし、紹介をしようとする。

「ああ……そういえば、みんなには話してなかったですよ……彼らは」

「フィリスの仲間……つすよ」

「右に同じくです」

「わたしもですよー!」

そうイアン、セルフィス、クルーヤは簡単に自分達の説明をした。それ以上の言葉は不要だといっているかのようだった。

「あんたらさあ……」

「ほっほっほ……フィリスにこのように素晴らしい仲間ができておったんじやなあ……けっこうけっこう」

リツカの祖父は彼らの反応で納得をしたらしい、そこでフィリス達からリツカの近状や旅の話を書きたいということで、家に4人を招き入れることにした。それにニードも、便乗をする。

「なあ、オレもお前等の話を……」

「……ウオツホン! ニード……お前は宿屋の仕事がまだあるはずじゃろう?」

「うぐ……そ、そうだけど……」

「わかってるなら宿屋に戻らんかあ!! 少しでも手を抜いたらまた3日間、鬼の特訓じゃぞおお!!」

「は、はいいい!!」

リツカの祖父はニードにたいしそう怒鳴ると、ニードは焦って宿屋に帰っていった。そんなリツカの祖父の怒号の声を聞いた4人は、驚きすくみ上がった。いた。

「こ、こええ……」

「ひええ……あんな気迫を出せるおじいちゃんだったの……あの人……」

「ああ、あたしもビックリしてる……」

「亀の甲より年の功……ということなのでしょうか……」

穏やかで孫思いの老人、という印象しか抱いていなかった一同は、さきほどみたスパルタンな一面に対し驚愕しているようだ。

「……まあでも、今晚はこの宿屋にいけばいいだけだし……そのとぎに話し相手になってやろうよ」

「ああ」

「ええ」

「はい」

今晩はニードの宿屋に向かい、そこでニードと話をしてあげようと言うことでまとまり、一同はリツカの実家へ向かい、彼女の祖父に孫の様子を伝えた。

「そうかそうか、リツカはセントシユタインの宿で……そんなにがんばっているのかあ……」

「最近も、少し息詰まっていたようだったけど……母の言葉で立ち直ったようです。あの子は、強い子ですよ」

最近リツカがスランプ気味になりそれを乗り越えたことを、フィリスは彼に報告した。話を聞いた祖父はそうかと、孫の成長を喜び笑ってうなずいた。そこでクルーヤは、先ほどのニードに対する彼の対応にたいし、思うことがあったのでそのまま問いかける。

「もしかして、リツカちゃんの宿があんなに繁盛してて……それに納得するほどの完璧なおもてなしができるのって……あなたの指導のおかげなんでしょうか？」

「むう……わしもそうしようと思っておったのだが……わしがそうするまでもなく、自分の力でやっていったのじゃ。リツカに宿屋の基礎を教えたのは、リベルトだったこともあるしなあ」

リツカは元々、宿屋を経営する素質にめぐまれていたのだろう。そして、父が亡くなる時までそばで手伝いながらもその姿をずっと見ていた。だから、リツカはあの大きな宿屋の経営をまかせられたし、結果として宿屋を繁盛させることができている。もはや、そんな彼女の實力を疑うものなどないだろう。

「じゃが……ここからが大変じゃろうな……」

「………と、いうと？」

「じきに宿王グランプリの時期が訪れる……それで優勝しなければ、リツカがいかに宿屋の主人として優れているかが証明されない。

誠の功績をおさめなければ、誰かに認められることはないじゃろう」

「……誠の功績……」

いくら優れた力を持っていようとも、それを評価する人間がいたと

しても……それを勲章として形にしなければ、その実績を認められないだろう。その厳しい世界のことを、リツカの祖父は言っている。「リツカはまだ年の若い娘……。だから、多くのものが彼女の手腕を意地でも認めることはしないだろう……。たとえば、自分がその能力に劣っていたとしてもな……。」

「そんなの、ただの負け犬の遠吠えじゃないですか」

「うむ……。だが、それしかできぬものが大半じゃ……。他人の功績を認めれば、自分が陰になってしまう……。無意識にそう思ってしまう弱いものが……。多くいる」

「……………」

「だが、それでも頂点はとらねばならない……。真に素質があるものに……。輝きを持つものにこそ、そこにたつべきじゃろう」

そう語った後、リツカの祖父はフィリスに語る。

「それを証明するのは、リツカの友であるおぬしの役目じゃ……。フィリス」

「あ、あたしが……。？」

「そうじゃ……。思えば、おぬしがリツカに出会ったあの瞬間……。」

あれこそが、リツカの運命の転機だったのかもしれない」

「……………」

「じゃから、リツカにとって宿王になれるかどうか……。その重要人物がおぬしだと思おうのじゃ。どんなことがあっても、友として力になってやってくれ」

「……………はい！」

リツカの祖父の話に対し、フィリスはそう力強くうなづく。

「さて、長話をしてしまったのう……。疲れておらんか？」

「いいえ、大事なお話が聞けたので苦ではありませんよ。ではあたし達は、宿の方にいききたいとおもいます」

「そうじゃな……。ニードの宿屋、是非その目に焼き付けてくれ」

そうしてリツカの実家を後にしたフィリス達は、この村にきた本来の目的を果たすために、ニードが経営する宿屋に向かった。

「……いらっしやいませ」

「よっー！」

「……って、フィリス!？」

ニードはふつうに挨拶をしていたが、宿に入ってきたのがフィリス達だと気づき驚く。すぐにフィリスから話を聞きたくて仕方ないという様子のニードに気付いたフィリスは、笑いをこらえつつ話してやるよと言った。

「そうそう、リツカのじーちゃんや村のみんなから聞いちゃったよ。

あんた、あの宿屋ついだ後結局三日坊主でさぼったんだって?」

「なっ……! あいつら、おしゃべりがすぎるぞ……!」

「……んで、そのあとでじーさんにシゴかれて、体制を立て直したともな」

フィリスとイアンの言葉を聞いたニードは、必死にフィリス達に頼む。

「だ、だろ? だからその……オレがさぼって一度宿屋をダメにしかけたこと……リツカには黙っててくれよ。ここは、オレがあいつから堂々と引き継いじまったんだから……もし、さぼっちまったことがバレたら……」

「リツカちゃんにキラわれるかもしれないわね」

あまりにも率直すぎるクルーヤの言葉に、ニードはショックを受けようなだれる。もしかしたら、そうなる可能性があったことも否定できないからだ。そんなニードの反応をみて、セルフイスは彼の心情を察したらしく苦笑し、イアンはあきれ、クルーヤはくすくすと笑う。

「まあ立て直したんだし、リツカには内緒にして……あんたが頑張っているんだってことを伝えてやるよ」

「ほ、ホントか!？」

「ああ……ま、タダというわけにはいかないけどな。あたしらの話、聞いてもらうよ」

そう言っつてフィリスは、自分達がウォル口村に戻ってきた理由について話をする。



「宝石のカケラあ？」

「ああ、実はあたし達はリツカにその情報を聞いて……探しにきたんだ」

「何かご存じありませんか？」

フィリスの話を聞いたニードは頭をかきながら、フィリス達が求める宝石のことを思い出そうとしていた。すると、その宝石のことを思い出したらしい、ポンと手をたたいて顔を上げた。

「そうだ、思い出した！」

「え、なにに？」

「あの滝のそばにある、翼の生えている謎の像！ あそこにこっそり隠したんだよ！ いざとなればあの宝石を売って宿屋をゴージャスにするための……へそくりとして！」

それをきいた4人は盛大にずっこけ、そして顔を上げると全員で白い目をして、ニードをにらみつける。

「……………」

「そ、そんな目でみるなよ！ ホントはへそくりにしようと思っただけだよ……リツカの許可もあって、お前達がそれほしがってるってんなら、譲るからさ！」

そうニードが言うと、彼らは天使像に向かう。ニードが言うには、その像の足下に当たる部分に、布にくるんだ状態で埋めておいたそうだ。

「……………」

「どうした？」

そのときフィリスは、像の足下にあるプレートに目を向ける。しかし、そこにはなにも刻まれていなかった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

これも、あの戦いが終わった後の世界に生じた異変の一つである。各地にある天使の像にはかつて、守護天使の名前が刻まれていたの

だが、今はその像のみが残され天使の名前は消えてしまったのである。それは、このウォル口村の守護天使であるフィリスも、例外ではないようだ。

「……ま、あたしだけ特別に……ってわけにもいかないな。もしこれであたしだけ名前が残っていたんなら……それは不公平だ」

「……そっか。お前がそういうんなら、オレ達もとかくはいわねえぜ」

「……そうね、はやいところ宝石を掘り出しましょう」

「はい……」

そう言葉を交わし、4人は天使像の足下を掘ってみた。すると、そこには白い布にくるまれた何かが埋められており、フィリスはそれを取り出して布を開く。

「……これは……！」

「間違いない、ルーイダさんからもらった宝石のかけらと同じだ……！」

「じゃ、これで2個目……ってことね！」

そうして2個目の宝石を見つけた一同が喜んでいると、そこに村の教会に仕えているシスターが話しかけてきた。

「フィリスさん……その不思議な像が気になるんですか？」

「え？」

「その翼が生えた人のような形をした像は……いつから、この村にあるのが誰にもわからないのです。なぜここにあるのかも、なんのためにつくられたのかも……」

「……」

シスターの話を聞いたフィリスは、おもむろに口を開いた。

「……この翼の像……あたしからお願いがあるんです。このまま、ここに……置いておいてもらえませんか……？」

「えっ？」

「理由はいえませんが、あたしにとっても……みんなにとっても……この像は大事なものです。だから……」

「……わかりました、よろしいでしょう」

「……え……う？」

フィリスの唐突すぎるお願いに対し、シスターは頷く。あまりにもあつさりを受け入れられたため、フィリスはキョトンとした顔になってしまう。

「……この像からは、悪意は感じられません。むしろ、どこか神秘的で……神聖さににたものを感じます。きっと、いつの時代だったか……神がこの世につかわした、人々を守るための祈りの象徴……のようなものなのでしょう。わたし達は、この像も村の一部として、受け入れますわ」

「……ありがとうございます……」

シスターの言葉に対し、フィリスはそう答えたのであった。

そうして目的の宝石を見つけだした4人は、ニード達に挨拶をした後、再びウォルロ村を旅立っていった。また近いうちに立ち寄るところを約束して。

「ニードの宿屋、一回泊ってみたらよかつたかなあ？」

「まあまた、次に立ち寄った時でいいんじゃないかねえか？」

今彼等がいるのは、峠の道。そこでフィリス達はペットとはぐれた家族に協力して、ペットを探しだし、家族と再会させたのだ。まあまさか、そのペットの正体が善良な心を持つスライムというのは、想像していなかったことではあったのだが。

「……ねえ、ルイーダさんにもらった宝石と、あの村にあった宝石。

いまいちど、見比べてみない？」

「そうだな」

その一家とスライムを見送った後、クルーヤの案に同意したフィリスは、ふたつの宝石を取り出した。

「こうしてみると、この二つの宝石……どっちも色が同じだ……」

「そっくりというか、同じものでしょうか……!？」

見比べてみた、次の瞬間。突然として二つの宝石は淡い光を放ち、フィリスの手の中でその光を強くした。わ、と一同が声を上げた次の瞬間、その光は二つの宝石を飲み込んだ。

「な、なにが……!?」

光がやんだとき、二つの宝石はなくなり一つの宝石がフィリスの手の中にあつた。その宝石の大きさは、自分達が持っていた二つの宝石とほぼ同じことから、彼らの中にある説が浮かび上がった。

「くつついて……ひとつになった、ということか!」

「うっそ、マジ!?!」

まさかこんなことが起こるとは。そう思ったクルーヤは宝石に手をかざし、宝石に秘められた魔力を探る。

「わずかに魔力が感じられるわね……どんなものかまでは、わからないけど……悪い力は感じられない、ちよつと不思議な魔力……ね……」

「……もしかしたら、これと同じ宝石が、各地にあるのかもしれないね」

それぞれで、宝石に対する疑問を浮かべていく。

「ということは、また新しい宝石が見つかったら、くつついてまたひとつの宝石になっていくのか?」

「もし、そうなら……この宝石が集まったら、どうなっちゃうのかしら……。完成したら、どうなるの?」

「わかんねえ……でも、いろんな人がこれを持っていることといい……二つそろつたとたんに合体したことといい……ただの宝石じゃないことは確かだぜ。それに……」

「それに?」

フィリスは、その宝石を見つめ、ぽつりとつぶやいた。

「なんだか、懐かしいものを感じるなあ……とも思うし」

「……そう言われたら、気になってくるじゃないの。この宝石のこと」

「ああ……だからあたしは、守り人の使命を忘れるつもりはないけど……この宝石の秘密を明らかにしたい……」

そう自分の感情や願望を吐露すると、仲間はそれにたいする意見を口にする。

「宝の地図で、世界を密かにねらう奴を討つとくついでに……その宝

石の謎も解明する……か……。おもしろそうじゃねーか。また退屈しなさそうだぜ」

「そうですね……まだやることがあると知って、ここまで胸が躍るところと滅多にない機会です」

「わたしも、なんだか宝石の完成が楽しみになってきちゃった！」

「………決まり、かな」

そういつてファイリスは、仲間達に告げる。

「よし、じゃあ宝石探しも積極的にやっていこうぜ！　そんで、この宝石の秘密を明かしていこう！」

「「おーっ!!」」

その宝石をみて、サンデイがなにかを考え込んでいる様子だったのに、ファイリス達は誰も気づいていなかった。

## 06 「ロクサーヌのお願い」

「まあ、今日もこの宿屋に立ち寄ってくださいっただんですね」  
「え？」

ウォル口村で無事に宝石を手に入れたことを、リツカに報告をしようとしていたファイリス達は、そこでロクサーヌに声をかけられた。

「あなたは確か、ロクサーヌさんですよ？ 私達になにかご用ですか？」

「ええ……実はわたくし、折り入ってあなた達にお願いがありますの……」

「お願いってことは……依頼？」

ロクサーヌは頷くと、自分の依頼を口に出す。

「その……大変申し上げにくいのですが……実はリツカさまから、この宿屋の顧客リストなるものを、お借りしてほしいのです」

「え？ 顧客リスト？」

「直接頼むのは無理なのか？」

「ええ……顧客リストというのは、この宿屋にとって……大事なものですから……むやみに他人に貸し借りしてはいけないものなんです……。でもわたくしには必要で……。ぶしつけなのは承知の上です、ですが……どうかファイリスさま、お願いします！」

関係がとくにないゆえに、顧客リストがどんなものなのか、説明されてもすべてを理解できない自分がそんなものを必要とするのは違和感がないだろうか。そして、それほどに大事なものを、自分が借りることができなかった。

「あたしなんかで……いいのか？」

「ファイリス様は……リツカ様がもつとも信頼しているお方ので、適役だとおもうのです」

それほどまでにファイリスは、リツカと信頼しあっている。周囲はそう認知しているのだろう。それは本人達も自覚があり、だからこそ大事なものを簡単に貸し借りできるものではないはず。しかし、

依頼とあれば断るわけにもいかないし、この人は意地でもきかせようとするはず。そう思ったファイリスは悩みながらも……わかっただよ……とだけ返事をして、ロクサーヌの依頼を受けることにした。「え、顧客リストを……!?!」

「あ、ああ……いろいろ気になることがあつて……ちよつとだけみせてくんねーか?」

「……ファイリス……直球すぎ……」

そして、そのうやむやな気持ちをさっさとはらすために、ファイリスはすぐにリツカの方へ向かい、顧客リストを見せてほしいと頼んだのである。

「突然そんなことを言い出すなんて……まあ、ファイリスなら悪用なんかはしないと思うけど……」

「まじで、ごめんな?」

「いいよ。それで、顧客リストなんだけど……それなら金庫番のレナさんが預かっているよ。でも、顧客リストはこの宿屋の重要な情報が入ったものだから、少し見たらしっかり返してね?」

「……ああ、わかってる」

そう返事をしたファイリスはレナのところへ向かい、リツカの許可を得たから顧客リストを見せてほしいと頼んだ。するとレナはすんなりと、その顧客リストをファイリスに貸し出した。すぐに返すようにと言いつけて。

「これが顧客リストか……」

ごくり、と4人は緊張したように息をのむと、それをこつそりとロクサーヌのところへ持つて行った。

「ロクサーヌさん」

「まあ、ファイリスさま」

「これ……」

ロクサーヌは周囲に気付かれないように、顧客リストをファイリスから受け取り内容を確認する。その手際は、非常によい。

「まあ、お客様ひとりひとりにたいする、もてなしの方法まっでかいてあるなんて……これはすごい資料ですわ……!」

「頼むから少しみるだけにしてくれよ……あたしだって、リツカをだましてるみたいで心苦しいんだからよ……」

そうフィリスがお願いした、直後のことだった。

「おうおうおう！ ジャマするぜー！」

「!？」

「何事でしょう!？」

突然男たちが宿屋に入り込んできたのだ。 大声で周囲をまわし立てるかのように入ってきたその男たちにたいし、リツカは眉間にしわを寄せた。

「おう、ねえちゃん！ なんだその仏頂面は!? オレらは客だぞ!？」

「申し訳ありませんお客様、他のお客様のご迷惑になりますので……もう少し静かに……」

「ああ？ ここは客を差別するのかああ？ へえくくく？」

「……そういうわけでは……」

「クツ！ あいつらー！」

リツカにたいしぶしつけない態度をとるその男達に腹を立てたフィリスが、威嚇のために剣を抜いて前にでようとしたそのときだった。

「リツカ様、申し訳ありません。 この人たちは……その……わたくしに御用があるようです」

「ろ、ロクサーヌさん？」

まさかの名乗りを上げた存在に、リツカは呆然とする。 ロクサーヌが男達のところに向かうと、男達は怪しげに笑い、彼女を連れてさっさと宿屋を出て行った。 抜きかけた剣を鞘に戻したフィリスは、リツカの安否が気になり彼女のところへ向かう。 リツカはフィリスに対し大丈夫、と返事をする。ロクサーヌの身の安否を気にした。

「ど、どうしようフィリス!？」

「なにか怪しいわね……」

「ロクサーヌさんが心配だわ！ お願い、ちよつと様子を見てきてくれる!？」

「ああ、もちろんだぜ！ みんな！」



「わあつてる、とつとといくぞー！」

「ええ！」

「はい！」

「あいつらだ！」

ロクサーヌと男達を追跡するため宿屋を出たフィリス達は、すぐにその姿を発見した。まずは物陰に隠れて、冷静にその様子をうかがう。

「オラ、さつさと出すもん出せや。十分時間はやっただろ？」

「すみません……………実はまだ……………なにも……………」

「なんだとお!? てめえ、天下の宿六会をなめてんのか!？」

「一流の宿屋のノウハウを盗んで、そいつをオレらに流すのが、てめえの仕事だろうが！」

男は2人でロクサーヌにつめより、なにかを求めているようだ。

最初はロクサーヌは口を割らなかつたものの、男の一人が、彼女が後ろに隠しているものに気付いた。

「あつ！ アニキ、この女、うしろになにか、かくしてますぜ！」

「なんだと！」

それに気付いた男は、ロクサーヌからそれを奪い取った。

「あ、それは……………」

「ほーう、顧客リストか……………なんだよ、仕事してんじゃねえか」

「おっしや！ 今日のところはこいつで許してやろうじゃねーか。

これからもさぼるんじゃねえぞ」

「引き上げだ、いくぞオラア！」

そう声を上げると、怪しい男達は早々に立ち去っていつてしまった。その場には、ロクサーヌだけが残されている。

「あいつら！」

「フィリスさん、今はロクサーヌさんの身の方が心配です」

「……………わかつてる！」

セルフェイスに諭され、フィリス達はロクサーヌの方へと向かう。フィリス達の姿を見たロクサーヌは、眉を下げながら口を開く。

「今の話……聞かれてしまったようですわね」

「ろ、ロクサーヌさん……」

「あのもの達が言っていたことはすべて真実……わたくしは、実はスパイなのです……」

「はっ?」

「いきなりぶつとんでんな……オイ……」

急激についていけない、と感じたイアンはそう呟いた。 そんなイアンよそに、ロクサーヌは事情を語り始める。

「あの宿六会という組織に……父を人質に取られ、ズルズルと仕事をさせられるハメになったのです。 これまで……あのもの達には手を貸すまいと誓っていたのですが……やはり、父のことが気がかりで……」

「んで、ついに顧客リストを出しちやっただわけか……ほお……」

「……その……お願いです、ファイリス様……! 顧客リストを取り返してはくれませんか!? あの顧客リストが悪用されたら、リツカ様の大事なお客様に……ご迷惑がかかってしまいます!」

「そりゃあ、リツカからの大事な借り物だから取り返したいけど……ヤツらはいったいどこに……」

ファイリスとしては、あの男達を野放しにするわけにもいかないの  
で、ロクサーヌの依頼の延長戦として考えながら、宿六会をおうこと  
にしたい。 そのためにも手がかりがほしいのだが、それにたいしロ  
クサーヌは現実を伝えてくる。

「……宿六会はアジトを転々と移すナゾの組織で……彼らのアジト  
は、今はわかりません。 わたくしのような者ですら、人目のつかな  
い地下アジトとしか聞いたことがないのです……」

「ええ……!?」

「きつと、誰も寄りつかない地下洞窟や、井戸の中に彼らのアジトはあ  
るのでしょ……」

手がかりは人目のつかない場所、ということしかわからない。 そ  
れを風潰しに当たるだけになるだろうが、だからといってこのまま放  
置していいわけがない。

「……まあ、まかせとけ！ あいつらはあたし達がシバき倒してやるからよ！」

そう胸を張ってフィリスは、宿六会を追いかけるところを告げた。そこで、クルーヤはふとあることを思いつき彼女に告げた。

「そうだ、彼の手を借りてみたらどうかしら！」

「彼……そうだな、あいつの力が役に立つかも！」

そういつた情報に詳しくそうな人物に、心当たりがある。フィリス達は迷わず、その人物の元へと向かった。

「………んで、オレのところに来たつうわけか」

「そのとおり！」

フィリス達が助っ人として頼ったのは、カラコタ橋を拠点に活動をする盗賊団の頭・デュリオだった。裏社会に生きる彼であれば、宿六会という怪しい連中のアジトの場所を知っているか、あるいは心当たりがあるか。とにかく、なにか情報を持っているかもしれないと思ったのだ。

「まあいいぜ、ちようどお宝情報にいいモンがあるからよ。手を貸してやる」

「ホントか！」

事情を聞いたデュリオは、フィリス達の協力要請を受けることにした。タダではないものの、それは想定済みである。

「ただし、今回はこっちも生活がきついからな……報酬を山分けする場合、こっちが多めにもらわせていただくぜ」

「かまわねえ。オレ達はあいつに奪われたブツを取り戻すことさえできれば、それでいい」

そうして交渉は成立し、フィリス達はデュリオを加えて5人で行動をすることになった。そして彼らはデュリオの案内の元、カメラのつばさを使いある場所へ向かった。

「ここって、グビアナ!?!」

「ああ、この国の地下水道へつながる道の近辺で、宿六会のメンバーが出入りしてる……って情報があるんだ」

「……地下水道……」

そういえば、そんな場所があったし、自分達も足を踏み入れたな…  
と思いつつ、ファイリス達はデュリオのいうとおり、その下水道へ再  
び入っていった。

下水道を進む一同。 そんなとき、ファイリスはデュリオがこの情  
報を持っていたことを幸運に思っていたことを打ち明けた。

「それにしても……割とダメモトだったんだけど、まさかホントにあ  
んたが宿六会の情報を持ってたなんて……ビックリしたぜ」

「偶然だけど、ラッキーだったな」

「……………怪しい組織の話は、特に多く聞いてるんだよ……………集めて  
いるしな……………」

「…………デュリオ…………？」

曰くありげにそうつぶやいたデュリオが気になるクルーヤだったが、  
そこであのとときの宿六会のメンバーの姿を発見した。 やはり奴  
らはここを根城にしていたようだ。

「あいつらつ……………」

「…………お前達がみたのは、あいつらで間違いないか？」

「ええ、顔はハッキリと覚えていますから……………間違いありません……  
！」

まずは物陰に隠れて、様子をうかがう。 男達はなにかの紙の束を  
みて、腹を立てたようであり地面にそれをたたきつけていた。

「なんだよこの顧客リスト、デタラメだらけのニセモノじゃねえか！」

「クソツあの女、なめたまねをしゃがって……………」

「どうする、ボスに報告するか？」

「ああ……………こうなりやあ……………あの宿屋を直接、ぶったたくしかねえ  
……………」

そんな男達の話聞いたファイリスは、ますます目つきを鋭くさせ  
た。

「させるかよ……………」

「いくか!？」

「もちっ！」

そう声を掛け合いながら、フィリス達は一斉に姿を現した。

「うおらああーっ!!」

「ジャマすんぜえ!」

「!?」

そうして姿を現した5人にたいし、男達は驚く。

「げ、こいつら……あの宿屋の、用心棒のようなやつらじゃ!?」

「御託はいらねえんだよ……悪党が」

「悪いことはやめて、反省してください! そうしなければ、その身を滅ぼすことになります!」

イアンが低い声でにらみつけながらそう言うのに続いて、セルフイスが真剣な表情でそう訴えかける。

「ツケ、そんなちやつちい説教で更正したら、宿六会なんてやってらんねえぜ!」

「このまま捕まってたまるかよ!」

そう言い残し、彼らは立ち去っていった。逃がしてたまるか、といわんばかりに彼らは追跡を開始するが、そこでデュリオが彼らの逃げていった道とは別の場所へ向かおうとする。

「あれ、こつちじゃねえのか!」

「ああ……いやつの逃走パターンは、想定済みなんだよっ!」

そういつてデュリオは走り出し、そんな彼の姿を見たフィリス達は顔を見合わせて頷き、彼の後に付いていく。

「ぼ、ボス……やばいツスよお……! アジトに足が着いちまいやした!」

「ば、バカ野郎……なんで、てめえらこつちに逃げてくるんだ!」

宿六会は、逃げた先でボスと合流し自分達の居場所を知られたと報告していた。ボスと呼ばれた男は、この場から今すぐにでも立ち去るべきだと判断して彼らを抜け道に誘導しようとする。

「イオナズンッ!」

「うぎゃあ!」

だがそこで、クルーヤが攻撃魔法を放ち彼らを驚かせる。フィリス達が宿六会に追いついたのだ。

「降伏しなさい、さもないと吹っ飛ばすわよ！」

「クツ……誰がするかっ!!」

「おっと、やっぱ逃げるかあ？ 悪人ってホントにビビリだな……」

宿六会はさらに逃げようとしていた。それも予想していたといわんばかりにデュリオが動きだそうとした、そのときだった。

「アナタがたの行動……わたくし、お見通しでございますわ………!?!」

突然、女性の声が出たと思いきや、彼らの逃げ道をふさぐようにして、ロクサーヌが姿を現した。

「て………てめえは、ロ、ロクサーヌ!?」

「へ!?!」

「まあ……とても驚かれていますご様子……。 わたくし、この光景を前々から……夢に見ておりましたのよ……」

「ろ、ロクサーヌさん……?」

「どういうことだ………お前はワシらが雇ったスパイだろ！ そこをどけい！」

「スパイ………? うふふふっ………」

スパイと聞いて怪しげに笑うロクサーヌ。 そんな彼女に対しボスは、なにが可笑しいんだと怒鳴ると、ロクサーヌは怪しげな笑みを浮かべつつ自分の正体を打ち明ける。

「スパイというのは、仮初めの姿。 わたくし、本当は世界宿屋協会から匿名を受けた……エージェントですの。 ドン・ヤドロク様……アナタを捕まえるための……ね……!」

「「「えええっ!?!」」」

「な……な……!」

「チキショウ！ 顧客リストがデタラメだったのも……そういうわけかっ！」

自分達の下で働いていたものが、実は自分達と敵対する組織の人間だった。 それを知った宿六会の面々は、悔しさを顔にゆがめている。 そんな彼らの前でロクサーヌは、フィリス達に笑いかけた。

「皆様、感謝しますわ。 アナタ方ならば、きつとたどり着けると信じ

ておりました。あなた方のおかげでこうして、ドン・ヤドロクを追いつめることができたのです」

「え、ええ……う？」

「さあ、ドン・ヤドロク！ ムダな抵抗はおやめになって、お縄におつきになってくださいなっ！」

今の状況に追いつけていないフィリス達が戸惑っていることを横目に、ロクサーヌはドン・ヤドロクをとらえようとしていた。

「ククク……そういわれて素直に従う悪党がいると思うか？」

「!?」

「さあでてこい、宿六会の番犬！ ギヤングアニマルっ！」

そうドン・ヤドロクが声を上げると、洞窟の奥の方から巨大な、ヘルジャツカルのような魔物が現れた。ギヤングアニマル、と呼ばれたその魔物はフィリス達を敵だと認識すると、大きく吠えながら牙をむいた。

「今のうちに……」

「そうはさせませんわよっ！」

「うげ!？」

「彼らはわたくしが押さえつけておきます、あなたはあの魔物をぶつとばしてあげてくださいいな！」

ドン・ヤドロクの逃げ道をふさぐために素早く動きながら、そう告げてくるロクサーヌ。そんな彼女に対しフィリスは、覚悟を決めたように剣を抜き、構える。目の前の魔物……ギヤングアニマルと対峙をするために。

「ああもう！ やるつきやねーよっ！」

「デュリオ、お前はロクサーヌさんを援護してくれ！ このバケモンはオレ達がやる！」

「え？ ああ！ わかったぜ！」

今のロクサーヌの俊敏な動きをみたデュリオは、自分の援護が果たして必要なのかという疑問を抱きつつも、宿六会を逃がさないように立ち回ることにしたのであった。

「さて、さっさとケリをつけちまおうぜ！」

「ああ！」

そういつてフィリスは相手の弱点属性のフォースを仲間達にわけあたえ、自分とイアンにバイキルトをかける。イアンは自分のテンションをあげるために力をため、セルフィスが全員にスクルトをかけた。

「いっくわよ……マヒャデドス！」

クルーヤも、魔力を覚醒させてからのマヒャデドスを放ち、ギャングアニマルに大ダメージを与える。

「グガアア！」

「おっとと！」

ギャングアニマルはイアンにとっしんを仕掛けてきたが、イアンはそれを楽々と回避した。すると今度はフィリスに攻撃を仕掛けてきたので、フィリスはそれを盾で受け止めつつ、ギャングアニマルの足を切り裂く。

「ドルマドンッ！」

そこでセルフィスはドルマドンを放ち、ギャングアニマルの体制を崩す。

「……ぐげえ」

「たあいもねえな」

「貴様、なにもんだ……!?!」

「なに、ただの盗賊さ」

縄で宿六会の下っ端を縛り付けるデュリオ。その一方でフィリス達は、一斉にギャングアニマルにたたみかける体制に入っていた。「みんな……一気にやるぞ」「おう」

そして、4人は一斉に力を解き放つ。

「ギガスラッシュ！」

「氷結らんげき！」

「ドルマドン！」

「マヒャデドス！」



4人が全員で同時に、大技を放つと、その力に飲まれたギャングアニマルは断末魔をあげて崩れ落ち、息絶えた。

「な……ば……かな……ギャング、アニマルが……!」  
「これで終わりですよ、ドン・ヤドロク」

そういつてロクサーヌは素早くドン・ヤドロクの首を打ち、気絶させ、彼を縄で縛り付ける。そして、戦いが終わったのを確認したデュリオが、ファイリス達に声をかけてきた。

「…………おわつたみてえだな」

「ああ。あれくらいなら、あたしらの敵じゃねえしな」  
「お見事ですわ、ファイリス様!」

デュリオに返事をするファイリスの後ろで、ロクサーヌが満面の笑顔で賞賛の言葉をかけてきた。それにたいしファイリス達は苦笑していたものの、すぐにあることを思い出しそのことをロクサーヌに問いかける。

「そうだ、ロクサーヌさん……顧客リストは!?」

「それならば心配はいりません。彼らに渡したのは偽物……本物はちゃんと、わたくしが保管しています。こうしてドン・ヤドロクを無事にとらえたことで、漏洩する心配がなくなった……だから、これからリツカ様にお返ししますわ」

「そ、それならよかった」

今回ファイリス達が宿六会を追っていたのは、リツカから預かった顧客リストを取り戻すためだ。それが無事だとわかり、まずは安心する。その後、駆けつけた世界宿屋協会の手により、宿六会は連行されていった。彼らは今後は、グビアナの地下牢で囚人として、過ごすようだ。

「……何度も身分を偽り、また嘘をついていたことは、謝りますわ。でもこうでもしないと、宿六会のアジトは見つけられませんでしたから……。これは、ファイリス様達が相応の力を持っていると確信したから、あなた方を頼ることにしたんですのよ」

「じゃあ、宿六会にいたのは父親のことがあったからじゃないということか?」

「ええ、すべてはあのドン・ヤドロクを捕まえるための、真つ赤なウソですわ」

「あたし達に……顧客リストを持ってきてほしいといったことは……」

「あなた方を、その気にさせるための作戦の一つですわ」

今回の依頼について、ロクサーヌはそう冷静に説明をする。

「わたくし一人だけのチカラではドン・ヤドロクを捕まえるのは不可能に近い……そう判断したわたくしは、世界を旅する優秀な冒険家であり、腕も立つファイリス様達にどうしても、協力をあおぎたかったです」

「……」

「今までの非礼をわびると同時に、協力に感謝いたしますわ。これで、わたくしの肩の荷もおり……宿屋グランプリも無事に開催されることでしょう！」

そういつてロクサーヌはファイリス達に満面の笑顔を向けると、先に帰っていますわとだけ言い残して立ち去っていつてしまった。残されたファイリス達は、ただ呆然としていた。

「……なんだ、コレ……?」

「……さあ……」

「……事件解決、でいいのかな……」

「……多分……」

そんな4人の心中を察したデュリオは、苦笑した。

「……なんつーか、お前達も……あの依頼人のねーちゃんの手の上で転がされてた、ということだな……」

「……そんな率直に言わないでくれ……」

「……ま、どんまい……」

そこで、ファイリスはふとロクサーヌが別れ際に自分達にお礼として報酬金がでると言っていたことを思いだし、それをデュリオにあげることにする。

「そうだ。あとでロクサーヌさんから謝礼金がでるみたいだけど……その大半をデュリオにやるよ」

「え、約束とはいえ……ホントにいいのか？」

「ああ、問題ねーぜ。カネだったら、あたしらはそこそこあれば大丈夫だしな。むしろ、今回の件に巻き込んだわびも入ってるし……」

「そこは気にするな、オレにとつても衝撃のオチだし」

「オチとか言わないでよ」

そう報酬の山分けについて話し合ったフィリス達は地下水道をでて、そこでデュリオと別れることになった。

「……もしもまた、そつちで困ったことがあったら、今度はあたし達が力になるからな」

「……………そうか、まあそんなときは世話になるぜ。じゃ、謝礼金を待ってるからな」

「ああー！」

そうしてデュリオはカラコタ橋に向かってキメラの翼を投げて帰って行き、フィリス達もルーラの魔法でセントシュタインに帰って行ったのであった。

## 07 「謎の古文書」

今回の依頼主であるロクサーヌの正体を知り、彼女宿六会という謎の組織を捕らえたファイリス達。セントシユタインの宿屋に帰ってきたファイリス達はロクサーヌに改めて礼を言われた。ちなみに今回の依頼に利用された本物の顧客リストは、この宿屋に無事に戻ってきている。

「ファイリス様達のおかげで、無事に宿六会の面々をとらえることができました……改めて、お礼を言わせていただきますわ。わたくしはあなた方を信じていましたこと……それは決してウソではありませんので、ご安心くださいませ。今後、このロクサーヌ……世界宿屋協会のエージェントとして、リツカ様のこの宿屋を繁栄させ、守り通して見せますわ」

ロクサーヌからそう言葉をかけてもらい、今回のお礼として、なにかの地図と報酬金をたんまりともらったファイリス達は、自分達がもらうぶん、今回の任務の協力者であるデュリオに渡す分を分けていた。

「……じゃあ、こつちがデュリオにあげる分でもいいわね」

「ああ、早速カラコタ橋に……」

その分け前を持って行こうと、宿屋をでたときだった。

「あ、ファイリス殿！ この国にいらっしやったのですね！」

「へっ!？」

「あなたは、確か……セントシユタイン城の兵士、ですよね？」

「はい！」

声をかけてきたのは、城の警備をしている兵士だった。もしやまた、自分達に話があるのだろうかと問いかけると、兵士は頷き、彼女達への依頼主の話をしてきた。

「今回はフィオーネ姫様から、あなた方に依頼がございます」

「姫様から？」

「ええ……城のものには話は通しています故、すぐにでもフィオーネ

姫様のお部屋へいらしてください。依頼の内容は、姫様が直々にしてください」

「そうなのか」

「そうなのです！　では、私は確かに伝えたので……失礼します！」

そう彼女達に告げた兵士はさつきと城へと帰還し、残されたファイリス達は、どうするかを話し合う。

「どうするもこうするも……姫様の依頼なら、断れねえな」  
「だな」

「……しょうがないわね、デュリオにはもう少し待ってもらいましょ。それで、今回の依頼が終わったらすぐにでも、届けられたいわ」

「そうするしかないですね」

そうして彼らはまず、ファイオーネ姫の依頼をきき解決するため、セントシュタイン城へ入っていくのであった。姫の部屋は以前に行ったことがあるので迷うことなくそこへ向かうことができた。

「みなさま、お待ちしていましたわ」

「ファイオーネ姫様！」

部屋にはいると、ファイオーネ姫は微笑みかけながら4人を迎え入れたのであった。

どうぞ楽にしてください、と言われたものの、やはり一国の姫君相手では顔見知りであったとしても緊張してしまうものだ。ファイリス達はその緊張感を抱えつつも、本題に入っていく。

「ところで、姫様。あたし達に依頼ってなんですか？」

「ええ……実は……」

そういつてファイオーネ姫が取り出したのは、嚴重に鍵のかかった、少し古い本だった。

「本？」

「この本は、かつてこのセントシュタイン城の図書室に、保管されていたものです。それはある日、従者によって盗まれたのですが……先日、当時の行いを反省し、自供して……この本を返却してきたのです」

「それドロボーじゃないっすか」

「ええ、そうですね。しかし特に誰も気にとめなかったものであり、また本人も反省し返してくれたので、お咎めなしにしたんです」  
「器でかつ」

いくら反省していて盗んだものが対したことがないとはいえ、泥棒であることは変わらない。盗んだものが存在していたのは王城であればなおさら、許されることであることではない。だがその従者をすんなり許してしまうのは、この国の器は並のものではないだろう。

「……………ただ……………その方は、これと一緒にあった本のカギを、紛失してしまったようなのです」

「ダメじゃん！」

「そうなのです…………。しかし、私自身も、この本の中身が気になって……………。なので、フィリス様達への依頼は……………この本のカギを探してほしいというものです…………。」

本のカギを探してくれ、という依頼。捜し物というジャンルでわかることはできるが、如何せん情報が少ないので、4人とも困った顔になる。

「でも……………本のカギだったって……………なんの手がかりもなしは、キツイぜ」  
「そのことなのですが……………本を返しにきた方は、どこで無くしたのか、その記憶を伝えてくれました」

「本当に？」

「はい。その方が言うには、花が多く咲く地に隠された洞窟の中で、一瞬この本を捨てようか……………躊躇っていたそうです。もしかしたらそこにあるかも……………とおっしゃっていました」

「……………」

その話を聞き、4人は黙り込んでしまった。それを手がかりにしていいものか、という迷いがでたようだ。そんな彼らの表情から、この依頼の難しさを感じ取ったフィオーネ姫は眉を下げる。フィリス達もフィオーネ姫の表情にきづいたのか、あわて出す。

「まあ、なんとかしますよ！ このまま本が開かないで書かれてい

ることがわかんないままってのも、モヤモヤしちゃいますしね！」

「そうですね！」

「というわけで、今回のこの依頼、引き受けますよっ！」

「……申し訳ありません……どうか、お願いします！」

「任せてくださいええ！」

そうしてフィオーネ姫の依頼を引き受けることにしたフィリス達は、カギを探すため一旦セントシユタイン城をあとにした。花が有名な町とその周囲という情報には心当たりがあるものの、そこに隠された洞窟があるという情報は初耳だ。

「……ひよつとして、例の地図……なのでしょうか？」

「そうかも……って、ちよつと待って？」

「どうしたんだ、クルーヤ？」

そこでふと、クルーヤがあることに気付いて、ふくろからある地図を取り出した。それは、今朝ロクサーヌが自分達にくれたあの地図だった。

「さつきロクサーヌさんからお礼の証としてもらった、この地図……」

「……まさか……」

続けて、イアンが世界地図を取り出して、小さな地図と照らし合わせる。

「やつぱり……ほら、見てみるよ」

「確かに……サンマロウ近辺に、この地図と似た地形がありますね」

「ということは！」

「多分、この地図のポイントにある洞窟へ向かえば、なにかわかるはず……！」

だが、これはハッキリ言ってカケだ。この場所に本のカギがあるとは限らない。だが、今はそれ以外の手がかりはない。

「ええい、当たって砕けるだ！　いくぜやろうどもお！」

「ちよつと、女の子もいるんだからねー！」

フィリスの掛け声に対しクルーヤがそうツツコミを入れる。そんなやりとりをしつつも、サンマロウを目指すために天の箱船を呼んだ。

「ほお、サンマロウにな……」

「そこに、姫様の探してるカギがあるかもしれない……ってハナシなわけ？」

「そうそう」

そうアギロやサンデイに事情を説明し、天の箱船をサンマロウに向かって動かした。そうして連れて行ってもらった先は、サンマロウ手前の、花が咲き乱れる道、その道中。そこに着地した一同は、地図の場所に向かって歩き出し、そのポイントで穴を掘ってみる。

「うわー！」

「ホントに洞窟があったー！」

あの宝の地図のポイントには、確かに洞窟が存在していた。リツカの持っていた地図を手がかりに探していて、発見したときと同じだ。ということはこの洞窟の中にはあの時のように、強力な魔物が多く潜んでいる可能性が高い。

「入ってみましょう、どんな魔物がでるかわからないから……用心しながら……」

「わかってる」

「絶対に攻略して、カギも見つけちゃいませよ」

「おう、絶対にあると……信じようぜ」

そう4人は覚悟を決めたかのように、洞窟に足を踏み入れたのであった。

「大丈夫かなあ？」

「あいつらなら、心配ねえだろ」

アギロとサンデイは、洞窟にはいつていった4人を見送った。

そして、約2時間後。

「あつちゅーまに帰ってきてやったぞー！」

「はやっ!？」

すぐに地図の洞窟を攻略して戻ってきたフィリスに、サンデイがツッコミをいれる。彼らは洞窟のもっとも深い場所まで進み、隅々まで目的のカギを探していた。そうして一番深いところにいた、ハ



ヌマーンという魔物を倒して、戻ってきたのである。

「お疲れさん。 んで、例のカギってのは見つかったのか？」

「うーん……一応」

そう言ってファイリス達は、洞窟の奥で発見したカギを取り出してアギロやサンデイに見せた。

「カギらしいカギは、これしかなかったけど」

「でも、作りや色から感じ取られる年季からして、あの本のものである可能性がきわめて高いと思われれます」

「そうなのか？」

「ええ……とはいえ、根拠はないですが……」

セルフィスの実家には多くの古文書や歴史の資料がある。 彼も、そういうものを多く見ていたために、自然と詳しくなったのだろう。 発見したカギは、例の本のものと推測できたのも、それが理由だ。

「とりあえず、それで開くかどうか試してみないとはじまらねえし……このまま姫様のところへ戻って、実際にやってみようぜ」

「そうだな」

ものは試し、といわんばかりに4人はカギを手に領きあい、アギロに呼びかける。

「というわけでアギロの旦那、セントシユタイン城に向かってくれ！」

「おう！」

「……っーかルーラつかいなよ……」

ファイリス達の言葉に応じて動き出した天の箱船の中で、再び、サンデイがツツコミを入れる。 そんなサンデイのツツコミを聞き流しつつ、ファイリス達はセントシユタインに帰還し、城に入ってフィオーネ姫の元へ向かった。

「まあ……ファイリス様……そして皆様……！ ご無事だったのですね！」

「えっへへ！」

まずは自分達を心配していたというフィオーネ姫に、無事を伝える。 彼女達の帰還や表情から、無事であることを確認したフィオーネ姫は、安堵の笑みを浮かべた。

「それが、この本のカギでしょうか？」

「とりあえず、あたし達が発見できたのはそれだけです」

そうしてフィリス達は、フィオーネ姫に例のカギを見せた。

「とりあえず、鍵穴に刺してみますね」

「うん、お願いします」

カギを受け取ったフィオーネ姫は、鍵穴にカギをさして回す。するとカチャリと音が鳴り、表紙を開いてみればあっさりとおいた。

「開きましたわ！」

「やった、大正解！」

「さっすが、セルフィスだぜ！」

「そ、そうでしょうか？」

今回の依頼は大成功だと確信した一回は喜び、とくにこのカギが本物であると見抜いたセルフィスをほめる。そんなフィリス達にフィオーネ姫はありがとうございます、と満面の笑顔でお礼を言う。そして、視線を本に戻す。

「では、早速読んでみますね……………」

フィオーネ姫が真剣な表情でそう告げると、フィリス達も息をのみながら頷く。こうなったら、カギを掛けるほど嚴重に封じられているその本の中身が気になって気になって仕方ない。ここまでやったのだったら、その中身をしっかりと確認しなければ気が済まない。

フィオーネ姫は、フィリス達の気持ちを背負いながら、本を開いて内容に目を通した。

「……………これは……………」

「どうなさったんですか!？」

内容に目を通し黙読していたフィオーネ姫は、徐々に目を丸くさせていった。驚きと戸惑いが混じった声を出しながら、顔を青ざめさせていった。

「ああ……………」

「わ! ひ、姫様!？」

そして、彼女はそのまま倒れてしまった。突然倒れた姫に対し慌てる一同。そこに、この城のメイドが数名駆け込んできた。

「姫様！」

「フィオーネ姫様、どうなさったのです!!？」

メイド達が呼びかけても、フィオーネ姫はぐったりとしていて意識が戻る気配はない。気を失っているだけだとは思いますが、それでも突然のことだったので慌ててしまう。そんなフィリス達に気付いたのか、一人のメイドが声をかけてきた。

「申し訳ありません、フィリス様。フィオーネ姫様はお疲れのようです……」

「今日は、もうお帰りくださいませ」

「わ………わかった……じゃ、あとはお願いするよ………」

「失礼します……」

そう言葉を交わして、4人は早々に部屋を出ていき、そのまま城を出ていった。今フィリス達は、フィオーネ姫の容態を気にしている。

「………どうしちゃったのかしら、姫様………」

「………わかんねえ……突然のことだったからな………」

「あの古文書に、謎が隠れてると思うのですが………王城に入れな  
い以上、確認はとれませんね」

「とりあえず………姫さんの調子が戻るのを、待つしかねーな」

「ああ」

そう話をするなかで、イアンはあの状況で内心想っていたことを口にする。

「………にしても、オレ達に疑いの目がかからなかったのが、不幸中の  
幸いだよな………」

「そういえば、そうですね」

「あたし達、なんとかあの国の信頼を得ている………ということ、いい  
んだよな?」

「ええ、それでいいと思うわよ」

とりあえず今はフィオーネ姫の体調が戻ることを祈りながら待つ  
しかないだろう。慌てず冷静に状況を見て、今できることをやるべ  
きだ。そう決めたときフィリスは、あることを思い出した。

「あ、そうだ」

このあと、フィリス達はカラコタ橋へルーラで向かい、デュリオに依頼の報酬金の山分け分を渡したのであった。デュリオは報酬金を受け取ると、またなにかあったら力を貸してくれとだけ伝えてきた。

そして、翌日。セントシユタインの宿屋で休んでいたフィリス達の方に、フィオーネ姫が目を覚ましたという話が舞い込んできたので、彼女達は迷わず城へ向かいフィオーネ姫と謁見した。

「フィオーネ姫様！」

「フィリス様」

そこには、昨日と変わらない姿の姫がいた。ただ、その顔はフィリス達に心配をかけたことによる、申し訳なさに染まっていた。

「皆様も……昨日は申し訳ありませんでした……突然倒れたりなんかして……」

「あ……ああ……ビツクリしましたよ。今は、平気ですか？」

「はい、もう大丈夫です」

本当はまだ本調子ではないだろうと、フィリス達は思っていた。

今日こうして目を覚ましたと聞いて会いに来たのも、お見舞いのような感覚である。だが今そこにいるフィオーネ姫は、いつもの姿であった。

「ところで、姫様。昨日のあの本は……いったい……」

そこでフィリス達が気になったのは、フィオーネ姫が失神をするほどのものが書かれているであろうあの本のことであった。いったいなにが書かれていたのだろうか。そのことを問いかけようとしたとき、フィオーネ姫は首を横に振った。

「……申し訳ありません、フィリス様。あの古文書の内容のこととは……今はなにもいわないでくださいまし……」

「ひ、姫様？」

「カギを見つけてくださったお礼と、昨日心配かけたお詫びとして……物足りないかもしれませんが……これを差し上げますわ」

そう言ってファイオーネ姫は、あの宝石のカケラを取り出した。それをみたファイリス達は、驚く。

「ほ、宝石のカケラ!？」

「まさか、姫様もこれを持っていたなんて……………」

そしてファイオーネ姫も、この宝石を知っているらしい彼らのリアクションが意外だったようだ。首を傾げている。

「どうかなさったんですか？」

「あ、いや……………ちようどあたし達もこういうの集めてたから……………偶然が重なったことに、ビックリしたっただけです」

「まあ、そうでしたの」

とりあえず、これで3個目の宝石のカケラということになる。この宝石のカケラも、地道に集まっているのだ。今回はこれで話をいったん切り上げた方がいいだろうと思い、ファイリスが彼女に持ちかける。

「……………あなたのこと。大丈夫なら、いいんです。だけどまたなにかあったら、あたしらに迷わずいつてくださいよう？」

「はい」

「というわけで、今回の依頼は、達成したことだし……………あたし達は失礼しますねっ」

そうして、ファイオーネ姫の依頼は完遂したことにし、彼女から受け取った例の宝石のかけらを手にして城をあとにしたのであった。もしまた異変が生じたり、話す気になったら正直に話すことを約束させて。

「……………ごめんなさい……………ファイリス様……………私も、あの本の内容について……………頭の整理がまだ追いついていないのです……………。真実がわかれば……………そして、その証拠が見つければ……………必ず、打ち明けると約束しますわ……………」

自室で一人になったファイオーネ姫は、例の本を手に、呟いた。そこに、彼女達に対する謝罪を口にしながら。

「それまで、隠し事をしてしまうことを……………そして、巻き込んでしまうことを……………どうか、お許しくださいまし……………」

そして、その先にあるものにたいし、また彼女らの力が必要になるであろうことを、姫は予測していた。その渦にたいする個人の思いを胸に秘め、フィオーネ姫は表情を曇らせたのであった。

## 08 「セントシユタインとルディアノ」

この日フィリス達はセントシユタインで新装開店したという、よろず屋を訪れていた。

「うん、オレこいつを買ってくぜ」

「僕も、こちらにしようと思います」

そこでイアンとセルフィスが、武器を新調していた。彼らが普段利用している武器はそれぞれ、棍と弓なのだが、今装備しているものにガタがきていたようだ。新しいメイン武器とサブで使う武器をそれぞれ購入した2人は、外で待っているフィリスとクルーヤの元に戻ってきた。

「よう、待たせたな」

「どうだ、いい武器手に入った？」

「はい、大丈夫ですよ」

これで、宝の地図に潜んでいるような魔物がいつ出てこようとも対等に戦えるはず。それができれば、もっといろんな依頼を引き受けられるだろう。

「よし！ じゃあ次の依頼主を探すために、出発しようぜ！」

「ああー！」

そう言葉を交わし準備が整ったところで4人は、再び旅にしようとしていた。そのときだった。

「あんたが、黒騎士騒ぎを解決したという、ウワサの傭兵4人組かい？」

「へっ?」

そこに現れたのは、赤く長い髪にローブをまとった女性だった。そばには武道家の男性もいる。

「失礼ですが、あなた方は？」

「おっと、これは失礼。 オレは武道家のリユーマで、彼女は魔法使いのマリツサ。 オレ達はコンビをくんで、各地を旅しているんだ」

「んで、今回はどんな依頼も完璧にこなす実力派揃いの傭兵4人組の

話を聞いて、あんたらに依頼をしようって思ったから、声をかけたつてわけさ」

武道家はリユーマ、魔法使いはマリツサというらしい。とりあえず2人の正体はわかり、自分達に声をかけてきたということは依頼主のようだ。

「わたし達って、傭兵って思われてるの!？」

「多分……」

自分達がどう思われているかを知ったクルーヤはセルフイスにそうヒソヒソと話しかける横で、2人は事情を説明する。

「実はアタシ達で、ルディアノに帰ろう団というグループを結成することにしたのさ」

「る、ルディアノに帰ろう団?」

「ルディアノに帰ろう団ってのは、滅びたルディアノ王国をよみがえらせよう……という集まりさ」

ルディアノ王国といえば、黒騎士騒ぎの最中で訪れた廃墟に存在していたという大昔の王国だ。確か黒騎士であるレオコーンが婚約者のメリア姫を待たせていたはず。だが今となっては先述の通り、滅びて廃墟と化してしまっている。それをよみがえらせようという働きがあったとは、初耳だ。一同はマリツサの話に引き続き耳を傾ける。

「黒騎士騒ぎの結果、北にある荒れ地はルディアノっていう国の跡地らしいってことがわかってね。それで、気になって詳しく調べたら、このセントシュタインとルディアノの間には、なにかがありそうなんだ」

「その謎を追いかけてみようってのも、団の目的のひとつなんだよ」

「へえ、おもしろそうじゃん」

「だろ? 今メンバーは、そんなルディアノの人間の末裔である……アタシとこいつだけなんだけどね。でもルディアノの子孫が見つかれば、団のメンバーとして勧誘していく方針さ」

ルディアノに帰ろう団、という組織の存在意義や目的は理解できたフィリスは、依頼の内容を確認する。



「……それで、あたし達に依頼っていうのは？」

「実は……ルディアノ城へ様子を見に行ってみただけ……そこにちよつとヤバイ魔物がいてねえ。とてもじゃないけど、アタシらじゃ少し歯が立ちそうにないんだよ」

「もしかして、依頼の内容っていうのは……その魔物退治ってわけか？」

フィリスがそう問いかけると、マリツサはその通りだと頷いた。

難しい話をされたら自分ではついていけないが、やっかいな魔物を倒すだけなら朝飯前なフィリスは、頷いた。

「まあいいぜ、引き受けてやるよ！」

「魔物退治は得意分野だしな」

そういつてフィリス達は、ルディアノに帰ろう団の依頼を引き受けることにしたのであった。

「お、引き受けてくれるか！ さすがだねえ！」

「魔物は確か、真つ赤で……でかい奴だな。それを3体見かけた。

とりあえずその魔物を3体倒してくれ」

「情報がおおざっぱだけど、了解したぜ」

そうして4人は、ルディアノ王国の跡地に再び足を踏み入れたのだった。ここにきたのはいつ以来だろう、そう不意に振り返ったイアンは、ポツリと語る。

「思えばあのとき、オレ達って……ハッキリとはパーティーくもうって決めてなかったんだよな。リーダーダさんのススメに乗っかって……そのままなんだよな」

「そうね、気付いたら目の前の問題から目をそらせなくて……力を合わせるのが当たり前みたいになってたわ……」

「まさか、あれがキツカケで常識はずれの旅にでることになるとは……思っていませんでした……」

「……偶然の力って、今思えばパネエね」

「……うん」

初めてここを訪れたときは、想像していなかったこと。それが現

実となり、既に過ぎた時間の記憶である。 そんな数奇な運命を改めて感じ取りながらも、一同は今の依頼を完遂させるためにまずは、ルディアノ王国後津を隅々まで調べてみることにした。

「あれから時間がそれなりに経過しているから………荒廃がさらに進んでいますね………」

そつと、セルフィスは城の外壁に触れながら、ルディアノの今の状態を口にする。 触ってみるだけでわかるのかよ、とイアンは苦笑しながらつつこむ一方で、セルフィスは冷静に今の状態にたいする感想を率直に口に出す。

「………ルディアノ王国の再建は、難しいかもしれませんが」

「そりやそうだ。 国を作ることじたい、難しい話だもんな。 元から形が残っていたとしても……ラクじゃねーだろうぜ」

「それでもやろうってなら、あの人達も覚悟はできているんじゃないか？」

「今はまだ2人だけ………人数増やす気、満々だったものね」

案外、この国の再建に本格的に挑むことになったときには、大人数になっていそうな気がする。 そう3人が明るく楽しげにはなしている一方、城の様子を確かめていたセルフィスだけは、眉間にしわを寄せていた。

「………にしても………この外壁の感触………まるで………」

セルフィスはその先に言葉を口に出そうとした、そのときだった。

「グギユアアアツ!!」

「うわあ!?!」

「セルフィス!」

彼のそばに突如魔物が出現し、襲いかかってきたのだ。 間一髪のところ、セルフィスは魔物の攻撃を回避したものの、それは赤く燃えるような体にギョロリと動く目玉を持つ不気味な魔物だった。 その魔物を、4人は初めて目の当たりにする。

「なんだこいつは!?!」

「えつと………あ、あった! エビルフレイムっていうらしいよ!」

「エビルフレイム?」

「前来たときはこんな魔物、いなかったわよ!?」

サンデイの情報からこの魔物がエビルフレイムであることを知ったファイリス達。前にこのルディアノを訪れていなかったときは姿を見かけなかった魔物がいま、ここに現れているのだ。何故だろうと彼らは戸惑いを見せつつも、これが今回のターゲットであると特徴などをみて認識する。

「きつと、こいつらだな……あの人達が退治をしてくれって依頼をしていた魔物は!」

「あの魔物は確かに、並大抵の人間じゃ歯がたたねえな。あたしらの出番つてのもわかるぜ!」

そういつてファイリス達は一斉に武器を手に取り、戦闘態勢に入った。まずはファイリスがきりかかり、エビルフレイムの体を切り裂く。そのとき、魔物から発せられる強い熱を肌で感じ取る。それはファイリスに続いて攻撃を繰り出したイアンも、同じようだ。

「クツ……やっぱあつちいな……!」

「炎をまとったような熱い魔物……だったら……これでどう!」

そういつてクルーヤは魔力を覚醒させ、杖の先端に凍てつく魔力を集めて放った。

「マヒヤド!」

マヒヤドの冷気はエビルフレイムを包み込み、大ダメージを与えた。直後に炎をはいてきたが、クルーヤは再びマヒヤドを放ってそれを相殺する。その背後でセルフィスは弓矢を構え、ねらいを定めている。

「これで、とどめだつ!」

そういつてセルフィスが矢を放つと、矢はエビルフレイムのもつもつとも大きな目玉、その中心に刺さる。その一撃が効いたのかエビルフレイムは不気味な断末魔をあげながら消滅していった。

「……ビュ……ビュアア……」

「よし……」

これでエビルフレイムを倒すことが出来たが、まだ終わりではない。マリツサやリユーマの話によれば、エビルフレイムはまだいる

はずだ。

「確か3体ほど見かけたって話ですね」

「ということはまだ2体、潜んでいるんだね」

「よし、探しにいこー！」

「ブシュウアアア………」

「よし、これで2体目ええっ！」

2体目のエビルフレイムはすんなりと見つかり、たった今倒したところである。これでルディアノに出没したエビルフレイムは、あと1体だ。

「最後の1体はどこだ？」

「慎重に探すぞ」

そう語り合いつつ、4人はエビルフレイムを探す。途中で発見しているのは、メーダやしにがみなど、もはや襲いかかってくるどころか向こうがファイリス達に近づこうとせずむしろ逃げていく魔物ばかりだ。

「あれ、あんな地下室……あつたつけ？」

「前きたときは、気付かなかったな……」

そんな時、城の内部に地下への階段を発見した。以前ここを訪れたときには気付かなかった階段4人は、その階段を下ろうとした。

「グウル……グバア……」

その階段を下った先。そこには確かにエビルフレイムは存在していた。だが、そこにいるのはエビルフレイムだけではなかった。「けがらわしきケモノよ……。ここから、立ち去りなさい……ここは……」

そこには、純白のドレスを身にまとった美しい女性が立っていたのだ。女性は厳しい表情でその魔物に立ち去るように告げるのだが、魔物は聞く耳を持たなかった。

「グアアアーツ!!」

「……………」

魔物エビルフレームは叫び声をあげながら女性に襲いかかるもの、その体はすり抜けていく。何故攻撃が通じないのだと混乱するエビルフレームを、女性は冷たい目で見ると。

「誰か襲われてる!」

「急いで助けましょう!」

その直後、ファイリス達はその部屋に入ってきた。ファイリス達の視線からすればエビルフレームが女性に襲われているように見えた。

このままでは女性がエビルフレームのエサになってしまうと思つたファイリス達は彼女助けるために駆け寄ると、ファイリス達の存在に気付いたエビルフレームは、今度はファイリス達に敵意を向けてきた。

「グブウルウウ……? ブツシャアアアツ!」

「こつちにきたわよ!」

「上等だ、かかってこい!」

そう言つてファイリス達はエビルフレームの注意を自分達に向けさせ、先ほどまでと同じ戦い方でエビルフレームと戦い、倒した。これによりルディアノで目撃されたエビルフレームは、3体すべて倒したことになる。

「大丈夫!? ケガは……」

だが今は、あの女性の安否が重要だ。そう思いファイリスは女性に声をかけたが、直後にサンデイがある違和感に気付く。

「………って、よく見たらこの人……ユレーじゃね?」

「………あ、ホントだ………あの……」

その女性は、サンデイの言うとおり幽霊だったのだ。だからエビルフレームの攻撃はいつさい通用しなかった。エビルフレームが消えたことで女性の幽霊は安堵したらしい、ほほえみながらファイリスに礼の言葉をつける。

「………ありが………とう……」

それだけを言い残して、女性の幽霊は消えた。成仏をしたわけではないので、一度立ち去ったような感覚だろう。そんなとき、クルーヤは驚いた顔のまま、女性の幽霊をみたときの感想をそのまま口に出す。

「にしても今の人、フィオーネ姫様に似てなかった!？」

「……………だ……………だよな!？」

「ホントにクリソツじゃね!？」

その女性の姿は、確かにフィオーネ姫にうり二つだった。それは全員が感じていたことであつたらしい、クルーヤの感想に賛同していた。そんなことを考えながらも、この部屋がどんな部屋なのかを見渡す。

「……、誰かの個室みたいね」

「今の人の部屋、かもしれませぬね」

あのフィオーネ姫にそっくりな女性が生前に個室として利用していた部屋だろう。

「いやあ、かつこいいねえ、強いねえ！ ホレボレしちゃう！ ルディアノへ帰ろう団の力になってくれたこと……………心からお礼を言わせてもらおうよ！」

実は同時に、ある依頼も引き受けていたのでそちらも達成させていたのだ。それは、セントシユタイン城に仕えているメイドの一人が実は、ルディアノの人間の血を引くものであると判明したので勧誘してほしいというものだった。勧誘にはある条件があつたものの、フィリス達はその条件を見事クリアし、彼女をメンバーに引き入れることに成功したのである。

「あんたのおかげでメンバーも一人増えたし、安心してルディアノをじっくりと見に行くことができそうだよ！ そのうち、ルディアノへ行こうツアーでもやってみようかね？」

「そのためには、現場をしつかり押さえて……………魔物も撃退して行かないといけないけど……………でも、なんとかなりそうだ！」

そうして今回の依頼はここまでとし、また何か頼みたいことがあつたら再び依頼をしようと言ふことで話はまとまつた。気付けば自分達はルディアノの人間の血を引いているわけではないのだが、ルディアノへ帰ろう団の一員ということになつていたのであるが、まあ特別気にする必要はなさそうなのでないことにする。

「……………それにしても、フルムーンアックスで喜ぶメイドさんって、滅多にいないわよね……………」

「……………うん……………」

実はメイドがルディアノへ帰ろう団に入団する条件というのは、自分にフルムーンアックスという武器をプレゼントしてくれることだったのだ。なんとか入手してプレゼントすることは出来たものの、ふつうのメイドがそんなものを欲しがるとはどうてい思えない。そのメイドは何者なんだと疑問が浮かびつつも、もう一つ彼らにとって驚くべきことが起きていた。

「おまけに、フィオーネ姫様が自ら参加を申し出るなんて……………」

「ああ。なんだかルディアノに……………すっげー肩入れをしているように見えたな……………」

実はこの話を偶然にも耳に入れたフィオーネ姫が、自ら参加を申し出たいと言いだしたのだ。それに反対しようにもハッキリとした理由が見つからないため、マリツサにも話を通したところ最初は驚きこそしたものの心強いメンバーとして受け入れられた。だが、そんな行動をとったら姫としての立場が危うくなってしまうのではないかという不安もあるのもまた事実。

「身分とか立場とかでかたくなるしいことはいうつもりはないけどさ、一国のお姫様がそんなことしちゃっていいわけ？」

「だ、大丈夫だろ……………今世界は……………一応平和なはずだし。犯罪に手を染めようってわけでもないから」

「そ、そうそう！ そうだよな！」

何故フィオーネ姫は、そこまでルディアノに関心を示し力になりたいて望むのか。そんな疑問を抱きながらも、公になれば国中が大騒ぎになるのは一目瞭然なので、今はひっそりと様子を見てみることにした。

「……………うーん……………何事もなければ……………よいのですが……………」

「……………そうね……………」

そうして一抹の不安を覚えながらも、彼らはしばらくルディアノに帰ろう団に手を貸すことにしたのであった。

「とはいえまずは、この団の名前ももう少しひねった方がよくネ？」  
「サンデー、しーっ！」



## 09 「ルディアノ会合」

それは、ルディアノへ帰ろう団の存在を知ってから、一週間後のことだった。しばらくはほかの依頼を聞いて達成していたフィリスに、団のリーダー的存在である魔法使いの女性・マリツサが彼女に依頼を出すために声をかけてきたのだ。

「第一回ルディアノ会合？」

「ああ、そうさ」

リツカの宿屋の内部にある、ルイーダの酒場で菓子や茶を口にしながらフィリス達は、マリツサの依頼にたいし耳を傾けていた。

「急なことにはなつたけど、ルディアノへ帰ろう団の、初会合をやることになったんだ。んで、フィオーネ姫にもその話をしてみたところ、どうしてもルディアノ城跡でやりたいって言うんで……そこでやることにしたんだよ」

「わざわざ跡地で？」

「なぜ？」

「さあ……そこまではわからなかったな」

どうやら今回の会合の場所を決めたのは、フィオーネ姫のようだ。というかいつの間にか姫とそんな話をしたのだ。相手は仮にも一

国の姫君のはずなのに。そんな疑問を抱えながらも、フィリスはルディアノで会合を行うのは危険がないかを心配して問いかける。

「道中は魔物がいっぱいいるんだけど、大丈夫なのか？」

「ああ。一応、オレ達も戦いは慣れてるし」

「あのメイドも、実は元バトルマスターというのが判明したからね」

「え、ええ〜……」

さらにまさか、メイドの正体が判明した。人は見かけによらないと思いつつも話に引き続き耳を傾けつつ、今回の依頼内容に気付いたイアンがそのことを口にする。

「その会合に参加しつつ、護衛も行う……これが、今回のオレ達の依頼内容ってワケか」

「そういうこと！　じゃ、一応会合の予定としては明日だから……よろしくな！」

そう言つてマリツサとリユーマは立ち去つていった。依頼を受けるか受けないかを聞かずに立ち去つてしまった2人にたいし、ファイリス達は呆然としていた。

「……断るか受けるか、いいそびれちゃったわね」

「これは、彼らの依頼を引き受けるのが、義理というものなのでしようか」

「まあ……この前みたいな厄介な魔物はいないだろ、たぶん」

「平気平気！　出てきたところで、あたしらがぶつとばしいだけだ！　というわけで、依頼を受けちゃおうぜー」

「そう、ですね」

結果として、依頼を受けることを選択をしたファイリス。依頼の内容としては、まずは明日、ルディアノへむかえばいいことを確認した4人は、それに備えて準備を整えることにしたのであった。

「そういうば、先程第一回とおっしゃってましたね。　ということは、何回も行かう予定でしょうか」

「確かに……そこに注目するなら、割と気長に続ける気満々よね……」

ルディアノ会合にたいし、セルフイスとクルーヤはそう言葉を交わしたのであった。

そうして翌日、ルディアノ城跡に現地集合という話だったのでファイリス達も、そこに向かった。

「みんな来るかしら？」

「きつとくるさ」

もしや自分達が、一番最初にこの城についたのだろうか。　そう話をしながら廊下を歩いていく途中にある階段の近くで、メイドの姿を発見した。　そのメイドには、ファイリス達も心当たりがある。

「こんにちは」

「あ、あなたは……」

それは、ルディアノへ帰ろう団に勧誘したセントシユタイン城のメ

イドだった。彼女はその団に入る条件として、フルムーンアックスという武器を要求していたのである。その時はなぜ彼女がそれを欲しがっていたのかは理解できず謎のままだったが、マリツサから聞いた彼女の素性を聞いた今なら納得できるかもしれない。

「もしかして、他のメンバーはもう城にいたりするのか?」

「ええ、リユーマさんとマリツサさんは、会合の会場である玉座の間にあります」

あの2人も無事に、この城にたどり着くことができたようだ。それを知りフィリス達は安堵する。そこでふと、ある人物のことが気になり彼女に問いかけてみる。

「そういえば……あなたは、フィオーネ姫様を護衛しながら、ここまできたんだよな?」

「ええ、途中で魔物が襲いかかったりもしましたが……このフルムーンアックスで一掃して、姫様をお守りしてきました!」

「へ、へえ……」

なんと頼もしいメイドだろうか。彼女と一緒にならフィオーネ姫の無事は保証されたも同然だろう。だが、彼女と一緒にいるはずの姫の姿は見あたらない。

「ということは、姫様もこの城にきているんだよな?」

「はい」

「んで、その姫様はどこにいったんだ?」

「それが……」

メイドは自分の背後にある、下へ降りる階段を見つめた。フィリス達は、その階段の先にある部屋を知っている。

「あの部屋は……」

「あの部屋で少し調べ物をしたいとおっしゃって、入っていったままなのです……」

「……」

フィオーネ姫が単身であるの部屋に、一体何の用事だろうか。疑問符が頭に浮かんでいる中、リユーマが自分達の存在に気づいて、そろそろはじめたいから集合してくれと呼びかけてきた。

「……なんなら、あたしらが代わりに姫様を呼んでくるよ」

「そうですね、あなた達になら……姫様のことをお任せできそうです。

では……申し訳ありませんが、姫様をおよびください」

「任せてください」

そうファイリス達がメイドから姫のことを託されたそのころ、部屋に一人いたファイオーネ姫は、その部屋の隅から隅までなにかを調べていた。それはまるで、重箱の隅を楊枝でほじくるかのように。

「……なにも見つからないですわね……セントシユタインになかったのなら……きつと、城のどこかにあると思ったのに……」

そう呟きながら捜し物を続けるファイオーネ姫だったが、背後に熱気を感じて振り返る。

「きゃあ!？」

「グギョオオオ……」

それは、ルディアノに突如出没した魔物・エビルフレイムだった。エビルフレイムは、体中から激しい熱を放ち、ギョロリと3個の目を動かしながらファイオーネ姫を見つめている。そのおぞましい姿にファイオーネ姫は、恐怖を覚えた。

「な、なんですの……!？」

「姫様!」

その場に、悲鳴を聞いたファイリス達が駆けつけた。駆けつけたファイリス達に、ファイオーネ姫は助けを求め。

「あ、あなた方は……! ど、どうか、助けてくださいまし!」

「まかせてくださいまし!」

「なにそれ!？」

ファイオーネ姫にすぐにそう返事をする、4人はそこにいたエビルフレイムをにらみつける。

「ギユオオオンツ!」

「……やれやれ……まだいたとはな!」

「さつさとやっちゃおう!」

そう声を掛け合い、まずはセルフイスがドルモーアを放ちエビルフ

レイムに最初のダメージを与える。　続けてクルーヤがフィリスとイアンにバイキルトをかけ、イアンは己の力を高めフィリスはアイスフォースを使い自分達の攻撃を相手の弱点属性に変えていく。

「氷結らんげき！」

「はやぶさ斬り！」

そして、クルーヤのマヒヤドが相手の動きを制限させた直後にフィリスとイアンの同時攻撃がヒットし、エビルフレイムは消滅した。

「よし、今回も勝てたな！」

「ああ！」

魔物が消え去り、フィオーネ姫も安心したようであり、フィリス達に礼を告げた。

「ふう……危なかったですわ。　皆様、ありがとうございました！」

「ああ……でもまさか、まだあんなヤツがいたなんて……油断ならねえぜ」

「これは……本格的に、魔物除けをする必要がありますね……まだ、準備が整いませんが……」

本来人が住む町や家、そして国などには、聖職者の手でその場を清める必要がある。セルフィス自身もその方法も知っているし心得も持つてはいるのだが、いくつもの準備が必要であるためすぐには実行できないらしい。

「……にしても姫様、どうしてこんなところに？」

「……、このお部屋を……偶然見つけたので……気になってしまつて。　ごめんなさい。　私、勝手なことをしてしまいましたね……」

そうフィオーネ姫が話をしていると、その奥に何かを発見したらしい、目を丸くしたフィオーネ姫は迷わずそちらへ向かった。

「あつ！　ごめんなさい、フィリス様！」

フィオーネ姫が向かった先、そこには白いドレスを身にまとった彼女と瓜二つの姿をした女性が立っていた。　その姿は、フィリス達もみたことがある。

「あの人は……」

「ああ……………この間の……………」

そうコソコソと話をするフィリス達をよそに、フィオーネ姫はその女性と対話をしていた。

「……………私にはわかります……………あなたが、どなたなのか……………」

「……………」

「お聞きしたいことがあります。あなたがセントシユタインに嫁いだとき……………国王より賜った指輪がどうなったか、ご存じありませんか……………?」

フィオーネ姫がそう問いかけると、女性は自分の手に不思議な指輪をはめているのを見せた。それこそが自分の探している指輪だと気付いたフィオーネ姫は、少し目を細めた。

「ああ……………あなたが持っていたのですね。その指輪、どうか私に譲ってはいただけませんか……………?」

そして、真剣な面もちとなり、彼女にある事実を告げる。

「隠さずに言います。あなたのレオコーン様は、先に天国へと召されていきました」

「……………!」

「あなたも、いつまでも……………現世に留まっていたはいけません……………」

あなたのためにも……………レオコーン様のためにも……………。ですが、現世のものを持つていては、天には昇れないでしょう」

「……………」

レオコーンの名前を聞いて悲しげな顔をしていた女性は、やがてフィオーネ姫の顔を見て、意を決したように頷くとその指輪を手からはずし、フィオーネ姫にそつと手渡した。その指輪を手にしたフィオーネ姫は、彼女に告げる。

「ありがとう、メリア姫……………。あなたの故郷……………ルディアノは……………私が必ず、よみがえらせます。ですから、安心して……………あなたもレオコーン様の元へ……………。そして、今度こそ……………愛する人とともに、幸せになって……………」

「……………」

そうフィオーネ姫が言うと、女性……………メリア姫はほほえみを浮かべ

てうなずき、光となつて消えた。その様子をフィオーネ姫と、フィリス達は見届けていた。

「……………やつと……………見つけた……………」

「姫様……………」

フィオーネ姫は指輪を確かに握りしめると、フィリス達の方を向いた。

「……………すみません、フィリス様。いままでの……………ただの独り言ですわ」

「どうかしたんですか？」

「……………なんでも、なんでもないので。さあ、これ以上みなさまを待たせるわけにはいきませんわ。玉座の間へいきましよう」

「は、はい」

とりあえず会合を行うために、フィオーネ姫はその部屋を出ていった。フィリス達もそれについて行く形で、彼女に続いて部屋を出ていく。

「……………きつと、オレ達には……………彼女は見えていないって思っているんだろうな……………」

「……………ああ……………」

フィオーネ姫は、自分達が幽霊が見えることは知らない。あのメリア姫の幽霊が自分達だけでなく彼女にも見えたのは、今回は偶然のようなものである。だからだろう。フィオーネ姫は、自分とメリア姫の幽霊とのやりとりを、彼女達がずっとみていたことは知らない。

そうしてその場にマリツサ、リユーマ、メイド、そして特別会員のフィオーネ姫。そして、護衛役としてフィリス達が集まった。これにより、ルディアノへ帰ろう団の初めての会合を行われようとしていた。

「さて、全員そろったところだし……………会合を始めようかね！」

「はい、お願いします」

そして、マリツサのかけ声からこの会合は開始した。まずは団が

結成された目的から。

「まず、我が団の目的は、このルディアノを国として蘇らせること………なんだけど、いきなりそれはムリってもんさ」

「まあ………はじめは、このルディアノ城をキレイにして、人が住めるようにするってことから始めようぜ」

やはりまずは、このルディアノ城跡を住まいとしている魔物達をここから追い出さねばならないようだ。 奴らは今はせいすいのおかげで自分達には近づけてはいないものの、それがきれたら魔物達は容赦なく自分達に牙をむくだろう。

「お掃除なら私に任せてください！　ここから魔物を全部追い出すには、時間がかかりそうですけどね！」

「え、掃除ってそっち？」

自信満々に魔物を退治すると言つてのけたメイドにたいし、フィリスは思わずツツコミを入れる。 彼女はメイドとなった今も戦士の本能が残っているじゃないかと思わせられる。 その一方でリユーマも、魔物を倒して追い出すことにたいし頷いていた。

「も、もちろん……オレもやるぜ！」

「当然、アタシもやるさ。　んで、場合によっちゃ………あんたらにも手伝ってもらおうよ」

そう言つてマリツサは、フィリス達に目を向けた。

「まあ、任せておけよ」

「僕は聖職のものです。　もし準備が整い落ち着いてきたら、この地に魔物が入らぬよう、清めようと思います」

「そうだねえ、あんたなら最高のお清めができそうだ」

ちようど地を清める知恵と能力を持った聖職者がいる、そのことがマリツサには心強く感じた。 セルフィスの力があればルディアノから魔物を追い出せたときに、近づけさせないほどの清めができるはずだと確信したのだ。

「ルディアノへ帰ろう団は、今日から………未来のためにがんばっていきよー！」

「おーっ！」



そう仲間達にかけ声をしたマリツサは、フィオーネ姫の方を向いた。この会合のシメの言葉を頼むために。

「では、フィオーネ姫。最後にビシッと会合をしめておくれでないかい?」

「え、姫様が締めるの?」

「そりやあそうさ、今回もとても大きな協力者だものな!」

そうマリツサは言うが、当のフィオーネ姫は顔をうつむかせ黙っていた。

「……………」

「姫様?」

「あ、ごめんなさい……………」

さつきから様子がヘンだ。そう思ったイアンが彼女を心配して声をかける。

「マリツサが、姫様にしめて欲しい……………ってやってやしたが、大丈夫ですか?」

「はい、是非やらせてください!」

「おお、ノリノリだ!」

フィオーネ姫はキリつとした表情で顔を上げると、ルディアノへ帰ろう団全員を見つめて、まるで演説でもするかのように言葉を告げる。

「皆さんと同じく、この私もかつて、ルディアノの血を……………それも、この国の姫であった……………メリア姫の血を引いています。その血を誇りに思い、私達は生きていくべきなのです」

「……………?」

「あらゆる手を使って、ルディアノを必ずや蘇らせましょう! ルディアノを新たな、私達の故郷とするために……………!」

そのフィオーネ姫の言葉に違和感のようなものを抱いたが、そこに首を突っ込んだら話をややこしくするだけだと思い、今はなにも言わないでおいた。

フィオーネ姫の言葉を聞いたあと、最初に口を開いたのはリユーマ

だった。

「……………なんつーか、驚いたぜ。 姫さんもルディアノの血を引いているなんて……………知らなかったからな」

「……………そうでしょうね……………私も、最近まで知らなかったのです。 ルディアノのことも、私の祖先が……………その国の王女だったことも……………」

「……………」

その事実はきつと、あの黒騎士騒動がなければ永遠にわからないままだっただろう。 実は世界を脅かしていたものの一つである、あの騒動によって明るみにでた真実が存在していたとは、なんと皮肉だろうか。 騒動のすべての真相を知るフィリスとイアンとセルフィスとクルーヤは、なにも言えなくなつた。

「まあ、いいんじゃないか!」

そんな空気を、明るい調子でマリツサが断ち切つた。

「姫だとかそんなのは関係ないよ! 同じ志を持っている以上……………アタシらは仲間さ!」

「おお、マリツサ言うなあ!」

そうハツキリ言い切ることは、ときに重要だろう。 今この瞬間が、ときに重要な瞬間である。

「よーし、以上で会合はおわり! せいすが切れる前に、魔物に見つかったらやつかいだから……………素早く撤退するよ!」

「次の会合の予定は、順次決めていくとしよう!」

「というわけで、解散ですね!」

そう声を掛け合い、この日の会合はここまでとし、各々は帰っていくことになった。

「姫様、帰りも引き続き私が護衛をします」

「ええ、お願いしますね。 ではみなさま、ごきげんよう」

そしてフィオーネ姫も、例のメイドを護衛につけながら、セントシュタイン城へ帰って行った。 あのメイドがいればまず間違いなく大丈夫だろう、と苦笑しつつフィリス達も、ルディアノを後にしたのであつた。

「エビルフレイムの出現は予想外だったけど、会合自体は無事に終わったな」

「まずは「安心ですね」

「そうね……………でも……………」

「ん？」

帰り道でそう会話をしながら歩いていたが、クルーヤが少し引つかかることがあったようであり、それを彼らに打ち明けた。

「なんだか、さっきのフィオーネ姫様……………怖くなかった？」

「ああ……………やっぱそう思うよな……………」

「あの会話の後から、急に空気が変わった気がするよな……………」

クルーヤは、フィオーネ姫の変化に気づきそれに畏怖の念を抱いていたようだ。それは、仲間達も薄々感じていたことである。そして、彼女のように素顔かしくなったタイミングもわかる。

「……………何事もなければ……………よいのですが……………」

ぽつぽつと、セルフィスも不安を口にする。このルディアノとセントシユタインを行き来する……………ルディアノへ帰ろう団の活動は、このままでは終わらない予感がしたようだ。

「やはり……………いやな予感がします……………」

「セルフィス……………」

「これからなにが起こるかわかりませんが、警戒は続けておきましょう」  
「ああ」

そうフィリス達が決断をし、セントシユタインに帰ってきたその夜のこと。

「……………」

フィオーネ姫は、自室で一人。指輪と例の本を交互に見て、ためいきをついていた。

「……………やはり、この指輪は……………。この本に書かれていることは、真実……………だったのですね……………」

その本の内容も、指輪の意味も、あのメリア姫の幽霊が今になって現れたことも。そのすべての真相を知っているのは、今はフィオーネ姫だけだ。本と指輪を見つめ、フィオーネ姫は頭を抱え、その目

尻からはわずかに涙を流していた。

「……………ああ……………なんと、いうことでしよう……………真実とは、どれほどに……………残酷で、知らないことが、おろか……………なのでしよう……………。後少し……………後少し……………手がかりをつかめれば、証拠があれば……………私は、私は……………あの国を、救える」

夜空は、まだまだ暗くなっていく。

## 10 「真相への道」

それは、ルディアノ会合の翌日に起きた出来事であった。その日もセントシユタインの宿屋で一泊していたファイリス達は、国王に呼ばれて城へ招かれた。

「ただいま参りました、セントシユタイン王様」

「よききてくれたな、ファイリス達よ」

玉座の間に訪れたファイリス達を、国王は歓迎した。そういえば、こうして国王に会うのはあの薬を渡して以来だ。あれから彼に、変化はあったのだろうかと思いついそのことを問いかけてみる。

「そういえば、あのドリマイザーはどうでした？」

「ああ……そのことでは世話になったな。あの後、あれのもの凄いニオイに耐えて、がんばって眠ってみたぞ」

「ホントに寝たんですか」

ドリマイザーとは、悪夢に悩まされているという国王のためにファイリス達が見つけた薬のことだ。その薬を開発した者によれば、そのフタを開けて側に置いておくだけで悪夢が去るというものらしいがそれを口にしたら命がないだけでなく、なんともいえないニオイが漂うという、とんでもないシロモノである。

そんな怪しいものの側と奇妙なニオイの中で眠れたとは、国王も一国を治めているだけあって肝がかなり座っているのかもしれない。そんなことをファイリス達が考えている目の前で、国王は首を横に振った。

「……………実は……………まったく、効力がなかったのだ……………」

「えっ!？」

「そんな、あたし達も……………あれで効果があると言われたから……………持ってきたんですけど?!」

「うむ、わしも……………そなたらがウソを言っているとおもえん。このドリマイザーこそが、悪夢をはねのけると……………そなたらも信じておったのだろう……………」

あのドリマイザーが効力を発揮しなかった。その事実には、セルフィスがなにかを考え込むような顔になっていた。……だが、効かなかった。わしはまた……悪夢をみたのだ……」

「確か、以前に話してくださった悪夢の内容って……誰かが王様のことを呼んでいる人影……というものでしたよね？　全く同じ内容なんですか？」

「そう、同じだ……が、少し変化が現れた……」

「……変化……」

国王は、悪夢の内容をフィリス達に打ち明ける。

「大きな棺のようなものが、どこかの地下室にあるのが見えてな……。そこから恐ろしい魔物が現れ……わしにこう呼びかけるのじゃ。封印をとけば、帝国から守ってやる……とな……」

「……帝国……」

やはり、帝国というワードが引っかかる。まさかと思った国王は、自分の中に浮かんだある説を打ち明けようとした、そのときだった。

「国王様にご報告申し上げます！」

「なんだ!？」

「城の井戸の奥にて、怪しげな部屋と……巨大な棺のようなものが発見されました!!　ちょうど、この城の真下にあたる空間だと思われます！」

「棺!？」

「な、なんじゃと!?　それはまことか!」

「はっ！」

国王の夢に出てきたという棺が、このタイミングで見つかった。これは、偶然ではない。

「……このことは、誰にも漏らしておらぬだろうな？」

「はっ……」

いつものように頷こうとした兵士だったが、そこでふとあることを思い出しそのことを告げる。

「い、いえ！ 先程姫様に何かあったのかと聞かれたもので……………つ  
いうつかりと……………」

「フィオーネ様?!」

「……………フィオーネ……………か……………。 まあよかろう。 そんなことよ  
りも、だ」

フィオーネ姫が棺のことを知ったことも気にはなるが、国王はフィ  
リス達の方を向いて、話をした。

「フィリス達よ」

「はい」

「棺が見つかったとなれば……………もはや、あれをただの悪夢と、片づける  
わけにはいくまい。 城の地下で見つかった棺と、わしの夢に出てき  
た棺が同じものかはわからぬ……………。 そこで……………頼みがある」

そして、国王は彼女達に依頼を申し出る。

「これより、城の地下で見つかった巨大な棺の様子を……………見に行つ  
てはもらえぬか?」

「王様……………」

「本来はそなたらには、ドリマイザーが効かなかったことを報告し相  
談するだけのつもりで呼び出したのだが……………このような事態に  
なってしまった以上……………そなたらの手を借りなければならぬ。

そんな予感がしたのだ。 ……すまぬが、よろしく頼む……………」

国王の依頼となれば引き受けないわけにはいかないし、ここまでき  
たら、謎を解明しないと自分達もスツキリしない。 そう思ったフィ  
リスは仲間の顔を見て、全員で顔を見て頷きあうと、国王の依頼を引  
き受けることにした。

「お任せください! その謎……………あたし達で解明してみせましよう  
!」

「わしも少しばかり所用があるので遅れるが、すぐに追いかけてよう。  
そなたらは、一足先に向かってくれ。 十分に……………気をつけてな」

「はい!」

フィリス達が依頼を受けてくれるのを知った国王は、フィリス達に  
そう約束をして仕事にでた。 まず動いたのは、王妃の身を守ること

である。

「王妃は、ここに。そなたらは王妃の護衛を務めてくれ」

「はっ！」

「あなた……どうか、無事で……うっう……」

王妃はそんな国王を心配しているらしい、涙ぐみはじめた。ホントに涙腺がゆるいなあ、とそんな王妃をみて苦笑しつつ、フィリス達は行動を開始する。

「あたしらも行こうぜ！」

「ああ！」

「ええ！」

「はい！」

そう言つて4人は、棺が見つかったという洞窟を目指して走り出した。その洞窟があるのは、井戸の中であるという情報を知ったとき、クルーヤはふとあることを思い出した。

「そういえばあの井戸の洞窟って、前に黄金のツルハシを渡したあの人が開通しようとしていた、トンネルのことじゃないの？」

「あの、井戸の中にできた割れ目が気になるとか言ってた、あの荒くれのことか？」

「ええ」

もしや、あのツルハシをあげた荒くれが、棺を見つけたのだろうか。そう思っている間に井戸の洞窟にたどり着いてみると、そこには例の荒くれがいた。

「あ、あんたらは！ あのツルハシをくれた旅人さんじゃねーか！」

「やつぱりあの荒くれだ！」

フィリス達に気付いた荒くれが声をかけてきて、さらに話をしてきた。

「実は……あなたのくれたツルハシにより、洞窟を発見したんだが……」

「その奥には棺桶があつたんだろ？」

「城の兵士に聞いたわ」

「そ、そうか……。んで、オレはあっさりと追いつかれちゃったんだ



よ。さらに先には、お城の姫さんがここを勢いよく通っていったんだ。いったい、なんの用だろうか？」

「……………」

やはりフィオーネ姫が、ここに来たのだろう。発見された棺も、それがおさめられている部屋も、詳しいことは何一つわかっていない。そんな中に彼女を一人いかせるのは、危険だ。

「…………姫様が心配です、急ぎましょう」

「うん」

そう仲間達で声を掛け合い、フィリス達は洞窟をさらに奥へと進んでいく。その途中で、その身をふるわせている兵士を発見する。

「どうしたの!?!」

「突然、フィオーネ姫がやってきて、棺を調べさせると言ってきたんです。キケンかもしれないと言って止めたかったです……………ものすごい怖い顔で…………睨まれて……………」

「え、ええ!?!」

「……………もう、どうしたらいいやら……………」

よつぽど、フィオーネ姫が怖かったのだろう。そもそも彼女は、兵士を怖い顔で睨むようなキャラクターではないはずだ。それだけで、今彼女の様子があまりにもおかしすぎると悟ることができる。

「兵士にガンとばすとか、マジヤバじゃね今のお姫様!?!」

「ああっ」

さすがのサンデイも、兵士の証言にたいし戸惑っているようだ。

やがて洞窟の奥広い空間にたどり着くとそこには祭壇があり、その祭壇にはいくつもの包帯のような布にくるまれた、大きな棺のようなものが存在していた。

「……………あれ……………ほんとに、棺……………だわ……………」

「……………なにか、まがまがしい力を感じます……………」

魔力に敏感なクルーヤとセルフィスは怯えているようであり、イアンとフィリスもただならぬ気配に警戒をし身構えていた。そして、祭壇の上の棺の前に、探していた相手フィオーネ姫の姿があることに気付く。

「…………ファイオーネ姫様……………」

そこに立っていたファイオーネ姫に、フィリスは声をかける。直後、ファイオーネ姫は不気味な笑い声をあげはじめた。

「うふふ……………ふふ……………ふふふふっ！」

「ひ、ひめさま？」

「……………なにかもが、あの本に、あつた通りですわ……………。すべて……………真実だった……………。信じたくなかったのに……………！」

正直、棺よりもこの地下室よりも、今の姫の姿の方が異質で恐怖を感じる。戸惑いを隠せないフィリス達に、ファイオーネ姫は告げる。

「フィリス様、皆様。なにも聞かず、今すぐに……………ここから離れてくださいませ……………」

「へっ？」

「もうじき……………この場所……………このセントシュタインは……………」

「ファイオーネ！」

ファイオーネ姫がフィリス達に何かを告げようとしたとき、所用を終わらせてきた国王がこの空間に入ってきた。

「王様！」

「何故ここにいる!? その棺にはなにが入っているのか……………わからないのだぞ?!」

「……………いいえ、私には、わかっているのです。ここには、魔神が封印されているのですわ……………お父様……………」

ファイオーネ姫は首を横に振って、国王を見つめながら口を開く。いつもより、強い声で。

「いいえ、セントシュタイン国王！」

「!？」

「……………な、なんじゃその物言いは……………。魔神……………だと……………?なぜ、そんなことを知っている……………?」

国王は、娘の豹変ぶりについていけないようだ。戸惑う国王に、姫は厳しい顔つきで、厳しい声で、話をする。自分の知った真

相を、彼らに解説するために。

「すべては……すべては、カギのかかったあの本に……書かれて  
おりました……」

「あの本？」

「……魔神の封印は弱まっていますが、放っておいても……解  
けることはないでしょう。でも私は、真実を知り……この、指  
輪を手に入れてしまった……」

そう言つてファイオーネ姫は自分の指にはめられた、指輪を見つめ  
た。彼女の持つその指輪は、彼女がルディアノ城跡でメリア姫の幽  
霊から受け取ったものだ。

「ファイオーネ姫、様？」

「さつきから何を言っている……？ その指輪が……なんだというの  
だ……!?!」

「……本当に、なにも知らないのですね……」

ファイオーネ姫は、顔を上げると国王に怒鳴るかのように告げた。

「無知は罪であることを、あなたは知るべきです!!」

素晴らしい、ファイオーネ姫は祭壇の上にある棺と向かい合い、指輪を  
高く掲げた。

「姫様!?!」

「眠れる魔神よ！ この指輪をもちて、今こそその封を解き放たんつ  
!!」

「ーッ!!」

ファイオーネ姫がその声を上げると、指輪は強い光を放つ。する  
と、指輪の光と彼女の言葉に反応したかのように棺は妖しい光を放  
ち、棺をまどつていた布も光が引火でもしたかのように消滅してい  
つた。棺は大きく揺れている。

「……煙が……!?!」

「みて、棺のふたが開くわ!」

「ッ!」

周囲には煙が立ちこめ、その中で棺のふたは大きく開く。さらに  
煙は濃くなり、地下室は一瞬で煙の中におちた。

「……………クツ……………」

「……………フウウウ……………」

やがて、煙は吹き飛ばされ、その場にいた全員の視界が開かれる。するとそこには、国王とファイオーネ姫、そしてフィリス達とは別の存在が姿を現していた。

「……………この棺に閉じこめられて、どのくらいの時がすぎたか……………」

金色の肌に鋭い目と爪、ツノに尾を持ち、口元にはヒゲや牙をはやした存在。

「こ、こいつはなんだ……………!?!」

「……………まもの……………なの……………か……………?」

驚く一同の顔を見たその存在は国王に気付くと、また口を開いた。

「そこのお前が、今の国王だな。 我の呼びかけをさんざん、無視してくれおつて……………」

「えっ?」

その魔物の姿を見た国王は、あることを思い出す。

「……………お、お前は……………た、確かに……………わしの悪夢に出てきた魔神……………!」

「なんだって!?!」

「こいつが!?!」

「お前はいつたい、何者なのだ!」

この魔物こそが、国王に悪夢を見せていた魔神なのだと思った一同。 やはり国王がずっと見ていたあの悪夢は、架空のものではなかったのだ。 何者だ、という問いに対し、魔神は答える。

「我に呼ぶ名などはない。 生け贄をくらい……………人の願いを叶える魔神よ……………」

「そ、そんなヤバイもんが……………なんでこんな地下に……………封印をされていたんだ? しかも、誰にも……………知られないまま……………」

フィリスが疑問を並べていると、今度はファイオーネ姫が口を開いた。

「そこは、私が語りましょう」

「フィオーネ姫様？」

「……………これこそは、かつてのセントシュタイン国王が、ガナン帝国の侵略から逃れるために呼び出した……………いにしえの魔神ですわ……………」

「……………いにしえの、魔神……………」

そしてフィオーネ姫は、衝撃の真実を打ち明ける。

「国王は自分たちのために、この魔神に、生け贄を捧げた……………そう、ルディアノの民の命を!!」

「!?」

「な、なんじゃと……………!? そんなことは信じられぬ……………」

自分の国の歴史、そして自分の血族の真実を聞かされた国王は驚く。その話を信用できない国王に対し、魔神はフィオーネ姫の話を肯定してきた。

「それは真実だ。 我がお前達の目の前にいること、それがその証だ」  
「……………魔神がルディアノを滅ぼしその民の命を糧とし、セントシュタインはガナンの侵略を逃れて……………今も国として存続を続けている。 そうしている間にガナンはガナンで、謎の力により滅んだ……………。 そしてセントシュタインは……………自分達が助かったのはルディアノの犠牲によるものであるという事実を隠蔽し続けた……………ということ、なのですか……………」

「そういうことですわ」

セルフィスは冷静に、魔神とセントシュタイン、そしてルディアノの関係を整理し語る。 そんなセルフィスにたいしフィオーネ姫は領くと、激昂する。

「自分たちが助かるためにほかのものの命を差し出すなど、あつてはならないことです! そしてそれをなかつたことにしようなど……………断じて許されることはありません!! ゆえに……………私たちは、その償いをしなくてはなりません!!」

「ひ、姫様……………おちつこーよ……………?」

フィリスがフィオーネ姫を説得しようとするが、フィオーネ姫は聞

く耳を持たず魔神に向かって言う。

「さあ魔神よ！ 我々の命と引き替えに、ルディアノをよみがえらせなさい!!」

「ちよ……………まっ……………!!」

フィオーネのもくろみは、自分達ごとこのセントシユタインの人々を生け贄に捧げルディアノを再興させることだったのだ。さすがにそれはマズイと、フィリス達は彼女を止めようとする。そんなフィオーネ姫にたいし魔神は、高らかに笑い声をあげていた。

「フハハハハ!! 同じことを繰り返すというのか！ ニンゲンとはなんと愚かなものよ!!」

「……………」

「だが、断る！」

自分の要求を断られたフィオーネ姫は、目を丸くした。

「な、何故です!？」

「あの国王は、我をだまして……………ここに閉じこめたのだ！ その業を許すわけにはいかぬ……………。この国そのものを……………いや、ニンゲンすべてをな……………!!」

「うわあ、憎しみの典型的パターンじゃねーか」

「ゆえに我は、このセントシユタインを……………そして、この世界のニンゲンをすべて、滅ぼす!!」

魔神が自分の願いを叶えようとしなければかりか、すべてを滅ぼしてしまおうとしていることを知ったフィオーネ姫は、絶望した。

「そ、そんな!？」

絶望をするフィオーネ姫に対し、魔神は衝撃の事実を口にする。

「そもそも……………ルディアノも……………我がつかわした魔女が……………本来は滅ぼすはずだったのが、あの魔女は、黒騎士を欲したが故に……………我が直に滅ぼさねばならなくなったのだ……………!!」

「魔女……………黒騎士……………!？」

それらのワードに心当たりのあるフィリス達は、前にでた。それぞれ、戦う体制に入って。

「あの魔女は……………お前のシモベだったわけかよ……………」

「つまり、あの魔神が……メリア姫とレオコーンを引き離した、真の黒幕だったというわけか！」

「そ、そんな……！」

その真相を知ったフィオーネ姫は、さらに絶望に身を震わせた。

自分がルディアノを再建させたかったのは2人のためだったはずなのに、その2人を引き離したのがかの存在だったとは知らなかったのだ。そんなフィオーネ姫を、国王はさがるようにいい腕を引いている。

「フィオーネ姫様、国王様……さがつててください！」

「こいつはオレ達じゃねえと、相手できやせんぜ！」

「わ、わかった……ここは、そなたらに任せたぞ……！」

「任せてください！」

国王と姫を後方に下げた後、4人は魔神の前にてて武器を手に取り魔神とにらみ合う。そんな4人をみた魔神は高らかに笑い声をあげた。

「フハハハハ！ ニンゲンごときに我を止めることなどできぬわ！  
我をおそれよ、逃げまどえ！」

「生憎、あたしはただの人間じゃねえんでね！ お前なんか、びびるわけがないんだよ！」

そう言つてフィリスは、星屑の剣を鞘から抜き取り、切っ先を魔神に向けて、叫ぶ。

「このセントシュタイン城に、この国に……手出しはさせない!!」

## 11 「国の罪」

ファイオーネ姫が、いにしえの魔神を復活させてしまった。その理由は、セントシユタイン王国がこの魔神の力を利用してルディアノ王国を滅ぼしたという真相を知ったからだ。そのためファイオーネ姫は魔神を蘇らせ、セントシユタインを生贄にルディアノを蘇らせようとしていた。

ところが、魔神は長年封印されたことによる憎悪によって、ファイオーネ姫の要求を断り、この世界のすべてを滅ぼそうとしていた。

「とああー！」

「ツクツ！」

そのいにしえの魔神に、ファイリス達は立ち向かっている。このまま魔神が表にでたら、魔神はこのセントシユタインだけでなく、さらに多くの地を絶望にたたき落とすからだ。

「せつかく守ってきたのに、また厄介ごとをさらに押しつけられてたまるかってんだ！」

一度世界を滅ぼそうとしていた存在と戦って、満身創痍になったことがある。戦いの中で倒れそうになったこともあったが、そこで倒れたらその存在は確実に世界を滅ぼす。それを誰も許すつもりはなかったから立ち向かって戦い、勝利したのだ。そのときも本当に大変だったのに、もう一度その苦労を味わえと言われたら、たまったものではない。同じことを繰り返し返させないべく、復活したてで本領発揮できていないうちに倒すしかない。

「はあっ！」

「ヘナトスー！」

イアンがせいけん突きを放とうとすると、魔神はヘナトスの呪文を使い仲間達を弱らせる。そのため、並の魔物なら一撃あるいは怯ませるほどの力を持つイアンの一撃を、魔神はたやすく全身で受け止められた。

「っ、つうじねえ!?!」

「ふんっ！」



「うわあぁっ!!」

そのままイアンをはじき返し、イアンを壁にたたきつける。直後にフィリスがはやぶさ斬りで魔神にきりかかるものの、やはり大したダメージにはならない。

「イオナズンッ!」

そこでクルーヤは、イオナズンを放って魔神を攻撃した。魔力覚醒を行った後だったので、その力により威力は大きく、魔神に大ダメージを与えた。おまけに、攻撃力低下の呪文も、攻撃魔法にはまったく影響がない。

「ぐうう!」

「魔法攻撃なら、ヘナトスなんて怖くないもんねっ!」

「そうだなよし、これでいくぜバイキルト!」

そういつてフィリスはまず自身にバイキルトをかけ、ヘナトスの効果をなかったことにし、再びはやぶさ斬りを繰り返した。だが、それは大きなダメージにはなっていないことに、フィリスはすぐに気付く。

「っちー!」

「スクルトがなければ、我は重傷であった。だが、残念だったな」

自身の肌についた剣のあとを見て、魔神はフィリスの一撃は大きなものだ気づく。そして、自身にかけた守りの呪文の効果が切れる前に彼女をつぶさねば、と思い、ある呪文を使う。

「ルカナン」

それは、相手の守りを緩める呪文であるルカナンだった。それによりフィリスのみの守りを崩しその隙に攻撃をしかけた。

「うわあぁ!」

「フィリス様っ」

「くう負けるかっ!」

フィリスはそれを受けながらも剣を手放すことをせず、むしろ強く握り返した。すぐにでもチャンスをみつけて反撃にでるために。

「ゴオオオアアアッ!!」

そのとき魔神は、光る炎をその口から吐き出し、4人に同時に攻撃

を仕掛けてきた。

「危ないっ！」

その余波が、隠れていた国王やファイオーネ姫にあたりそうになったので、セルフェイスが二人の前に立ち彼らをかばった。

「セルフェイスッ！」

「王様、姫様ご無事ですか？」

「私達より、貴方がっ！」

国王と姫の身代わりとなって光る炎を受けたセルフェイスは、全身に傷を負っていた。その傷は、4人の中でもっとも大きいものだろう。

「僕なら、心配はいりません」

そう言ってセルフェイスは立ち上がり、自らにベホイムをかけ、自身のダメージをすぐに回復させる。そうして自分のダメージを跡形もなく消したセルフェイスは2人に笑いかけ、弓矢を手にして構える。

「このとおり、大丈夫ですよ。僕は決して倒れません。たとえ

……僕がどれほど傷ついても、その傷がどれだけ重かったとしても……。彼らを見捨てるより……遙かにマシですから！」

そう強く言い、セルフェイスは数本の矢を連続で放った。それらの一撃は魔神の不意をつくには十分であり、自分の方に気づいた魔神に対しセルフェイスは今度はイオナズンを放って攻撃した。

「これだけではないです！　いてつくはどう！」

そう叫び、セルフェイスは魔神に対していてつくはどうの技をはなち、魔神にかかっていたスクルトの効果をかき消した。

「はああ！」

「うがああ!!」

直後、ファイリスは魔神に切りかかった。その傷を背中に受けた魔神は振り返りつつファイリスに反撃をする。その攻撃を受けたファイリスは傷を負ったが、その顔にはにやりと笑みを浮かべていた。

「っへー！　攻撃をねらっているのは、あたしだけじゃねーんだよっ!!」

「なにっ!？」

「うおおおっ!!」

フィリスがそう言うのと、別の方向からイアンがつつこんできて、先ほどはあまり効果のなかったせいけん突きを今度こそ食らわせる。

「ぐほおあああ!？」

「よーし、仕返し完了!」

その一撃を受けて、今度は魔神が壁に強くたたきつけられた。ヘナトスがバイキルトによりかき消されていて、その上テンションをためることであげていたので、威力は抜群だ。

「ぐ、おのれ……」

「おっと、とどめはお前に任せようか？ クルーヤ!」

「ええ、まかせといて!」

クルーヤの魔力があがっているのに気付き、そう声をかけてきたイアンはそう彼女に声をかける。それにたいしクルーヤは、ウインクしながらそう答えた。

「とどめいくわよっ! メラゾーマよりでつかいの、お見舞いしちゃうんだから!」

そういつてクルーヤは杖を高く掲げて、その上に巨大な火の玉を作り出した。その大きさも熱量も、メラゾーマより大きい。

「メラガイアーツ!」

そのメラガイアーツは魔神に命中し、そこに大きな火柱がたつ。その業火に包まれた魔神は、断末魔をあげた。

「グオオオオオオアアア!!」

「よっし!」

「ま……まさか、我がニンゲンなどに……やられるなど……ありえぬ……!?!? こんなことは……ありえっ……!?!?」

自身の体が炎により灰になっていき、熱にとかされていく中、魔神は自身がまもなく消滅するのを感じた。その現実を受け入れがたい中で、魔神は自分の視界に入ったをみて、ある予感を感じ取る。

「キサマ……まさか……!?!?」

「……」

最期の最期で、いにしえの魔神はフィリスの正体に気がついたが、それ以上はなにも言えないまま灰となり煙となって、その場から消滅

してしまった。

「消えた、けど……」

「勝てた、のかしら……？」

「おそろく……な……」

「だと、よいのですが……」

いにしえの魔神は消滅したものの、自分達の勝利を確定していいものかわからず、思わずそう口にする。不安を覚えているクルーヤや気を抜いていないフィリスがそう呟いていると、サンデイが出てきて周囲に気配がないことを一同に告げた。

「ダイジョーブ、ヘンな気配は感じないヨツ！」

「そっか」

それをきき、フィリス達もようやく勝利したことによる達成感を感じたようだ。魔神の消滅によりセントシユタインの崩壊は免れたことを知ったセントシユタイン王とフィオーネ姫が、フィリス達に声をかけてくる。

「よくやってくれた、そなた達！　今回ばかりは、もうダメかと思っただぞ！」

国王は戦いに勝利したことでフィリス達の無事と、セントシユタインが守られたことを喜んで、彼女達を称えた。一方フィオーネ姫は、ただ呆然とした様子だった。体も、まだ震えているようだ。

「……………わ……………私、は、わた……………く……………しは……………」

「姫様！」

「フィオーネ！」

そして、自分のしようとしていたこと、してしまったことをブツブツとつぶやきながら、彼女はその後で崩れ落ちてしまった。すぐに国王が受け止めたため、その身体が地面につくことはなかった。

「……………気を失っているようですね……………」

セルフィスが姫の容態を瞬時に確認し、外傷はないことや先程までの出来事から、精神的なものにより気絶をしてしまったのだと気付きそれを冷静に伝える。

「しよーがねーだろーな。　こんなことがあつたあとじゃ……」  
「ええ……」

「心配はいりません、国王様。　フィオーネ姫様は、お休みなられば大丈夫です。　すぐに意識を取り戻し、目を覚ますでしょう……」

「う、うむ……そうか。　それでまずは安心じゃな」

セルフィスから姫は大丈夫だと告げられた王は頷くと、この場から離れることを提案する。

「……とにかく、今は一旦ここを離れるとしよう」

「わかりました」

まずは国王と姫からその部屋を出ていき、それにフィリス達もついて行くとした、その時だった。

「お、おい……フィリス！」

「どうしたイアン？」

イアンは棺桶の中でなにかが光っていることに気付き、それに近づいて光ったものの正体を確かめる。　そして、光っているものの正体に気付いてすぐにフィリスを呼び寄せた。

「これ！」

「あっ……」

「例の宝石だわっ」

それは、今世界各地で見つかっている、あの宝石だった。　フィリスはそれを拾い上げて、持っていた宝石とくっつける。　すると宝石は今までと同じようにくっついて、一個の宝石になった。

「まずは回収完了、だね」

「ああ」

そうして4人はその部屋を出ていき、国王と合流した。　フィオーネ姫は先程駆けつけたメイドにより姫の自室に連れて行かれ、寝かせられたようだ。

「ワシにはまだ、なにがどうなっておるのか……話をきいてもさっぱりで、まだついていけない。　だから話は、フィオーネが目覚め次第、詳しく伺うこととする。　それまでそなた達は、この国の宿屋で休んでいてくれ。　あの魔神との戦いによるダメージもあるだろうしな

……そして、ともにフィオーネの話を……聞いてほしい」

「わかりました」

「それと……このことはなるべく、口外しないでくれ……」

「ええ、わかっています」

そう国王にいわれ、フィリス達はセルフイスのベホマラーで回復した後、リツカの宿屋に帰っていった。リツカになにかあったのかと問われたが、魔神のことはなにもいわずただ強敵と戦ってただけ告げた。

そして、翌日のこと。意識が戻ったフィオーネ姫は、例の本と指輪を手に、会議室を訪れていた。その会議室にいるのは、国王とフィリス達4人、城の老学者であるイロホン、そしてこのフィオーネ姫だけである。

「……さて、フィオーネ。あの書物に書かれていたことを、教えてくださいな？」

「……はい……」

フィオーネ姫は、表情を曇らせたまま、あの本に書かれていた歴史の真実を彼らに打ち明ける。まずは、魔神の正体を改めて説明をした。

「私が地下より蘇らせ、フィリス様達があのととき打ち倒したあの魔神は、かつての国王が、帝国からセントシュタインを守るため、呼び出したものなのです」

「……その帝国ってのは、ガナン帝国のことではないんだよね……？」

「ええ」

ガナン帝国という国の存在ならば、かつて世界征服をねらっていた悪の帝国ということで国王も名前だけなら知っていたらしい。だが、それをフィリスが知っていることが、国王には不思議に思うものだった。

「そなたら、ガナン帝国を何故……？」

「なに、あたしすらも帝国とちよつとした因縁があったっただけです。

さて、続きをお願いします」

「……………魔神は国を守るための代償としての生け贄を求め、国王は同盟国であった、ルディアノの民の命を差し出した……。それにより……………この国は救われましたが、その後……………魔神の力をおそれた国王が、魔神を棺に封じたのです……………」

「……………なんとということだ。そんなことがあったとは……………儂は全く知らなかった……………」

「そうでしょう。かつての国王は……………この忌まわしい真実をルディアノという国ごと、歴史の中から葬り去ったのです……………。あの国王の手記を私がみつけ、鍵を探そうとしなければ……………永久に歴史の真実は……………闇の中に……………」

「……………おお、なんと……………なんとということだ……………」  
フィオーネ姫の語った真実に、国王はシヨックを受けているようだ。自分が国を継ぐにあたり、歴史にそのような不祥事があったこと、そして取り返しのつかないことをしていたこと。国王はこの真実を受け入れようと持ちこたえている。

「……………この指輪は、封印のカギとして……………後にセントシユタインに嫁いだメリア姫に、託されたのでしよう……………」

そういつてフィオーネ姫は、メリア姫の幽霊から受け取った例の指輪を見せた。幽霊のことにはふれず、自分が偶然見つけたといつて。そして、真実を知った彼女は、そのときからずっと胸の内に抱えていたものを、打ち明ける。

「……………私は……………ずっと考えていました。メリア姫は……………果たしてどんな気持ちで、この国に嫁いでこられたのか……………。愛する人と引き裂かれ……………祖国を滅ぼしたカタキとも言えるこの国に、なにを思ったのか……………と……………」

「……………メリア姫とレオコーンのこと、か……………」

その2人には、フィリス達も大きくかわったことがある。愛し合っていた2人は悪魔の運命により引き離され、望まぬ形で終わりを告げてしまった。その悲恋を、知っている。そのことを思い出したフィオーネ姫は、己の中でよみがえりつつある怒りの感情のまま

に、打ち明ける。

「……………メリア姫の気持ちを思うほど……………私は、許せなくなつたのです！ 自分達の命を守るため、罪のない人々を生贄とした、この国こそ……………滅びてしまえばいいと、私は……………！」

「それは……………」

「馬鹿者が！」

それは違う、とフィリスがフィオーネ姫の言葉を妨げようとしたが、それより早く国王がそれを妨げた。

「王様……………」

「お父様……………」

「確かに、かつての国王がルディアノにしたことは、決して許されるものではないじやろう……………」

国王は、フィオーネ姫に対しさらに言葉を続ける。

「だが、そんなことをして何になる!? あの黒騎士やメリア姫が……………それを喜ぶと思うか!？」

「……………いいえ……………」

それをきき、フィオーネ姫は少し考えた後、首を横に振ってそう答えた。そして、それをみたフィリス、クルーヤ、イアンが口を開く。

「……………仮に……………魔神が、あなたの願いを聞いてセントシユタインを犠牲にルディアノをよみがえらせたとしても、また何年後かに同じことを繰り返すだけですよ」

「悪いのは当時のセントシユタイン王だし、そのためになんの罪もなければ関係のないこの国の民をみな犠牲にしようとして……………それでよみがえって喜ぶものなんて、いません。私だったら、それで復活するなんてイヤです」

「……………残念ながら、あなたは皮肉にも、もつとも許されないと自分で思っている相手と、まったく同じことをしようとしていた……………あなたが、当時のセントシユタイン王の生き写しになろうとしていたんだ」

「……………ッ!!」



ファイリス達の言葉を聞き、ファイオーネはさらに己のしようとしたことを思い知らされる。それに対しよく言ってくれたと国王はかえすと、話を続ける。

「そう、この国が犯した罪は重い。ならば農らは生きて、その償いをするべきじゃ」

「……そうですね、罪は償うべきもの。たとえどれほど許されないことでも、どれほどの時間がかかっても……大事なのは、本気で償うという意思を持ち続けることです」

「その通りじゃ。そして、ファイオーネよ。お前は確か、ルディアノへ帰ろう団とやらに加わっておったな……？」

「……はい、お父様……」

どうやらファイオーネ姫がその団体に加わっていたことを、国王は知っていたようだ。だが国王はそれを責めることはしない、むしろ、逆のことを考えていた。

「ならば……その団の活動を、国を挙げてもり立てていこうではないか。そして、何年かかることになろうとも……ルディアノをよみがえらせよう！」

「は、はい……！」

それこそが、罪を背負ったセントシユタイン王家自分達がルディアノへの贖罪であり、メリア姫とレオコーンの無念を晴らす方法だ。

それに気付いたファイオーネは力強くうなずいた。そうしてルディアノ再建を約束し宣言した国王は、ファイリスたちのほうを向く。

「さて、ファイリスたちよ。お主たちには礼のしようもないほどに力を尽くしてもらった。これは、農からの礼だ受け取ってくれ」

素晴らしい国王は、ある銀色の宝玉をファイリスたちに差し出した。

「これって？」

「それはシルバーオーブというもので、我が国に伝わる不思議な宝玉なのだ。とっておくもよし、売って金にするのもよし……好きにするよかろう」

「うわあ、売るのもつたいないなあ……」

その銀色の宝玉を受け取ったファイリス達は、宝玉を袋に入れた。

フィリスが報酬の宝を受け取ったのを確認した後、国王とフィオーネ姫は、彼女達に告げる。

「そして、儂は誓おう！ かつての王が犯した過ちを……決して繰り返させぬと！」

「……………フィリス様達には、色々ご迷惑をおかけして申し訳ありません……………。過去を忘れないようにするために、あの本はここにいるイロホンさんに預けます」

「うむ、確かに預かりましたぞ」

そういつてフィオーネ姫は本をイロホンを手渡すと、ルディアノへの想いにこの国への想いをのせて、告げる。

「これからは……………ルディアノとセントシュタインの民……………その双方を愛し、他のなにものでもな……………私達の力で、未来を作るためがんばっていきましょう！」

「ああ、またあたし達も力を貸す……………だから、がんばってください！」  
「はいー！」

過ぎた時間、過去の過ち……………それは簡単には戻せないし、取り戻せないこともあるだろう。

だが、それで歩みを止めればすべてが終わり、なにもできなくなる。だったら、たとえ悪あがきであったとしても……………先へ進むべきだ。

苦痛かもしれない……………だがそれでも、進むべきだ。

力強き道しるべを、たよりに。

## 12 「未来への道」

そうして、ファイリスたちの健闘によりセントシユタイン消滅の危機は去り、ルディアノ王国の再建が約束された後。　ファイリスは老学者イロホンから、例の本を見せてもらった。

「これが、真実……か……」

「そうなるのう……」

そこに記されていた真実。　それは先程もファイオーネ姫が語ったとおりのことだった。　ルディアノ王国が滅んだ原因は、大昔のセントシユタイン王国にあること、魔神の存在。　改めてそれを確認したファイリスたちは、それぞれで思ったことを口に出す。

「この国王は、確かに国を守ろうという意志はあった。　しかし、その方法を誤ってしまった……」

「他人を犠牲にして生きるだけでなく、そのことを隠蔽して後世に伝えようとしなかった……それが、罪なんだろうな」

「それに、ルディアノ王国のことはともかく、メリア姫とレオコーンが引き離される原因が、あの魔神だった……。　もし、また魔神が姫様の願いを叶えようと動いたとして、そのあとで真相を知ったら……姫様はもつとシヨックだったでしょうね」

「ああ。　そもそも姫様が魔神の力を利用してセントシユタインを滅ぼしてでもルディアノを蘇えらせようとしていたのも、その2人のためだったことだしな」

そもそもファイオーネ姫が今回の凶行に及んだ理由。　それこそがルディアノの姫と騎士の悲恋。　その悲恋の元凶があの魔神と知ったとき、ファイオーネ姫の心は強く傷ついた。　自分の国を滅ぼそうとするだけでなく、さらに悲劇を生み出そうとしていたかもしれないからだ。

「なにはともあれ、魔神もいなくなってセントシユタインも守れて、ルディアノの復活は約束された……これで解決、でいいよな？」

「そうね」

「ああ」

「そうですね……さて、僕もいかねばなりませんね……」

フィリスの言葉に仲間達が同意した後、セルフィスはそうつぶやいた。

「セルフィス、どこにいくんだ？」

「教会です。実はフィオーネ姫様にお願いをされていて……先の件で懺悔をさせてほしいとおっしゃったので、聞いてきます」

「そっか、まあお前なら姫さんを慰められるだろうな。いつてこいよ」

「はい、いつてまいります」

そうして教会に向かったセルフィスを、仲間達は見送った。

「にしても、みんな解決して許してるのに今も懺悔したいだなんて、姫様はまじめだな」

「あの方は元々、正義感が強くて優しいお方だもの。しっかりと向き合いたいのだと思うわ」

「……やっぱ、罪つてのは自分で認めないと償いようがないよな……」

「……イアン……」

そしてセルフィスは町の教会を訪れた。そこにはすでにフィオーネ姫の姿があり、彼を待っていたかのように声をかけてきた。

「セルフィスさん、お待ちしていました」

「お待たせしました……フィオーネ姫様。では、はじめましょうか」「はい」

そうしてセルフィスの前でフィオーネ姫はひざを折り頭を下げ、己の懺悔したいことを語る。

「……神よ、私は王族としての責務を忘れ己の感情のままに、己の国を滅ぼそうしていたことを懺悔します……。 真実を見つめているようであり、真実から目を背けていた……。まことにみるべきものや考えなければならぬことから、目をそらしていた……」

ぎゅ、とフィオーネ姫は祈るようにくんだ手を握る力を強めた。

かすかに、全身と声をふるわせながら。

「私は、ただ……悲劇を自分勝手な理由で利用していただけにすぎなかったのです……。 神よ、私はどうすればよいのでしょうか……。どのようにすれば、この罪は償えますか。 あなたの答えを、お聞きしたいです……」

素晴らしい、フィオーネ姫は目尻から涙を一筋ながした。 彼女は本当にあの事件のことを後悔し、罪の重さを感じそれに押しつぶされそうなのだろう。 どう償うか決めたとして、自分でそれをやっていくと決めてもなお、それは彼女を苦しめる。 それを感じるのはすべて、彼女の元の性格の影響だろう。

「フィオーネ姫様……」

そんなフィオーネ姫の姿を見て、セルフィスは心から彼女を救いたいと思った。 だから、彼女にある話をする。

「僕は、旅の途中で……姉を失いました」

「……え……?」

「姉はいつも、僕の味方で……僕を何度も助けてくれた……なのに、僕は肝心なところで助けられなかったのです。 そのせいで、僕は姉を失ってしまったのです。 その苦しみは僕だけでなく、義理の兄も抱えています……」

セルフィスはかつて自分の故郷でおきたこと、町を救うと同時に大事な人を失ったことを語った。

「僕はいまも、姉上を救えなかったことを罪とおもい、抱えているのです……。 そして今、その償いのために僕は……希望をくれたあの方達と旅を続け、旅先で出会う人々を救う旅を続けています」

続けてセルフィスはもう一人、贖罪のために旅をしている仲間のことを語る。

「僕の仲間であるイアンさんも、ある取り返しのつかないような罪を犯してしまい……。今もそれを抱えていらつしやいます。 いつも明るく振る舞われていますが、それでも、己の罪を記憶から消したりはしません」

「そんなことが……貴方達も、抱えているものがあつたなんて……」

「ええ……そして、僕達はフィリスさんとともに、彼女の正義、そして自分の正義を信じて……一人でも多くの人を救うために自分の力を使い、戦っているのです。あの方の力となることが、僕達にとつての……贖罪となるし、できる……そう、信じています」

そう自分の考えを語った後、セルフィスはフィオーネ姫と視線をあわせ、彼女に微笑みかけながら話しかける。

「フィオーネ姫様」

「はい」

「貴女の贖罪は、未遂とはいえ己の犯そうとした罪を認め、受け止め、忘れないようにすること……。そして、国王様と誓い合い、己で決めたように……この国と力を合わせて、ルディアノ王国を蘇らせること……。それらを行うことで、果たされるでしょう」

その言葉にフィオーネ姫は耳を傾け続け、そしてセルフィスは自分の聖職者としての仕事をもうひとつ、口に出す。

「準備が整ったなら、僕をおよびください……その地に魔物が足を踏み入れぬよう、清めましょう。そのためにも、あの団の方々、そして貴女達の努力が必要なのですから。負けず、自分と自分の国を信じて、復興に努めてください。僕も、それが叶うことを信じて、修行を続けます」

「……はい……」

フィオーネ姫は、セルフィスの言葉を受け取り、うなずいた。そのフィオーネ姫の表情をみて、セルフィスはほほえむ。

そうしてフィオーネ姫が城に帰るのを見届け、自身も教会をでて、セルフィスが宿屋に戻ってきたのは、夕方だった。

「ただいま、戻りました」

「お、帰ってきたか」

宿屋に入ってリツカにフィリス達のことをきき、彼らが部屋で休んでいることを聞いたセルフィスは、部屋の場所を聞きそちらへ向かった。するとその部屋にはリツカのいつていたとおり、フィリス達の姿があつて、セルフィスを待っていた。

「どうだ、姫さんは？」

「自分の抱えているものを打ち明け、僕も自分にできる限りの助言を  
しました。　きっと、大丈夫でしょう」

「そっか、お前がそういうなら大丈夫だな」

とりあえずファイオーネ姫の懺悔は無事終わり、彼女へ今後のアドバ  
イスを送ることで、その心は救われたことだろう。　安堵したファイ  
リス達は、自分達がセルフィスを待っている間になにをしていたのか  
を、セルフィスに打ち明ける。

「実はあかし達、さつきまでルディアノへ帰ろう団のメンバーと話を  
していたんだよ」

「あの方々と、ですか」

「ええ。　それで、ファイオーネ姫様を中心に、これから国がこの活動に  
力を貸してくれることを思い切って言ってみたら……マリツサさん  
達、大喜びだったわ」

「元々悪意があったわけでもないし、これからはこっそりとじやなく  
本格的に活動ができる……って言ってたな。　あと、やる気がでた  
……とも」

「そうですね……それなら、ルディアノの再建もさほど遠くない未来、  
なのかもしれませんね。　これならば姫様のお心は救われるでしよ  
う」

それに、祖国を滅ぼされたメリア姫とレオコーンの魂も救われるだ  
ろう。　生まれ変わって祖国に帰ることができ、今度こそ結ばれるよ  
うに願い事をするのも、いいかもしれない。

「あの人達、魔物と戦っても割と戦えて強そうだから……問題はなさ  
そうね。　特にあのメイドさん」

「……やっぱあのメイドさんに目を向けがちだよな」

「ええ……だって、ねえ……？」

ルディアノへ帰ろう団は各地を冒険しているだけあって、魔物との  
戦いもなれているし戦闘力も高いだろう。　きっとこれからも、ル  
ディアノを復興させるために、あそこにはびこる魔物達と最前線で戦  
うことで、国の信頼を得て進んでいくだろう。

「ま、いずれにせよだ。あたしらはルディアノへ帰ろう団の味方だ。今後も協力を惜しまないでいようぜ」

「そうね」

「だな」

「はい」

この国のため、そしてルディアノのために自分達ができることを、全力でやる。それが、よりよい未来というものを作り現実にするために、もつとも効果的なものだろう。その行動にでることにはたいし、4人はいつさいの躊躇いを見せないし、ためらうつもりもない。

そうしてセントシユタインとルディアノは今後も、大丈夫だろうと話がまとまった。そのときクルーヤはふと、ある事を思い出す。

「そうだ、まだセルフェイスにはなしていないことがあったわね」

「え、なんですか?」

自分が場を離れている間に、まだなにかあったのだろうか。セルフェイスが首を傾げると、クルーヤは彼にある話を持ちかけてきた。

「ねえ、セルフェイス。久しぶりにベクセリアにでも行ってみない?」

「えっ?」

それを聞き、セルフェイスはキョトンとする。それもそのはず、自分が席を外している間にしていた話の内容が、自分の故郷に関する話をしていただけだから。

「実はさっき、ロクサーヌさんから頼まれたんだよ。ベクセリアにいるとある家族のところまで、ある装備の一式を届けてほしい………つて」

「その配達人の仕事を引き受けようって、計画を立てていたんだ」

「あたしらは、受けるつもりでいたんだけど………せっかくセルフェイスの故郷にいくんだ。あんたの意見も聞かなきゃと思って返事待ちにしてもらってるんだよ」

町の名前をきいたセルフェイスは、静かに目を細めた。

「ベクセリア、ですか」

「ね、依頼もあるし………いこ? 久しぶりの故郷でしょう?」



さらにクルーヤに言われて、セルフィスは話を聞き入れることにした。

「そうですね。僕も気になりますし……今あの町が、どうなっているのが……」

「噂だと、その町は今、考古学者のおかげで学問の町へと進化しつつあるみたいだぜ。その考古学者の顔も、依頼ついでに拝もうぜ」

「はは、その方がよいかもしれませんね」

その考古学者が誰なのかをわかっているセルフィスは、クスリと笑ってそういった。フィリスはふと、窓の外を見て空がすっかり暗くなり星が顔を出していることに気づき、その夜空を見た。

「……明日からまた、あたしもがんばらなきゃな。ノンストップで……突き進まなきゃ」

その星の光をみて、フィリスはこれからもこうして人助けの旅を続ける決意を新たにしていたのだった。

### 13 「ベクセリアの真実に近づく」

セントシユタインの宿屋にて、新たな依頼を受けたフィリス一行。その依頼内容は、ベクセリアという町まで届け物をしてほしいというものだった。ベクセリアはこれまでに何度もいったことがあるし、さらに言わせてもらえば、仲間の一人・セルフィスの故郷でもある。

「これよ、このプラチナ装備一式があれば、息子をエルシオン学園に入学させられるわ!!」

「は、はあ……」

そして、今。 そのお届け物を届けたところである。 依頼主は近所で教育ママとして知られる女性であり、自分の息子をなんとかでもエルシオン学園に入れたくて勉強を強いているそうだ。 今回プラチナ装備の一式を注文したのも、息子をエルシオン学園にいれるためである。

「……そこまで強要したって、人の意志を無視して強引な手段を使ってる限り、意味ねーだろうよ……」 頭のイッたオバさんだな……」

「イアン、しーっ……」

イアンの言葉をクルーヤが必死になって止める。 一方例の教育ママは、届けられたプラチナ装備一式に満足していて、イアンがなにを口にしてたのか、まったく耳に入っていないなかつたようだ。

「ここまで準備が整えば、エリートにさせられる…絶対に大丈夫ですわよね……セルフィスおぼっちゃま!!」

「え? え、ええ……そう、ですね……?」

教育ママの気迫に押され、セルフィスはそう返事を返す。 彼女はセルフィスのお墨付きだと思いきんだらしい、これからどうしようかと計画を立てていた。

「これで戦闘の科目はなんとかなりそうねえ……となるとあとは、ルーフィン先生に家庭教師してもらったほうがよいのかしら?」

「……義兄上、ですか……」

それは、ベクセリアの町に到着したときから聞いた、彼の評判についての話。セルフィスが中心となり歓迎されていく中で、学者のルーフィンは町の人に勉強を教えるようになって、町になじんできているらしいことを耳にしていた。セルフィスにとつてルーフィンは姉の夫……義兄となる人物なので、彼の評判があがっていることは、うれしいことだった。

「でもこのところ、ルーフィン先生……古文書の解読に忙しいみたいだし、難しいかしら?」

「……古文書……?」

教育ママの口からでた古文書が、妙にひっかかる。フィリス達は疑問を抱きながらも依頼を達成したので、一度その家をあとにした。

「さて、これからどうする?」

「どうするもなにも、ルーフィン先生や町長さんにあいさつをしようぜ。久しぶりにきたんだし、セルフィスの顔を見たら喜ぶだろうしよ」

「そうだな、セルフィスもみんなと顔を合わせたいだろ?」

そうフィリスが確認をとるようにセルフィスに問いかけてみると、セルフィスは考え込んだような顔になっていた。そんなセルフィスのことが心配になり、フィリスはセルフィスに顔を近づけ、もう一度声をかける。

「セルフィス?」

「うわあっ!」

「うお!!」

フィリスに至近距離で声をかけられたことで、セルフィスは我に返ったらしい、大きな声で驚いた。その声には、フィリスも驚く。

「だ、大丈夫!」

「す、すみません……ちよつと、ボーつとして……」

自分がさつきまで考え事をしていて、仲間達のことを気にしていなかったことをセルフィスは謝罪する。そんなセルフィスのことを気にかけつつも、自分達はセルフィスの実家やルーフィンを尋ねよう

かと考えていたことを打ち明ける。

「そうだったのですね、でしたら僕も賛成です。 父上や母上、義兄上と久しぶりにあいたいですし……あ、姉上のお墓参りもいかななくては いけませんね」

「だな。 じゃまらずは、エリザさんのお墓参りからいこうぜ」  
「はい」

そうしてファイリス一行は、ベクセリアの町中を歩いていった。 まずはエリザの墓参りから始まり、道中でセルフィスを知る人と対話を していく。 そしてセルフィスの実家である町長の家へ足を運び、そ の日は会食と思いい出話に花を咲かせた。

「そうだ、父上。 このごろ、義兄上はどうしていらつしやいますか ？」

「ん？ 町を探索していたのならば、お前も聞いていただろう？」

そんな会食の席にて、セルフィスは父親である町長に、ルーフィン の近状について尋ねてみる。 するとそう言われたので、セルフィス はそうなんですけどね、と苦笑しつつも自分の気持ちを伝える。

「ただ、父上の口からお聞きしたかったのです」

「まあ、セルフィスったら……」

セルフィスの言葉に対し、婦人はクスクスと笑った。 どうやら、 夫とルーフィンが不仲だったときのことを思い出しているようだ。

町長は少し照れくさそうに咳払いをしながら、あのあとのこと打 ち明けた。

「あれからというものの、ルーフィンは町のものに積極的に関わって おる。 自分の知識を自分だけのものにせず、町の皆の前にその姿を 現し、自ら進んで勉強を教えているのだ」

「やはり、そうなんですな」  
「それに、エリザの墓にも、毎日訪れているようだ」

そう、彼らはルーフィンの話を息子に聞かせた。 その話で盛り上 がっている両親をみて、セルフィスは穏やかに笑う。 彼らの仲が安 泰していることが、嬉しいことのようにだ。 そんな息子に、母はある

話をもちかけてきた。

「そんなルーフィンなのだけど、最近はある古文書の解読に夢中みたいなよ。今、どこまで進んでいるのか……気になるわね」

「古文書……ですか、そういうえばそんな話を聞きました」

「ちよつと気になるよね」

「はい」

セルフィスは仲間達と顔を合わせてうなずくと、ルーフィンの今の状況を確かめることを約束した。

「このあと、義兄上のところにも伺おうかと思つていますし……僕たちが話をうかがつてきましよう」

「そうか、では頼んだぞ」

「はい」

そうして実家を後にしたセルフィスは、仲間達とともにルーフィンの家に足を運んだ。

「あれつて……」

その家の前に、フィリスは見覚えのある姿をした幽霊を発見する。

ほかの仲間達もその幽霊の存在に気付いており、特にセルフィスが驚いていた。その証拠に、セルフィスはその幽霊を呼ぶ。

「姉……上……?!」

『え、もしかして……セル、くん……?』

それは、ルーフィンの妻でありセルフィスの姉である、エリザだった。彼女はかつてこの町を襲った病魔の呪いによって命を落としたのだが、フィリスの助力によって成仏したのである。

「なんで!？」

『実はちよつとだけ、ルーくんのが心配で、天国から戻ってきたんですよ』

「そ……そうなんだ……」

だが、そのエリザがこうして戻ってきている。事情は先ほど彼女自身が話したとおりの内容で間違いないのだが、そういう形であつさり現世に戻ってきていいものだろうか。フィリスは天使だった頃

に現世にとどまる魂を成仏させていくのを仕事のひとつとしてやってきたのだが、そこから私情で戻ってきた話など聞いたことがなかった。

『でも、セルくんにわたしの姿が見えるようになったなんて……そんなに修行をつんだのねっ』

「えっ……ええ、まあ……」

フィリスが微妙な気持ちになっていることなど気付いていないらしく、エリザは生前と同じく明るい態度で弟と話をしている。　　どうやら死した後に会えないと思っていた実弟とこうして話ができるのが、彼女にとっては嬉しいことのようなのだ。

「エリザさんなら害がないし、そういう理由なら現世にとどまっても……まあ、いいか？」

「……僕がこんなことをいってもいいのかはわかりませんが、姉上のためにも、そうしてあげてください……」

「オレも、なにもつつこまねーよ」

「私も」

そう、エリザの霊に対し各が感想を口にした、そのときだった。

「おや、セルフィス！　みなさんもいたんですか」

「義兄上」

「ルーフィンさん、久しぶりだね」

この家の主である、ルーフィンが帰ってきたのだ。　彼に招かれるかたちで家の中に入っていった。　家の中に入った一同は旅の話や最近のベクセリアの様子などで盛り上がっていたが、やがて話は本題である、古文書の話に流れていった。

「……ええ、確かに古文書の解読はしますよ。　だけど……」

「だけど？」

「……実はこの古文書、肝心のページがこんなに汚れちゃっていて……読めないんですよ。　それで、息詰まっちゃってます」

「うっわ、こりゃひでえや」

そうルーフィンは、例の古文書をフィリス達に見せた。　その内容はほとんど汚れてしまっており、明らかに重要そうなページは読むこ

とができなくなっていた。これなら解説が進んでなくて忙しくなるわけだ、と妙に納得してしまったが、そこでクルーヤがある話を思い出す。

「それなら、確かセントシユタインで教わったわよね？ まほうのせいすがこういうシミに効く……って」

「僕もそれは知っているんですが、生憎持っていないし……道具屋にきいても切らしているようなのです。遠くへ買いに行こうにも、僕には難しい話ですし……」

そのまほうのせいすいはいま、このベクセリアにはないらしい。

それを聞いたフィリスは、自分の荷物袋からまほうのせいすいを取り出した。

「だったら、あたしが持つてるから使つてよ」

「よろしいのですか？」

「かまわないさ」

「……ありがとう。では、さつそく」

フィリスからまほうのせいすいを受け取ったルーフィンは、それで古文書のシミを掃除し始めた。そのときふと、フィリスのそばにいたサンデイが、あることに気付く。

「そういや、この古文書のマーク、見覚えがあるよネ？」

「そうだっけ」

そうして、ルーフィンは古文書のシミをすべて取り除くことに成功した。

「みなさん、お待たせしました。これでようやく古文書が読めるようになりましたよ」

「おおお……！」

「なにが書いてあるのでしょうか」

「気になるな」

こうなれば、自分達も古文書の中身を知らなければ引き下がれない。その古文書に対する好奇心を受け取ったルーフィンは、この古文書の中身を彼らに話し聞かせることにした。

「では、読んでみますよ」

「お願いします」

「……………何々……………」

ルーフィンは、古文書を声に出して読み始める。

「タイトルは、ガナンの歴史書……………」

「……………ガナン……………!?!」

「ベクセリアの森にそびえる、巨大な城……………そこは賢明なる国王の統治が行き届き、国民はそのガナン国王を……………愛していた。だが、ガナン王国に暗雲が立ちこめる。国王は暗殺され、亡骸は封印のほこらに埋められた。ガナン王国はるか東にその拠点を移し、王国から帝国へと、名前を変えた……………」

ルーフィンは冷静に、シミで汚れて読めなかつた全文を読み上げていたが、その目には驚愕の色が宿っていた。そして、すべてを読み終えた後、セルフィスは愕然としながら口を開いた。

「……………ガナン……………王国……………! ガナン王国……………だつて……………!」

「せ、セルフィス……………」

「このベクセリアが、かの忌まわしき、ガナン王国だつたなんて……………!!」

自分が長く過ごしていた、そして強く愛する故郷である町。いつかは跡を継ぎ自分が守るべき地。その正体がまさか、自分がその悪行を目の当たりにし戦っていた、あの国の本来の在処だつたとは。呆然とするセルフィスの横で、ルーフィンも語る。

「……………ガナンの名前は歴史学者で知らないものはいない……………300年も昔に、世界を征服しようとして各地に攻撃を仕掛けてきた、悪の国……………。しかし、そう世界に恐怖を与えながらも、突如として滅んだとされる……………ナゾの帝国……………」

「……………」

「その様子だと、あなた達も知っているようだ……………」

「まあ……………いろいろあつてな。でもまさか、この町がホントのガナンだつたなんて、ビックリだぜ」

「僕も、こんなナゾが潜んでいたことに、驚いていますよ」



そうルーフィンは口にした後、ナゾ解明かなとつぶやきつつ、フィリス達に言う。

「……この話はどうか、秘密にしてください。町の人を騒がせたくはありません」

「……………」

「……セルフイス、キミも……町の人だけでなく、ご両親にも言っただけじゃない。……それが、この町のためなんだ。わかったね？」

「……はい……………」

ルーフィンはフィリス達……とくに、セルフイスにたいし、今回の件は秘密にすることを約束させた。フィリス達はそれにたいし首を縦に振ったが、セルフイスだけが動きが鈍かった。

『……セルくん…………』

そんなセルフイスの姿を見て、姉は不安を顔に出す。彼女に対しフィリスは大丈夫だところりつたえつつ、4人はルーフィン宅をあとにしたのだった。

「そういえば、あの遺跡……………」

「あそこに、なにかあるんですか？」

「地下に、墓のようなものが見つかったな……もしかしたらそこに、ガナン帝国につながるものが、あるかもしれない」

家を出る前、そう、ルーフィンはベクセリアとガナンのナゾについて、つぶやいていた。封印のほこらに亡骸を封じたとあの古文書にも書いてあった。となれば、真実にさらに近づく手がかりもそこにあるのではないか。

「……みなさん……………」

「……………どうした？」

ルーフィン宅をでた後、セルフイスはずつとうつむかせていた顔を上げて、フィリスとイアンとクルーヤに対し、言った。

「……お願いです、僕とともに……………封印のほこらを一緒に、調べてください。ベクセリアとガナンの関係……………そして、その奥にあるさらなる真実を……………もつと、よく知りたいんです……………！」

## 14 「名もなき王の怨」

仲間たちとともに久しぶりにベクセリアに帰郷したセルフィスは、そのとき義兄であるルーフィンから、驚きの事実を聞かされた。それは、かつてこのベクセリアこそが、本来のガナン王国であること…国王の暗殺により城の場所は移動させられたということ。

「改めて町をみてみると、面影はあるといえはあるな……」

「………」

「……つと、わりい。不謹慎だったか？」

「……いえ、そういうわけではないのです……」

その真実を知ったときから、セルフィスの表情が暗い。自分が愛する町が、にくき国の城だったことが、彼にとつてはショックだったせいだろう。セルフィスは、そのことにたいしフィリス達に、真相をおいいたいと願っていた。

「……むしろ、謝るべきは僕のほうです」

「………」

「ベクセリアがガナンだったことは、既に過去の話……それも、かつてここにあったときはまだ、あの国が安定して平和だった頃のこと……だから、かのガナン帝国とは関係があるようでない……」

ぐ、とセルフィスは自分の手に入れた。

「なのに、僕は……そのつながりにたいし、心の奥で渦巻く気持ちをおさえきれないのです。憎みたくても憎めない……その憎悪の念。晴らすには、どうしても……双方のつながりに関するナゾを追わねばなりません。そして、僕は……それにあなた達を……巻き込もうとしています……。このことに、あなた達は無関係なのに……」

そういった次の瞬間、イアンはセルフィスの頭に手を伸ばして上から帽子を押し込んで深くかぶせてきた。

「い、イアンさんっ………」

「お前が関わってるなら、オレ達が無関係なわけがねーだろ」

「そうそう」

そこに、クルーヤも話題にはいつてくる。

「セルフイスっていつも、自分のことより……私達やみんなのことはかり考えて動いているでしょう？ だから、たまには自分のために動いたっていいのよ。私達も、あなたに助けてほしいもの」

「それに、あたし達も気になるしき……まだまだ、ガナンが関わっている以上、徹底的に突き止めないと、あたし自身も気が済まないんだよ」クルーヤに続いてファイリスもそう口に出したことで、イアンとクルーヤとファイリスは、セルフイスとともにベクセリアとガナンの関係を追いつめることをしめた。

「みなさん……」

「さ、封印のほころじになにかあるっていうんなら、探しに行こうぜ」

「……はい……」

その仲間達の励ましを受けたセルフイスに、笑顔が戻ってきた。

一方ここは、封印のほころじの地下室。そこに、さまよえる魂が一つ。

『おおおお……ここで眠り続けて、もうどれだけの歳月が過ぎ去っただろうか……だれか、だれか、おらぬのか』

立派な外套と王冠をかぶった、年老いた男の霊はそうブツブツとつぶやきながら地下室を徘徊していた。時折頭を抱えて立ち止まり、眉間にしわを寄せるが、それでもその地下室を出ることがなかった。否、できることができなかったというのが、正解だったかもしれない。

『……………』

この霊は、すべての記憶を失っていた。なぜ自分がここに眠っているのか、自分が何者なのか……なにもわからなかった。わかるのは、自分は既に死者であり、数百年という途方もないほど長い時間さまよい続けていること。そして、記憶がないことを悩んでいることで未練がはれず、昇天することができないことであった。

「ここには、例の病魔を封印して以来、ですね」

「そうなるな」

そんな男が地下室でさまよっていることなどつゆ知らず、ファイリス

達がその封印のほころに足を踏み入れていた。

「もしかして、あの病魔も……ガナンが生み出したものなんでしょうか」

「……可能性は高いけど、今は優先するものが違うぜ、セルフイス」  
「……わかつています」

もし病魔がガナンの生み出したものであれば、セルフイスにとってあの国は姉のカタキということになるだろう。既にガナンは討ち取ったので、カタキを討ったも同然なのだが。とはいえ、今は別の目的がある。

「んで、これが例の病魔を封印したツボね。……封印はしっかりされてるわ」

「さわらないでおこうぜ」  
「うん」

かつて病魔の魔物と対峙した場所にたどり着いた一行は、ツボの封印が未だに続いていることを確認しつつ、その奥に地下へと続く階段を発見した。

「地下へと続く階段だな」

「前にきたとき、あんなのあったかしら？」

「覚えがないですね」

そう疑問を抱きつつ、4人は階段を下り地下室に足を踏み入れた。そこには石碑がひとつあるだけの部屋だが、そんなものがこのほころの中に存在していたことを知らなかった一同は驚く。

「ここは……」

「知りませんでした……。まさかこのほころに、こんな地下室があるなんて……」

『だれか、だれかおるのか……』  
「！」

全員がその地下室を見渡していたとき、どこからか声が聞こえてきたので一斉に警戒してそちらを向く。

「幽霊……！」

そこにいたものを、ファイリスは率直にそう言った。それに反応し

た霊は、彼女達に問いかける。

『キサマら……余が、みえるのか?』

「……ああ、みえるけど」

『そうか……余は、なにものなのか……自分で自分がわからぬのだ  
……』

「えっ」

『命を落とし、途方もない時間が過ぎていった……余は、その長い時間、記憶を探している……そして、ひとつでも思い出せぬ限り、ここから動けぬ……』

「なんと……では、成仏もできないでしょう」

セルフィスの言葉に霊はうむ、と頷くと、4人の顔を見てなにかを決めたように告げる。

『みたところキサマらは、腕がたちそうだ……どうだ、余の姿がみえるというならばひとつ……余の頼みをきいてはくれぬか』

「頼み? まさか、記憶を取り戻す手助けをしてほしいとか……か?」

『ほう? 随分と察しがよいな』

「まあな」

すでに、亡き者の未練をはらすことは慣れっこなファイリスはそう答えた。説得力がある、と仲間達がうんうん頷いていると、霊はあるものを取り出してファイリス達にみせる。

「……この地図は……」

『この地図に存在する潜む、Sキラーマシンなる魔物が……余の記憶の手がかりを持っているに違いないのだ……。それを持ち帰り、余の記憶が戻ったときには……キサマに褒美をつかわそう』

そうして、霊から受け取った地図の場所へ向かったファイリス達。

その地図のポイントは、封印のほこらの近く……このベクセリア地方の西側だったのだ。

「まさか、ここに洞窟が隠されていたなんて……びっくりです」

「この地図があんなところにあつたのにも、ビックリだけども……」

洞窟の中は、土と氷で覆われていた。肌に直接冷気がささつてく



「きゃーっ!!」

「ぐっ……!」

その攻撃を受けたSキラーマシンは天高く弓をはなち矢の雨を降らせて、4人に同時に攻撃を仕掛けてきた。そして武器を振り回し攻撃を仕掛けてくる。

「っちー!」

「このやろうー!」

イアンはそれを棍で受け止めるとフィリスがはやぶさ斬りで切りかかり、直後にセルフイスとクルーヤが同時にイオナズンを放ってSキラーマシンを追いつめる。

「ギギギイイイ!」

「うわあああつ!」

するとSキラーマシンは今度は、強力な剣術である、ギガスラッシュを放ってきた。それは全員で防御して防いだものの、大ダメージを受けてしまったことにはわりはない。

「だったら、同じ技でかえしてやるよっ!!」

その中でフィリスはすぐに立ち上がり、自分の剣に電撃をまとい、大きくふるった。

「ギガスラッシュュツ!!」

その技は先程Sキラーマシンが放ったものと同じ技だった。その一撃を受けたSキラーマシンは上下まっふたつにわかれた。

「いまだ! ばくれつ拳!」

「イオナズン!」

そしてイアンがばくれつ拳、クルーヤがイオナズンを放ったことでSキラーマシンは崩壊した。

「やった!」

「僕達の勝利です」

「決まったな」

「ああ!」

そうして4人は勝利を確信したが、そこでフィリスはSキラーマシンの残骸がなにかを言っていることに気づいた。

「シヨ……ブン……テンシ……ニンゲン……セレ、シア……」  
「えっ……っ？」

その単語を出したSキラーマシンに、フィリスは驚く。洞窟の地下に潜む魔物がなぜ、天使やセラシアを知っているのだろうか。その疑問を抱いたフィリスは、さらにその残骸を調べようとする。

「おい、こいつをみてみるよ」

だがそのとき、イアンが別の残骸から、あるものを見つけだした。

もう一度確認してもSキラーマシンはなにもいわないので、フィリスはイアンの元に駆け寄る。

「どうしたんだ、イアン？」

「これみてみるよ、この残骸から見つけたんだ」

そういつてイアンはフィリスに、その金色のものをみせた。それは何かが彫られており、それをみたフィリスはみたままの印象を口に出す。

「それって、ハンコ……か？」

「まあそういうほうがわかりやすいな。金色の印章なんて、オレははじめてみたぜ」

「それなりの階級の人が、使用しているものでしょうか……」

それをみたセルフイリスは、あることに気がついた。

「もしや、かの霊の探していたものって……これなのでしょうか？」

「わかんないけど、とりあえず持って行ってみようぜ」

「ほかに手がかりも、なさそうなものね」

とりあえず一旦、この金色の印章をあの霊にみせてみたほうがいいかもしれない。そう思った4人は洞窟をでることにした。

「とりあえずでる前に戦いのキズを回復させますね」

「ああ、頼む」

洞窟をでたのは、セルフイリスによって全員のキズをいやした後だった。フィリスは、Sキラーマシンのいた部屋を見つめ、ふとあることを思った。

「にしても、ガナサダイのやつ……こんなヤツのいるところにこんなお宝を隠して、いったいなんのつもりだったんだ？」



「それ、なんかつつこんじやいけないポイントな気がするんだけど」

封印のほころの地下室。　そこで例の幽霊はまだ、さまよいつぶやいていた。

『……………うう……………余は、余は……………だ、れなのだ……………』

「おーい」

そこに、ファイリス達が戻ってきた。　声と気配でそれに気付いた霊は、ファイリス達の方をみる。

『……………キサマら、か……………どうだ、余の記憶の手がかりになりそうなものは、見つかったのか?』

「ああ、それっぽいものならあったぜ」

「これなんだけど、どうだ?」

そう言つてファイリスは、Sキラーマシンの残骸の中から発見した、金色の印章を見せた。　霊はそれを受け取ると、印章は強い光を放つ。

「ひかったー!」

『お……………おお……………そうだ、これだ……………これこそが、余の記憶……………わしの、すべての記憶……………だ』

その印章をみて、光を浴びた霊は、記憶が自分の中によみがえつていくのを感じた。　まだ断片的なものではあるが、記憶のない時間の長さに比べれば、それだけで自分のすべてがよみがえつていくような感覚に陥った。

『そうだ、余は国王……………ガナンの、国王であつたな……………』

「ガナン……………!?!」

『褒美はそこにある……………勝手に持つて行くがよい』

「いいんですか?」

『わしは、ゆかねばならぬのだ……………あやつの元へ』

そうして、ファイリス達に依頼の報酬の入った宝箱のことを告げると、霊は消えた。　成仏と言うよりは、どこかへワープしたかのよう

「行っちゃった」

「とりあえず、報酬でもみようぜ」

イアンはそういって、宝箱をあける。そこには、青いオーブが一個、入っていた。

「これって、オーブ、かしら……」

「2コ目だな」

希少価値の高い宝。そんな立派なものを報酬として出すとは、やはりあの霊はガナンの王だったのだろう。

「にしてもあの王様のユーレイ、どこいっちゃったんだろ？」

「……………」

その王の幽霊がどこにいったのだと疑問を抱いていた一同。そこでセルフィスは義兄が解読した古文書の一文を思い出し、王がガナンの王であるなら……と考え、王の霊の行方についてある説を持ち上げる。

「もしかして、彼はガナン帝国城に向かったのではないのでしょうか!?」

「ありえそうだな!」

たとえば場所を移つても、国王は自分の国へゆくはずだ。そう思ったファイリス達はセルフィスの案に乗り、彼に手を伸ばす。

「いこうぜ、セルフィス! あの王様の幽霊を追いかけに!」

「はい!」

ベクセリアとガナンのつながり、そのすべてを知り関係を受け止められるまで、あと一歩だろうか。その一歩のため、4人はガナン帝国城へ向かったのだった。

## 15 「王よ、眠れ」

王の霊を追いかけて、フィリス達は今は誰もいない廃墟であるガナン帝国城を訪れた。

「ここにくるのも……あれ以来、か……」

「そうですね……」

あれ、というのはガナン帝国の軍勢との最終決戦のことである。

女神セレシアから世界を脅かす邪悪なものがいるガナンを討て、と神託を受けたフィリス達はこの城に乗り込み、暗黒皇帝ガナサダイを倒した。だが、邪悪な力の正体はその皇帝ではなく、地下深くに幽閉されていたがために憎悪に飲まれ闇に堕ちた天使だったのだ。

フィリス達は天界へおもむきその天使を討ったことで、世界に平和が戻ったのである。

「！」

その激しい戦い以来となる城に、足を踏み入れようとしていたそのときだった。城門の前に、見覚えのある姿があり、フィリス達は警戒をして叫ぶ。

「お前は、ギユメイ将軍！」

『また会ったな……』

それはガナンに仕える将軍の一人、ギユメイ将軍だった。大昔の戦いで命を落とし魔物としてよみがえった彼は、生前と同じように自らが忠誠を誓ったガナサダイのために戦っていた。卑劣な手段を好まず正々堂々と強きものと戦うことだけを望む、誇り高き武人だった。そのことあって、帝国最強とよばれるほどに。

「……………」

『警戒をするな、このとおり今の我はただの靈魂……すでに死者だ。』

お前達にはなにもできぬ』

それをきき、フィリスは腰の剣を握る力を緩める。彼は元々筋の通ったものであると、戦いを通して知っていたからだ。フィリスは、なぜこうして姿を見せたのかを、彼に直接問いかける。

「じゃあ、あんたは今……なぜここにいるんだ？」



なおさらビツクリだろう。

「な、なんだよ今の!？」

『ガナサダイ様はもういない……。 ガナン帝国の野望の野望はどうに潰えたのだ。 我も現世に未練などない』

「皇帝を殺した、あたしすらにも……。か?」

『……お前達がそのカタキであろうとも、既にでた結果であり、繰り返すわけにもいかぬ。 ゆえに、 お前達のこと憎んでいない』

「話がわかるな」

『だが、気がかりはあの方の存在よ。 あの方は悲しき運命の中で散った……。 あの方の心は……。いまだに休まらない』

ギユメイ将軍がそう口にする、再び城全体に怒号が響きわたる。

「姿を見せなければガナンを! いや!! 世界中を滅ぼしてでも!

貴様をいぶりだしてくれるわ!!」

「ちよ、そいつはやめろーっ!!」

もしまた世界を滅ぼそうものなら、せつかく守った苦労が水の泡だ。 というか、つい最近も世界を滅ぼしかねない存在と戦い倒し、世界を守ったのだが。 そんなファイリス達に、ギユメイ将軍は彼女達にある依頼を出してくる。

『ファイリスよ……。我はお前達に託したい……。あの名を奪われし王を……。永遠に眠らせてやってはくれないか』

「え、あたしらに?」

『我や皇帝陛下を越えた、お前達になれば……。我もたくせる』

そう真剣な表情で頼んでくるギユメイ将軍、その目を見たファイリスは少し考える動作をとったが、やがて口角をあげて頷く。

「……そうだな! このままだと今度はあの王様が、世界を滅ぼしそうだ。 ガナサダイがもういないことも、この世にとどまったままじゃダメだつてことも、教えてやんなきゃならない……。だから、あんたの頼み、聞き入れてやるよ!」

ファイリスが迷いなくさういうと、ギユメイ将軍も目を伏せつつ口元に笑みを浮かべた。

『ふふふ……。やってくれるか。 流石は、我を倒したものだな』

「あつたりまえだ！」

『気をつけるがよい……あの方はガナサダイ様より強いぞ……』  
「ああ」

そうしてギユメイ將軍の願いを聞き入れたファイリス達は、城内に足を踏み入れた。

「みんな、覚悟はいいな？」

「乗りかかった船だしな、とことんつきあうぞ」

「ここまでできた以上、引き下がれません」

「最後まできつちりやらないと、モヤモヤしてて気持ち悪いもんね！」

そうして暗い城の中を突き進む4人。特に地形は変化しておらずだいたいので覚えているので迷わないが、あのとときと違うのは、魔物と一匹も遭遇しないところだろう。

「王様がいそうなポイントといえば、やはり玉座の間でしょうか」

「道は覚えているよな！」

「ああ」

王がいるのは玉座の間。そう推理した4人は玉座の間へ向かう。そうして玉座の間にたどり着いた4人は、扉に手をかけようとした。そのときだった。そこから、激しい怒号が聞こえてきたのは。

「どこにいるのだガナサダイ！ 姿を見せなければ、ガナン領は消滅すると思え!!」

「ここだな」

「ここね」

「ここだね」

「ここですね」

その怒号を聞いて、ファイリス達はここに間違いなくあの王がいると確信した。そして扉を開けると玉座の間には、ガナサダイにそっくりな大男が叫んでいた。顔は、怒り狂っていてさながら鬼…あるいは般若のようだ。

「ひよえー……」

「間近でみるとすごい迫力……」

「ありやあ、怒りで我を忘れてるネ……」

そう感想を口にしつつ、4人はあの王を倒すために前に出る。そうして自分の前に現れた4人に、王が気付き声をかけてきた。

「うん？　なんだ、キサマは？」

「こいつさらにオレ達を忘れてるよ」

自分達を発見した第一声にたいし、イアンは不満を顔に出す。一応自分達は、この王が記憶を取り戻す手助けをした恩人のはずなのに、と。ファイリスもイアンと同じことを思いつつも、剣を抜いて切っ先を王に向け、自分達の目的を告げる。

「あたしらは……あんたを止めるため、あんたを倒しにきた者だ！」

「名のなき王よ……あなたはすでに亡き者なのです。このままこの世にとどまっただけではいけません……どうか怒りをしずめ、天へとお還りください！　できぬのであれば、僕達があなたを屠ります！」

ファイリスに続いて、セルフィスが王を説得する。それを聞いた王は、大笑いをした。

「フハハハハッ!!」

「なにが可笑しい！」

「ゴミが余に刃向かうとはな……おもしろい……よかろう、相手をしてやる！」

「ゴミって……！」

「余は手加減はできんからな！　すぐに死んでも恨むでないぞ！　少しは余を楽しませてくれ！」

「そのせりふ、そっくりそのままお返ししてやるよ」

王の言葉にそう返すと、ファイリスは自らにバイキルトをかけはやぶさ斬りを繰り出す。その攻撃は王の杖と打ち合う結果になったが、直後に力をためていたイアンがすべりこんで、せいけんづきを食らわせる。うぐ、とうなり声をあげながら王はなにか呪文を唱えると、杖の先端についている玉をうかせて、それでセルフィスとイアンを攻撃する。

「ぐあー！」

「うぐっ……！」

セルフィスは盾で攻撃を防ぐがその一撃が重く、歯を食いしばる。一方丸腰のイアンはその玉をもろにうけた影響で吹っ飛ぶ。さらに王は今度は、マヒヤドの呪文で一同を同時に攻撃してきた。

「このおー・メラゾーマッ！」

反撃でクルーヤは、メラゾーマを唱えてそれを王にぶつける。そのメラゾーマによる炎は一瞬で、王の体を包み込んだ。

「ぐうう……！」

「はぁあーっ！」

炎の中にいる王に対し、フィリスは剣を強く振りかざした。それにより王の腕は大きく切り裂かれ、王はそのダメージに苦しみながらもしんくうはを放ちフィリスだけでなく周囲の仲間まで吹っ飛ばす。「まだまだっ！」

フィリスは床にたたきつけられながらもすぐに立ち上がり、はやぶさ斬りで攻撃する。再び玉が飛んできたが、それはイアンが蹴り技ではじき返し、そのまま氷結らんげきを繰り出して王を追いつめる。

「メラゾーマー！」

「ドルモアッ！」

そのとき王はメラゾーマで攻撃を仕掛けてきたが、それをセルフィスの闇魔法が防ぐ。王は引き続きマヒヤドを唱えさらにしんくうはを放って4人全員に大ダメージを与えたが、すぐにセルフィスが全員のカズをいやす。

「同じ呪文でお返しよ……マヒヤド！」

クルーヤはマヒヤドを放ち、王の動きを妨げる。そしてフィリスとイアンが武器による一撃をそれぞれ食らわせ、己の魔力をためていたセルフィスに声をかける。

「セルフィス！」

「はい！」

その呼びかけに対しセルフィスは頷くと、その手にたまっていた魔力を、王に向かって解き放つ。

「名のなき王よ……眠りなさい！ イオナズンッ！」



「ぐあああーっ!!」

その爆裂呪文は、王の体を包み込むと激しく爆発を起こし、その爆発がやんだ頃には、王は地に伏せていた。

「まさか、ガナサダイの時のようにバケモンに進化したりしねーよな？」

「ないことを祈りたいわね……」

「気を抜いちや、だめだよー!」

ガナサダイは一度倒れた後、骸骨のような姿になってよみがえり再び自分達に牙をむいてきた。まさか、この王も同じではないか。

そう4人はかつての戦いを思い出し油断せず警戒をして、王をみていた。王は、戦いのキズに苦しみつつも立ち上がり、言葉を発する。

「又オオオ……余は国王……余は、ガナンの国王なのだ……」

「……?」

「父として、ガナサダイの……野望を……息子の野望を止めねば……世界は、この世界は……!」

そう口にしながら、王は目を見開かせた。それは、自分の記憶を取り戻したからだ。

「……そうだ……思い出したぞ……余はガナサダイの父……余の名前は、ガンベクセン……」

「ガンベクセン国王……か……」

「ガナサダイよ……出てくるのだ……いったいどこにいる……なぜ……なぜ、父に姿を見せぬのだ……」

ガンベクセン王は、自らの名前を思い出し、再びガナサダイを探す。そんな王に、セルフィスは歩み寄る。

「セルフィス?」

「ガンベクセン王よ」

「む……?」

セルフィスは、ガンベクセン王と向かい合いつつ、彼に現実を突きつける。

「あなたの息子であるガナサダイは、もうこの世にはいません」「なに?」

「かの者は暗黒皇帝の名の下、帝国を築き世界を脅かしました……ですが、野望を叶えぬまま……散ったのです。今は、フィリスさん……そして我々の手により、永遠の眠りにつきました」

セルフィスの口から、ガナサダイの野望は潰え彼自身も亡くなっていることを知ったガンベクセン王は、一瞬で冷静さを取り戻した。

「そうか……キサマ達が……止めたのか……ふふふ……そうだったか……それならば、もうよいわ」

「いいのか」

「キサマらは余を正気に戻し、余は名を取り戻した……ふふふ……見事であったぞ」

そして、ようやくフィリス達のことを思い出したらしい。今回自分を止めたことや記憶を取り戻す手助けをした礼……ガナサダイを止めたことも含めて礼を言った。それにたいし4人が笑みを浮かべると、ガンベクセン王は天を仰ぐ。

「息子よ……余は、お前の心をわかってやれなかった……できるなら、もう一度お前と……」

最期に望むのは、父としての後悔と息子に対する謝罪、そして自分と息子の贖罪だった。国としても親子としてもやり直したいと望みながら、光となって昇天していった。

「……いっちゃったな」

「ああ」

もう座るものは誰もいないその玉座の間。そこでセルフィスは胸に手をそえて、かたる。

「祈りましょう。かの王が転生し……次の世界には、ともに力を合わせていく父子として歩めることを……」

セルフィスはそう目を伏せて祈り、それにほかの3人も共感しおなじことをしたのだった。

そうしてガンベクセン王を止め、天に召されていくのを見届けた4人はこのことを、依頼主であるギユメイ将軍に伝えるために彼の元に帰ってきた。

『あの方が……逝ったか……』

「ああ」

ガンバクセン王が既に旅だったことをフィリス達からきいたギユメイ将軍は、冷静にそう語りながらもその目からはわずかに涙を流していた。

「あつ……」

『ふっ……いかな……我としたことが、涙を……』

ギユメイ将軍は、かつての主君の姿を思い出し、その日々が戻らないことも自分の後悔も取り返しがつかず簡単には許されないことを思い返しながら、つぶやく。

『……あの方は、孤独な王だった……誰からも理解されず、我らもわかってやれなかった……』

「……」

『ふふふ……三将軍の我が、こんなことをお前にいうとはな……我にも、情がうつったようだ……』

「別にいいんじゃないのか？」

『むっ？』

立場で己を戒めようとするギユメイ将軍に対し、フィリスはそう返した。

「あたしらにとつて、あんたらは敵だ……あたしにしてみれば、皇帝なんかは特に、あたしの大事な人のカタキだ。だから今も、簡単にや許しはしねえ」

『……』

「けど、あんたしか知らないこと……あんたにしか理解できないこと、あったんじゃないかって思う。わかってやれなかったと思うこともあるし、今更取り返しもつかないかもしれない……でも、それに気付いてやれないと、理解できないと……忠義も同情も、なんの意味もねーよ」

だから、とフィリスはギユメイ将軍をみて、告げた。

「あんたのその涙も思いも……なにひとつ無駄なものじゃないし、そこに立場や肩書きは関係ない。むしろ、あんた自身がくさってない

証拠……立派な誇りだと、思うよ」

そう笑顔で語るフィリスに対しギユメイ将軍は目を伏せ、そして口元に笑みを浮かべた。

『その声をかけてくれるとは……我が敗北したのも、納得がいく……お前は、まことに強いものだな』

「あたしは、思ったことをそのまま口に出しただけさ」

『お前達には世話をかけた。これは礼の証だ』

そういつてギユメイ将軍はフィリス達に、報酬として赤い宝石を手渡した。その宝石に、4人は見覚えがある。

「あ、宝石！」

『なにか、我々も知らぬような、未知の力を感じる宝石だ……お前達ならば、その真実を突き止められるだろう……』

その赤い宝石についてそう説明すると、その体からポロポロと光の粒子をこぼしはじめた。それは、未練がはれ成仏するあかし。

『これでもう、悔いはなくなった……』

「ギユメイ将軍……」

『私も、生まれ変わることが許されるのであれば……もう一度、あなた方々とともにあり……そして、お前達と武勇の腕を、競いたいものだな……』

そう、転生を願う声を聞いたフィリスは、彼の言葉にたいし頷いて言葉を返す。

「……もし、あなた達が生まれ変わるのを許されないことというんだったら、かわりにあたしが許すよ！」

『……フツ……さらばだ……フィリス……』

そうして、ギユメイ将軍は昇天した。消える直前、その将軍は人間の姿をしていた気がしたが、既にここにはないので、確認はできなかった。

「……これで、すべてが……終わったのでしょうか……」

セルフィスは、暗い空を見つめてそう、つぶやいた。

## 16 「ガナンとベクセリア」

そうして、ガナン帝国城にてかつてのガナン王国の王・ガンベクセン王を討ち、その御霊を鎮めたフィリス達は、今回の一連の流れの発端となった町・ベクセリアに帰還した。

「みなさん、きていたんですね」

「ルーフィンさん」

そのとき、彼らを発見したルーフィンが声をかけながら駆け寄ってきた。

「義兄上、どうしたんですか？」

「いや実は、あのあと町中を調べ、そしてもう一度ほころにも足を運び……古文書の謎を僕なりに追いかけていった結果……興味深い話を見つけたんだ」

「興味深い話？」

そう説明をしたルーフィンは、ファイルから手紙らしきものを取り出し彼らに見せた後、そこに書かれていた文章で判明したことを、彼らに話し聞かせた。

「……かつてここをおさめていたガナンの国王は、自分の息子が成人したら王位を譲るつもりだったようだ。だが、その直前で暗殺されたらしい、ということが……この資料で判明したんだよ」

「……………」

「……よく、わかりましたね……そんな、大昔のこと……それも、暗殺の日と王位継承の契約の話を」

「国王が暗殺された日と、この書状が書かれた日はちょうど一日違いだったこと……そして、書状の文章と例の古文書を照らし合わせて、判明した事実をてらしあわせ、僕なりにまとめたんですよ」

そう、ルーフィンは説明し、セルフィスの方をみた。

「……これを見つけ、そう推測ができあがったとき……僕はキミに見せようとおもっていたんだ」

「僕に、ですか？」

「ああ……将来的にこの町を守る町長は、自分ではなくセルフィスが

なるものだって、エリザが僕によく話していたんだ。キミだったら、この町をまもるいい町長になれそうだから大丈夫だって言った」

「……姉上が……」

そのような話は初耳だった、セルフイスは驚きながらもルーフィンのお話に耳を傾ける。

「そのときがきたら、自分と僕で彼を支えようと言っていたけど……正直僕はそれを受け流してた。でも、様々なことがあって、ベクセリアと自分の距離も知って、そしてベクセリアの謎も知って……彼女の分まで、キミの助けになろうって決めることが出来たんだ」

「……義兄上……」

「今回、僕が見つけた資料をキミにみせ、そして僕の推測を聞かせたのも……キミがベクセリアを守るための、手伝いのひとつのようなものだよ」

ルーフィンはルーフィンなりに、エリザの遺志をついでいこうと決めたらしい、そのためにもこのベクセリアの真実は、次期町長であろうセルフイスに知ってもらったのである。そこには、セルフイスがこの真実を追い求めようとしていたことに彼が気付いていたから……というのもあるだろう。

「……」

「……とはいえ、キミは確かまだ修行中の身だったね。町長云々の話は、キミが考えて決断をすればいい。たとえばどっちになっても、僕はその答えを受け入れるよ」

「……義兄上……ありがとうございます……」

ルーフィンの言葉に対し、セルフイスは静かにほほえみつつそう返した。彼の表情と言葉を受けたルーフィンは、また会おうとだけ言い残して帰って行った。

ルーフィンと別れた4人はひとまず、エリザの墓参りを行い、自分達がさつきまで体感してきたことやルーフィンからの新情報を重ね合わせていき、

「悲しいすれ違いだったのね」

「……まあ、あいつが王……もとい、皇帝の地位についたときにやろうとしたことを考えてみれば……ヤツに王位を継がせるのはマズイ話だったかもしれねえ」

そう言った後、イアンは首を横に振りながら話を続ける。

「………とはいえ、そこはタダの結果論だ。ガンベクセン王が王位を譲る話をちゃんとしてりや、ちったあマシだったかもしれないねえな」

「ガナサダイの早とちりと臆病が生んだすれ違い、それがガナンの王国の終わりであり、帝国の始まりなのね」

そう、それぞれでガナサダイとガンベクセンの関係が正しければ、たがいにわかりあえれば、もう少しまともだっただろうし、多くの悲劇が生まれずに済んだかもしれない。そう敵に対し複雑な気持ちになりかけていた仲間達を、フィリスはバツサリ斬るかのように口を開いた。

「いずれにせよ、もう起きたことは変えられないし、あたしはガナサダイを……生涯通して、許す気はない」

「フィリス」

「あたしは、簡単にヤツが犯した罪も悪事も許さない。どんな事情があつても、あたしから大事な人を奪ったことに変わりはないんだ。

やむをえない事情の一つや二つで、簡単に帳消しにしちゃいけない罪つてのも存在する……。それでも許してしまったら、んなもんは慈悲でも寛容でもない……。現実から目を背けるための、適当な言い分だ」

そう、ガナサダイへの憎悪を今もかかえているフィリスをみて、イアンとクルーヤは不安そうな顔をしていた。そんな2人の顔に氣付いたフィリスは、彼らに笑いかけながら話を続ける。

「安心しなよ、もうヤツはいない……。あたしはすでにカタキを……巨悪を絶つてる。だから……。それを誰かにやつあたりして、憎しみを広げたりなんかしない。大事な人を奪われたからといって、同じことをさせたりしない……。自分の悲劇を利用して、好き放題なんてしない

よ」

「……そうね、フィリスって、そんな人だもんね」

「だな。自分がつらい目にあつたからといって、それで悪事を働いたりするのは、ただ頭の弱い八つ当たりでしかねーもんな」

フィリスは決して、その敵を許すことも憎しみを捨てることもしないだろう。だがそれ以上に、それに飲まれ他者を自分の思うがままに動かし、苦しめることをよしとしないだろう。彼女はハツキリとした正義をもつ人物であると、イアンとクルーヤは知っている。

「あ……セルフィス」

「礼拝はすんだのか？」

「ええ」

そこに、ベクセリアの教会で自身を落ち着かせるため、そして考えの整理をするために礼拝をしていたセルフィスが帰ってきて、フィリス達と合流してきた。

「ずっと……礼拝の中で思っていました」

「なにを？」

「僕が……旅の中でずっと、ガナン帝国を気にしていたのは……ベクセリアこそが真のガナンだったから……そして、僕はきつと、この地を代々守ってきた人間の一人の、子孫だったからかもしれません」

そこでフィリスも思い出した、旅の中でセルフィスはガナンというワードに反応したり、その存在に強く興味を示していたことを。今回のガナンとベクセリアの関係をたどってみれば、そうなったのにも納得がいく。

「だからこそ、以前のフィオーネ姫の話に耳を傾けそのお心に寄り添うことができたのでしょう……僕も、彼女と同じように……祖先の記憶を、自身の血を通じてつないできたのでしょう……」

そして、つい最近関わった姫と自分を重ね合わせたのだった。彼女もまた自分の祖先の無念を晴らそうとしていた……自分の中に流れる血と、そこに宿る記憶をたどったことによって。

「……もしも、あなたと旅をしていなかったら、僕も、あの方と同じことを、していたかもしれません」



セルフイスは、ある種の可能性についてそうつぶやいたのだった。

そうして、4人はその日はベクセリアの町に泊まることにした。

「考えてみれば、ほこらで幽霊に遭遇してその願いを叶える……のは昨日のことだったからいいんだけど、そこからが怒濤だったんだよな。どつかへいった王様の幽霊を追っかけてガナン城いつてギユメイ將軍と再会して王と戦って……よくまあこれだけのことを一日で終わらせたよな……」

「たしかに」

実はガンベクセン王を追いかけて倒すまでのこと、そしてルーフィンからある真相を聞かされるまでのことすべては、本日行われたことである。さすがにこれだけのことを一気にこなすとなれば、疲労は半端ではない。なので、このままベクセリアで泊まることにしたのである。ちなみに宿泊先は、セルフイスの実家である町長の家だ。

「……………」

そこで夕食をごちそうになり風呂にも入り、3人は来客用の部屋で泊まることになり、セルフイスは久しぶりの自分の寝室で眠ることになった。そうして彼らは安心して一晩休むことができるのだが、夜になってクルーヤは一人目を覚まし、バルコニーに出て物思いにふけていた。

「……………イアンもフィリスもセルフイスも、みんな背負ってるものとかあるのね……………」

イアンは過去に自分の失態により両親も積み上げた実績も全部なくしており、セルフイスは自分の故郷の秘密を知りそこには実姉の死も関係していた。フィリスに至っては、そもそも彼女の正体の時点でふつうじゃないし、その後たどった運命は重い。

そんな仲間達と自分を比べて、クルーヤは重いため息をついた。

「私はそういうのが……ないんだなあ」

「お前はそれでいいんだよ」

そうつぶやいた次の瞬間、背後から声が聞こえてきたので振り返ると、そこにはイアンがいた。

「わ、イアン聞いてたの!？」

「おー、まあな……あいつらは寝てるけど」

「……うん、寝かせてあげて」

独り言を聞かれた、それはもう仕方のないことだと観念したかのようにクルーヤは、言葉を続ける。

「私……孤児、ではあるけど……育ての親もいるし……友達もいるし……。私って過去にそんなに苦勞を背負ってないなあ……って、みんなをみて思っちゃったの」

「……………」

「もちろん、そういうのって比べるもんじゃないのは……わかってるんだけどね」

「あつたりめえだろ」

クルーヤの言葉にイアンはハッキリとした言葉で返して、話を続ける。

「それに、同じ苦しみを背負ってほしいなんて思わないぜ。オレはもちろんだけど、フィリスもセルフイスも、自分と同じくらいの苦しみを誰かに背負ってほしくないし、背負えばいいなんて少しも思わない」

「……………イアン……………」

「二応、お前が自分とオレ達の過去を比較してなにを思っていたか……それはだいたいの予想はつく。オレ達の苦勞を自分は同情しできないのが、お前には苦痛なんだろう？」

「……………うん……………」

クルーヤが自分と仲間の過去を比較して、なにに思い悩んでいたのか。それは、自分は仲間のつらい過去を知っていても、それにたいして可哀想だと思いきむことしかできないことだった。自分で体感したわけでもないのに恰も共感している、単なる同情にほかならないことにクルーヤは自分で気付いていた。彼らの抱えているものは重いものであるのに変わらないし、助けになりたいのに、同情しかできない自分かもどかしいのだ。

「気持ち分かる、という安っぽい同情しかできない自分が……なん

かイヤで……私はどうしたらいいのか、たまにわからなくなるの」

「……お前にとつて、オレ達は大事な仲間という気持ちはあるのか？」

「そんなの、当たり前よっ！」

イアンの問いにたいし、クルーヤは強く反発した。

「だったら、お前はこれからも、お前にできることをやって……オレ達をしつかり支えてくれればいいさ。そして、オレ達のことを仲間として大事してくれれば、オレ達は背負うものを重く感じないですむ。

それで、十分な助けになってるんだからさ……お前も、自信持てよ」

「……うん！」

そうイアンにいわれ、クルーヤは明るくうなづく。

「私これからも、みんなに襲いかかる魔物やわるいやつを、魔法でバンバンぶつ飛ばして、みんなを助けるからねっ」

「おう、その意気だぜ！ お前はそこにいるだけで、頼もしいんだから……魔法の腕前が、さらに磨きをかけてるんだからよ！」

「ふふっ、ありがとー」

クルーヤは、自分の迷いはらして笑って見せた。

そして、翌日。朝食を用意してくれたというので全員で食卓に向かう。

「みなさん」

「セルフィス」

そこへむかう途中、フィリス達は自室から姿を見せたセルフィスと合流した。セルフィスは昨晚、自分は将来的にどうしようかを一人で考え、そして答えを見つけたことを打ち明ける。

「一晩、ずっと考えて決めました……。僕は、いつか……この町を守る地位を、受け継ぎたいとおもいます」

「本当か!？」

「はい。だけど、受け継ぐのは……その瞬間は。父上が僕にそのことを告げたとき、正式に発表された時です」

そこには、ガンベクセンとガナサダイのことを重ねていた。自分  
は自分だけの意志で、人の上に立つことをしないこと。そして人の

上に立つには先人の許可と認定をもらうことにしたこと、人の上に立ったからには果たしたいことなどをはなした。

「……僕……ベクセリアの新町長になったら、この町を支えたいのです。ほかのみなへの助けを受け、みなを信じ……多くの人の心を救う人に……なりたいです」

「……セルフィス……」

「僕は、そのときのために……己を律していきたいと思います……みなさんとともに……引き続き、貴女方をお守りし……己を精進し続けることを、ここに誓いましょう」

そういつてフィリス達の前にセルフィスはひざを折り頭を垂れた。

そんな彼の真剣な姿勢にたいし、まずはイアンが動き出してセルフィスの頭に手を置きぐしゃぐしゃとなでてその緑色の髪を乱した。

「わわわっ!!」

「大げさだし、かたつくるしいんだよ!」

「そうよ、私達……仲間じゃない! 一つのパーティーじゃない! 今更そんな挨拶いらぬわよ!」

「あたしらは、あんたを信じてて……頼りにしてんだからな……!」

イアン、クルーヤ、フィリスのそれぞれの言葉を受け、セルフィスはははにかんだ。

「はい……!」

そして、その様子を、セルフィスの両親はあたたかく見守っていた。

「セルフィスは、いい人に巡り会えたのね……」

「……うむ、ああして人に信頼され、強く思われる存在……それもまた、人を率いるものの器の証だ。……エリザのいつていたとおり、あいつは、いつかいい町長になれるだろう……」

「ええ、私もそう思うわ」

## 17 「地図を求めて」

カルバド大草原はいま、深い霧に覆われていた。その現象は滅多に現れないものであり、集落に集う人々は白い景色に不安を覚えていた。

「…とまれっ！」

「ヒイインッ！」

集落にすまう遊牧民をまとめる族長・ナムジンは馬を利用して草原を駆けながら、集落の周辺をパトロールしていた。その最中で彼は自分たちに近づくくなにかの気配に気付き、手綱を引いて動きを止める。ナムジンが止まったところでその気配の正体も顔を近づけて鳴き声をあげた。

「グギギッ」

「なんだ、ポギーか……お前も不安を覚えたのかい？」

「グギッ」

それは、彼になついている善良な魔物……マンドリルのポギーだった。普段は彼の母親の墓が存在している洞窟を住処にしており、ここにナムジンがたびたび顔を出している交流の形を取っているのだ。そんなポギーがなぜここまで足を運んできたのか、その理由に気付いているナムジンはそつと、ポギーをなでる。

「シャルマナは、あの洞窟にいるんだな？」

「グギッ」

「このような深い霧、私が生まれてからは一度もなかったから……ヤハーン湿地からくるものなのだろうか……。とはいえ、滅多にないとはいえ、霧は霧だ。不安がる必要はない……すぐにやむさ」

「グギイ」

「それよりも、お前はシャルマナのそばにいてやれ。あいつは小さく弱い。強き友であるお前がそばにいなければ安心できないだろう……今も、洞窟の中でふるえているかもしれない」

そういつてナムジンがポギーに、洞窟に帰るよう勧める。心配そ

うに見つめてくるポギーにたいし、私は大丈夫だと答えながら。だが、そのとき、どこからか自分達以外の存在の気配がした。すぐに気配のした方をみるとそこには、なにかのシルエツトが浮かび上がっていた。

「何者だっ！ 姿を現せ！」

そう叫び、護身用として持ってた弓矢を構えるナムジン。ぎりつ、と弓がしなり矢がひかれる。だが、黒い影は動かず、そのまま薄くなっていった。ポギーが前に出てみると、そこにはなにもなかった。

「霧が、なにかの影に見えただけ……か………？」

ポギーの行動によりそこに誰もいないのを確認したナムジンは、弓矢をかまえるのをやめた。そこに、ある違和感を抱きながら。

「まるであの影は……翼を持った人間のような……」

ガナンとベクセリアの関係を解き明かし、その因縁にも終止符を打った。それ以降4人は町の人々の依頼を聞いては、それを達成させていく。

「もうほかにやることもないし、しょうがない……か」

「どうした？」

「うん……今もうやることがないからさ」

これといって大きな事件もないから、手応えというのを感じない。まあそれは平和である証拠だし、その平和を自分たちの退屈しのために崩す必要もないだろう。フィリスはそれを承知していながらも、最近感じていたことを正直にイアン達に打ち明けると、彼らもフィリスと同調した。

「そういえば、地図もあのガンベクセン王の霊からSキラーマシンの居場所を記したものをもらって、それつきりでしたね」

「そーだろ？」

あれからもう、1〜2週間は経過しただろうか。地図がみつかるどころか、それに関する情報も噂もない。ある意味、八方ふさがりのような状況である。次の新しい地図を探そうにも、手がかりがな

い。そこでイアンはふと、あることを思いつきフィリスに提案する。

「なあ、一回アギロの旦那と相談でもしてみねえか」

「アギロさんど？」

「ああ……そもそも、最初にオレ達に宝の地図に潜む奴の情報を提供してきたのって、旦那だろ。旦那だったら、なにかわかるかもしれないぜ」

「……なるほど……！」

イアンの提案に全員が納得し、フィリスは早速アギロホイッスルを使って天の箱船に向かった。突然乗り込んできた4人にアギロは驚いたものの、フィリス達の話に耳を傾けた。

「……へえ、地図がどこにあるのかがわからず、息詰まってる、ねえ……」

「なにか、この事態を打破する手がかりをお持ちでないですか？」

「ああ、それならあるぜ」

「マジですか！」

アギロはそばにあった箱から一枚の地図を取り出すと、それをフィリス達に見せた。それは紛れもなく、今まで発見してきた例の地図だった。

「実は奥の荷物倉庫に、あったんだ……一枚だけな。とりあえず、今てがかりがないんだったら、これを頼りに行ってみたらどうだ？」

「ありがとう、アギロさん！」

フィリス達はその地図を受け取ると、この世界の地図を広げて同じ場所を探し出す。するとやがて、ある場所と合致した。

「あ、カルバドの集落の南の位置だ！」

「ああ、同じ地形だな」

「カルバドだな……よっしゃ、せっかくだ！このままオレが連れて行ってやるぜ！」

「よろしく、アギロさん！」

そうして4人は天の箱船にのり、カルバド大草原に向かった。やがてそのポイントについたアギロが彼らにそれを告げると、フィリス

達はアギロに礼を言いつつ降りようとした。

「つて、なにこの深い霧!」

だが、そこで外に出ようとしていた4人は草原が深い霧に包まれていることに驚く。これでは視界が白一色だ。

「そういやこの近くに霧がたまってる湿地があつたような……」

「だからつて草原全体が白くなるほどに染まることつて、あるのかよ!」

いくら近くに湿地があり霧が発生しようとも、この草原はとてつもなく広いのだ。そこまで濃いものを、広範囲に広げるチカラはない。この現状に対しアギロは最初戸惑っていたが、やがてある説に気付き冷静につぶやく。

「こいつは、地図の魔物の影響かもしれないな」

「ええ!」

「そんな、影響を及ぼすことつて、あるんですか!」

「そういうこともあるみたいだぜ。実際に目の当たりにするのは、オレも初めてだ……」

「……このまま、こんなに濃い霧に包まれていたら……集落の人も大変だろうな」

「ああ」

フィリスはこの草原に住む人々の姿を思い出し、今彼らは暮らしくなくなっているはずだと考えた。そんなフィリスにアギロは、地図を攻略することで救われるという話をする。

「だが安心しな、この現象も洞窟の魔物を倒せば消えるつてことだ」

「そうか……だつたら迷いはないな! いくよ、みんな!」

フィリスのかけ声に対しイアンとセルフィスとクルーヤはうなずき、4人は宝の地図の洞窟に向かった。

「あつつうい……」

無事に宝の地図の洞窟は発見できた。だが、それだけでは終わらなかった。洞窟の中に入るとんでもない熱気が、4人に襲いかかる。洞窟の中に溶岩が流れているし、高温で湿気も多い。仲間達



は汗だくになりながら、道中の魔物と戦っていた。

「この前攻略したのって、氷の洞窟だったよな……」

「温度差がとんでもないことになってますよね……」

「これは、砂漠よりきついわね……」

「そりゃ、砂漠はまだ屋外で空気があるし風もふくからな……それに、夜は涼しいし……ここは洞窟の中だから全然だぜ。なあファイリス……」

そう、イアンが声をかけてみるが、ファイリスは黙ったままだ。

ファイリス、ともう一回声をかけてみると、ファイリスはボツリと呟いた。

「あちい……」

「……お前、結構まいってるみたいだな……」

「ああ……こりやまいるぜ……このままじゃあたし、最悪全部脱ぐぞ……」

「「それはダメ!!」」

「じよ、ジョーダンだってばさ……！　んなことするわけないだろ……真にうけんなよ……」

冗談のつもりで言った言葉に対し全員で詰め寄って止めてきたので、ファイリスは苦笑しつつそう返した。この洞窟は早々に攻略をしないとマズイかもと、全員で気を引き締めつつ洞窟の奥へ進む。そうして最奥部らしき場所にたどり着き、そこにここまで遭遇したとは違う魔物がたたずんでいることに気付く。

「あれ、あの魔物……ほかのとは少し違うわね」

「ああ……おそらく、洞窟のボスといったところだな」

「あのものを討てば、外の霧も消えるでしょうか」  
「どうだろうな」

そう話をしつつ、4人はその魔物の前にでる。その魔物は巨大な赤いスライムにまたがった、小さな兵士のようなもの。両手には巨大な剣を一本ずつ持つており、スライムにも兵士にも髭がはえている。

「我こそは、スライムジェネラル……」

「スライムジェネラル？」

「ここは忘れ去られた地……封印された兵士たちの墓場……だが、心に戦いの炎がある限り、戦いは終わることはない……」

そう呟いた後、スライムジェネラルは両手の剣を大きく振り回し、戦闘態勢にはいった。

「そうとも！ 貴様の命を糧とし、この封印を打ち破って、再び世界を戦場に変えてやる！」

「そうは、させるかよっ！」

向かってくるのなら、と4人は一斉に武器を構え戦闘態勢にはいった。・まずはクルーヤがイアンにバイキルトを、セルフィスが仲間達にスクルトをかけ、イアンはバイキルト状態で敵につっこみ棍による一撃を食らわせる。

「スキアリ！」

「甘いっ！」

直後にフィリスがはやぶさ斬りを繰り出したが、それはスライムジェネラルのガードにより阻まれ、さらに反撃の一撃を受ける。直後、クルーヤが今度はメラゾーマを唱えて炎の玉でスライムジェネラルを焼いた。

「どうよっ！」

「小癩な……イオナズンツ!!」

「きやああ！」

だが直後にスライムジェネラルはイオナズンを唱え、4人に同時に攻撃を仕掛けてきた。すぐにセルフィスが全員を回復させるためにベホマラーを唱えようとしたが、つつこんできたスライムジェネラルの一撃を受けてしまう。

「うぐっ！」

「セルフィス！」

「よくもやってくれたわね……！」

そこでクルーヤが攻撃魔法で反撃にでる。その手に冷気をまとい、マヒヤドを放ちスライムジェネラルを攻撃した。その一撃を受けたスライムジェネラルはクルーヤに剣での攻撃を食らわせようとしてきたが、それをイアンが阻む。

「どこみてんだよっ！」

「うがああ！」

直後、ファイリスがスライムジェネラルの背後に回って、大きくその体を切り裂いた。そのダメージにより体勢を崩したところで、ファイリスはある人物に声をかける。

「いまだ！」

「うけなさい……ドルモーアツ!!」

ファイリスが声をかけた相手は、セルフェイスだった。彼は闇の攻撃魔法を放ち、スライムジェネラルを攻撃した。その一撃は、とどめの一撃だった。

「ウゴオオオオオオ……！」

そうして魔物は敗れ去り、消滅して後には宝箱が一つ、残されていた。

「あー……ようやく熱さから解放されたぜ……！」

「お前も全裸にならずに済んだな」

「……もうっ、冗談を引きずるなよな！」

魔物が残していった宝箱には手袋が一つ入っていた。これは上質な宝だ間違いないと感じたファイリス達はそれを持ち帰り、洞窟の外に出た。やはりというべきか、洞窟の中と外では全然違ったので、草原の空気は非常に涼しいものだった。

「みて、霧が晴れてるわ！」

「ホントだ！」

「やはりあの魔物こそが、霧の発生源だったようですね……」

草原を覆っていたあの濃い霧は跡形もなく消えていた。あの広く風が行き渡る草原が帰ってきている。あの広

「にしても、熱い上にばとったから疲れたぜ……どっかで休もう」

「そういえば集落が近かったはずですし、そちらへいきましよう」

「さんせーっ！」

ファイリス達はカルバドの集落へ向かい、その宿屋で休むことにした。集落にはいったところで遊牧民がファイリス達の存在に気付

声を上げた。

「おお、ファイリスでねえか！」

「ひっさしぶりー」

「オレらもいるぜー」

「族長様ー！　ファイリス達がきましたー！」

「えっ？」

軽く挨拶を返すと、ほかの遊牧民が族長を呼ぶ。彼は人々となにかを話し合っていたらしい、声をかけられ振り返り、4人の存在に気付くと、近づいてきた。

「あなた達は……！　久し振りだな！」

「久しぶりだね、ナムジンさん」

ナムジンにそう答えつつ、4人は旅の途中なのだが疲れたので休ませてもらうために立ち寄ったのだと告げる。それを聞いたナムジンはもちろん歓迎をすると言い、今日起きていた異変の話をする。

「……そうでしたか……やはり、あの濃霧にあなた達も悩んでいたのですね……」

「ああ。　いつ魔物や部外者が攻めてくるかわからないから、私や皆で交代で、見張りを行っていたんだ」

「族長自ら？」

「当然だ、私は皆を守らねばならないからな。　一人だけ安全な場所に匿われるわけにはいかない……見回っている間、集落の皆のことは父上に任せていたのだ。　まあその霧も先程晴れたから、もう心配はなさそうだな」

そう草原が濃霧に包まれていたときのことを語りつつも、ナムジンはこのタイミングで4人が現れたことに疑問を抱いた。

「にしても……あなた達はよく、あの濃霧を越えられたな」

「!!!!!!」

「それとも……霧が晴れたからここまでくることが、できたのか？」

ナムジンに言われ、4人はどう答えればいいかわからず言葉を失う。そんな4人の反応に対しナムジンは自分は失言をしたのだと気付いて、首を横に振る。

「……すまない、あなた達を疑っているのではないのだ。ただ、あまりにも偶然で……関係があつたのではと……。もしかしたら、霧が晴れたのはあなた達の働きではないかと、そう思いたかつた……その確信がほしかったんだ」

「……あんたがあたしらを、信頼してくれている。それが事実ならいいよ」

「……」

自分達があ霧の関係があつた、それはあながち間違いではない。もちろん、ナムジンは自分達を濃霧の原因と言うより、この草原から濃霧を払つたのだと思つているのも事実であると受け入れられる。だが、詳しい話をするのは難しいことだ。これ以上なにもはなすことができない4人にたいし、ナムジンは話を切り替えることにした。

「そうだ、一つおもしろい話があるんだ」

「おもしろい話だつて？」

「……先も言つたとおり、この草原が霧で包まれていたとき、私は馬に乗つて見回りをしていて……その最中で不思議なものを見たんだよ」

「不思議なもの？」

濃霧の中、馬を駆り見回りをしていたときに見かけたなぞの影。

そのみたままの姿をナムジンは口に出す。

「……人影だ。それもただの人影ではない……まるで、その背中に大きなもの……たとえるなら、翼のようなものを持った……」

「……っ！」

「まあ、その姿を私もハッキリとみた訳じゃないから、事実とはいいがた……」

どうせ自分の気のせいだろうとナムジンは言いたかつたが、フィリスの様子がおかしかつたのに気付く。

「フィリス？」

「ッ！」

「どうした、なにかあつたのかい？」

「ま、まさか！ 霧が濃いから見間違えたんだよ！ 背中に羽の生え

た人間なんている訳ないもの！」

「そうか……そうだな。魔物ではないかと警戒はしていたが、あるはずないか」

「そうそう！」

フィリスは必死になってごまかし、それにたいしナムジンは納得をしていた。そして、彼にはこれ以上なにもいわず、おやすみとだけ告げ、宿屋に帰っていった。

「あ、フィリスッ!! ……ああもう、しゃーねーなあ！」

「え、彼女はいつたい……?」

「すみません族長様、僕達もここで失礼させていただきます！」

「ではまた明日っ！」

仲間達も、フィリスの後を追いかけるようにして、宿屋へ一直線に走り去っていった。そんな彼ら……とくにフィリスのその姿を、ナムジンはみていた。

「……フィリス……」

## 18 「宝石のチカラ」

翌日、宝の地図の洞窟を探索した疲れをカルバドの集落で休むことで取り払った4人は、そこを旅立とうとした。

「昨日はゴメン、急に取り乱したりして、それで、勝手に帰っちゃって……」

「いや大丈夫だ、こちらこそ失礼なことを口に出していたようで……すまなかった」

「ナムジンさんは悪くないよ、あたしが勝手に行動しただけだし！」

そう、ナムジンに昨晚の非礼を詫びたフィリスは、カルバドの集落を出た後も少し後悔をしていた。思わず自分が翼を持つ人間というワードに対し過敏に反応したことや、彼がああ濃霧と自分達に關係があることに気付いたのは不信感を抱いたからではないのかと、彼を疑ってしまったことに、たいしてである。

「あーあ……なんかあたし不審者丸出しだったかもしれないねえ……あの、絶対にあたしのことを不審に思ってるよ」

「大丈夫だと思うわよ？ 私達はなんも悪いことをしてないし、するような人と思われていないもの。それに彼だって、あまり追求しなかつたでしょ？」

「おそらく、ワケありだと思つて聞かなかつたんだろうよ……」

「その方がよいと判断なさつたのでしよう……であれば、僕達は彼のご厚意を受けましょう」

「そうよ、ちゃんとあなたもあの人も謝つたんだし、その話はそこままで、にしましよー！」

「……うん」

そう仲間達にはげまされ、フィリスは本来の元気を取り戻した。

それを確認したイアン達も笑顔を浮かべつつ、イアンは次の依頼を彼女に言う。

「そーいや、集落の人から手紙を預かつてるぜ」

「誰宛？」

「うーん……サンマロウの宿屋で働いている友人に届けてほしい、とだけ聞いたな。これを次の依頼としようぜ」

「いいよ、引き受けた！」

フィリスはイアンが持ち込んできた依頼を、そのまま引き受けることにした。サンマロウならルーラで一発だと話をし、早速そのルーラの魔法を使って、サンマロウへ転移した。

「……………」

その様子を、誰かがみていることには気付かずに。

そうしてサンマロウに手紙を届けた4人。

「あ、フィリスさんだ！」

「テイル」

そこで彼らはナザム村で出会った少年・テイルと再会した。彼は今、このサンマロウに里帰りし、もう一人の叔父のところではばらく世話になっていたのだという。フィリス達との再会が嬉しいテイルは、彼女達がここにいる理由を知り、自分と叔父の家で食事をとることを提案してきた。

「みんなで、ボクの実家でご飯を食べていって！」

「あはは、じゃここはテイルのお言葉に甘えるところだろうか！」

フィリスも、元々人間には好意的な性格だったが、特にリツカやテイルにはその性格が全面にでる。やはり、命の恩人としての一面が強くなるからだろうか。フィリスの案に全員が同意し、彼らはテイルの叔父の家に向かった。その叔父は突然の来客に驚きこそしたものの、前に会ったことがあることや、テイルからよく話を聞いていたと言って、4人を歓迎してくれた。

「……………」

しばらくの思い出話に花を咲かせ、昼食を手伝った上でご馳走になったあとのこと。荷物の整理をしていたフィリスはふと、自分が持っていたあるものの変化に気づき、それを手に取った。

「今、この宝石のかけらが光ったような気がしたんだけど……………」

それは、最近彼女達が集めている不思議な宝石のことだった。太



陽の光に当てたわけでもないのに、自らその色と同じ光を放ったその宝石にたいし、フィリスはますます疑問を抱き、それを手にとつてみていたのだ。

「フィリスさん、どうしたの？」

「テイル」

そんなとき、フィリスの姿に気付いたテイルが歩み寄ってきた。

他の仲間達は今それぞれで自由時間を過ごしているようだ。そんなとき、テイルはフィリスの持っていた宝石に気付く。

「ねえねえ、それキレイだね！ フィリスさんのものなの？」

「ああ、とりあえず……今の所有者はあたしだよ」

「そうなんだあ……でも、不思議な色と光だよ。 なんだか壊れかけみたい」

「ああ。 しかもこの宝石、同じのがいっぱいあるみたいでさ……カケラを集めるのも、あたしの目的みたいなものだよ」

「そうなんだあ……」

そう話をしていき、テイルは寂しそうな顔をしていったのに気付いたフィリスは、彼にどうしたんだと問いかける。

「……ボクがもつと大きくて強かったら、フィリスさんのお手伝いできたはずなのになあ……」

「気にするなよ、あたしは好きで集めようって決めただけなんだ。

あんたは関係ないさ」

「でも……」

「でも、じゃない。 たとえあんたがどんな人間でも、あたしはあんたが助けてくれた恩も忘れないし、今の関係を変えたりはしない。 どうあっても、あたしはテイルの味方だよ」

そう微笑みかけながら語るフィリスに、テイルも自信を取り戻したようであり、笑顔を浮かべる。 その表情にフィリスも安堵した、そのとき、高い鳴き声のようなものが聞こえてきた。

「な、なに!?!」

「ひえ、魔物!?!」

そこに現れたのは、背中に大きな翼をつけた赤紫色の竜の魔物だっ

た。その魔物は同じ姿のものが数体おり、うち一体がフィリスに牙をむいてくる。フィリスは咄嗟に剣を抜いて魔物と対峙する。

「くうっ！」

「フィリスさん！」

「テイル、にげろっ……」

自分が魔物の注意を引いている間に、なんとしてでもテイルだけでも苦そうと呼びかける。だが直後、別の魔物がテイルに飛びかかり、彼を捕まえた。

「わああああーっ!!」

「テイルーっ!!」

その魔物はテイルを捕まえると、そのままとび去ってしまいました。フィリスはそこで自分と対峙していた一体の魔物を倒したが、すでに飛び去っていつてしまった後だった。そこで、悲鳴を聞いてきたイアン達が集結してくる。

「なにがあった、フィリス!」

「てい、テイルが……突然飛んできた魔物に連れ去られた!」

「なんだって!」

町の中で小さな騒ぎが起きていた原因を聞いて、イアン達は驚く。

そこでセルフィスは、本来町は魔物除けが施されていることを思い出し、セルフィスはその魔物除けのチカラの気配を探る。

「普通こういう領域は魔物は進入できないはず……」

だが、直後に異変に気付き、セルフィスは目を見開かせる。

「これは!」

「どうした、セルフィス!」

「この町……魔を退けるチカラが弱まっています……! この近辺の魔物は寄せ付けませんが、それ以上に強いものには通じません……!」

「さり気にもこの辺の魔物をデイスってるんですけど!」

サンデイのツツコミを受けつつも、セルフィスは今、この町魔物を退けるための魔除けのチカラが弱まってきていることを告げた。

それにより、ある程度の強さを持つ魔物なら簡単に町に入っ

こと、このままチカラが弱まれば、周囲の魔物もこの町には行つてくることができてしまうことを告げられる。これは、再び魔除けを強化しなければならぬ。

「とにかく、テイルくんを助けなきゃー！」

「ああ……！」

「あの方角だったら、あの洞窟だよな」

だが今最優先にすべきは、魔物に連れ去られたテイルの救出だ。

魔物が飛んでいった方向、そして魔物が身を隠すのにうつつけな場所が近くにあることから、魔物はテイルをどこに連れ去ったのかを推測する。

「待ってろ、テイルー！」

フィリスは少年を助けるため、走り出した。

サンマロウの北の洞窟に足を踏み入れたのは、恐らくマキナもといマウリヤを救出するために乗り込んで以来だろうか。

「はあっー！」

だがそこは今、以前に訪れたときはまた別の魔物に占領されていた。あの頃と比べて自分達も強くなったとは思うのだが、ここの魔物もあの頃とは比にならないほどに強い。

「みなさん、下がってくださいー！……イオナズンー！」

今日の前に出現しているのは、しゃくねつのほのおをはくピンク色に輝くキメラ、赤と黒の怪しい模様が描かれた仮面の魔物の集団。

全体にたいしセルフイースはイオナズンの魔法を放ち、そこで統率が崩れたところにイアンとフィリスが攻撃を加え、クルーヤがマヒヤドを放ってトドメをさした。

「にしても、前回と違って魔物のレパトリー増えすぎだぜー！ この前の草原での濃霧事件といい、変なことがふえてねーか？」

「そうですね……あのときはまた、別の脅威でもあるのでしょうか……宝の地図のことも、ありますし……！」

「……そうだったら、絶対に防がないとな。前は一步間違えれば、ナムジンさんが巻き込まれそうになったし……今回は、テイルが……！」

「フィリス……」

フィリスは、剣を握りしめながら、テイルにたいする思いを打ち明ける。

「あたしにとって、テイルは弟のようなものなんだ……純粹で、優しく……周りになんと言われようと自分の気持ちをしっかりともって、行動もできる……そんなところが、あたしは好きだ」

「……………」

「あいつはまだ小さく、弱いかもしれない……でも、いつかは絶対に強くなれる！ その強さをうむために、あたしが守らなきゃいけない……守りたいんだ！ だから、今回だって助けてみせる！」

そう、テイル救出に対する強い思いを口に出すフィリス。その思いを聞いたイアンは、腕を組んでうなづく。

「そうだな。 どうあつても若い芽は、つむもんじゃねえ……育てるもんだ」

「そのためにも、守るべきものは守らなきゃね。 たとえ、どれほどの苦勞を背負つてでも、当然の役目は果たすべきだもの」

「そして、僕達は……今、その役目を果たさねばなりません。 だから、急ぎましょう」

「うん！」

そう声をかけあいながら、4人は洞窟の奥に向かう。 その先にはかつてマウリヤが閉じこめられていた小さながあり、中には氣を失っているテイルがいた。 そして牢の前には、テイルを連れ去ったあの魔物がいた。

「グウルルル……」

「いた、ヤツらだ！」

その魔物達をみたフィリス達は、一旦物陰に隠れ様子をうかがう。

そして、そのうちの一体がなにかをブツブツと呟いていたので、そろって耳を傾ける。

「ホーセキ、ホーセキだ……」

「宝石？」

「ホーセキをてにいれる……そのチカラ、てにいれれば、われらアンド

レアルが、サイキョーのマモノになれる……………」

そう口にしなから、アンドレアルは同族の群に言った。

「そのタメニモ、ダ。このコゾウは、そしてあのマチは、だいじなホゾンシヨク。ハウセキをサガスための。もっともつとアツめるぞ……………」

「保存食、だと……………」

彼らは連れ去ったテイルのみならず、あのサンマロウの人々も自分の食料にしようとしていたのだ。そのたくらみを阻止しなければ、彼らの命がない。これはすぐにでもあの魔物達を討たねば、と身構えたそのときだった。

「グオオオオ！」

「うわあっ!!」

「ファイリス！」

別の場所から別のアンドレアルが現れ、ファイリス達に襲いかかってきた。ファイリスはその不意打ちを受けて腕をかすめてしまうが、すぐにイアンが受け止めクルーヤがマヒヤドを放ち、アンドレアルを氷で串刺しにした。それでもまだ息が残っていたので、イアンが氷結らんげきをヒットさせてトドメをさした。

「大丈夫ですか」

「ああ、サンキュ」

ファイリスはセルフィスにより傷を回復させられる。だがこの戦鬪により、牢の前に集まっていたアンドレアルの群に自分達の存在がバレてしまった。

「ニンゲン？ まさか、われらのシヨクリヨウになりに来たのか……この、コゾウのように！」

「っへん、誰もお前達の食料になんか、なりたかねーよ！」

「その通り、だからお前達も全部ぶつ殺して、その子を助け出してやるぜ！」

「にんげんが、ナマイキを……………ここでコロして、くいつくしてヤルウウウ!!!」

そう雄叫びをあげて、アンドレアルの群は全員でファイリス達に牙を

むいてきた。それにたいし4人は臆することなく武器を握りしめ、それぞれで戦い始める。フィリスは自分にバイキルトをかけ、そこからドラゴン斬りを繰り出す。

「ここで、最近覚え立ての一撃、かましてあげるわっ!!」

そう言つてクルーヤは杖の先端に魔力をためる。そこには強い冷気が宿っており、クルーヤはその呪文をさげふ。

「マヒャデドス!!」

クルーヤの放ったマヒャデドスは、アンドレアルの集団に突き刺さる。おまけに氷によつて動きも大体封じられているようであり、クルーヤはそれに気付いて仲間達に今よ、と声をかけた。それにたいしフィリス達はうなずき、確実に一体ずつしとめていく。

「てめえが最後の一体だな、さあ……この剣の錆になつてもらおう!」

「シネエエエ!」

「くっ!」

最後の一体に対し剣を向けると、アンドレアルはしつぽを大きく振り回してフィリスに襲いかかってきた。それをフィリスは盾で受け止めると、すぐにアンドレアルの懐に飛び込み、剣を振るう。

「はああっ!!」

「ウゴオオアアアッ……!」

そうしてアンドレアルは、全滅をした。

「テイルツ!!」

アンドレアルをすべて倒したフィリス達は、本来ここに足を踏み入れ魔物を全滅に追い込んだ理由である、少年の元へ向かった。その少年……テイルはあの牢屋の中にいたのは気付いていたので、フィリスは急いで彼に駆け寄り、抱き起こして名前を呼ぶ。

「テイル、テイル……!」

「………ううん………フィリ、ス………さん………?」

フィリスが必死に名前を呼ぶと、テイルはゆっくり目を開けてフィリスを認識した。彼が意識を取り戻したことで、フィリスは安堵する。

「よかった、本当に無事で……よかった……」

「……よかったなファイリス」

「ああ……。なあティル、大丈夫か？ ケガしたりしてないよな？」  
「うん、ボクここにいれられてそのまま気を失っちゃったけど……見ての通り、全然大丈夫だよ！」

そういつてティルは、につこりと笑って見せた。そこには外傷のみならず、心の傷もないようだった。ティルは、引き続きファイリスにたいし話を続ける。

「それに、連れ去られてる間……ボク、ファイリスさんなら助けにきてくれるって信じてたもの！ ボクをナザム村のあの空気から助けられてみたいに……悪いヤツを倒して、助けにきてくれるって……！」  
だから、だから……全然平気だよっ！」

「……ティル……」

「それにね、それにね！」

ティルは必死になって、ファイリスを見てて思ったことをそのまま打ち明けてきた。そこにあるのは、ファイリスに対する羨望だ。

「ボク、今度は……助けられる側じゃなくて、助ける側になるんだ。

魔物に対しても勇敢に立ち向かっていく……そんな強さを手に入れたいな。ファイリスさんたちを見てて、そう思ったよ」

「……ああ。ティルなら大丈夫だ。強くなる理由を、絶対に見失わないと、約束できるなら……あたしも、これからさらに強くなれる」  
「うん、ボク約束する！ 大事な人を助けるために、強くなるって！」

かつて自分を救ってくれたから、信頼して正しい道を歩んでくれる。そう信じるからこそ、ファイリスはそう約束をした。ティルは迷いなくそれを受け入れ、いつかは強くなることを宣言した。

「やれやれ、一件落着だな」

「ああ、もう大丈夫だ」

「うん！」

そんな光景をあたたく見守っていたイアン達は、今は町に帰るところを二人に提案する。

「さあ、帰りましょう。」

みんなが待つてるはずよ」

「あの町の魔除けも、強化しなければなりませんね」

「そうだな。いこうぜ」

「うん」

そうしてファイリス達は、救出したティルとともに、アンドレアルの死体を飛び越えつつ洞窟を出て行った。

「にしても……なんであの魔物達……。オレ達の持っていた宝石をねらっていたんだ？」

その帰路でイアンは、魔物達があの宝石をねらっていたことに対し、疑問を抱いていた。



## 19 「サンデイせんぱい?」

サンマロウで魔物に連れ去られたティルを救出したフィリス達は、ティルを無事に町まで送り届けた。その際、弱まっていた町の守りを、セルフィスを中心とした聖職者達が祈りを込めて清めたことで、強めたのであった。

「ティルを助けてくれた上に、町を清めてもらって……もう感謝の言葉しか言えないぜ」

「ありがとう、フィリスさんにみんな!」

「無事でよかった……これからは、気をつけてくれよ  
「うん!」

清めが終わった翌日、フィリス達はティルとそう言葉を交わして、サンマロウの町を後にした。まだ凶暴な魔物が現れた原因もわからない今は、町の外にでないように勧めて。

「ふうん、その宝石をねらう魔物……ねえ」

「うん」

そして一同はアギロホイツスルを使い天の箱船に戻り、例の宝石のことと魔物のことをアギロに話した。そうして今世界に起きている、エルギオスとはまた別の異変をアギロは知る。

「なにか、わかりませんか?」

「……いや、わかんねえな……俺も今、世界に起きている異変を知ったところだ。宝石のことだって、同じだ」

「そういうえば、アギロさんには言っただけな……」

実のところ、フィリス達もこの宝石がなんなのかはわかっていないのだから、説明のしようがないのだ。当初は、旅の資金に困ったときに換金するために持つていようと決めていただけだったから。だが、破片同士が近くにあるとくっついてひとつの宝石になることや、魔物がねらっていることなどから、やはりただの宝石ではないようだった。

「あたしにも、この宝石が持つてるチカラがどんなものかはわから

ねえ……だけどつ」

その宝石をみていたフィリスは、つぶやく。

「こいつをねらっているのが、あんなあくどいヤツらだったら、絶対にこの宝石をわたせねえ。それだけはわかる」

これがただの宝石でないと決定づけた、先の件のことを思い出しているようだ。このまま宝石を渡していたら、さらわれたテイルだけでなく、サンマロウの人々が犠牲になっていたかもしれない。今後と同じことがおきたとしても、決して宝石を渡すことなく魔物は倒すべきだとフィリスは言う。

「そうね」

「そうですね」

「そうだな」

そのフィリスの言葉に、クルーヤとセルフフィスとイアンは力強くうなづく。そして、イアンは今後の目的を口にする。

「まあ元から決めてはいたけれど……洞窟の地図を探し出して攻略して、いろんな依頼をききつつも、その宝石の謎も解明しようぜ」

「ああ」

「よし、こんな感じでいいかな?」

「お、だいぶ慣れてきたじゃねえか」

とりあえずその後は特にやることも急ぐ用事もないので、フィリスはアギロ指導の元、天の箱船の操縦を行っていた。フィリスはすんなりとそれになじむことができ、アギロが思っていた以上に教えが進んでいた。

「だてに天使界一の天使の弟子じゃない、ってことだな」

「はは、ある意味ではイザヤールお師匠様のご指導の賜、かもね!」

そう師匠のことを思い出しつつも、フィリスはふとある違和感を抱いて、アギロの方を向く。自分は師匠のことを、アギロにはなしたことがなかったからだ。

「というかアギロさんに、お師匠様の話ってしたことあったっけ?」

「ああ、オレも話だけはきいたぜ」

「いつのまに耳に入れてたんだよ」

「アギロの旦那、侮れねーな……」

「あまり気にしすぎると体に毒だぜ、さあ指導を続けるぞ」

アギロは自分のことを多くは語らない、少し疑問をいだけばこうしてはぐらかされる。そうして疑問を抱きつつも天の箱船の指導を受けたフィリスは、それが終わったあとでサンデイに声をかける。

「サンデイ、今指導が終わったよ」

「ああ、おつかれさまー」

フィリスのその報告をきいたサンデイはそう軽く返事を返しつつ、ふと思っていたことを口に出す。

「そういやさ、アタシずーっと思っていたことが、あるんだけどさ」

「ん、どうしたんだ？」

「フィリスは、アタシのことを先輩と呼ぶべきだとおもうのよね」

「はい？」

唐突すぎるサンデイの提案に対し、フィリスはすっとうきよんな返事をしてしまった。どういうことだよ、とフィリスが問いかける。と、サンデイは自分を先輩と呼ぶべき理由を語る。

「だってアタシはさ、ずーっと前から天の箱船のバイトじゃん？ で、あんたはピチピチの新人ちゃん。つまり、フィリスはアタシのことを、サンデイ先輩って呼ぶべきだと思った……というわけなの！」

「そ、そーゆーもん？」

「そーゆーもんなの」

理由を説明されても、いまひとつ理屈がわからないフィリスは顔をひきつらせる。そこに、仲間達が流れるように合流してきた。

「なんだなんだ、なにか新しい遊びか？」

「なにをなさっているんですか？」

「うわ、みんなきた」

「なによその反応」

「こっちは遊びなんかじゃなくて、真剣な話をしているんですケド」

サンデイはフィリスにたいし、自分をセンパイと呼んでほしいと話をしていたことをイアン達に打ち明けた。

「先輩、ねえ……」

「そういうわけだよ！　じゃ、早速先輩つてよんで！　よんで！」  
「……………」

そう頼み込むサンデイに対し、フィリスは頭をポリポリかきながら  
も、サンデイの方を見て頼まれた呼び方をする。

「センパイ？」

「もつと！」

「サンデイセンパイ！」

そうフィリスが大きな声で呼ぶと、サンデイはうれしそうに笑っ  
た。それは、優越感からくるものだった。

「ふっふっふっ……！　いい！　センパイって呼び方、すっごくい  
い気分！」

「いいのか、これで」

「じゃあ、センパイからの愛あるメッセージをきいてね！　これから  
センパイであるアタシの言うことは、なんでもきくコト！」

「あー、はい？」

サンデイの唐突な言葉に対し適当に返事をするフィリス。　そん  
なフィリスをイアン達は遠目に見ていた。

「じゃ早速だけど、焼きそばパンかつてきて！　5秒以内ね！」

「はっ？」

そんなありきたりな命令あるか、というかそれは命令というかパシ  
リだろ。

フィリスはそんなことをおもいながら、カウントダウンをするサン  
デイをジト目でみる。　サンデイは、そんなフィリスの表情にすぐに  
気がついた。

「なにその顔。　やだあ、ジョーダンに決まってるでしょ！　アタシ、  
ダイエット中だもん。　焼きそばパンとかいらないっし！」

「ダイエットしてなかったら買わす気だったのかよ」

「っーことごとっからマジ話ね」

「っーとこで流したわね」

「実はさ、アタシ今着てるこの服にちよつと飽きてきちやつてさ……  
新しいのにしたいんだよね」

「なるほど？」

「ということで、センパイから愛の命令！ アタシの新しい服を作るための材料を、集めてきて！」

そんな漫才のような会話をしつつ、サンデイはフィリスにある頼みごとをしてきた。これは、依頼の一環と言うべきだろう。

「材料は、4つ！ ちようのはねと、レインボーチュチュと、ゆめみの花！ そしてミスリルこうせきをひとつずつね！」

「どういうファクションになるつもりだよ」

「それは後のお楽しみ、これを全部集めてくれたら、アタシの秘密をおしえちやうから！ そんなじゃ、よろしく〜！」

そうして、フィリスはサンデイの頼みを聞くことになってしまった。隣で話を聞いていたイアン達に、サンデイのほしいものの話をしてみると、イアン達もサンデイの願いを叶えるのに協力すると言ってくれた。

「二応全部、地上をまわれば手に入るものばかりですし……がんばりましょう」

「しゃーない、さっさと集めてきちやおうか！」

そう話を合わせ、4人はまず地上に降りた。元々錬金素材のために持っていたゆめみの花やちようの羽、ミスリルこうせきは持っていたので、あとはレインボーチュチュだけだ。確かセントシユタインの店でみたことがある、という話を聞いて店に行ってみたところ、打っていたのはカラフルチュチュという服だった。最初はにたような服かと思えば、どうやらこれを錬金することでレインボーチュチュが作られるらしい。さっそくその服を購入してリツカの宿屋へ向かい、錬金釜のカマエルにそれを作ってもらおう。

「お嬢様のお頼みとあればこのカマエル、いくらでも錬金をしましよ  
う！」

と、言葉を話せる不思議な錬金釜・カマエルは語った。彼の協力のおかげで無事に、サンデイの望みの品が手に入ったのであった。

「にしても、これがレインボーチュチュか……ハデだなあ。あたしはこれきろって言われたらムリだわ……」

「そう？ 私全然いいわよ」

ハデでふりふりな服は、フィリスの好みではなかったようである一方、クルーヤは興味津々だった。

「なんかあげちやうのもつたいないなあ……」

「クルーヤってこういうのホントスキだよな」

「いいじゃない、私だって女の子だもんっ！ フィリスはそういうのに疎すぎ……というか興味なさすぎよっ」

「あたしはいいよ」

女の子らしい格好を拒み続けるフィリスに対しクルーヤはそういうが、フィリスは再び断った。そんな2人のやりとりを見ていたイアンは、話を進める。

「まあ入手方法がわかってるんだったら、また手に入れればいいだけだ。今回は先約に渡してやろうぜ」

「そうね」

イアンの言葉にクルーヤも納得し、4人はレインボーチュチュを天の箱船へと運んでいったのだった。

「お、やるねえ！ 全部集めてきてるじゃん！」

「まあなんとかな」

「それじゃ、早速もろうよ！」

「どうぞ」

そういつてフィリスはサンデイに、頼まれたものすべてをプレゼントした。それを受け取ったサンデイにたいし、イアンは問いかける。

「もらうだけか？」

「ここで着替える訳ないでしょ！ えっち！」

「えっちって……まさか僕達のことですか!？」

「ああ、オレらだろうな……」

男である自分たちのことを言われたと気付いたセルフィスは軽く

ショックを受け、イアンは苦笑する。彼らにはサンディに対し性的なものはいつきい感じていないし、のぞく気もなかっただけになおさらだ。そんなイアン達に対し苦笑いをするフィリスとクルーヤにたいし、サンディは上機嫌で言う。

「んじや、これからもすばらしきセンパイ……サンディ様の言うことをよくきくように！」

「はい」

そう軽く返事をして、この日の依頼は完了としようとしたそのとき、フィリスは立ち去ろうとしたサンディを呼び止める。

「まった！」

「ん、なによう？」

「ひとつ、忘れてませせんパイ」

「忘れてるって……ああ、アタシの秘密を教えるって約束のこと？」

サンディがそう問いかけると、フィリスはコクコクとうなずいた。

それで約束のことを思い出したサンディは考え込みつつも口を開いた。

「ん……実はね。アタシ……今は、こんなトコでバイトなんか

やってるんだけど……」

「うん」

「……アタシ……アタシは……本当は……ネ……に……」

「ネ？ なに、ネって」

サンディらしくない、歯切れの悪い言葉に4人が食い入るように耳を傾けていると、サンディはあわてて首を横に振る。

「や、やっぱ恥ずかしい！ ま……また今度ねっ!!」

「あ、ちよ、サンディ!？」

「センパイをつけなさい!!」

「サンディセンパイッー！」

フィリスはそうよびなおして呼び止めようとするが、サンディは止まることなく奥の車両へ飛んでいってしまった。残された4人はポカンとしてしまい、奥にいたアギロはため息をつく。

「なんか、メンドクサーことになったな……」

「うん」

「このままで大丈夫でしょうか……」

「でもきつと気まぐれだし、長続きしないわよ……彼女も気分が変わって飽きるかもしれないし、それまで付き合っただけでしょ」

「クルーヤ、なにげにヒドいぞそれ……」

クルーヤの言葉に対しイアンがそうツツコミを入れるのだった。そうして彼女たちはしばらく、サンデイを先輩とよぶことになったのであった。

「あれ、というかオレ達も、サンデイをセンパイと呼ばなきゃならなくなってる？」

「いつのまに……」



## 20 「カデスの星をめぐる」

「おはよー……」

「おー」

朝、天の箱船の中で一晚を過ごしたフィリス一行は目を覚まし、一カ所に集まった。朝食として彼らは、セルフィスにきつてもらったりんごを食べながら、昨日のことを振り返る。

「なんだかんだで、あのあと天の箱船で寝ちやっただよな……」

「ああ」

「今日もあたし、サンデイをセンパイって呼ばなきゃならないんだろ  
うな」

「みたいだな……そういえば、サンデイは？」

「さつき、お化粧をしにいったわ」

そうサンデイのことを話していると、誰よりも早く目を覚まして運  
転士の仕事をしていたアギロが声をかけてきた。

「そうだフィリス。俺からお前にひとつ、提案があるんだが」

「どしたの、アギロさん」

「お前も中々に天の箱船の運転が板についてきたことだし……正式に  
天の箱船の運転士の試験を、受けてみないか？」

「え？」

「天の箱船って、運転士試験があつたんすか!？」

アギロからの突然の申し出にフィリスはきよんとし、そもそも試  
験が存在していたことにイアンは驚きツツコミをいれる。そんな  
イアンにたいしアギロがあるんだなこれがと返していると、フィリス  
は頭をポリつとかいた。

「あたしにできるかねえ？」

「なあに、お前ならやれるはずだ。俺の試験を受けて見ろ、な！」

そうアギロに笑顔でいわれ、フィリスは迷うが、ふと視界に入った  
仲間達がうなずくのを見て、フィリスは試験を受けることを決める。

「じゃあ、あたし……やってみるよー」

「よしきたー！」

フィリスが試験を受けることを決めたことで、アギロも気合いが入ったらしい。彼女に試験のルールを説明しようとしていたら、そこにサンデイが割り込んできた。

「ねえねえテンチョー！」

「ぎ、サンデイ………センパイ」

「その運転士試験、アタシも受けたい！」

サンデイは運転士の試験に興味津々のようだ、堂々とフィリスより前ですら、アギロに告げる。

「ほら、アタシのがフィリスよりもキャリア長いじゃないツスカ。

アタシのが試験受けるの、先でしょー！」

「……………」

「旦那？」

だが当のアギロの表情は厳しい。そんなアギロにイアンが心配そうに声をかけると、アギロはサンデイを厳しい目で見つめながら、重々しく口を開く。

「サンデイ。お前もう、天の箱船のバイト、やめろ」

「!?」

「はあ？ 何スカ、それ。テンチョーの冗談笑えないツス」

突然のリストトラ宣告に一同は驚き、サンデイはちやかすようにいうが、アギロに答えを帰る気配はなく、冷たく厳しい態度でサンデイにさらに言葉を突きつけていく。

「冗談でも何でもねえ。俺は本気だ。今日限り、お前は天の箱船

のバイトはクビだ」

「えっ」

「忘れたのか？ お前はいつまでもフラフラ、バイトしてていい身分じゃあねえだろ」

「それは………そうツスケど………」

「バイトごっこはもう終わりだ。自分のやるべきコトを思い出せ。

待っているお方だって、いるんだろう？」

アギロの言葉に対しサンデイは戸惑いながらも、反発する。

「そりや、アタシだって……………ネ……………に……………って……………忘れてワケじゃないツスけど……………でも……………！ そんな、いきなり……………！」  
「サンデイー！」

アギロが怒鳴ると、サンデイはその身を震わせ、アギロに向かって叫ぶ。

「……………の……………テンチョーのばかーっ!!!」

「あ、ちょセンパイ!？」

そう叫んだ後、サンデイは箱船の奥へ猛スピードで飛んでいき、やがてガシャンという重い音が響きわたった。

「どこいつちやったのかしら」

「サンデイのやろう、気に入らないことがあると、すぐに自分の部屋に閉じこもりやがる」

「部屋に……………」

「あの部屋の扉は、神様でもなけりやあけることはできねえ。自分から出てくるまで待つしかねえな」

「そうなんですな……………ん……………？」

アギロの言葉に対し、セルフィスはなにかひっかかるものを感じた。

サンデイとの一悶着がありながらも、フィリスはアギロから天の箱船の運転士試験の説明を受けた。ルールとしては、受け取ったスタンプカードに、ある組織のスタンプを全部おしてもらうこと。

「天の箱船を操作しながら人間界にいる、カデスの星のメンバーを探す、かあ」

「そもそも、カデスの星ってなに？」

「あー、実はさ」

運転士試験のために探し出す組織というのは、アギロが中心となり結成された、カデスの星という組織らしい。だがその組織をフィリス達は知らない。そこで、唯一その組織のことを知っているイアンが説明をする。

「ほら、オレってさ……………みんなとはぐれたあとガナン帝国に捕まって、

カデスの牢獄でずっと奴隷として働いてた……つつつたる？ そこで一緒に捕まって、一緒に反乱を起こして脱獄したやつら……そんなに人数はないけど。 そんな彼らと、オレと旦那で、カデスの星という組織を結成したんだよ」

「そんなことをしていたんですね……」

「ということは、イアンもメンバーってこと？」

「まあそうなるな……あと、脱獄に協力したとして、お前達も特別メンバーとしてカウントされているらしいぜ」

「いつのまにー！」

特に会話も経験していないし知らされてもいないのに、いつメンバーに迎え入れられたのだろうか。

「とはいえ、一度カデスの星の結成をはなただけで……今はどこにいるのかは、オレにもわかんねえけどな」

「そうなのか……」

「まずは一つずつ町をあたっていこうぜ。 あいつらのことだ、町の中にいるだろうし」

「わかったよ……というわけで、天の箱船、うごけー！」

そういつてフィリスは天の箱船を操りながら、ひとつずつ町を巡っていた。 まずはウオル口村で一人、続けてベクセリアで一人……と、見つけていく。 サンマロウに立ち寄った際も一人を見つけたが、なぜここにいるのだと、衝撃を隠せなかった。

「はあ……はあ……ようやくスタンプ全部そろったああああ!!!」

「なんか知らないけど、全員分お疲れさん！」

そして、今。

フィリス達は最後の一人である、ウロツキーにたどり着きスタンプを入ることができた。 人を捜したり多くの場所に足を踏み入れたりして、かなり疲れがたまっている。 そして、最後の一人のウロツキーは、まさかのカデスの牢獄の見張り台にいたのだ。

「にしてもあなた、どうしてこんなところにいるの？」

「いやあ。 この牢獄が今、どうなってるのか少し気になってよお……」

ちらり、とウロツキーは墓地をみた。そこはかつて、自分の働いていた場所だ。

「あそこに、この牢獄で死んでいったやつらが……今も眠ってるんだ。オレはずーっと、あそこで墓を作っていた……数えるのがイヤになるくらいにな……」

「……………」

「そのことが、やっぱり気になってよ……。もう誰がいるのか覚えてないけど、せめてクレイにはしてやりたいし、適当でも花でも手向けて吊ってやりたいし……ガナン帝国はもうないから、安心して眠ってくれとかいってやりたいから……時々であっても、ここにきてあいつらに話しかけたいんだ」

「……そう、なのです。ここは、負の遺産でもありますが……だからこそ、残すべきところなのでしょう」

そういつて、セルフイスは自分も吊うといって祈った。そんなセルフイスにたいしウロツキーは、ありがとうなと声をかけた。

そしてウロツキーは、もうすでに人の気配も魔物の気配もないガナン帝国城を見つめ、思ったことを口に出す。

「にしても、俺達をさんざんこきつかったガナン帝国も。あつちゅーまに滅んだよな……」

「……………」

「イアンも、どういう経緯で巻き込まれたのかはわかんねーけど、よくあの過激な労働に耐えたよな！俺達の中じゃダントツに若いのに、こつそり抜け出すのも、俺達を助け出すのも……よくやったぞ！」

「あ、ども……」

当時の重労働ぶりや、兵士に変装して抜け出し仲間とともに帰還して脱獄のために戦うという、まさに無茶としか言えない作戦を思い出して、イアンは苦笑する。結果としてガナン帝国と戦う運命にあつたとは言え、自分は完全に巻き込まれたんだなとフィリスが思っている前で、ウロツキーは陽気に話を続けた。

「今度同窓会でもやりてえな、もちろんこの場所で！」

「それでいいんスカ」

カデスの星のメンバーが集まることは大歓迎ツスけど。 というイアンの話に対し、ウロツキーはいいじゃねえかと豪快に笑いながら、さらにある話を持ち込んできた。

「そうだ、せつかくだしひとつ……おもしろい話をしてやるよ」

「おもしろい話？」

フィリスが首を傾げると、ウロツキーはカデスの牢獄にまつわる話を彼女たちにした。

「……大昔、この牢獄を作ったのは、サンドネラってヤツらしいんだ」

「サンドネラ？」

「オレ、聞いたことがあるんだよ……その名前。 ここの看守をしていたガナンの兵士達がはなしているのを小耳に挟んだんだ。」

『サンドネラ様は、どうして蘇らないのだ。』

『サンドネラ様が蘇れば、ガナン帝国はもつと強くなれるのに。』

……つてさ。 ガナン帝国の関係者だとは思うけど、あそこにはいなかったみたいだぜ」

「……そう話をするつてことは、結構ヤバイのかしら……その、サンドネラって人……」

サンドネラの存在は、初耳だ。 先ほど彼が口に出すまで、その存在の名前すら聞いたことがなかった。 兵士達がそう話をしているということや、牢獄を作らせたことなどから、サンドネラは帝国屈指の危険人物である可能性が高い。 4人がその存在に疑問を抱いている一方、ウロツキーは陽気な態度のまま話をする。

「よくわからねえが、そのサンドネラってののおかげで、オレ達巡り会えたんだな」

「そんなまとめかたでいいのかな」

「サンドネラ、ばんぎーい！ カデスの星ばんぎーい！ カデスの星に栄光あれ！」

そう大声をあげて、サンドネラという存在とカデスの星にたいする参拝の声を上げるウロツキー。 そんな彼に対し、これでいいのかと苦笑いをするフィリス達。 イアンは、フィリスに今すべきことを告

げる。

「あいつは今はそのつとしておこうぜ。今はスタンプを集めた証を、旦那に提出することを優先しよう」

「だな」

なにはともあれ、カデスの星のメンバーのスタンプを全員分集めきったのは事実だ。これをアギロに提出すれば、フィリスは運転士として認められるはずだ。

「じゃあ、あたしらはもういくぜー！」

「ああ、アギロの旦那によろしくな！」

そう、ウロツキーに別れを告げて4人は、天の箱船に戻っていったのだった。

天の箱船に戻ってきたフィリス達をアギロは迎え入れ、フィリスが集めたカデスの星のスタンプが押されたスタンプカードを確認する。

「よし、スタンプ全員分そろってるから合格としよう！ カデスの星に栄光あれ！」

「栄光あれ！」

アギロに認められ、運転士として認められた喜びから、4人は揃ってそう答えた。アギロはフィリスの合格を自分のことのように喜びつつ、彼女にその証を与えようとしていた。

「お前に運転免許をやる……と、言いたいところだが」

「え？」

「その前に、サンデイのヤツをよんできてくれ。いくらなんでもそろそろ、あいつも落ち着いただろうしな。頼んだぜフィリス」

アギロの叱責を受けてすねているサンデイのことを思いだし、フィリスはそういえばそうだったと笑いつつ、彼女を呼びに行くことを決めてうなずく。

「そうだね、あたしも……サンデイが気になるし！ いいよ、いってくる！」

そう声をかけて、フィリスは箱船の奥へと向かう。その奥の方には金色の装飾がほどこされた白い扉がり、鍵がかかっている。これ

が、サンデイの引きこもっている部屋なのか、と思いつつフィリスは扉をノックしてサンデイを呼ぶ。一応、センパイとつけながら。

「サンデューセンパイ」

「なに、フィリス？」

「あのね、実はあたしきー！」

声からして、まだ落ち込んでいるのだろうかと思いつつ、フィリスは自分が運転士試験に合格したことを告げる。これが追い打ちをかけたらしなないだろうかという一抹の不安はあったが、本当のことはいわなければならぬから。

「……えっ!? フィリス、運転士の試験……合格できたんだ！ すっ

ごいじゃん！ おめでと!! あんたまじすぎだつてー！」

「へへ、ありがとな」

そういわれて、フィリスはまず安心した。サンデイは落ち込んだりフィリスを妬んだりせず、ただフィリスが一つのことをやり遂げたことを、まるで自分のことのように喜び、素直に賞賛してくれているからだ。そして、サンデイは扉越しにつぶやく。

「……………そっか…………」

「ん？」

「フィリスががんばってるのに、センパイのアタシが、いつまでもウジウジしてらんないね」

そしてサンデイは、ずっと胸の内に秘めていた思いを打ち明けていく。

「あのね、フィリス……アタシずっと前からかなえたい夢があったんだ。でも、天の箱船のバイトは楽しいし、あんたと冒険するのかもしれないし……だから、後回しにしていたの」

「……………」

「テンチョーが怒るの、無理ないよね。こんなにフィリスだつて………がんばってるんだもんね！」

その台詞とともに扉が大きく開き、明るい表情のサンデイが姿を現した。

「決めた！ アタシも本気出すよ！ アタシ……アタシも！ ……ネ



「……………に……………」

「それ、なんなんだよ」

以前からサンデイがしきりに口に出す言葉にフィリスは疑問を抱き、今回もその意味を問いかけた。だがサンデイは真実を口にせず、首を横に振る。

「ううん、今はまだダメ。ちゃんとやり遂げてから言うから!」

「……………まあ、元気になったなら今はそれでいいよ」

だがフィリスはムリにそれを問いつめたりはしない。今はサンデイが元気を取り戻してなにかを決心したことの方が大事だから。2人でアギロの元へ帰ろうと歩き出す。サンデイはそれにたいしうなずきつつ、フィリスにあることを告げる。

「あと、もうセンパイと呼ばなくていいよ」

「なんで?」

「もう立場逆転してるんだもん、あんたの方が偉いジャン! それに……………センパイとかコウハイとかの上下関係みたいなもの、アタシらにはあわないでしょ? だから、いつも通りによんでねっ!」

「そっか。なら、そうしようか!」

たった一日の先輩後輩関係がおわり、サンデイはアギロの前できちりと頭を下げて自分の甘さを反省し謝罪をする。

「しよーじき、アタシが悪かったツス。もう、逃げないっす」

「なあに、わかりやあいんだ。頑張れよサンデイ!」

「チョー楽勝だから、見てて!」

そのサンデイの潔さやなにかの決意を受け取ったアギロは、満面の笑顔でサンデイを励まし、それにたいしサンデイも強気に笑う。フィリス達は、そんな2人の対話を見守っていたのだった。

## 21 「妖精の伝」

「フィリスも無事に天の箱船の運転士になれたし、アギロさんとサンデイも仲直りできたし、今日の依頼も快調ね！」

「ああー！」

フィリスが無事に天の箱船の運転士としてアギロに認められ、その証として運転免許ももらった。それだけでなく、サンデイも何かを決心したようであり、フィリス達に負けないように自らの試練を乗り越えるといった。そんな出来事を経験した4人は、今日地上で様々な依頼を次々に解決させていった。

「じゃここからは、天の箱船で移動しよっか」

「そうね」

次の依頼を探すため、場所を移そうと天の箱船を呼ぶ。そうして天の箱船に乗り込み、いざ運転しようとした、その時だった。

「うわああああん!!」

「ほぎゃあ!!」

乗り込んだ瞬間、なにかが猛スピードでフィリスにつっこんできた。それにびつくりしたフィリスは後ろに転んでしまった。

「な、なんだよ!?!」

「ヒック、ヒックツ……」

「つて、サンデイ!? そんなに泣いて、どしちゃったの!?!」

あわてて上体を起こし、自分につっこんできたものの正体を確認めるフィリス。するとそれは、涙で顔全体をぬらしたサンデイであり、なぜ彼女がこんなになるほどに泣いているのか、この状況についていけないフィリスは戸惑いつつサンデイに涙の理由を問いかける。

「どうしよ、どうしよー!! フィリス、たすけてー!!」

「だから、なにがあっただよ!?!」

「……………アタシ……………アタシ……………」

サンデイはいいにくそうにしながらも、自分の身になにが起きたのかを打ち明ける。それは、衝撃的な内容。

「……人を、殺しちゃった……」

「……え……」

「……うそ……」

「……まさか……」

「……そんな……」

サンデイの衝撃的な告白に、4人は目を丸くした。サンデイが人の命を奪うコトなどありえないが、なにがあったのだろうか。サンデイは今も泣きながらうろたえている。

「ど、どうしよう、どうしよう!? アタシそんなつもりなかったの! でも、あの子……!」

「お、落ち着けサンデイ……」

「ファイリス、ファイリス! おねがい、アタシをたすけてえ! サンデイ容疑者は、イヤアア!」

サンデイは今は、冷静さを欠いている状態だ。サンデイを落ち着かせるには、彼女の無実を晴らすことを約束するしかない。ファイリスは、サンデイを助けることを約束した。

「わ、わかったわかった! あんたの容疑を晴らしてあげるから……落ち着いてくれ!」

「ファイリス……」

「なにがあつたかは知らないけど、サンデイはあたしの大事な仲間だもんな! だから、必ず助けるぜ!」

そうファイリスはサンデイに笑いかけ、それにイアン達も、協力すると告げた。それをきいたサンデイは何度も頷きながら、お礼を言う。

「ぐす、ぐすつ……ファイリス……あり、がとう……ヒック……ぜったい、アタシを、たすけてね! ゼツタイだからねっ!」

「ああ、もちろんだ!」

「それで、なにがあつたの?」

クルーヤが事情を尋ねてみると、サンデイは頭を抱えながら今日自分になにをしたのか……もとい、どこにいつていたのかを証言し始める。

「アタシ、悪気はなかったの……！　ただ用事があつてカラコタ橋に立ち寄っただけなんだよ……！　なのになんで死んじやうの!?　どうしてアタシがこんな目にあうのおお……!?!」

「……うん！　カラコタ橋、だな！」

「だったら、カラコタ橋に行つてみようぜ！」

ややヒステリックになりかけているサンデイを横目に、てがかりを求めてカラコタ橋へ向かう一同だった。

カラコタ橋に到着したファイリス達は、サンデイの案内の元、彼女が殺しかけている人物を探す。

「たぶん、この宿屋のあたりにすんでる……」

「ここだな」

とりあえず、サンデイのいうとおり宿屋に入る。するとそこには、ベッドに横たわっている少女とその母親らしき女性……そして、予想外の人物が一人。

「デュリオ!?!」

「お前達は……!?!」

それは、このカラコタ橋を根城にしている盗賊団の首領・デュリオだった。ここにいる理由に心当たりがないファイリスは、彼がなぜここにいるのかをたずねる。

「どうして、ここに?」

「この人に頼まれたんだよ、このおじよーちゃんを救ってくれてな」「盗賊団の首領であれば、この子を助けるお薬を知ってるんじゃないかと思つて……」

「ううん……」

ベッドに横たわる少女は、苦しそうな声を漏らした。顔色もよくないことからひどく衰弱しているのが伝わってくる。そのとき、サンデイがあらわれて、安堵したような声を上げた。

「生きてた！　よかつたあ……この子、まだ生きてたよっ!」

「え、この子なのですか?」

この少女こそが、サンデイが殺してしまったと思ひこんでいた人物

らしい。セルフィスは失礼しますとだけ告げて、少女の顔をのぞき込みながらその容態を確かめる。

「これは……」

「どうしたの？」

「……非常に衰弱していますね……この子は病に冒されていると先ほどおっしゃってましたが、弱気になってしまっていることが原因で、病を進行させてしまっているようです。この状態から回復するには、非常に強力な薬が必要かと思われまます。それで病を取り払えば、おのずとこの子も病の恐怖から解放され、元気になるでしょう」

セルフィスの解説をきいたデュリオは、顎に手を当てて考え込む。「実のところオレも薬には詳しくねえし、そんなものがあるなんて聞いたことがねえ。これから情報を集めて探し出すのもアリかもしれねえが……それで果たして、間に合うかどうかだな」

「そんな……」

デュリオが動いても、薬が手に入るのが先か、少女が死ぬのが先か。

もう賭のような状況のようだ。

「ねえ、フィリス……ちよつと手伝ってほしいんだけど……」

「ん？」

「この子がこうなっちゃったのは、アタシの責任であることには変わらないから……アタシが助けなくちゃいけないの。そのためにも、アタシが知ってる中でも最強の、チョーすっごい薬が必要なんだ……」

「……もしか、最終決戦に使われたあの薬のことだろうか。サンデイ曰く、その薬はどんな病気も治せるし衰弱状態からも回復できるものだろうだ。彼女はそれを、作れるらしい。」

「だけど、それには材料が必要なの。だから、集めるのに協力してっ！」

「……わかった、やるよ」

フィリスはサンデイにたいし頷きながらそう告げると、その話にこっそり耳を傾けていたイアンたちと目を合わせて頷き、自分たちがその少女を助けると申し出た。

「なあ……その子を助ける役目、あたしらに託してくれないか？」

それをきいた母親とデュリオは驚き、デュリオは彼女たちに問いかける。

「なんだ、なにか方法があるのか？」

「ああ。あたしの知り合いに、最高の特効薬を作れる人がいるんだ。

その人のところに材料を持って行けば、すぐに作れるよ！」

「マジか……」

「どうか、お願いします……！ この子を助けてください！」

「まかせてください！」

母親は藁にもすがる思いで、ファイリスたちにその薬のことを懇願する。それにたいしファイリスたちは堂々と答え、すぐにでも薬を持ってくると告げて立ち去っていった。

「……あいつら、ナニモンだ……？」

そんなファイリスたちを、デュリオはいぶかしげな目で睨みながら、そうつぶやいたのだった。

サンデイが作れるという、どんな病気でも治してどんな疲弊からも回復できるという、チョースツゴイクすり。その材料はエルフの飲み薬、特やくそう、超ばんのうぐすり……そして、世界樹の若葉と言うものらしい。

「この先の島にある、世界樹があるから……そこに若葉が落ちているみたいね」

ほかの3つは元々持っていたのでなんとなかったが、世界樹の若葉というアイテムは聞いたこともなければ手元にもない。だがそこでサンデイは、この世界で手にはいるものであると教えてくれた。

それを聞いた4人は、船を動かし世界樹のある島へと向かう。

「これが……世界、樹？」

「青白く光ってる……不思議ね……」

そして、その島にたどりついた。そこはずっと雨が降っている不思議な島であり、その中央には青白く光る大樹が生えている。今までも女神の力が宿った大樹を見かけたことはあったが、それとは少し

違う気がした。

「天使界にあったのとは違うな……」

そこでフィリスは、かつて天使界にあった世界樹のことを思いだしそれについて口に出した、次の瞬間。

『……………もうひとりのわたしに、世界樹の若葉をとってこいと頼まれたのですね…………』

「な…………!? なんだ、この声…………!?」

『確かに、カラコタ橋のあの少女は、まだわたし達の仲間になるべきではないようです……………いいでしょう、世界樹の若葉を持って行きなさい…………』

突然フィリスの脳内に声が聞こえてきたと思いきや、世界樹の葉ががさがさと揺れ、そこから光がひとつ舞い落ちてフィリスの手の中に収まった。彼女の手の中で一枚の葉っぱに変わった。

「これが、世界樹の若葉…………」

『……………フィリス…………サンデイを…………。 もうひとりのわたしのことを、頼みましたよ……………』

それをきいてフィリスは驚き、どういふことなのかと問いかける。「待ってくれ、あんたは、いったい……………!」

だが、その声に世界樹は答えなかった。そのため、世界樹の正体やサンデイとの関係も、フィリスは知ることができなかった。そんな、呆然とするフィリスにたいし、さらに追い打ちがかかる。

「フィリス? どうしたの?」

「さつきから、どこにむかってしゃべっているんですか?」

「…………え…………」

仲間達には、フィリスがずっと独り言を言っているように見えたようだ。天使界の世界樹の加護を受けているはずの彼らにも聞こえていない、あの声。こんな現象は久しぶりで、フィリスはさらに戸惑ってしまう。

「みんなには…………聞こえなかったのか…………あの声は、あたしにしか聞こえなかったのか…………」

「……………フィリス……………」

自分にしか聞こえないあの世界樹らしきものの声、それはなんなのか……フィリスは疑問を募らせる。そんなフィリスの様子を見たイアンは、彼女の頭の手をおいて、彼女にいますべきことだけを伝える。

「フィリス、気になることがあるのはわかる……けど、今は」

「……………わかってる、今は……あの女の子を助けることが最優先だ。さ、サンデイのところに戻って、薬を作ってもらおうぞ」

様々な疑問はあるし、話さなければならぬし耳を傾けなければならぬ。彼らは真剣に相談しあう必要があるが、今は優先するべきコトがあるので、そちらに意識を向けた。迷ったりしている間に、少女の命はすこしずつ削られていくのだから。

「うん！ 超ばんのう薬、特やくそう、エルフのみぐすり……そして、世界樹の若葉！ 全部揃ったね！」

天の箱船に戻ってきたとき、サンデイは材料がすべて揃ったことを確認し、サンデイは早速調査した。そしてすぐさまその薬は完成した。一見ただ混ぜているだけにみえたが、しっかりと完成したらしい。

「でつきたー！ サンデイ特製の、チョースツゴイ薬だよっ！」  
「やったな！」

「さあ、これを早くあの子のところに持って行ってあげて！」  
「うん！」

フィリス達はその薬をもって、急いでカラコタ橋へ向かった。

「お前達！」

「デュリオ！ おまたせ！」

カラコタ橋に戻ってきたフィリス達は、デュリオと簡単に言葉を交わし、薬を持ってきたと語る。そして、すぐに病気の少女のところへ向かうと、少女は最初に見たときよりずっと弱っていた。

「はあ……はあ……めが、かすんで、きた……………」

「ああ……どうか、どうか……………この子の命を……………お救いください……………！」



そう必死に懇願する母に対し頷くと、フィリスは少女に薬を差し出した。

「なあに、このクスリ……う？」

「これで大丈夫だよ！ さ、がんばって飲んで！」

「うん……」

少女は少しためらったが、これでなんとかなるのだろうか、その薬に口を付け一気に飲む。薬と言えば苦い印象なのだが、この薬は違うのだろうか。少女は普通に飲み干した。薬のビンが、からっぽになるくらいに。

「！」

「どうだ？」

すると、みるみるうちに少女の血色はよくなっていき、起きあがって動いて見せた。彼女は今、満面の笑顔を浮かべている。

「お母さん！ あたし、治った！ ほら、起きても平気なの！ とんでもはねても、ぜんぜん元気だよっ!!」

「……ああ……たすかったのね……よかった……よかった……！ キセキ、だわ！」

母親は少女に抱きつき、涙を流しながら娘の回復を喜んだ。一応セルフィスにみてもらうと、彼女は気持ちも回復していて病の気配がないと診断された。それで無事に少女を救えたとフィリス達は喜ぶ横で、デュリオが目丸くしていた。

「マジで回復させちゃった……おまえ、あの薬どうやって……」

「へへっ」

デュリオのその言葉に対しては、フィリスはただ笑った。一方、母娘は自分たちを救ってくれたフィリス達に感謝の言葉をつける。

「あなた方のくださった、あの薬が効いたのですね……旅の方、ありがとうございます……」

「ありがとう——」

「こちらこそ、間に合って何よりでした」

「もう少しでこの子は、妖精になってしまふところでした……」

「いやいや……って、え？」

そのとき、母親からでた言葉に対し、4人はきよとんとした。妖精になってしまおうとはどういう意味だ、と理解が追いつかないのだ。「どういふこと?」

「ああ、お前等しらねーのか。このカラコタ橋に何百年も昔から伝わる話だよ。若くして死んだ娘は、妖精になるっていう話だ」  
「……」

「ほんとだよ、あたし見たもん! 病気で寝てるとき、ようせいさんがむかえにきたの! ピンクの羽をはやして、ちよつと色黒で、お花のかみかぎりをつけた、かわいいようせいさんを見たもん!」

確実にサンデイのことじゃん。

フィリス達は一斉にそう思ったが、口には出さなかった。

そのとき母親は、少女の病とその侵攻の原因について語る。

「この子の病気は元々、大したことはなかったんですが……妖精を見てしまったことで、生きる気力を失って……」

「まあ、事実かどうかはおいといて……偶然にも妖精を見ちまったこの子は、自分にお迎えがきたとおもいこんで元気をなくし、体調を悪くしちゃった……ということだな。無事に助かってよかったぜ」

「そ、そうだな! これマジの死者がでなかったのが一番だぜ!」

とりあえず、少女を死の淵まで追いやったのは、この子の気の持ちようの問題であり、サンデイが殺したわけではないのだ。つまり、サンデイは自分が少女を死に追いやったと、思いこんでいただけなのだ。

すべての真相を知った4人は苦笑いするが、そんな彼らを訝しげににらみつけつつ、デュリオは彼女達に問いかける。

「にしても……オレですら知らない情報を持ってたり、ほいほいとすごいものをよこしたり……。お前等、何者だ?」

「……」

そのデュリオにたいし、4人は黙りこんでしまうが、フィリスが口を開いた。

「ただの、旅人だよ。それ以上の情報は、ここではいらないだろう?」  
「……そうかよ……」

そうさっぱりした態度で返され、デュリオはこれ以上たずねても無駄だと思い、そこで話は切り上げられた。母娘からは改めてフィリス達に礼を言ったところで、フィリス達はカラコタ橋をあとにした。「やはり、目ざといですね……彼は……」

「デュリオに気付かれなかったのは幸いだけど、なんかとんでもない話を聞いちゃったわね」

「ああ」

「でも、サンデイはあくまでも……妖精であることは否定してるんだよなあ」

「あれで妖精じゃないなら、あいつって何者なんだよ?」

「……わかんない」

ますます謎は深まったが、フィリスが聞いた声のことを、まずは確かめねばと思い、イアンはそのことを問いかける。

「そうだ、お前から謎の声の話を聞かなきゃな」

「ああ……話すよ」

そうしてフィリスは仲間達に、世界樹からの声のことを話した。

フィリスの言葉を疑う気はないが、世界樹の正体、そしてサンデイとの関係がわからないまま、どうすることもできないのだった。

「ごつちも、地道に情報集めてみようか」

「ええ」

「はい」

「うん」

謎は残ったが、とりあえずこうして、サンデイの容疑は無事にはれたのであった。

## 22 「ある女の謎」

カラコタ橋でおきたサンデイ殺人未遂事件は、サンデイの勘違いと被害者になりかけ少女の命が救われたことで解決した。

「いやあ焦った焦った！ てつきりアタシがあの子を死に至らしめようとしてたのかと……！」

「容疑……というか勘違いで済んでよかったわね」

「にしても、あの動揺っぷりはすごかったなあんだ」

「とーぜんでしょー！」

フィリスの言葉に対しサンデイは、ハッキリと自分は他人の命を奪うことを好まないことを告げる。

「一応、無関係の人と女子供の命を奪ったり苦しめたりするのって、アタシのポリシーに反することだしっ！ そんなことぜーったい、するもんですか！」

「そっか、それを聞いて安心したぜ」

そしてそれを聞いたフィリスも、どこか安堵したような表情になる。きつと、サンデイがどんな人物なのかをしっかりと理解しているからこそ、今彼女のポリシーを聞いて安心したのだろう。そこでふとフィリスは、サンデイがなぜ一人でカラコタ橋まで出かけたのが気になりそれについて問いかける。

「そういや、サンデイはなんで一人であんなところにいたんだ？」

「ああ、それは………大事な………用事があったから」

「もしかして、たびたび言おうとしたこと？」

「そうそう！ ……ネ………に………！」

言い掛けて、サンデイはあわてて言葉を止める。

「ま、まあ関係があるとだけいつとくから！ 今日はこちらまで！」

「そうなの？」

「そうなの！ えっと、このお礼はまた今度あげるから！ とにかく女の子を助けてくれて、アタシの容疑を晴らしてくれて……ありがとう！」

満面の笑顔とともにちゃんと礼の言葉をつげたサンデイに一同は笑いかえすと、丁度天の箱船がセントシユタイン城の近くを通りかかっていたことに気づき、久しぶりにリツカの宿屋で休もうという話になってそこに降りる。

「リツカ、ひつきしぶりー！」

「あ、ファイリス！」

宿屋にはいったとき、ファイリス達に気付いたリツカが笑顔で彼女たちを迎えてくれた。

「ちようどよかった！ セルフイスさん、いる？」

「僕に何か御用ですか？」

「うん、お客様がきてるの」

そのときリツカは、セルフイスに用があるという人物の話をはじめた。その人は待合室にいい、4人をそこに連れて行くと、その部屋には予想外の人物がいた。

「久しぶりだな、セルフイス」

「義兄上！」

セルフイスを待っていたのは、考古学者のルーフィンだった。まさかの義理の兄がそこにいたことにたいしセルフイスは驚きつつ、彼がここまで足を運んできた理由をたずねる。

「どうしたのですか、こんなところまで……」

「いえ、実は知り合いの学者が自分の学説のために、広い世界を旅するものを求めていまして……そこであなた達の顔が思い浮かんだんですよ」

「そうでしたか」

どうやらその知り合いの学者の依頼を、ファイリス達にしようとしていたのだろう。話を聞いたセルフイスはうなずき、ファイリスは率直に思ったことを口に出す。

「知り合いいたんだ、ルーフィンさん」

「一言よけいだけ、ファイリス……」

そんなやりとりをしつつ、ルーフィンは彼女たちに依頼があるという学者を紹介した。

「こちらが、あなた達に依頼があるという学者の……」

「エルクともうします。あなた達の話は彼から聞いています。かの疫病をしずめ、そしてベクセリアの謎の解明に一躍かったと……」

「そういう面であたしたら、有名になってたんだな」

「そこで、わたしはあなた達に是非、協力をお願いしたいと思ったのです！」

エルクはフィリス達の活躍をルーフィンから聞いたことで協力を申し出ようとしていたことを打ち明ける。フィリスはとりあえず、まずは依頼の内容を聞くとつげ、リツカに出してもらったお茶を片手に話を聞く。

「わたしが研究しているのは、雨の島。グビアナ大陸の東の海にある、一年中雨の降る小さな島です。その雨の島には、とても美しいまぼろしの樹が現れるですよ！」

「まぼろしの樹……あ、あれのことか？」

「ご存じだったんですか」  
「まあな」

その島というのは、この間サンデイの頼みを聞いてクスリの材料をとりに行ったときに訪れた島だ。彼が調べたいのは、その樹なのだろう。

「私の仮説によれば、まぼろしの樹が現れる場所にはかつて、本当に樹が生えていた。しかし、なんらかの理由で樹は失われ……樹の幽霊が残ったのです」

「ほお……それで？」

「そこで、並大抵ではない旅人であるというあなた達に依頼です！」

この仮説を裏付けする資料を探してきていただきたいのです、お願いします！

「僕からもお願いしますよ」

そうお願いをしてきた2人に対し、フィリスはこう答えたのだ。た。

「とりあえず、できる限りのことはするよ」

そうして、雨の島にある樹の謎を追求することになったフィリス達は、船をあやつりその島へ向かうのだった。

「あの学者さんも、ずいぶんと自信満々だったわよね」  
「なー」

そんな他愛のない話をしている間に、船を操縦していたイアンが、島に到着したと仲間達に告げる。そうして雨の島に上陸した一同は、そこにある青白い光を放つ樹をみる。

「この島ですね……」  
「うん、樹もちゃんとあるね」

そこでイアンは、フィリスがあつた樹から声を聞いたという話を思いだし、今も聞こえているのかと確認をとる。

「なあフィリス。お前、この樹から声がするっていつてたよな？  
今も聞こえるか？」

「……いや、なにも聞こえない……。この前のは、状況が状況だったからかもしれないけど……」

前は世界樹の若葉が必要だったために、声が聞こえたのかもしれない。だが今回はただ調べ物のためであり火急の用事というわけでもない。特別な条件というのもない。だから、フィリスは世界樹から声が聞こえるわけでもなければなにかを感じるわけでもない。

「あら？」  
「どうしました、クルーヤさん？」

「足下に、なにかあるわね……ボロボロの、石碑……かしら？」

そんなとき、クルーヤは樹の根本に当たる部分にある石碑に気づき、そこに文章が刻まれていることにも気付いて、それを読み上げる。  
「名も無き女のたましいよ、やすらかに眠りたまえ」

クルーヤはそこに刻まれた文章をそのまま読み上げると、直後に沈黙が訪れた。

「なんだそりゃ」

「もしかしてこれ、石碑じゃなくて、墓石なのか……？」

全員がそれにたいし疑問を抱いていた、そのときだった。

「それは……名も無き女の墓……頑なに己の名を告げず、そのまま

死んでいったあわれな女の墓なのです……」

「だれだっ!？」

突如自分達以外の声が聞こえてきたのでそちらをむくと、そこには正装をした神父がいた。その顔に見覚えのあるクルーヤは、もしかしてとおもい彼に問いかける。

「あなたは……教会の神父様?」

「その声は、クルーヤさんですね」

「知ってる人?」

「ええ……顔を何度も合わせたことがあるから」

どうやら、この神父はクルーヤの知人らしい。その理由に、神父からの自己紹介で皆が納得する。

「私はグビアナの教会に仕える神父、オルヌルフという者。グビアナの神父は代々、この島に眠る名も無き女のため、祈りをささげにくるのですよ」

「グビアナの……そういうことだったのか」

「神父様、私達はこの場所について調べているところなのです。なにか知っていたら教えていただけませんか」

「……そうだったのですね、よいでしょう」

クルーヤが事情を説明すると、オルヌルフは話を始めた。その墓石のしたで眠る人物についての話を。

「それはおよそ、300年ほど前のこと……」

「300年前……!？」

「グビアナ砂漠の北に、傷だらけの立派な身なりの女が流れ着きました。」

女は意識を取り戻してから死ぬときまで、呪いの言葉を吐き続けていたそうです。

自分を追放したおろかなる大地は草も木も生えぬ不毛の大地となれ。戦いと憎しみがかの帝国を包め。

自分に刃を向けた者共よ、地の果てまでも追いつめ、何万回でも滅ぼしてやろう。

……と」



「なにそれこわい」

「すべてを呪いながら女は死に、古来より神聖なる地である、この雨の島に弔われました。そうしてこのグビアナの教会の神父は、代々雨の島で祈りをささげています……。女の魂が……。救われるように……。と……」

そうして、この墓の謎はとけたが、その女性のことも樹のことも、謎がのこったままだ。おまけに、気になるワードもいくつかある。それを解決しなければならぬ気がしたファイリス達に、オルヌルフはさらに情報を提供する。

「もし今後も手がかりを追うのであれば、オングリのガケという場所をおとずれてみてください」

「オングリのガケ？」

「当時の神父の話によれば、女は病の床で、オングリのガケのことを口にし……。うなされていたそうです」

オルヌルフはそのオングリのガケという場所がある方を見つめ、話を続ける。

「あそこはかつて流刑地でしたから、なにか関係があるのかもしれないね」

「そうですか……。ありがとうございます、神父様」

「どうか、お気をつけて……」

そう言葉を交わし、神父はそこに祈りをしばし捧げた後でグビアナに帰って行った。

「ファイリス」

「いつてみるつきやねえな、いくぞ」

そしてファイリス達は、そのオングリのガケという場所を目指すことを、決めたのだった。

船を動かすこと、約一時間ほど。ファイリス達は地図を頼りにしながらも無事にオングリのガケと呼ばれる場所にたどり着いた。

「ここが、オングリのガケ……」

「……なんか不気味ね……」

「流石は過去に、流刑地と呼ばれただけのことはあるぜ」

大地は濁った色をしており、木々も骨しかないような形をしており、どこか重苦しい空気が、この地域を包んでいるかのようだった。そこでイアンは、ここに立ち並ぶ石碑に気付く。

「こいつは……さしずめ……ここで息絶えた人々の墓石っていうところか？」

「ちよ、怖いこといわないでよ……」

「そうとしか、言いようないだろ」

そう話をしていく中で墓石を調べていたフィリスは、そこに文字が刻まれていることに気付いた。自分にはわからない文字だったので、読み上げることはできなかったが。

「なあ、これなんか長い文字みたいのが書かれてるんだけどさ。昔の文字みたいで読めないんだ」

「これは……古代文字、ですね……しかも、埋葬された人々の名前ではなく、ひとつの文章になっているようです」

「墓石に名前がないっつーことは……あくまで死体は一括りにまとめられて埋められて、個人情報はナシってか。罪人に名前はいらないうってところかもな……」

そうシビアなことを語るイアンのよこで、セルフィスはこの文字は自分が読めると告げつつ、読みあげることにした。

「解読しますね」

「お願い」

セルフィスはふう……と呼吸を整えると、墓石に刻まれた古代文字の文章を読み上げていく。

「ゆるすまじ サンドネラ。 ガナン帝国をほろびにみちびくは、皇帝の妃たる かの悪女よ。 この流刑の地オンゴリで、われらはおまえを憎みつつける。 命 つきはてるとも……」

「……ガナン……サンドネラ……」

それは、以前にカデスの牢獄で聞いた名前だった。カデスの牢獄を作り出した、なにか強力な存在。この文章から、サンドネラというのはガナン王妃ということがわかる。

「別の墓石へいきましよう」

「ああ」

文章はそこでとぎれていたが、別の墓石にも文章が刻まれていることに気付いたので彼らは移動し、引き続きセルフィスが読み上げている。

「サンドネラ 神をもおそれぬ悪女よ。 ガナンの歴史をけがす 忌まわしき妃よ。 東の果てにある島の聖なる大樹 空にもとどく偉大なる大樹は、サンドネラの気まぐれで焼き払われた。 神にさからう悪業をとめるため、皇帝にうったえた私は、流刑の地オングリで、息絶えようとしている。 のろわれよ サンドネラ。 ほろびよ 愚者の帝国ガナン。 もろともほろびるがよい」

そして、雨の島の世界樹の謎もとけた。 そしてこのオングリのガケに連れて行かれた罪人はみな、サンドネラもとい帝国を憎んでいることもわかった。

「話に出てた大樹、あの樹のことだな……次も頼むぜ」  
「はい」

まだまだ続く文章解説。 だがこころなしか、墓石の文章を読めば読むほど、空気が悪く、そして重くなってきている気がする。

「ほろびよ サンドネラ。 ガナン帝国をほろびの道へといざなう 邪悪なる女よ。 サンドネラは城の西にカデスろうごくを作らせ、おのれにさからう者を閉じこめている。 このままでは帝国はほろび。 そう決意し私はサンドネラを亡き者とすべく、斬りかかった。 すぐさま私はとらえられたが、サンドネラは床にたおれながらも、ぞつとするような微笑をうかべていた」

それでもセルフィスは、ほかのものなど目にはいつていないようであり、文章をただ淡々と読み上げていった。 徐々に、目を虚ろにさせ声を低く

「サンドネラがそのまま死んだのか、それとも息を吹き返したのか、流刑の地にいる私にはわからない。 どちらにせよ……もはやガナン帝国はほろびの道をたどるだろう」

「え、ちよ、セルフィスさん？」

「あの声 サンドネラの声が耳にこびりついてはなれない。わが剣に倒れたときの あの言葉が……」

思わずフィリスがさんづけて呼んでしまったが、セルフィスは気にもとめず文章を読み続ける。

「悪女サンドネラ、ガナサダイ皇帝がサンデイと呼び愛したかの妃は最後に こう 宣言したのだ」

次の瞬間、セルフィスの声はいつきに感情をなくし声を低くさせ、一言を告げた。

「私は かならず 生まれ変わる」

それを聞いた瞬間、フィリス達は一気に寒気を感じる。

「ゆるすまじ サンドネラ。呪われよ サンドネラ。ほろびよ サンドネラ」

そうセルフィスが文章を最後まで読み上げた次の瞬間だった。

セルフィスは糸が切れたかのように、その場に崩れ落ちた。

「……………」

「セルフィス!？」

3人はすぐにセルフィスにかけより、体を起こす。体はぐったり

としていて意識はなく、顔色も悪い。目も、かたく閉じられていた。

「ひでえ顔色だ……ルーラでセントシユタインへつれていこうぜ!」

「そうだな……よし、すぐにいくぞ!」

イアンはセルフィスを抱えフィリスはルーラを唱える体制に入り、クルーヤは墓石に文章がないことに気付く。

「……墓石に、なにも書かれてない……!?!」

「クルーヤ、なにやってんだ急ぐぞ!」

「あ、うん!」

だがそれを気にとめる余裕はなく、クルーヤはフィリス達のところへ向かい、ルーラでセントシユタインに帰って行つたのだった。

「セルフィスさんだけど、シスター様のお話によれば、今晚休めばだいぶよくなると思うわ」

「そっか、よかったぜ……リツカも部屋をありがとな」

セントシユタインについたフィリス達はまず、セルフィスを休ませ

るために宿屋へ向かった。気を失ったセルフィスをつれてきたことにリツカ達は驚いたものの、事情を知るとリツカは部屋を用意しそこにセルフィスを休ませ、そして彼の容態を知ったシスターがきて彼を清めるのだった。彼女の話によればセルフィスは、よからぬものに取り付かれてしまったことで弱ってしまったらしい。そのよからぬものに心当たりのあるフィリス達は、なにもいえなくなった。「なるほど、そういうことだったのですね……オングリのガケにそのような文章が刻まれていたとは……これは詳しく調べねば！ ご協力感謝します！」

「あ、ども……」

そして、エルクは雨の島の樹についての真相を、セルフィスの読み上げた文章をすべて記憶していたイアンからきき、メモをとったところでさらに調べるといつてうごきだした。お礼とセルフィスへの見舞いの品として、超ばんのうぐすりとせかいじゆのしずくを、そこに残して。

「……僕はもう少しとどまることにします」

「いいんですか？」

「なに、数日あけることは伝えてありますし大丈夫でしょう。それに……義弟を放っておいたら、エリザに叱られますしね」

そういつつ、ルーフィンは見舞いのためにセルフィスの休んでいる部屋へ向かう。フィリス達もリツカが用意してくれた部屋で休むことになり、そこに向かい部屋にはいったところで話し合う。

「……さて、と……なんかとんでもないことになったな……」

「……あの墓石の文章……。まさかあの樹もまた、ガナンの非業の被害者だったなんてな」

「ホント、ただだけ私達に関わってきて、ただだけとんでもない国だったのよ……」

あの帝国の名前は、きっと自分達が帝国と関わり戦ったという事実が存在している限り、ずっと自分達に因果としてまとわりつくものなのだろうか。イアンは頭を抱えており、クルーヤはサンドネラに関するある情報を、ある人物と結びつけようとしていた。

「おまけに……あだ名のようなものとはいえ、サンデイの名前まで……まさか、私達のしるサンデイって……その、サンドネラの……？」

「んなん、納得できるかよっ！」

そのクルーヤの仮説を、ファイリスは真つ向から否定した。信じたくないから。

「あたしはイヤだぜ。サンデイがまさか、あんな怖いヤツの生まれ変わりだなんて……どうあっても信じたくねえよ……！」

「……ファイリス……」

ファイリスはあの石碑の中に入っていた名前に対し、動揺を隠せないようだ。そんなファイリスに不安を覚えつつ、イアンは彼女に声をかける。

「……ファイリスにもクルーヤにも、いろいろ思うこともあると思う。

オレも同じだ。　だけど今はセルフイスが無事に起きあがるのを、待とうぜ？　小難しい話は、そのあとだ」

「……うん……」

「……ああ……」

自分達はどうしていくのが、正解なのか。　様々な疑問を残しつつ彼らは、いつの間にか降っていた雨を、窓越しに見つめたのだった。

## 23 「世界の命運をかけた戦い」

学者の依頼により、まぼろしの樹の謎を解明した一方でまた新しい謎を抱えることになったファイリス一行。その翌日、セントシユタインをあとにしたファイリス達は、次の依頼をもとめて旅立とうとしていた。

「ちゃんと使っていないと、運転手の腕がなまっちゃう」

という理由で、ファイリスはこのところ、ほかの場所への移動はルーラよりも天の箱船を利用している。そのときイアンはふと、自分の隣にいたセルフェイスのことが気になり、彼に問いかける。

「そういや、セルフェイス。お前もう体調は大丈夫なのか？」

「ええ、一晩休んだらすっきり」

彼らがリツカの宿屋で一晩やすむことになった理由は、このセルフェイスにある。セルフェイスは謎を解くために難解な古代文字を解読していたのだが、徐々に顔色や空気が狂いだしていき、ついには倒れてしまったのである。すぐに連れて帰り教会の人達に手当してもらったことで、セルフェイスはこうして元気を取り戻したのである。

「ただ……」

「ただ？」

「僕……オンゴリの崖に到着してから気絶するまでの記憶がないんです」

それを聞いたとき、ファイリスとイアンとクルーヤは硬直した。あのかのときのセルフェイスからは生気がまるで感じられなかったのだが、やはりあれはセルフェイスであってセルフェイスでなかったのだろうと直感で感じる。一応あのかを感じたシスターが、お清めをセルフェイスにしてくれたのだが……どうやらそれは正解だったようだ。

「まあ、あそこはワケありだから……ね？」

「……………色々お察しします……………」

その一言でなにかを察したセルフェイスは、それだけを返した。と

りあえず全員の体調は万全と言うことで、まずは倉庫のチェックを行おうと、一同は車両の奥へと向かう。

「ヤバイよ〜マジでヤバイよ〜!」

「サンディ?」

そんなとき、サンディがときたま引きこもっているという扉の前で、サンディがうなり声をあげているのに気づく

「このままじゃ世界が滅びちゃう……あいつが、外に出たら……やばい!」

「世界が滅ぶだつて!」

その一言にフィリスが大きく反応し、それによりサンディもまた、フィリス達がそこにいたことに気付いてフィリス達に飛びかかる。

「あ、フィリス! みんな! ちようどいいトコにきたじゃん!」

「どうなさつたんですか?」

「今、サイツコーにヤバイの! 破滅だよ! 絶望だよ! とにかく、

中にいるヤツが出てきたら、世界が滅びちゃうんだよ!」

「え、ええ!」

「マジでヤバイからお願い! 中にいるチョーヤバイやつ、やつつ

けてきて!」

「なにこの急展開!」

怒濤の勢いでサンディが扉の中にいるという、とんでもないものを倒せと依頼してきたのだ。彼女のこのあわてようからして、冗談ではないと判断したフィリスは、仲間達と顔を合わせてうなずくと、サンディと向かい合う。

「とにかく、ここにいるんだな? その……世界を滅ぼすヤベーやつ」

「うん!」

「みんな、いくか」

「しゃーね! いっちよやつたるかな!」

「見過ごすわけにはいきませんしね」

「世界を守るのも、慣れっこだものね」

そうして、サンディの望みを叶えるため、そして世界の滅亡を阻止するため。フィリス達はサンディに開けてもらった例の扉をくぐ



るのだった。

「お願いだよ、絶対だからね！」

「まかせておけ！」

そしてここは、その扉の中。そこには星空のような広い夜空のような、そんな空間が広がっている。部屋とは言い難いその空間に、たたずむものがひとつ。

「クツクツクツク……フォロボサーンも……フォロボツソも……フォロボセも。皆倒し、魔空界はすでに、我がものとなった」

それは、太った肉厚の体に牙のそろった大きな口、ぎよろりとした鋭く赤い目、じやらじやらと無駄に豪華な装飾を身にまとった、一応ながらも女型の巨大モンスターだった。

「次は、この世界……！」

自分の経緯を独り言のように語ったその魔物は、自分のたどり着いた世界をみて、高らかに笑いながら名乗りを上げる。

「たたえよ、気高き我が名を！ フォロボシータ!! 恐怖と邪悪を示す名を!!」

「うわぁー……」

先の独り言を含め、その名乗りも聞いていたファイリス達はジト目で目の前の大型モンスター・フォロボシータを見た。そんなとき、フォロボシータはファイリス達の存在に気づき、声をかける。

「おーや？ これまたかわいい子ネズミちゃん。はじめまして」

「ね、ねずみい?!」

「クツクツク……またずいぶんとおいしそうな子だねえ……クツクツク」

今回もまたねずみ扱いされ、ファイリス達は不服そうな顔をした。

フォロボシータはファイリス達に対し笑い声を漏らしつつ、自分は別の世界からきたことを告げる。

「世界を滅ぼすためにアタシは、余所の世界からきたのさ」

「余所の世界だって？」

「さあ、魔空に君臨せし女神・フォロボシータの、最初の生け贄におな

り!!」

そうファイリス達に告げるフォロボシータにたいし、ファイリスはするりとほしくずの剣を抜きながら、問いかける。

「イヤだ、と言ったら?」

「あたしの命令は絶対だよっ!　ということ逆らうのなら……あたしが直に食ってやる!」

やはり、イエスでもノーでも結果は変わらない。　だったら、自分で結果を変えてやる。　という勢いで全員武器を構えた。

「っへ、自己中だなあブスツ!」

「ホント、性格の悪さがそっくりそのまま外見に出てるわね!」

「不屈きものは、浄化するまでです」

戦いの火蓋は、ここで切っておとされた。

「はあっ!」

「ふんっ!!」

まず飛びかかったのはイアンであり、棍を大きく振り回しながらフォロボシータにつっこんでいく。　氷結らんげきという技だ。

それをフォロボシータは杖で防ぎながら、大きく振り回してイアンを吹っ飛ばす。

「うわああ!」

「イアンツ!」

「くっそ、なんて馬鹿力だよ……」

イアンは立ち上がろうとしたが、そこで真上からいくつも流星が降り注ぎ一同を一斉に攻撃する。　そこでおいうちをかけるようにフォロボシータはマヒヤドを放ってきた。

「アツハハハハハ!　どうだいどうだい!!」

「よくも、やってくれたわね!　メラゾーマツ!!」

「ぐああああ!!」

そこでクルーヤは反撃としてメラゾーマを放ち、その炎がフォロボシータを包み込む。　そこでセルフイスがさらにイオナズンを放つて、フォロボシータを追いつめていく。

「どうよ!」

「ごどかしいね！ こいつでもくらいな！ マホトーンツ！」  
「なっ……」

そこでフォロボシータは魔法を操る二人がやつかいであると判断し、マホトーンを唱える。それによりクルーヤの魔力が封じられてしまった。

「しまった……」

「おかえしだよっ！」

「きやあああっ!!」

魔法が使えなくなり焦るクルーヤにたいしフォロボシータは杖で殴りかかり、彼女の体を吹っ飛ばした。

「クルーヤっ……」

「……うっ……」

あの攻撃が痛恨の一撃だったようであり、クルーヤはそこで気を失ってしまった。なんとかマホトーンを回避できたセルフィスがクルーヤにかけより、回復魔法をかける。

「てめえ……ゆるさねえぞ!!」

クルーヤのことをセルフィスにまかせ、フィリスは剣を握りしめてギリツとフォロボシータをにらみつけた。

フィリスが自分とイアンにバイキルトをかけ、二人がかりでフォロボシータに直接攻撃をしかける。それをフォロボシータはその身に受けるが、倒れることはなく反撃でマヒヤドからの流星を放つてきた。その中でイアンは相手につっこんでいき、とうこん討ちをたたき込む。

「ぐあああ!?!」

「どうだ!」

それを受けたフォロボシータはうなり声をあげるが、すぐに杖を振り回してイアンを攻撃する。それをすっかりガードして受け止めたイアンは後方に吹っ飛ばされながらも着地し、体勢を立て直そうとする。それに続いてフィリスがはやぶさ斬りを繰り出し、フォロボシータを切り裂いた。

「よしー！」

「なめるなああ!!」

「うわあああー！」

フォロボシータはマヒヤドを放ちファイリスを攻撃し、自分との距離ができたところでめいそうを行い自分の傷を回復させる。

「クツ……！ー！」

「ベホイムツ」

そこでファイリスのマヒヤドによる傷が深いと気付いたセルフィスは、ファイリスに回復の魔法をかけて彼女の傷を消す。それで傷が癒えたことに気付いたファイリスは、再びフォロボシータにつっこんで、再びはやぶさ斬りを繰り返した。フォロボシータはファイリスに攻撃を仕掛けようとしたが、そこでイアンが飛び出してばくれつけんを放ちフォロボシータをボコボコに殴る。だが直後に二人とも、フォロボシータの杖による攻撃を受けてしまった。

「……うう……」

「クルーヤさん、気がつきましたか」

「セル、フェイス……」

そんなとき、セルフィスの腕の中で気絶していたクルーヤが意識を取り戻した。紫色の瞳を何度も瞬きさせながら、クルーヤは今の状況を確認する。

「みんな、は……」

「敵……フォロボシータは、まだあそこにいます。今は、あの二人が戦ってくださっています」

「……！ー！」

それを聞いて、クルーヤは戦っている彼らを見る。そして、しばらく眠っていたからだろうか、自分の魔力が戻ってきていることも。

「やらなきや！ セルフェイス、力を貸して！」

「しかし、貴女は……」

「大丈夫よ、もうマホトーンは消えたわ！ 私だって戦えるもの、このまま黙っていられないわよ！」



「魔空5きようだいの、頂点にたつ……この、あたしを……フオロボ  
シータを倒す、なんて……お前達、なにもの……」

「ハッ、世界を滅ぼそうとするヤツとの戦いには、とつくに慣れっこな  
んだよこっちはよお!!」

「ぐ……ぐ……ふっ!!」

フオロボシータの言葉に対し、フィリスはそう強く言い返した。

その直後にフオロボシータは息絶え、この世から消滅した。

「さっきのセリフ、オレらだから言えた感があるよな……」

「そうね……」

フィリスの言葉に対しそう感想を漏らしていると、静かになったこ  
とでなにかを察したらしいサンデイが、扉を開けてその空間に入っ  
てきた。

「……………おわった?」

「ええ、敵は消えました……もう大丈夫ですよ」

そう、セルフェイスがサンデイに笑いかけると、世界滅亡の脅威が  
去ったことを実感し安堵の笑みを浮かべながら、フィリス達に礼の言  
葉を言う。

「ありがと、みんな! マジでヤバイやつだったでしょ? 倒してく  
れて助かったわー!!」

「そいつはいいんだけどさ、なんであんなのが急に出てくるんだよ」

そもそもその疑問だった。こんな場所は知らないし、神聖なもので  
あるはずの天の箱船の内部……あの扉の奥にあんな危険物が存在して  
いるなど、想像できないしそんな話も聞いたことがない。なのにな  
ぜ、ここにそのようなものが出現してしまったのか。フィリスが問  
いかけると、サンデイはぼつりとつぶやいた。

「実はね、アタシ。 どうとう……ネ………に……」

「え?」

「あ、ううん! なんでもない! とにかくちよつと、実家に帰ろうと  
おもってさ……」

「実家あるんだ」

その突っ込みを受け流しつつ、サンデイはあの魔物を呼んでしまっ

た理由について語る。

「久々にこの通路を動かしたら、手違いでなんかとんでもないところにつながっちゃったみたいで……ちよーキモくてちよーヤバイの出てきちゃうし。マジあせったわあ」

「そういうことだったのか……この通路って、なんなんだ？」

「うーん、旅の扉ってやつ？ 今じゃあまり見かけない気もするけど」  
この部屋と、奥にある光の渦。 それについてサンデイはそう説明しながら、この場所が無事に自分の実家につながっていることを確認する。

「うんうん、今度は大丈夫みたい！ じゃ、アタシは実家にかえってくんね！ 行ってきまーす！」

「あ、サンデイ!?!」

まだ話は終わっていない、とフィリスはサンデイを呼び止めようとしたが、すでにサンデイは渦の中に消えていってしまった。 残された4人は、ポカンとする。

「……行っちゃった」

「ああ……いっちゃったな」

どうしたものか、と戸惑っていたそのとき、フィリスはあることに気づき絶叫をあげる。

「ああああ!!」

「フィリス!?!」

「どうしたの?」

「なにがあつたんですか!?!」

イアンとセルフイスとクルーヤはあわててフィリスの方をみると、フィリスは自分の剣を指さして、今の状態を伝える。

「……ちよつと、剣にヒビはあったんだけど……」

「うわ、まずいじゃんそれ！ 大事なもんだろ！」

「うん……」

彼女の今愛用しているほしくずの剣は、ただ珍しく、貴重な剣というだけではない。 フィリスにとっては、今なお尊敬してやまぬ大事な師匠の形見なのだ。 とても大事なものとんでもない傷が付い

てしまったことに、フィリスはショックを受けたらしい。これで  
は、折れるのも時間の問題だろう。

「……仕方ない、地上の鍛冶屋にでもみせるよ……」

「え、でもそれって……天使界のものよね？ 地上でなんとかなるの  
？」

「わからん！」

「おい」

だがこのまま落ち込んでても仕方ないと感じたのか、フィリスはそ  
のうちなおしてもらおうと決め、気持ちを引き締めなおした。そし  
て、意識はサンデイがぐぐった旅の扉に目を向ける。

「それよりも。ねえ、サンデイの実家？ に続く道が残ってるんだ  
けど……どうする？」

この道は、開いた本人曰く実家につながっているそうだ。この道  
を使った先にあるというサンデイの実家と呼ばれる場所。そこに  
いけば、自分達がずっと気になっていたこと、その真実にたどり着け  
るかもしれない。そう思った一同は、決めた。

「いくしか、ねーか」

「でしようね」

「サンデイさんのこと、気になりますしね」

「よし、いくぞー！」

そう声を掛け合い、4人はサンデイの実家と呼ばれる場所へ向かっ  
たのだった。ただ、今は真実を知りたくて。



## 24 「衝撃の真実、ここに」

世界滅亡の危機にあったものの、それをねらっていた魔物を打ち倒し、世界をまた救ったファイリス達。その直後、サンデイが実家に帰ろうとしていたので、その後を追いかけていったのであった。

「……あれ、ここって……」

「とても、神聖な空気の漂う場所ですね……」

だがそこからとばされた場所は、神の国だった。その場所を知っているファイリスは一瞬きよんとしてしまったが、初めてここをちゃんと訪れたセルフィス達に簡潔にここは神の国の神殿だと伝える。

「そうだったのですね……こうして美しい姿をちゃんと見るのは、なにげに初めてな気がします」

「あー……それはいいんだけどよ……」

「なんで私達、ここにいるのかしら……」

たしか自分達は、サンデイの後を追いかけてサンデイの実家へ行くうとしていたはずだ。なのになぜ、神の国にたどりついてしまったのだろうか。4人が疑問を抱いていると、奥からサンデイの声が聞こえてきた。

「………きいてきて、おねーちゃん!」

「おねえちゃん!」

姉がいたのか、と一同は思いながらも声のした方へ向かう。するとそこには、サンデイのほかにもう一人、女性の姿があった。

「アタシ、とうとう……ネ………に、ネイルアーティスト検定に合格したの!!!」

「はあ???」

「まあ……おめでとう、サンデイ。あなたの長年の夢でしたものね」  
「あれって……まさか……」

そう嬉しそうにはなすサンデイに微笑みかけている、サンデイの姉と思われる女性に、一同は目を点にした。先ほどの報告の内容も含めて、唾然とする。なぜならば、サンデイが姉と呼ぶ相手は輝く金色の髪に透けるような白い肌、透き通った青い瞳の美しい女性…女

神・セレシアだったのだ。

「天の箱船でバイトしたり、色々寄り道したケド……とうとうアタシやったよっ!!」

そう嬉しそうに語っていたサンデイは、背後にいつの間にかファイリス達がいたことに気配で気づき、振り返って驚く。

「つて、ファイリス!? それにみんなも! いつから聞いてたの!?!」

「ち、ちーっす……」

「……………」

自分の話を聞かれていたのだ、と気付いたサンデイは、彼女達に近づいてすべてをはなすことにする。

「あのね……ファイリス……」

「お、おう」

「いつかあんたに言い掛けて、最後までいえなかったこと……アタシの秘密を、今度こそ教えてあげる」

そして、サンデイはずつと言うのを躊躇っていた言葉の内容を、そのままファイリス達に告げる。

「アタシね……ずつと……ネイルアーティストになりたかったの!

子どもの頃からの夢だったの!」

「……………」

「バイトが楽しくてずつと夢にチャレンジしなかったんだけど……テンチョーにも怒られたし……。それに、あんたのがんばってるトコ

見て、アタシも本気を出さなきゃっつて。そう思ってたががんばったんだ!

」

そう嬉しそうに語るサンデイだったが、ファイリス達は啞然としていて言葉を失っている状態だった。ファイリス達からすれば、自分達の考察と目の前で起きていることとのつじつまが合わず、頭の中の整理が追いつかないといったところだ。だが、サンデイはそんな4人の心情などするよしもなく、4人が自分の夢が叶ったことを祝ってくれないことに対する不満を顔に出す。

「……なによっ! お祝いのセリフくらい言えないの!?! せつかくアタシ合格したのに!!」

「……いや、あの……」

「フィリスの、ハクジョーもの!!」

サンデイはフィリスにたいしそう吐き捨てる、泣きながらとび去ってしまった。飛び込んだ先は天の箱船のあの部屋につながる旅の扉だったので、おそらく天の箱船に向かっていったのだろう。

「行っちゃったね」

「行っちゃったな」

「行ってしまいましたね」

「……」

飛び去っていったサンデイにたいし、4人はポカンと立ち尽くしてしまった。どうしよう、とフィリスが首を傾げたそのとき。

「……フィリス……」

「セレシア様」

セレシアが、フィリス達に声をかけてきた。女神の前なので4人はあわてて姿勢を正し、そして向かい合う。

「……まさか、もう天使でなく人間となった貴女が、再びここを訪れるなんて……思いもありませんでした」

「正直、あたしも思ってたませんでした……もう、サンデイやアギロさん、そして貴女とは生涯2度と、会うことはないだろうと思ってましたから。なのに、偶然拾った女神の果実で、彼らや貴女とあい、そして再びここにも来る事ができた。こんなことってあるんだ……と」

「……これもきつと、貴女の運命……ということなのでしょう……」

フィリスの話を聞いたセレシアは、彼女の天使としての力が一部だけ戻ってきたことにたいし、彼女にはまだなにか大きな運命があるのだと言って、その偶然を受け入れた。そして、話はサンデイのことに向かっていく。

「サンデイのこと、ごめんなさいね……フィリス。けれど、サンデイは誰よりも、あなたに祝福してほしかったのですよ」

「は、はあ……にしても、事実ですか？ あなたとサンデイの、関係つ

て……………」

フィリスのその問いに対して、セレシアはにつこりと笑って返しながら、昔話をはじめた。

「……………かつて、太古の昔。創造神グランゼニス……………我が父は、私を創り、それから人間界や天使界……………動物や人間や天使達を創りました。……………私にとって、人間も天使もみな、弟であり妹のようなものです……………」

「そ、そうなんですか」

なんか否定もしていないが、肯定もしていない気がする。だがこれ以上気にすると話がややこしくなるだけだと思ったので、とりあえずサンデイとセレシアは実の姉妹である……………と認めることにする。

「フィリス」

「は、はい」

「これは、サンデイの願いを叶える手伝いをしてくれたお礼です……………」  
そうやってセレシアが手をかざすと、フィリスの腰に装備されていたほしくずの剣が光を放つ。それに気付いたフィリスは鞘から剣を抜くと、刀身は光り輝いており、ヒビも徐々に消えていく。

「剣が輝きを……………」

「増した……………!」

「傷もなおってる……………!」

仲間達も、その様子を見てそう感想を口にした。そして、バッグから以前入手したシルバーオーブが出てきたと思うとそれも光を放っており、ほしくずの剣に宿った。そして光がやんだとき、そこにはほしくずの剣とは少し違う色合いや輝き、装飾の剣が存在していた。

「ほしくずの、剣が……………」

「それは流星の剣です」

「流星の剣……………」

「その剣は、オーブの力により、さらに美しくさらに力を増していく特別なもの……………このほかにも同じような武器が、この世界には存在しているのです」

セレシアの話を聞いたファイリスは、まじまじとその剣を見つめ、つぶやいた。

「そんなすげえ武器だったのか、これ……」

かつてエルギオスからイザヤールにたくされ、そしてイザヤールは自分に授けるつもりでずっと封印していた。その間剣はラフェツトに預けられ、彼女を経由してファイリスにたくされたのだ。剣はイザヤール亡き後に受け取ったので、今となっては形見である。そうして天使から天使へと受け継がれていた剣が、そんな特別なものだったとは思わなかった。

「ファイリス」

「はい」

「私の妹、サンデイのこと……どうぞ、よろしくおねがいますね」

セレシアのその言葉に対し、ファイリスは力強くうなずいて返す。

次の瞬間、ファイリス達の意識は一瞬とばされた。

そして、気がついたとき4人は天の箱船に帰ってきていた。

「ここは……」

「天の箱船、だな」

「じゃあ私達、帰ってきたのね」

「そのようですね……女神様の力によるものなのでしょう」

自分達がさきほどまで神の国にいて、天の箱船に帰ってきたことを確認したファイリス達は、車両を進んでいき、その先にサンデイの姿があったので声をかけてみる。

「サンデイー！」

「……ファイリス……」

サンデイはどうかやら拗ねているようであり、頬を膨らませていた。そしてファイリスにつつこんでいき、彼女に不満をぶちまけてくる。「一言くらいお祝い言ってくれたっていいじゃない！　ファイリスってつめたすぎー！」

「いや、あたしも色々あったんだよ！」

「なによ、そのいろいろって！」

そこでフィリス達は、自分達が今まで気にしていたことや考察などをすべて、サンデイに疑問をぶつけていくことにした。

「あんたが、その……女神セレシア様の妹なのは、ホントなのか？」  
「なにいつてんの、そんなのホントに決まってるじゃん！」

あくまでもサンデイは自分とセレシアが姉妹であると、ハッキリ肯定するつもりようだ。自分達の関係が信じられないといった様子のフィリス達に対し、サンデイはさらに怒る。

「なによその不満そうな顔。妹じゃなかったらなんだっていうの？」

「い、いやカラコタ橋で……話があったでしょ……？ 若く死んだ女は妖精になって生まれ変わるって話。だから、私達も……あなたもそうなんじゃないかって、思ってたんだけど……」

「はあ？ なんで？ アタシいきてんじゃん」

その説をサンデイはハッキリと否定し、まだ言いたいことがある4人をにらみつつ、話を続けさせる。

「なによ、まだあるの？ 怒らないから言つてごらん」

「……じゃあ、言わせていただきますが……あなたは、サンドネラ、ではないのですか……？」

「なにそれ、新しいスイーツの名前？」

その名前に彼女は聞き覚えがないようだ、別の言葉として解釈されてしまった。その返事に対し一同は口を開けながらも、サンドネラとはなんなのかについて説明をする。それをサンデイは自分とはまるで関係がないかのように、適当にきく。

「……ふーん、女の人の名前なんだ。つーか、サンデイとかってよびかた、よくあるからねー。同じ名前の子、いっぱいいるし」  
「そうかもだけど……」

どうやら、自分達がサンデイがサンドネラの生まれ変わりではないかと不安を覚えていたのは、とりこし苦労だったようだ。次から次へと自分達の考察が的外れになってきていることにたいし呆然とするフィリス達にたいし、サンデイは呆れたようにため息をついた。

「……はあ。なにをあんたが悩んでいるのか、よくわかんないけど」

……。アタシは、セレシアおねーちゃんの妹・サンデイ！ これ以上疑う気なら、もうクチきいてあげないからね！」

「え、ちよ！ そいつは困るぜ！ わかったよ、もう解決してすつきりした！」

サンデイと関係を絶たれるのは、フィリスとしても困るものがあるようだ。あわててサンデイの謎について、これ以上追求することや彼女の証言や先ほどまでの出来事を真実として受け止めることを約束する。

「そうだ、これあげるね」

そうして機嫌をなおしたサンデイは、思い出したようにあるものをフィリス達に差し出した。それは、布にくるまれた長いなにかだった。

「なにこれ？」

「あのきもくて怖いヤツ、倒してくれてありがと。そのお礼だよ！」

どうやら、あのフォロボシータを倒して世界滅亡をくい止めたことに対する謝礼の品のようだ。とりあえず布をとってみると、そこには不思議な装飾の施された、棒のようなものだった。

「たしか、しゅらのこん……て名前の武器だったかな」

「棍……？」

「たぶんこれも、この剣と同じ……特別な武器なんだろうな」

そう言ってフィリスは自分の流星の剣を見つめつつ、その棍を見る。セレシアの話の思い出しているのだろう。棍の扱いならイ

アンが得意なので彼に渡してみると、イアンは軽くそれをふるう。

「うん、しつくりくる！」

「じゃあそれは、イアンが持っていた方がいいわね」

「そうですね」

そうして、その棍はイアンが今後使うことになった。無事に事件が解決したことや自分のことでスッキリしたことで、サンデイも気持ち切り替わったようであり、明るい調子で声を上げる。

「それと、アイツを倒してくれたから、さつきまでの失礼な質問は許してあげる！ というわけで、おつかれー！」

「はーいー」

そうして、サンデイの秘密が明かされた後。謎の脱力感におそわれたファイリス達は、天の箱船の中でゆっくり休息をとることになったのであった。

「はあ……なんかどつと疲れた」  
「だな」

その果てに彼女たちがたどり着いたのは、エラファイタ村だった。

この天の箱船には偶然にもその村の近くを通っていたので、その宿屋で一泊しようと思ったのだ。

「今日は内容が濃かったもんな」

「ああ……世界を滅ぼそうとしているヤツをぶっ飛ばしたり、サンデイの秘密を知っちゃったり……」

「僕達はてつきり、彼女がかの悪女サンドネラと同一人物だと思いきり、とてついでに……いろいろなミスリードをさせられていた、ということなのでしょう」

そう、ファイリス達は最近立て続けに起きていた出来事や、サンデイ自体がそもそも正体がわからなかったということ、サンデイはガナン王妃の生まれ変わりではないかと疑っていたのだ。自分達にとつて憎むべき相手だったガナン帝国とサンデイにつながりがあったらどうしようかと、一同は不安を抱えていた。

「けどまあ、私達の仮説がドンピシャリにならなくて、よかったんじゃない？ 私としては、当たってたら……そっちの方がイヤよ。サンデイってちよつと変わったところがあるけど、いい子だもの……。なのに、そんなサンデイが昔はとんでもなく悪い人だったのかもなんて、考えてた自分達のほうが恐ろしくなっちゃうわ」

その不安を覚えていたからだろう、クルーヤはこの結果に対しそう感想を口にした。それを聞いたイアンとファイリスはうなずく。

「それもそうだな。いくら前世とはいえ、実はサンデイはワルモノでしたーってオチは、あたしもさすがにイヤだぜ」

「よく考えてみれば、いつくら生まれ変わりだとしても同じ名前なわ



けがねえし……オレ達も無駄に考えすぎていた……つてことか」

「場合によつては、僕達……サンディさんに手をかけねばならなくなっていたかもしれないね。 実は無関係だったという結果が、よい時もあるのでしょうか」

そうセルフィスも意見を語り、フィリス達はうなずく。 いずれにせよ、自分達はもう一度、世界の滅亡をくい止めることができたのだ。今はそれで満足であろう。

「……ふあ……」

まだ眠るには少し早いが、かといって遅すぎる時間ではない。 そんな時間に宿を取り安心して休めたことで気が抜けたのだろう、フィリスはあくびをした。

「とりあえず、あたし眠いからねるわ……」

「そうですね……しっかりと夕食も食べましたし、ほかにやることはありません。 ここは、寝てしまうのが一番なのでしょう」

「おー。 んで、明日は早起きして出発しちやおうぜ」

「さんせいっ」

そう話し合つて、4人はそれぞれのベッドに入り眠りについていった。 今日の出来事を胸に、明日のことを考えて。

「……今日はいろいろあつて疲れたとはいえ……今までよりずっと、ねむ………たい………な………」

ふと、フィリスはまどろみのなかでそう思いながら、眠つたのであつた。

こうして、とある一人の妖精の少女に関わる話は、完結したのである。

## 25 「星ふぶきの夢」

サンデイの秘密が明らかになった、その日の夜。　ファイリス達は偶然立ち寄った村で一晩、眠りについていた。

「……………は……………」

そのときファイリスは、不思議な夢を見た。　自分が今いる場所が夢の中であると認識するのに時間はかからず、その景色を見てすぐにこれは夢だと気付いた。　ただ、今自分がいるその場所がどこかまでは、わからなかったが。

「イアーン、セルフイースー、クルーヤー！　サンデイー！　いるなら返事をくれー！　……………つて、誰も返事するわけねーか」

ファイリスは自分の行動に軽くツツコミを入れると、その景色をただ一人で見つめた。　地面は草の感触が残っているが、空は黒一色だ。

こんな寂しい空間に一人でいる、と、夢とは言え現状を改めて理解し実感したファイリスは、ポツリとつぶやく。

「……………ひとりきり、か……………」

仲間達がずっと自分のそばにいたから、気にしていなかった。　だがこうして改めて一人だけになると、急激に寂寥感や孤独感におそわれる。　星空も見えないから、より強く感じてしまうのかもしれない。　一度、気持ち沈みそうになったが、ここは夢の中の世界ではないと思い、首を強く横に振る。

「まあでも、夢だからヘーキだ……………し……………」

そう笑って誤魔化した、その瞬間。　空にぼつぼつと小さな光が一つずつ灯っていく。　星か、とファイリスが呟いた直後、その星は一斉に流れていった。　その景色を見て、ファイリスは目を大きく見開く。

「……………ほし、ふぶき……………!?!」

世界を滅ぼそうとした墮天使との決戦の日を、思い出す景色だった。　天使達が一斉に星になり、永遠の救済を得たあの夜。　空に上っていく天使だった星達。　その光は、ずっとファイリスの記憶にとどまっている。

「なんで今更、この光景をあたしは夢でみてるんだ……？」

そんな疑問をフィリスが抱いた、そのとき。彼女の目の前にロブをまとった女性が現れた。

「あなたは……」

何者かと問いかけようとしたフィリスに答えることなく、ロブの女性は白い翼を大きく広げ、全身から強い光を放ちそこから消えた。その眩しさに一度目を閉じたフィリスだったが、光がやんで目をあけたのと、眠りから覚めたのは、同じタイミングだった。

「……………ああ……………そう、だった……………。さっきまでの、夢……………だったな……………」

「おはよー」

「おはよう」

「ようっ」

「おはようございます」

ベッドから起きあがって仲間の顔を見て、フィリスは安堵する。

やはり彼らがいると安心できるし、自分は確かに強くいられる気がしたのだ。だがそのとき、仲間達の表情に気づきそこに一言言う。

「あれ、みんなねむそーだね？」

「おお、お前も人のこと言えない顔だぜ」

「だろーな」

やけに印象に残るからしつかりと覚えている夢だ、それが気になって仕方がないのである。眠そうな顔になっているのも納得だ。

だが、ほかの仲間達も同じだとは思ってなかった。どうしたんだ、とフィリスが問いかけるより早く、クルーヤが口を開いた。

「あのね、私……………不思議な夢を見たの」

「不思議な夢？」

「うん……………真つ暗な空に草原に、私だけ立っている夢。誰もいないから私、必死にフィリス達を探したの……………だけど、誰もいなくて」

「……………」

「そうしたら突然、小さな光がポツポツと、いろんなところに浮かんで

きて……そのいつぱいの光達が一斉に、空にあがっていったの……まるで、あの時のように」

「……それって……」

「オレが見た夢と同じじゃん！」

ファイリスより先にイアンが口を開いた。それにたいしファイリスはえ、と声を上げて驚き、イアンとファイリスの視線が合う。

「……まさか、ファイリス……お前も、同じなのか？」

「そういうイアンこそ……」

「なんだ、あなた達もこの夢を見たの？」

クルーヤの問いに対し、ファイリスとイアンは頷いた。そこに、セルフィスも話にはいつてくる。

「その夢なら、僕もみました」

「セルフィスもか」

「はい。僕の場合は、昔からあり得たことなので気にしてなかったのですが……皆さんが語る夢の内容と一緒にだったので驚きました」

4人が同時に同じ夢を見る、そのようなことがありえるのだろうか。そこでファイリスは、最後に翼をもつ女性の話をするべきだろうか。一瞬迷ったものの、それ以上にも話さなかった。

「まあ、今となつちやあたしらも……普通の人間っていうのはちよいムリがあるからな。なんて言えばいいのかわかんねえけど……いろんなことを経験しすぎて、4人とも同じ夢をみちまったのかもしれないぜ」

「そうかもな。ま、こういう不思議なこともあり得るってことではないか。弊害があるわけでもねえし」

「そうね、もう私達いろいろ不思議体験しちゃったもの。今更どんなビツクリがきても動揺したりしないとおもうわ……たぶん」

天使を仲間にして各地で問題を解決させて、巨悪と戦い神とも出会い、ついには世界を救ってしまった。元天使のファイリスだけでなく、本来は普通の人間であったイアンとセルフィスとクルーヤは、旅の経験故にもはや普通の人間ではない。そんな自分たちの立場に苦笑しつつ、4人そろって同じ夢を見ることもあるだろうという話で

片づけた。

「……本当に、そうなのでしょうか……」

そうして朝食のために部屋を出ていこうとする3人の後ろで、セルフィスだけが不安を覚えていた。あの夢に対する不安だ。セルフィスは、4人でともにみたあの夢は、ただの夢ではないと感じていたのだ。

「でも、皆さんを不安にさせるわけにはいきませんね。この夢は覚えておくとして、なにかあったときに再び話に出せばよいのでしよう……」

だが、何もわからないことにたいする不安を他者に抱かせるわけにはいかない。ということ、この夢に対する疑問は、セルフィスは覚えていながらも胸の奥にしまっておくことにしたのだった。

「セルフィス、どうしたの？ もうすぐ朝ご飯よ、はやくいきましょ！」

「はい、今まいります」

そうして朝食を食べ終え、旅の支度を終えた4人は再び旅立った。

次はどこを目指そうかという話をしていて、その時だった。

「キヤーツ！」

「!？」

そのとき、どこからか悲鳴が聞こえたのでそちらに向かってみると、そこにはりゆう兵士やにじくじやくの群に囲まれた、旅の商人達の姿があった。旅の荷物が乗った馬車も荒らされ、ひいていた馬も殺されたようだ。商人達も、いつこの魔物に殺されてしまうのかとおびえている。

「ぎしやーっ!!」

「うわああー！」

「マヒヤドツ！」

この状況を放っておけない、と4人は迷わず彼らに駆け寄り、まずはクルーヤが魔物達に向かってマヒヤドを放つ。それを受けた魔物達は一斉に弱り、そこにセルフィスがイオナズンで追い打ちをかけ

る。

「大丈夫か！」

「あ、ああ……命拾いをしたよっ」

「この近くに村がある、そこへ駆け込めば大丈夫だ！ みんな！ この人達はオレが護衛するから、こいつらの相手は任せませ！」

「ああ！」

「はい！」

「ええ！」

商人達を村まで連れて行くと言ったイアンに対し、ファイリス達はうなずき、魔物と向かい合う。りゆう兵士が何体か、商人やイアンを狙ってつつこんでいったが、それはすべてイアンが氷結らんげきを繰り出す。

「はっ！ であああっ!!」

ファイリスはりゆう兵士の剣をはじいた後で大きく切り裂く。愛用の剣がグレードアップしたおかげか、魔物も前より易々と倒せるようになった気がする。

「ドルモアッ！」

それに続けと言わんばかりに、セルフィスも闇の攻撃魔法を繰り出して、魔物を倒す。クルーヤも再びマヒヤドを放って、にじくじやくを一掃する。それでその場の魔物をすべて倒せた、と思ったが、直後にまた別の魔物の軍勢が現れて襲いかかってきた。まだ戦うのか、と思ったがもう一度追い返してやるという気迫で、3人は戦う姿勢を崩さなかった。

「うわああ!?!」

「ファイリス！」

その中の一匹、にじくじやくが上空からファイリスに襲いかかる。その爪によりファイリスは首を捕まれてしまい、ファイリスはもがく。一方、彼女の首を絞める魔物の力も強くなっていた。

「う、ぐう……!?!」

首を絞める力に負けず、必死に振り払おうとしたファイリスだったが、そのときにじくじやくの目がひどくよどんでいる事に気付く。

人間に襲いかかるような魔物だから、そんな目をしていて当然かもしれないが、また別のものを感じたのだ。にじくじやくは、自分が首を絞めている相手を見て笑っている。

「クカカカカ」

「このっ……！」

その笑い方が不気味に思ったフィリスはにじくじやくの腹を思い切り蹴り、少し離れたところで剣を振るい、にじくじやくを切り裂いた。それによりにじくじやくは息絶え、フィリスは立ち上がる。

「大丈夫ですか！」

「ああ、問題はないぜ！」

頬についた返り血をはらい、セルフィスにそう返すと、クルーヤが最大の攻撃魔法を放つ体制に入っていた。

「よし、一気に決めちゃうわよ！ いいわね！」

「どうぞ！」

「マヒャデドス!!」

冷気の攻撃魔法の最上位のものを、クルーヤは派手にかまして、ここにいた魔物軍団を今度こそ壊滅させた。

「よし、いっちょようあがり、だな！」

「そうね。イアンは大丈夫かしら……」

「おーい！」

イアンと村人の安否を気にしていた、そのとき。その声とともにイアンがフィリス達に駆け寄ってきた。

「イアン、無事だったか！」

「あの商人の方々は？」

「ああ、大丈夫だ。ちゃんと村に送り届けたぜ。もちろん、オレもみての通りなんともないぜっ！」

「そっか、よかったわ」

そうして4人はそれぞれの役目を無事に果たせたことと全員の無事を喜び合った。そして、魔物に殺された馬を土葬し吊った後、イアンはそうだ、と思い出したように自分の荷物袋から、あるものを取り出して仲間に見せる。それにたいし、フィリス達は驚いた。

「あ、これ……!」

「おう、例の宝石のカケラだぜ」

それは、ファイリス達が地道に集めている宝石のカケラだったのだ。

「ということは、あの人たちは、これを持っていたから狙われた……と  
いうことなのでしょうか?」

「だろうな。 さっき、助けてもらったお礼だっけってしてくれたんだよ。  
よ。 欠けてて小さいから、安物だろうけど……って言ってたけどな。

オレがこれでいいっていつたら、すんなり譲ってくれた」

「マジでか」

とりあえず、また宝石のカケラが手に入ったので、元々持っていた  
宝石と照らし合わせる。 すると、このカケラもまた元の宝石にくっ  
ついて、一つの宝石になったのだった。

「こうしてみると、結構集まってきたほうだとおもうわ」  
「だな」

「完成したら、どうなるのか……ますます気になりますね」

かなり宝石が一個の完成型に近づいてきている。 と、誰もが思っ  
ていたそのときだった。 真上から、声が聞こえてきたのは。

「見つけた。 それこそ、女神の祈り……」

「誰だっ!」

聞いたことのない声だったので、4人は一斉に身構えて警戒をす  
る。 すると、真上から翼の音をたてながら一人の女性が舞い降りて  
きた。 銀色の短い髪に、青い切れ長の目をもった女性のその姿に、  
一同は驚く。

「!？」

「え……!？」

「て……」

「……てん、し……!？」

その姿は紛れもなく、天使だった。 もうこの世界に天使はいない  
と思っていた4人は驚く。 特に、ファイリスが驚いていた。 戸惑う  
4人に、天使は名乗る。



「私の名前は、ラヴィエル。 運命の天使」

「運命の天使……ラヴィエル……」

「私は今まで、多くの人々の運命を見つめながら、探していたのだ……女神の祈りという、奇跡の力を持った宝石を」

「宝石だって!？」

天使・ラヴィエルの言葉を聞いたフィリス達はまた驚き、手元にある例の宝石をみた。 宝石は今も、マゼンタの光を放っている。

「まさか、これが……?」

「そう、それこそ奇跡の宝石……女神の祈り。 それを手にしたものの願いをかなえるという神秘の宝石だ」

「願いを叶える……?」

「だが、その宝石は昔に砕け散り、力を失ってしまった……各地では小さくてきれいなだけの、ただの石のかけらにすぎない。 それに、特別なものの願いしか、かなえてはくれないのだ」

そう、女神の祈りという名前が付いた宝石についての説明をするラヴィエルは、彼女たちがその宝石を手にしていることに対し疑問を抱く。

「それを手にしている君達は……もしや、天使と、その加護を受けし者達、なのか?」

「……ツ!!」

「……もし、そうだと言ったら……あんたはオレ達になにをするつもりだ?」

「い、イアンさん!」

ラヴィエルの言葉に対し、フィリスは凶星をつかれたと肩を動かして、それに気付いたイアンがラヴィエルにそう問いかける。 慌ててセルフイスがイアンの口の悪さを注意しようとしたが、それより先にラヴィエルが口を開いた。

「そう警戒をするな、私は君達の正体はすでに気付いている……私は運命を見つめる天使なのだから……」

「じゃあ、私達のことには気付いたから……あなたは声をかけてきたのですね?」

「そうだ。現に君達は、私をみて会話もできているだろう」

ラヴィエルの言葉に、4人は一斉にハツとなった。天使はもうすでにいないとはいえ、普通ならその姿を目撃し会話することは本来不可能なのである。

「……そうか……んで、あたしがこの女神の祈りを持っていると知って……あなたがあたしの正体を知っているのなら……あなたは、なにをするつもりなんだ？」

フィリスがそういぶかしげに問いかけると、ラヴィエルは冷静に話を続ける。敵ではないと伝えるために。

「危害は加えない、君の正体を知っているならなおさらだ。今はただ……私は、女神の祈りが完成するのを待っただけだ」

「女神の祈り、が……」

「すでに同士はいないが、地上に降りて数百年……私は今もなお運命を見つめ続ける。輪をはずれ天使の資格を失ったいまも……」

「……………」

「君達がその女神の祈りを手にした者なのであれば、女神の祈りを完成させられる者達なのであれば……私はその宝石が完成するのを待つ……星を見つめながら……」

そういい、ラヴィエルはその背の翼を大きく羽ばたかせながら、天高く飛んでいってしまった。そのとき彼女は、フィリスの髪をまとめていたものに気付いたが、彼女は何も言わずフィリス達の前から姿を消してしまった。

「あんな天使もいたんだな」

「ああ……あたしも初めて知った……」

「というか、今もこの世界にとどまっているのも意外よね……いったい、何者なのかしら？」

天使は皆、あの夜に星となったはず。女神セレシアもそう言っていたのだから。唯一残された天使と言えば、元がついていて今は人間となっている、このフィリスだけだ。思わぬ遭遇にフィリス達は戸惑いつつ、

「この宝石……女神の祈りのことはわかったけど、また謎がふえち

まったな。あの……ラヴィエルさんのこと……」

「……」

今のこの世界で自分以外の天使をみたことが衝撃だったようだ、フィリスは今も戸惑いを隠せず宝石をみて語った。その横でセルフィスはなにかを考え込んでいるような動作をとっており、やがてあることに気づき顔を上げる。

「まさか、以前ナムジンさんが仰ってたのは……彼女のことではないのでしょうか？」

「えっ？」

「ほら、彼……言ってたではありませんか。大きな翼を持つ人のような影を見た……と。あのときはフィリスさんが見間違いだと思って言っていたので、彼もそうだろうと思っただのかもしれない」

「……だが今回、ラヴィエルさんという天使にオレ達は出会った。」

だから今思えば、その影はラヴィエルさんだったのかも……と、いうことだろうか？」

「はい……」

霧の影で見える可能性もあるのだろうか。とはいえ、彼にはその影については見間違いと説明してしまった以上、追求は難しい。いずれにせよ、この女神の祈りが完成さえすれば、真実がわかるかもしれない。

「やっぱり、このカケラを地道に集めていけばいいんじゃないかな」

「それがベストよね」

そうフィリスは女神の祈りを胸に抱きつつ、ラヴィエルにあったときを感じたことを口に出す。

「ただ……」

「ただ？」

「……あの人が、なんだか懐かしい感じが、したんだ……」

## 26 「宿王をめざせ！ 前編」

「宿王グランプリ？」

「ええ」

それは、旅の途中でセントシユタインの宿屋に立ち寄ったときのこと。そこでしばらく休息をとることを決めたフィリス達に、ルイーダは依頼があると言って声をかけてきたのだった。その依頼に関係のあるワードが、宿王グランプリなのだ。

「実はね、宿王グランプリがついに開催されることになって、調査員が宿屋の審査にくるの！ で、前回グランプリのこの宿屋には、主催者のセントシユタイン国王が直々にみえるんですって！」

「ええ!? 国王自ら赴くのですか!？」

国王が宿王グランプリを主催するだけならまだしも、自ら審査に赴くなどありえるのだろうか。もしルイーダの話が事実であるならば、国王は行動力が有り余っているとさえ言えよう。衝撃の話を聞いたフィリス達に、ルイーダは引き続き話をする。

「それで、リツカに意気込みを聞いたら、あの子……いつも通りにがんばるわ、て……なーんか緊張してるのよ……」

「……リツカ……」

フィリスはリツカのことを信じている。彼女の経営するこの宿屋は今も心が安らぐだけでなく、ウォル口村にいたとき、彼女に助けられたときも、フィリスは彼女の献身的な姿勢に救われているのだ。あれを否定するものなどいるはずがない、という確信がフィリスにはあった。だから緊張しているとはいえリツカなら大丈夫だと思っていた。そんなとき、ルイーダは大声を上げて今のままではないと告げる。

「でも、いつも通りはマズイわよっ！ だって相手は超VIPだもの！」

「ルイーダさんが一番興奮してやすぜ」

「そこで、フィリス達に私からお願い！ リツカのために国王様をも

てなす、最上の品を用意してくれない!？」

「ええ!？」

「それが、私があなた達に出す依頼よ!」

ルイーダの依頼というのは、リツカが宿王グランプリで優勝できるように手助けをしろというものだった。宿王になるにはまず、国王の審査を完璧に通らなければならない。そんなルイーダの気迫に押されたフィリスだったが、親友のために彼女の依頼を受けることにしたのだった。

「まあでも、ほかならぬリツカのためなら……あたし、がんばってみるよ!」

「うんうん、さすがね! あなたならそう言ってくれると思ったわ!

ありがとう、フィリス!」

「それで、あたしらはなにをすればいいんだ?」

彼女が自分の依頼を受けてくれると知ったルイーダは、一枚のリストを取り出してその内容を彼女たちに伝える。

「あな達が用意するべき品は、ここにピックアップしておいたわ!」

「おお」

「まずは天使のはねとにじいろの布きれ。これで最高級のベッドを用意するわ」

「うんうん」

「次にさえずりのみつ。この蜜を使って、超おいしいハニーティーをいれるの!」

「なるほど」

落ち着いてルイーダが選出したというアイテムの一つ一つとその用途をきくフィリス。だが、次にルイーダが口にしたアイテムを聞いて、目を点にしてしまう。

「最後に、プラチナクッキー!」

「?」

「この世にふたつとないお茶受けで、最高のおもてなしを演出するのよ!」

以上、4つ! どれもとっても貴重なものだから、大変だと思うけ

ど、がんばってね！」

プラチナクッキーなんていかにも珍しいシロモノ、どうやって手に入れればいいんだろうか。そう疑問を抱いていることはお見通しだといわんばかりに、話を聞いていたロクサーヌが、情報を提供してきた。

「プラチナクッキーを作るためにもっとも大事な材料は、ゴールドেন্টーテムという魔物が持っていることがありますわよ」と。

そうして、ルイーダやロクサーヌの情報を頼りに、指定されたものを次々に集めていくファイリス達。

「とりあえず、さえずりのみつと天使のはねとにじいろの布きれは入手できたわね」

「天使の羽は手に入れすぎたが、ベッドを作るならこれくらいないといけねえしな」

「天使のはねといっても、あたしのこれはゆずらねーよっ!？」

「ああ、わかってるって」

ファイリスは自分の髪をまとめている髪飾りについた羽を提供することを断固拒否した。そんなファイリスにたいしイアンは苦笑しながらつつこむと、残されたアイテムについて相談をする。

「さて、残されたのは……プラチナクッキーというヤツだよな」

「そんなクッキー、私も初めてきいたわ」

「ゴールドেন্টーテムという、金色のスライムが3匹重なった魔物が材料を持っていることがあるとロクサーヌさんが言っていました……これは、苦戦しますね」

ゴールドেন্টーテムという魔物にも、この世界を旅した彼らですら知らない。非常に発見が難しい魔物なのだろう、そんな魔物から手に入るアイテムをもってこいというなんて、ルイーダも中々に鬼畜だ。そうまでしないと厳しい世界なのだろうか、宿王というのは。そんなことを気にしていると、懐から以前に依頼を果たした報酬で手に入れた洞窟の地図が出てきた。

「あ、この前もらった地図」

「……そういや、こういう地図って滅多にみつからない魔物がでるらしいウワサをきいたぜ……かけてみるか？」

「もうほかに手がかりはねえ、やるぜ！」

「ええ、もうやっちゃうしかないわ！ 当たって砕けろよ！」

そう話し合い、フィリスたちはその地図の洞窟へ向かう。その場所はウォル口村の近くだった。その洞窟の中はまるで遺跡のような内装になっており、フィリスたちはそこに突撃し、魔物を倒しながら突き進んでいく。

「あ、もしかしてあれじゃない!? ゴールデントーテムって！」

「……金色のスライムが3匹重なっている……間違いありません！」

「よし、あいつを倒すぜ！」

そうして発見したゴールドデントーテムを討伐するために、4人はその魔物に挑もうとしていた。4人の気迫に驚いて恐怖を覚えたゴールドデントーテムは逃げ出す。

「ちよ、逃げるんじやねえっ!!!」

4人は逃げていくゴールドデントーテムを追いかけて、ゴールドデントーテムは追いかけてくる4人から逃げる。やがてゴールドデントーテムは壁際に追いつめられ、イアンが先頭にたつてゴールドデントーテムに向かって言う。

「さあもう逃げられねえぜ！ 命がおしけりや、そこにもってるクツキーのもとをよこしなあっ!!」

「なんかカツアゲみたいになってるわよイアン！」

やはりそういうところは元不良なのだ。と仲間たちは今のイアンを見て感じていた。そんなイアンが怖くてゴールドデントーテムは震え上がり、その身を激しく震わせると、金色の袋に入ったものを落としした。イアンはそれを拾い上げて、あけてみる。そこには、甘い香りのする白金色の粉が入っていた。

「これは……もしかしてっ」

「ああ、これがプラチナクツキーのもとだ！」

「じゃあこれを使えば、そのプラチナクツキーが作れるのね！」

目的のものが手に入った喜びにより、4人はゴールドেন্টーテムが逃げていったことに気付いてなかった。それに気付いたのは数分後のことだったが、今回は目的を果たしたので倒さなくてもいいかという判断にくだり、4人は一度洞窟を出て行った。

無事にもてなし道具の材料をそろえてきたファイリス達は、リツカやルイーダの待つセントシユタインの宿屋に帰ってきた。

「リツカ！」

「あ、ファイリス！ どうしたの？」

宿屋に帰ってきたファイリス達を、リツカはいつものように迎え入れる。そして、ルイーダに言われたもてなしの品を彼女に差し出した。

「おまちどお！ 最高のおもてなしの品を持っていたぜっ!!」

「ほ、ホントに持ってきたの!?!」

「さすがね、すごいじゃない！ 私が頼んだもてなしの品を全部集めてくるなんて！」

「私のために……ファイリス、みんな！ ありがとう！」

「へへっ、友達のためならこのくらい当たり前さ！」

ルイーダに賞賛され、リツカにお礼を言われたファイリスは、それに笑顔で答える。準備が整ったところでリツカと宿屋の従業員達はベッドを作ったりクツキーを作ったりして、国王を全力でもてなす準備をしたのだった。

「ベッドもクツキーもお茶も、準備できたわっ」

「……しかも、グッドなタイミングよ。もうすぐ国王様が見えるって、連絡が入ったの」

「いよいよ、この瞬間が訪れようとしているんですね」

ルイーダとロクサーヌは、じきに国王が来ることで胸を躍らせていた。リツカも、あくまでもいつも通りにいようとしているらしい、姿勢を整えていた。

「あたしらは、片隅にいたほうがいいよな」

「ええ」



フィリス達は、酒場の席の端つこで用意してもらったお茶を口にしつつ、じきに現れるであろう国王を待っていた。

「誰かきたわね」

「国王様でしょうか」

この宿屋に客がきたことを知らせるベルがなり、皆は国王がきたのかとそちらに視線を向けた。だが、宿屋にはいつてきたのは国王とはかけはなれた、みずぼらしい容姿をした、どこか囚人を連想させるような男だった。

「なんだ、あのオツサン……？」

「ふうふう……ど、どうもツス……今、部屋、あいてるっスか？」

「はい、ございますが……大丈夫ですか？ お顔の色があまり優れていませんよ」

顔色のことを指摘された囚人風の男は、少し戸惑っていたが、懐から少しだけ硬貨をだし自分の全財産をみせた。それをみたりツカは、少し目を丸くする。

「まあ」

「……実は、これぼっちしか金がなくて、ロクにものを食べていないんす……。それでも、泊めてもらえるツスか？」

「……」

囚人風の男は、本当にひもじいおもいをしてきたようだ。今にも死にそうな枯れた声でリツカに確認をとる。そんな男に、リツカは微笑みかけた。

「ええ、もちろんですとも。それではすぐにお茶をいれますね。」

「テーブルでお待ちください」

その応対は、いつもどおりだ。お金がなくて困っていても、それでもお客としてきているなら放っておくことはしない。そんなリツカの性格のよさを感じられる流れだったが、直後に彼女がとつた行動に一同は目を丸くする。

「はいどうぞ、極上のハニーティーとプラチナクッキーですわ」

「り、リツカちゃん……？」

「んっ、んめえ！ なんじゃこのハニーティー！ すきっぱらにしみ

わたるツス!!」

囚人風の男は、ハニーティを勢いよく飲み、クッキーも口に次々に放り込んでいく。

「わあ、あれを出すなんて太っ腹だなあ」

「まあまだあるだろうけど、ガツガツ食ってるぜあのオッサン」

その様子を、フィリス達は苦笑しながら見ていた。そして、席に戻ってきたリツカにルイーダはあわてて注意をしてくる。

「ちよつと、リツカ! どういうつもり? あれは国王様にお出しするため……」

「ウォツホン、失礼するよ」

ルイーダはリツカを注意していたが、その直後に本日の特別な客がきたので、咳払いをしながら自分のポジションに戻った。その後、ある身なりのいい人物が宿屋に入ってきた。

「きたぜ」

「ああ」

それは、フィリス達が何度も会った、セントシユタインの国王でまづ間違いなかった。リツカは国王が相手でも、いつものようにお客を迎える姿勢で挨拶をする。

「いらつしやいませ! チェックインはカウンターにて受け付けます!」

「ちよつとリツカ! お迎えにあがらなきや! 相手をどなたと思ってるの?」

ルイーダは小声でそう怒るが、リツカはあくまでも同じように応対する。そして、宿泊者リストに名前を記載した国王を、席へ案内する。

「はい、記録ありがとうございます。それではすぐにお茶を入れますね。テーブルでお待ちください」

だが、リツカが案内した席は、先ほどの囚人風の男と同じ席だった。流石にムリがありすぎないかと、皆が不安をかかえた。

「おいおいおい」

「……………なんだね、この小汚い男は? この男も客だと申すのか?」

「もちろん、大切なおお客様ですわ」

国王の言葉に対しリツカはそう、堂々と答えると、国王に対してもハニーティーを差し出す。リツカの言葉に対し国王はふん、そうか……とだけ答えながら、ハニーティーを口にする。その光景を目にしたルイーダは、眉間にしわを寄せつつ、つぶやく。

「……………雲行きが怪しいわね……………」

「そうでしょうか」

「セルフィス？」

ルイーダの厳しい言葉に返すように、セルフィスはそう曰くありげに呟く。一方でフィリスは、リツカは必ず国王に賞賛されるはずだと信じて、つぶやく。

「リツカなら大丈夫、あたしは、信じる……………」

そうしてグランプリの審査は進み、リツカ達は精一杯、国王をもてなしたのだった。

翌日。

宿屋のカウンターには、昨日駆け込んできた囚人風の男と国王の姿があった。リツカは2人同時に、挨拶をする。

「おはようございます、お客様！ ゆっくりおやすみになれましたか？」

「ええ！ もう、サイコーツス！ あんなにふかふかのベッドで休んだの、生まれて初めてツス！」

囚人風はこの宿屋のサービスに感動したようであり、目を潤ませながらそう感想を口にする。一方の国王も、その感想には同調をしているようであり、うんうんと頷いていた。

「ワシもじゃ。よいベッドであった……………しかし、この小汚い男と同じものが用意されているとはな……………」

「……………」

「どうなっちゃうの？」

国王のその言葉に誰もがゴクリ、と息をのんだ、そのときだった。「恐れ入りました!!!」

「『ええええ!!』」

なんと国王はリツカの前で、土下座をしたのだ。一国の王らしくないその行動に、フィリス一行だけでなく、リツカも驚いている。

「ちよ、ちよつと王様！ そんな、やめてください!!」

「……客を分け隔てなく扱うとは、なんとたる心意気！ 関心したぞリツカ！」

「へ？」

囚人風の男がそう口を開いたので、その場にいた一同が口を開ける。そんな一同の前で囚人風の男は一瞬で、立派な身なりの男性に変身した。その顔や風貌に見覚えのあるフィリス達は、席を立ち上がり声を上げた。

「『あーっ!!』」

「え、えええ!!? うそお!! お……王様が、ふたり!!」

「ワシこそが、本当のセントシユタイン国王。その者はワシがやとった偽物じゃよ。ほっほっほ……!」

「なんつーこつた……」

この真実に対し、一部始終をみていたフィリス達はただただ呆然としていた。まさか国王が変装をして人を試そうとしていたなど、誰も想定していなかったからだ。国王はこの宿にフィリス達がいたことにも気付いていたようであり、大きく笑いながら、審査の結果を話し始めた。

「だまし討ちのようなまねをして、すまなかったな。しかし！ お主の宿は完璧であったぞ！ もてなしの品も最高！ もてなし方も最高！ まさに最高の一日じゃったよ」

国王はリツカの応対や宿屋のクオリティを高く賞賛した。

「それでは、審査の結果を楽しみに待つがよい！ ぐっ苦勞であったな、リツカよ」

「は、はい！ ありがとうございます！」

そう国王は高らかに言い放つと、偽の国王を連れて宿屋を出て行った。リツカはすぐに我に返り、頭をぺこりと下げてお礼を告げた。

「なんとまあ、この間も思ったけど、ホントに行動力のある王様だよ

な」

「うん」

フィリス達はそう国王の行動に対する感想を口にしており、その一方でルイーダはため息をついていた。そのためいきは結果に対するものなどでは決してなく、自分の考えが的外れだったことに対してである。

「あなた達にはみっともないところ、見せちゃったわね……。私の言うこと、全部裏目だったんだもの」

「いやいや、あたしすらも全然気づかなかったし……。なのにルイーダさんだけを攻めるのはお門違いでしょ」

そうフォローをするフィリス達に救われたのか、ルイーダは静かにほほえむ。そして、国王からほめられて一安心し微笑むリツカに対し、ルイーダもまた笑みをこぼしたのだった。

「でも、驚いたわ。リツカに宿屋のオーナーとしての力があんなについていたなんて……」

「元々、リツカはいい子だから……。ちやんと力を手にすることができたんだとおもうし、それを発揮できて認められたんじゃないかな？」

「……ふふっ……。もう彼女を子供扱いできないわね」  
「そうですね」

ルイーダは自分のやっていたことや気にしていたことが取り越し苦労だったと実感し、笑ったのだった。

「あたし、これからもリツカを応援するぜ！」

「ありがとう、フィリス」

フィリスの裏表ない言葉と笑顔に、リツカも明るい笑顔で返したのだった。

## 27 「宿王をめざせ！ 後編」

宿王グランプリが開催されることになり、リツカが審査員をしている国王をもてなし、高評価を受けたその翌日のこと。セントシユタイン城下町の人々の依頼を受けていたフィリス達の耳に、結果が届いたという報告が届いた。

「え、もう結果が出たの!? はやつ!」

「うん……わたしもまさか、こんなに早く結果がでるなんて思わなかったからビックリしちゃった。ちよつと緊張するけど、みてみるね」

「おう」

フィリスがそう返事をする、リツカは結果の通知を開いて内容を読み上げる。

「宿王グランプリの審査の結果。リツカ様……あなたの宿屋は……お見事！ 宿王グランプリ決勝戦への参加を認めます！」

「……!」

「キヤー! やったあ!」

その結果をきいたフィリスは目を丸くし、リツカは飛び跳ねて喜んだ。すぐにフィリスも笑顔になり、リツカに祝いの言葉を伝える。

「やったな、おめでとうリツカ!」

「ありがとう、フィリス! 本当にみんなのおかげよ! それじゃ続きを読みむね」

どうやらまだ、その通知には続きがあるらしい。リツカは引き続き文章を読み上げる。

「……あなたの宿屋はすばらしかった。しかし……! オーナーが宿王たることを証明し、初めて栄光のトロフィーを手にするのできるのです! 参加オーナーはパートナーを選び、セントシユタイン城玉座の間までお越しください」

「いわゆる、決勝戦だな」

「ですね」

その内容を読んだりリツカは、笑みを浮かべると自分のパートナーは誰なのかを発表する。

「ふふふ、わたしのパートナーはもう決まってるわ！　もちろん、フィリス！　あなたよ！」

「あたしかっ」

「これまで、陰でこの宿屋を支えてきてくれたんだもん。　フィリスしか考えられないわよ。　あ、でも！　もちろん、みなさんにも感謝しているよ」

「気を遣うなよ、その気持ちだけで十分だからな」

フィリスだけでなく彼女の仲間にもフォローをかけるリツカ。

そんな彼女の優しさに気付いている3人はそういつて、リツカに笑いかける。

「どう、フィリス。　わたしのパートナーとして、一緒に宿王目指してくれる？」

「もち、親友の頼みはよろこんで聞くぜ！」

そんなリツカの頼みを、フィリスは喜んで聞き入れる。　自分の頼みを聞いてくれたフィリスに対しリツカはありがとう、と返事をし、早速決勝戦の行われるセントシュタイン城へ向かおうという話になった。

「とりあえず、あたしが代表でいつてくる」

「おう、オレ達はここで待つてるからな！」

「くれぐれも粗相のないよう、お願いしますよ」

「こうなったら、優勝をしちやいませよ！」

そう、仲間たちの激励を受け、フィリスとリツカは宿屋を出て行った。

「さ、いこうぜリツカ」

「うん！」

宿王の座を、勝ち取るために。

そして、セントシュタイン城の玉座の間。　そこにはセントシュタイン国王とフィオーネ姫。　そして、宿王グランプリの決勝戦まで勝

ち抜いた3つの宿屋の代表オーナーと、そのパートナーが並んでいた。

「全員、集まったな」

宿王グランプリを勝ち抜いたものがそろったところで、国王はコホンと咳払いをし、開催を知らせる。

「それでは、これより……宿王グランプリ決勝戦をはじめる！」

「ワーツ！」

そしてセントシユタイン国王は、参加しているオーナーを次々に紹介すると、ルールを説明する。

「……では、宿王グランプリ決勝戦の、内容を説明しよう。各オーナーはパートナーとともに、配布された地図の洞窟にはいり……おぬしの宿屋にとつてもつとも大切だと思ふものを手に入れてくるのじゃ！」

「……たいせつなもの？」

「流石にこれだけでは難しいから、ヒントをやろう。今回の答えはズバリ、アイアンブルドーという魔物が握っておる！ 20匹くらい倒せば、おのずと答えは見つかるであろう」

国王は今度は、各オーナーのパートナーに目を向けた。

「それから、パートナーの諸君！ 今回のグランプリはそなたらが勝敗のカギを握っておる！ 戦いの中でそなた等が力つきてしまつてはもろろん、大切なものは手に入らん！ オーナーと力を合わせ、グランプリを勝ち取つてほしい！ それでは、健闘を祈る！」

そう、国王は告げると、サンマロウの宿屋のオーナーとそのパートナーとともにいの一に城を飛び出していき、自分達の近くにいたある人物が、リツカに声をかけてくる。

「リツカ……いや、リツカ様」

「へっ？」

「あなたのおじいさまの手により、宿屋マシンとなったこのニード……宿屋にとつて大切なもの……つまり、誰よりも高価なお宝を手に入れて、ここに戻つてきます。この勝負、ボクがいただきましたよ」  
そう堂々と語る相手は、あのニードだった。ニードはリツカにそ



う宣戦布告をすると、パートナーであるリツカの祖父とともに城を出て行った。残されたフィリスは、リツカにあの人物はニードだろうかと確認をとる。

「あいつ……ニード、なんだよな」

「まあ、ニード、だよな」

「キャラ違うな」

「うん」

そう、今のニードの姿に対し微妙な気持ちになりつつも、国王の言葉通り、配布された地図の洞窟にいるアイアンブルードと戦おうと決める。

「そんなに単純な問題とは思えないけど、考えていてもはじまらないし、わたし達もいきましようー」

「ああ！ 内容が戦闘だというなら、あたしらの本領発揮だからな！」

宿の仕事はあまりきれいにこなせる自信はないが、魔物と戦っているという話であれば、フィリスの得意分野だ。早速フィリスとリツカは城を出ると宿屋に戻りアイアンたちと合流し、事情をはなして一緒にきてもらうことにした。

「つまり、指定された魔物を倒していけばいいんだな」

「戦いは得意だから、私たちもお手伝いできるわね」

「大切なもの……みなさんで力を合わせて、みつけましよう」

ちなみに、パートナーがパーティをつれていても大丈夫かと国王に確認したところ、Okだそうだ。こうして、準備を整えた4人は、国王に渡された地図を頼りに洞窟を探し、それを見つける。場所は、セントシユタインとエラファイタ村をつなぐ道の途中だ。

「ここが、アイアンブルードのいる洞窟だね」

「みたいね」

「まああの時みたいに、戦闘はあたしらに任せておけよ！ リツカのこともちろんと守るから、安心していいぜー！」

「うん、フィリスならどんな魔物が出てもお茶の子さいさいだよな！」

「へへ、トーゼン！」

リツカは一度フィリスたちと共にこういう洞窟にはいり、その戦い

ぶりを目の当たりにしている。だからこそ、彼女達の強さも知っているし、どんな場所でも安心して突き進める。

「早速出たわよー！」

「よしきたっ！」

早々に、アイアンブルドーの群が現れ、4人はリツカを守るようにして武器を構える。まずはクルーヤがイオナズンを放ちアイアンブルドーを足止めし、イアンがなぎはらい、フィリスがギガストラッシュを放って一掃する。

「リツカさん、あぶない！」

「キャツ……」

「ドルマドンツ！」

1匹のアイアンブルドーがリツカに向かって突進しかけたが、直前でセルフィスが攻撃魔法を放ったことでアイアンブルドーの息の根はとまり、倒される。すると別のアイアンブルドーが、彼らに気づき敵意を向けてきた。

「フィリス！」

「はあーっ!!」

そこでクルーヤのバイキルトを受けたフィリスが力強く剣を振るい、アイアンブルドーを切り裂き、倒した。

「いっちょあがり、てな！」

そういつてフィリスは、鞘に剣を納めて笑って見せた。そんなフィリスの戦いを目の当たりにしたリツカは、すごい……と言葉を漏らした。

「ふう……だいぶ奥まできたわね」

そして、アイアンブルドー含め多くの魔物との戦闘を繰り返したフィリス一行。魔物の気配がなくなちようどいいスペースが見つかったところで少し休憩をとることにし、4人はリツカが持ってきていた水筒に入っていたスープを口にした。冷たいコーンスープが、戦いで火照った体にはちようどよい。

「例のアイアンブルドーですが……。おそらく、王様が言っていた

とおおり、20体ほど倒したでしょう」

「……でも、なんにも手に入らない……わたしじゃ、ダメってことかなあ……」

先程戦ったのでちょうど、国王の言っていた数だけの魔物を倒したことを確認する。だが、アイアンブルドーの隠していたまじゅうの皮や、レアのものであろうプラチナこうせきは手には入ったものの、どれもいまひとつピンとこない。

「お父さん……お母さん……ごめんね……わたしじゃ、宿王になれないみたい……」

「……リツカ……」

ここまでやってきて、なにも結果が出ないことにたいし、リツカは自信をなくしていた。そんなリツカに対し、フィリスは自分の考えを口に出す。

「いいじゃないか、称号にこだわらなくても」

「え？」

突然口を開いたフィリスにたいし、きよとんとするリツカ。そんな彼女に、フィリスは引き続き話をした。

「たとえ今回の宿王グランプリに勝てなかつたら、あたしはずっとリツカの味方だし、あの宿屋は最高だと胸を張って行って、いつだって利用するつもりだぜ」

「優劣とか順位とか……そんなにこだわってるヤツがいいものなんて作れないだろ？ リツカちゃんが宿王になりたい理由と気持ちもわかるけど、オレは今のままでもぜんぜんいいと思うぜ」

「そうそう！ それにもしも今回がダメだったとしても、次回、リベンジすればいいだけよ。今回だけの結果がすべてじゃないわ、何度でもいけばいいわよ！」

「あなたのお心遣いは、このように僕達でなく……今まであなたと出会った方々、そして、あの宿屋を利用した方々にはしっかりと伝わっていますよ」

クルーヤは明るく前向きな言葉をかけ、セルフィスはリツカに淹れてもらったスープを飲みつつ微笑む。そんな彼らをみたリツカは、

小さくほほえむ。

「ふふ……そうやってあなた達は一緒に頑張ってきたんだね！ その気持ちも伝わってくるもの、わかるよ！ だから、あんなに強くて恐ろしい魔物ともわたりあえるんだ……ホントにファイリス達はすごいね！」

「へへっ」

「やっぱり、パートナーにファイリスを選んで正解だったわ。ありがとうね……ファイリス」

そう、ファイリスの存在の大切さを改めてかんじたりツカはその思いを口にする、あることに気付く。

「……そうか……！」

「え、なに!?!」

「ファイリス、わたし、わかったの！ わたしの宿屋にとって大切なものが！ 今、手に入れたわ！」

「まじか！」

「まじよ！ さあお城に戻りましょう、宿王グランプリはいただきよっ！」

さきほどまでの自信喪失した気弱な姿はどこへやら。 そんなリツカの姿に対し、4人は笑みを浮かべる。

「元気が戻ってよかったな」

「うん！」

「話が決まったなら、ここはさっさと帰っちゃいましょう！ リレミトで！」

そういつてクルーヤはリレミトを使い洞窟を出て、ルーラでセントシユタイン城へ戻り、そこで一旦仲間たちと別行動をとる。 そのとき仲間たちはリツカに激励を送り、それにたいしリツカは笑顔で頷いて答え、ファイリスは彼女を守るようにいつていつた。

「ほかのチームも戻ってるな」

「そうみたいね」

そして、玉座の間にたどり着いてみるとそこには、ニードやサンマロウのオーナーの姿もあった。 この2人のほかにリツカも戻って

きたことで、宿王グランプリの決勝戦参加者がこの場に全員そろったことを、国王は確認する。

「……うむ……これで全員、帰ってきたな」

そういつてうなずくと、国王は彼らに号令をかける。

「みななもの、ご苦労であった！ 宿屋にとつてもつとも大切なもの、見つけてきたようじゃな！ それでは一人ずつ、持ってきたものを見せてもらおう！」

国王のその言葉に対し、ふたつの宿屋のオーナーがそれぞれ、答えを口に出す。

「はいっ！ わたくしの答えはアイアンブルドーが落とす、このまじゅうの皮です！ パートナーのバカ息子の力など借りずにこのまじゅうの皮をとつて参りました！ えらいでしょー！」

「はいっ！ 宿屋マシンと化したボクの答えはこれです！ プラチナこうせきでございます！ これは中々ヤツも落とさない高価なレアものでございます！ かなりのゴールドになりますよう……宿屋にとつて大事なものは、やはりゴージャス感でございます！ お客様はそれを求めているのです！」

2人が主張したのは、それぞれアイアンブルドーの落とすものだった。 それだったら自分達もいっぱいゲットしたわ、とフィリスが心の中でツツコミを入れる中、国王は2人の主張にたいしこたえる。

「ふむ、ロンサンもニードも、大儀であったな。 して、リツカ。 そなたの答えを示すとよい」

「……………」

リツカは真剣な顔つきで、前に出た。 その表情も姿勢も、堂々としている。

「……王様。 わたしの宿屋にとつて大切なものは、形あるものでもお金でもありません」

そして、答える。 自分にとつて宿屋に大事なものの答えを。

「フィリス達と一緒に洞窟の中を冒険していて、気がついたのです。 わたしにとつて大切なものは、わたしを支えてくれる仲間達……。

フィリス達はもちろん、ルイーダさん、ロクサーヌさん、レナさん

……誰一人欠けても私の……リツカの宿屋は成り立ちません！」

そう答えるリツカ。そして沈黙が訪れ、ある人物が口を開く。

「見事じゃ、リツカ！」

「!?」

「お、おじいちゃん？」

突然口を開いた祖父に、リツカは驚く。その場にいた皆も、全員その老人に目を向ける。ただ、国王はそちらを見ていた。

「客をもてなす心、そして仲間への思い……どちらが欠けても、宿王とは呼べない。そうであつたな……会長？」

「か、会長おおおーっ!!!?」

国王がリツカの祖父をそう呼んだことにたいし、その場にいた者達は驚きの声を上げた。

「お、おじいちゃんが……会長？」

「う、ウソだろ、おい!」

その事実に対し、実の孫娘であるリツカも、鍛えられていたニードも素を出して驚いていた。

「その通り。わしこそが世界宿屋協会の会長じゃ。今まで黙っておつてすまなかつたな」

「……………」

「それにしてもリツカよ。おぬしの答えは完璧じゃ。よくぞ……そのことに気付いたのう……」

そう会長は言うのと、国王とアイコンタクトをとった。それを受け取った国王は頷くと、大きな声で結果を発表する。

「それでは、以上の回答をもって、今回の宿王グランプリは決した！宿王グランプリの栄光を手にしたのは……セントシュタイン代表、

リツカの宿屋オーナー・リツカじゃ！」

「……………!!」

「やったあ！」

「ワアアア！」

その結果に対し紙吹雪が舞い上がり、歓声が上がり、ファンファールが鳴り響く。リツカは目を丸くし、今も自分の優勝が信じられないように口を手を当てており、フィリスは素直に彼女の勝利を心から喜んでいた。

「さあ、トロファイーを受け取るがよい！ 父リベルトも手にした、宿王のトロファイーを！」

「ありがとうございますー！」

やがて自分が優賞したのだと実感したリツカは、涙目になりながらもトロファイーを受け取った。そして国王は、ここに宿王が誕生したことを告げる。

「今、ここに新たななる宿王が誕生した！ 宿王リツカに、盛大な拍手を！」

国王の言葉に応えるように、その場に拍手が鳴り響く。そんな中、フィリスはリツカに笑いかけながら

「やったな、リツカ！」

「うん、フィリスのおかげだよっ！ ホントに、ホントにありがとうっ！！」

その言葉と共にリツカは喜びのあまり、フィリスに抱きついた。

フィリスはリツカをしつかりと受け止める。

「やったわね、リツカ。おめでとう」

「ありがとうございますー！」

そうして皆に祝福されながら2人は宿屋に帰っていき、そこではリーダー達がリツカの優勝をお祝いしてくれた。そこにはフィリスの仲間達の姿もあり、彼らもまたリツカのことをお祝いしてくれている。そんな、お祭りみたいな雰囲気の中、リツカはふとあることを思いつき、先程受け取ったあるものをフィリス達に差し出す。

「そうだ！ さつき受け取った副賞の杖なんだけど……あなた達が持っていてくれないかしら」

「え、いいのか？」

「うん！ 今回の優勝は、あなた達がいてくれたからだもの……その感謝の気持ちよ。それに、わたしよりあなた達が持っていた方がい

いだろうし」

そういつてリツカは、国王から受け取った副賞の杖を彼女達に見せる。

青い宝石に翼のような金色の装飾を持ったその美しい杖は、光の杖と呼ばれるらしい。その杖に興味を示したのは、クルーヤだ。

「……私なら、なじめそう……」

「そうね、杖と言えば魔法……卓越した魔法の力を持ったあなたなら、使いこなせそう」

「そうですね！ だからこれは、あなたが使つて！」

「うん、大切に使うね！ ありがとう！」

その杖をクルーヤは嬉しそうに受け取る。そして、軽く掲げてみる。その姿は不思議としっくりくる。そんな彼女達の姿を見ていたリツカは、自分の決意を語る。

「わたし、これからも自信を持ってこの宿屋を守っていくわ。そして、多くのお客さんをもてなして、誰でも穏やかな気持ちで楽しむことができる、立派な宿屋にしていく……これが、わたしの新しい夢よ。

だから、見ていてね……お父さん、お母さん」

そう、リツカは星空を見つめながら呟いたのだった。

その星空のもと、セントシユタイン城では新たな宿王の誕生を祝う宴が夜通し行われたのだった。



## 28 「旅を続ける理由」

フィリスの協力のもと、リツカは父の遺志を継ぎ、新たな宿王となった。その祝宴の翌日、フィリス達は一気に大忙しとなったリツカの宿屋を手伝い、夜になったときにフィリスはリツカと2人きりで話をする。

「今日は手伝ってくれてありがとう、フィリス。 おかげで助かった」

「いいんだよ、リツカの力になれるんだったら、あたしも働いた甲斐があるってもんだ」

宿屋の裏の席でリツカとフィリスは、お茶を口にしながら今日一日を振り返った。 フィリスがやっていたのは、主に客寄せと、失礼を働いた人間に厳重に注意をすることだ。 時にリツカの話聞いた男達が、リツカに告白をしてきたが、そのものもフィリスが追っ払った。

「にしても、今日あたしがおっぱらったナンパ野郎……マジで腹立ってたな。 リツカも、ああいう奴に流されちゃだけだぜ？ 今後もしそういうことがあつたら、ちゃんとあたしに教えろよ？」

「大丈夫だよ、わたしには心強い味方がいっぱいいるもの。 この宿屋にも、それに、あなたもね！」

「うん、よろしい！」

そう楽しく笑って見せつつ、フィリスは用意された紅茶を一気に飲む。 そんなフィリスの姿を見て、リツカは思ったことを口にする。

「おもえば……初めてあつたときから、ずっとそうだよね」

「へっ？」

「……この宿屋をつぐ決心をしたときも、ちよつとした悩みも、ハプニングも……そして、この宿王グランプリでも。 わたし、ずっとフィリスに助けられっぱなしだなあ……て、おもったんだ」

リツカは気付いている。 フィリスはこの宿屋この国だけでなく、広い世界を旅してはそこで起きている問題を解決していることを。

そんな人物が友人であることをリツカは誇りに思うと同時に、自分と違う世界の人間だと感じていた。そんなリツカの心情に気付いたのか、フィリスは目を細めながら口を開く。

「これでも、あたしはあんたに恩返しがしたいと思つてたんだ……」

「恩返し？」

「ああ。さつきあんたはさ、あたしに助けられればなしつて言つたじゃないか。でも、先にあたしを助けてくれたのは……リツカ、あんただよ」

「……」

「恩の大小の問題じゃない。死にそうなくらい傷ついて、ひとりぼっちになっていたあたしを、あんたが助けてくれなかったら……あたしは、今ここにいないんだよ」

そもそものはじまりは、リツカが傷ついたフィリスを見つけて献身的に助けてくれたからだ。あの出来事があつたからこそ、フィリスは同胞かから離れ孤独になつたという、絶望から立ち上がることができたのだ。もう一度、進もうと決めることができたのだ。

「だから、あたしはあんたと……そして、多くの人を助けたいって強く思つたんだ。助けてくれた恩を、そうやって返していきたかつたんだ。今もリツカはこうやって、あたしを、仲間ともども実家のように迎えてくれるだろ。それも、ありがたいんだよ」

フィリスのその言葉を聞いたリツカは、クスリとわらいながら、今もフィリスに優しくする理由を口にする。

「フィリスって、どこかお人好しな感じがして……わたしもほっとけないんだよ」

「はは、お人好しかあ……。それ、あいつらに言われたよ」

苦笑して頭をぽりぽりかきつつ、仲間について話すフィリス。

「あたしも、仲間はとつても大切なものなんだ。正直あたしの旅つて、あたしの使命という方が正しいものがあつて……ムチャぶりばかりっていうか……普通じゃ経験できないような内容のモンなんだよ。

結構過酷で、難しいことばかりだ」

「……そんな大変な……ううん、大変なんて言葉で片づけられないも

のなんだ」

「そうだな」

本当に、人間が経験できるはずのない旅。そして、当時の自分の正体。そのすべてを信じてもらえないとフィリスは覚悟を決めて打ち明けた。自分のことを信じられなくても仕方ないし、それで離れられても自分にそれを咎める権利はない。一人旅も、覚悟していた。実際に体感してみて、今思うのは、その旅は過酷なものであったのに違いないのだから。

「けど、みんなあたしの過酷な旅に、つきあってくれた。あたしの事情を聞いてくれた。あたしのすべてを知った上で今も、あたしと旅を続けてくれてるんだ……。イアンもセルフィスもクルーヤも……。ホントに信頼できて、大事な仲間だよ」

「……仲間……」

リツカは、宿王グランプリを通して、ともに働く仲間の大切さに気付いた。きっとそれは、フィリスも同じなのだろう。

「じゃあ、フィリスにとってみんなは宝物なんだよね」

「そうだなー」

リツカの言葉に対し、フィリスはにっこりと笑った。

一方イアンは、宿屋の仕事が一区切りついたところで、次の旅のために店で道具の買い出しをしていた。

「よし……これだけあれば自分、長旅に耐えられるだろ！……お!?」

無事にその買い物も済み、仲間達との合流ポイントである宿屋へ帰ろうとしたイアンだが、そのとき見覚えのある姿を発見し迷わずその男に駆け寄る。

「ハオチュン！ ハオチュンじゃねーか！」

「イアン」

その男というのは、イアンの兄弟弟子である、武道家のハオチュンだった。2人は久しぶりに顔をあせ、言葉を交わす。そのときにハオチュンは最後にイアンと会ったのは、ドミールの里だったと言う。

「そういえば、ドミールの里で顔を合わせて以来……だったか？ あ  
のときお前は急いでいたようで、まともに会話はおろか挨拶もできな  
かったな」

「ああ、わりい……オレも色々あつて、大変だったからよ……。今  
は、平和になったから、余裕ができてるけどな」

ドミールの里でファイリス達と合流するまで、イアンは帝国にとらわ  
れ牢獄で奴隷として働かされていた。その中で敵兵に変装し里に  
攻める隊の一員として紛れ込み、隙をついて変装を解いてファイリス達  
と合流したのだ。そのとき偶然にも戦線をともししていたハオ  
チュンと、一応は再会をしたのだが、状況が状況だったのでまともな  
会話もしていない。今こうして対話をしているのが、2人にとって  
は本当の再会である。

「でも、オレはまだ旅を続けるよ。そうする理由つてもものもあるし  
な」

「ファイリス達のことか」

「ああ……」

くしや、とイアンは自分の金髪をつかみ、笑みを浮かべながら話を  
続ける。

「オレの贖罪……つっていいのかわかんねえけどよ。あいつらと  
一緒に戦い続けていて、そんで多くの人を助けて守つていつて……自  
分のやつちやったこととかと真剣に向かい合うようになったんだよ」  
「……………」

「ま、オレがファイリスに興味を持ったのは成り行きみたいなものだけ  
どな……。そのあとでセルフイスやクルーヤと会って、いまの4人  
で旅をしてるんだけどよ。お前も遭遇したとおもうけど、オレ達の  
旅って普通じゃねーぜ」

「確かに、あのあとも大変だったからな……」

ドミールに帝国の兵士をかたる魔物が攻めてきたときのことを思  
い出すハオチュン。彼は里を守るために魔物と戦い、敵を退けたの  
だが、あんなに激しい戦いは下手をすれば初めてかもしれない。そ  
の後、ガナンが敗れたという話を聞き、ハオチュンは彼らがやったの

だとすぐに気付いた。

「こういうのもなんだが」

「ん？」

「今のお前は……不良時代や私と修行をしていたときよりもずっと、生き生きとしているように見える」

ハオチュンの言葉を聞き、イアンは目を丸くしていたが、やがて柔らかな笑みを浮かべていく。その表情の変化をみたハオチュンは、やはりイアンに変化があると気付いた。

「……そう、なんだろうな……」

「やはり、彼女たちの力か」

「ああ。昔のことはふれたくねーけど……さ」

イアンは腕の装備を直しつつ、目を細めてフィリス達の顔を思い浮かべる。

「修業時代がイヤだったとか、そんなことは全くなかったんだけどよ……でも、今あいつらといるのが、本当に楽しいんだ。オレの居場所はそのこだ、と思えるようになった。今オレは、罪滅ぼしとか己を高める以上に……あいつらのために強くなりたいって思えるようになったんだ」

「そうか」

「だからさ、ハオチュン」

「なんだ」

そして、イアンはハオチュンの方を向いて照れくさそうに笑いながら、彼にある伝言を託す。

「超天老師様に伝えてくれよ。オレは……あいつらと旅が出来て、幸せを覚えてるってさ」

「それは、お前の口から直接伝えろ」

「えっ」

ハオチュンの言葉に対し、イアンは目を点にする。そんなイアンにたいし、ハオチュンはある老人をイアンの前につきだした。その老人をみたイアンは、飛び跳ねて驚く。

「ちよ、ちよーてんろーしさまあ!？」

「ふおつふおつふお。 久しぶりじゃないアンよ」

まさか師匠がそこにいるとは思っていなかったイアンは照れながらも、挨拶と先程ハオチュンに託そうとしていた伝言を、直接本人に伝えることになったのだった。 そのときのイアンは、顔から火がでていたそうなの。

一方、セントシユタインの教会では、セルフィスがお祈りをしていた。

「……今更ながら……この世界をつくりし神は、 はずこにおられるのでしょうか……」

そのお祈りを終え、セルフィスは教会を出てそばのベンチで腰掛けしていた。 神父やシスターには前に倒れたとき、助けてくれたことにたいし礼を言い、穏やかな時間を過ごしていたが、そこでふつとセルフィスは、思ったことを口にする。

「……女神様は、この世界が残っているから死んではないとおっしゃってた……。 しかし、どこにいるのかは未だにわからないまま……神に創られ役目を終えた天使達は星となった……。 なのに、今も世界は残り平和になっても、神はまだ気配すらみせない……」

セルフィスが抱いていた疑問は、この世界を創ったとされる神・グランゼニスのことだった。 元凶もさり女神も目覚め天使が役目を果たしたにも関わらず、未だにその存在を天に見せない神。 死んでいないのなら、どこにいるのだとおもいはじめたのだ。 もしや、その神を見つけたしよみがえらせるのも、自分たちのつとめであり使命だろうか。

「セルフィス、 いた!」

「おや、 クルーヤさん」

今後の旅の方針にセルフィスがひとり、 思いを馳せていると、自分の存在に気付いたクルーヤが駆けつけた。 どうしたのだろうかと首を傾げていると、クルーヤとともに意外な人物が現れたので、セルフィスは驚く。

「あ、 義兄上!?!」

「体調はいかがですか、セルフィス」

それはセルフィスの義兄であるルーフィンだった。何故ここにいるのか理解が出来ないセルフィスに、ルーフィンが事情をかたる。

「実はね、君達に贈り物を預かっていたんですよ」

「贈り物？」

「これです」

そういつて、ルーフィンは黒い布に包まれたものをセルフィスに差し出した。彼に渡された布をセルフィスがといてみると、そこには翼のような装飾が施された美しい弓があった。

「これは……弓、ですか？」

「エルクが、今回の自分の学説を裏付ける手助けをしてくれた礼に、きみに渡してくれとおっしゃってたんです」

「エルクさんが？」

「天使の弓と呼ばれる代物だそうですよ」

その弓をみたクルーヤは、先日リツカにもらった杖を見つめる。そして、ファイリスが持っている形見の剣、イアンがサンデイからお礼としてもらった棍を思い出し、この弓もそれらと同系列だと気付く。

「この杖とおなじものかもしれないわね」

「確かに……ですが、こんないいもの……僕がもらってもいいんでしょうか」

「エルクは、戦う力がない自分が持っていたても価値がさがるだけだと言っていましたよ。だから、戦う力がある君に、託すことを決めたいんですよ」

セルフィスは弓を握りしめると、ほほえんだ。

「義兄上……ありがとうございます。この弓を僕は受け取ったと……エルクさんに伝えてください」

「まあ、伝えますよ。また会えたらですけどね……。では帰るとしましょう。クルーヤさんも、ここまでご案内していただき、ありがとうございます」

「いえいえ、お役目はたせてよかったです！」

どうやらクルーヤは、ルーフィンをセルフィスのところまで案内す

るために彼とともにいたようだ。そう軽く言葉を交わし、ルーフィ  
ンが立ち去ろうとしたとき。

「セルフィス」

「はい？」

「……ぼくは、あの町を……ベクセリアを守るリーダーは、君がふさわ  
しいと思ってるよ。ぼくよりも、君がふさわしいだろう……と」  
「……………」

それだけをセルフィスに告げ、ルーフィンはキメラの翼を使ってベ  
クセリアに帰っていった。残されたセルフィスは呆然としていた  
ので、クルーヤがそれに気付いて声をかけてくる。

「なんか、難しいことを考えていたんじゃないの？」

「……そうみえますか？」

「うん、だって眉間にしわの後がのこってるわよ」

クルーヤに指摘され、セルフィスは自分の眉間をさわる。そんな  
わかりやすい反応に対しクルーヤはクスクス笑いつつ、セルフィスに  
考えすぎはよくないと告げる。

「なにに悩んでいるのかわかんないけど、悩みすぎはよくないわよ。  
ムリしないでほしいわ」

「そういうわりには、僕がなにを考えていたのか、聞かないのですね」  
「……そうね。だって、あなたの話を聞いても私にはわからないか  
もしれないし……むやみに聞くのは、あなたの負担にもなりそうだも  
の。だから、あなたが自分から話すまで待つてみようと思うわ」

そう言つて、クルーヤは光の杖をみる。

「私は今ね、あなた達と一緒にいることだけに集中したいの。その  
ために魔法をもつとうまく使いたいし、この力は正しいことに使いた  
い。そのキモチは、世界が平和になっても変わらないわ。平和だ  
からこそ、それを乱す奴は懲らしめなきゃいけない……。守るため  
の力をたもったり高めたりするのが、今の私に出来るすべてなもの」  
「……………」

「だからね、セルフィスも頭が良すぎて色々考えすぎちゃうのかもし  
れないけど……今を大事にして、そしてできることをやっていけばい



いと思うの。その積み重ねがきつと、もつと先の悩みを解決させるための力になると思うわ」

途方もなく謎が多すぎることをばかりにとらわれて、簡単なことを見落としてしまう。今日の前にいる大切な存在、自分にとってなにが大事なのか、何故謎に対し頭を抱えていたのかそのきっかけ。それをセルフィスは、神の存在の有無で忘れかけていた。

「……僕は、フィリスさんやみなさんのために、難題を自分に押し掛けていたのですね」

「そうみたいね」

「でも、今このときに……貴方達と正面でむかいあえないのに……貴方達のためだなんていえませんね。言ったら、僕はただの愚者でしょう」

セルフィスは小さく笑いつつ、彼女に宿に帰ろうと提案する。

「クルーヤさん、宿屋へ帰り、フィリスさんやイアンさんと合流しましょう。そして、これからのことをお話ししましょう」

「ええ、そうね！ みんなでちゃんとはなしたほうが、いいことがあるに違いないものね」

クルーヤも、笑顔でそう答えた。

そうしてリツカの宿屋に集結した一同。リツカが用意してくれた部屋でシャワーをあげ気分もすっきりしたところで、今後の目的を語り合う。

「次は何のために旅をするか、ねえ……」

「はい、僕……そのことでみなさんと改めて、話をしてみたいと思ったのです。今までのように依頼をこなしていくのもよいのですが……あてもなくは少し、今後旅を続けるには厳しいかと……」

「唐突だな」

イアンの率直な言葉に対し、セルフィスはすみませんと返しつつ、ずっと思っていたことを口にする。

「……このままで、いいのか……と、僕は思ってしまったのです。今までは、フィリスさんが天に帰るためとか、女神の果実を探すため、仲

間を捜すため。そして、ガナン帝国の野望を止め、世界を救うため。  
「このように、皆で旅をする理由がありました」

「……ああ、そうだな……」

「ですが、今の僕達はそんなに、目的はありません。宝の地図を巡るとか、その宝石を完成させるといふものはありますが、それでは曖昧で、旅の理由にはなりません」

ぎゅ、とセルフィスはくんでいた自分の両手に力を入れた。

「……セルフィス？」

「……情けないと思うかもしれませんが、僕は……このメンバーで旅を続けたい。だけど、どうしてこの4人で旅を続けるのか、その理由や意味がないと……このままでいいものか、と……僕は、不安を覚えるのです」

「不安？」

「はい……今まで神に祈ることで気を落ち着けてきましたが……その神もいまはどこにいるか、わかりません。その神のおられるところを見つけることを使命にするべきか、そのために自分でどうすればいいか、迷うのです。僕はこのままでいいのか……と」

そして、セルフィスは内心でなにを抱えていたかを打ち明ける。

「やるべきこと、目的……それがわからないままにいるのが不安です。だけど、僕は、それでも……貴方達と離れたくない。あてがなくとも、旅を続けたいのです。こんな甘えた考えで……いていいはずはないのにそうしたい。その矛盾を、僕はずっと抱えています」

「なんだ、そんなことだったのね」

「え？」

セルフィスが打ち明けた不安に対し、クルーヤはセルフィスがなにに思い悩んでいたのかに気付いて、そう答えた。

「神様がどこにいるのかわからない、探すべきなのか……それを理由にした方がいいし、それを理由にあたし達と一緒にいたいなら、いつそそうちやえばいいじゃん」

「そうだな、神が関わるなら、いまやオレ達も他人事じゃねーし……目的の一つにするのも悪くない。特にセルフィスは信仰心が強いか

らな、そういうの気にしているとしても、それを否定する気はねーよ」「でもそれ以上に、あなたが私達と一緒にいたいと思ってくれてるこ  
とがうれしいのよ。 私達も、あなたといたいもの」

フィリス、イアン、クルーヤがそれぞれ、セルフィスの考えに対す  
る答えを口に出していく。そして、フィリスがまた口を開いた。

「あのさ、セルフィス」

「フィリスさん」

「……思えば、あたしがみんなを、あたしのワケわからん事情に巻き込  
んだといつても過言じゃないんだ。 でも、イアンもセルフィスもク  
ルーヤも、あたしを信じて、あたしときて……一緒に旅をして戦って  
くれただろ？ んで、今もあたしのあてのない旅についてきてくれて  
る……。 そこまでの道に、あたしとの旅に……。あんだ……。後悔、し  
てるか？」

「……！」

フィリスのその言葉に対し、セルフィスは首を必死に横に振った。

「していません！ 貴女は、僕の故郷を救ってくださったから……。姉  
上を失い悲しんでいた僕を立ち上がらせてくれたから！ なにより、  
貴女の正しさをこの目でみて、知ったから……。僕は、貴女を信じたい  
と、ともに行きたいと思っただけです！」

「……だろ？ だったら、それでいいんだよ。 これからも」

フィリスはセルフィスと向かい合って、笑って言う。

「神様を捜すもよし、宝石をさがすもよし、いろんな依頼を聞くもよし  
！ まあぶつちやけ、今までとたいして変わんないし、不安にさせた  
り迷わせるだろうけど……はつきりしつかり、約束できることはある  
ぜ」

「……？」

「あたしは絶対に、あんだ達を裏切らない！ そして、あんだ達があた  
しを裏切らないって信じる！」

「フィリスさん……」

「あたしも賢くねーけど、単純でもやらないよりマシだろ。 だから、  
今はあたし達が曲がらないって信じてくれよ。 今まで、あんだがそ

うしていたように……さ」

その言葉を聞き、仲間達の顔を見たセルフィスは、少し目を潤ませつつ、笑ってうなずいた。

「……そうですね……僕、貴女方や神のことを案じているようであり、実際はなにも見えていなかった……今までも、不満なんてなかったに」

「セルフィス……」

「……みなさん、僕はこれからも貴女方のためにこの力と命を捧げます。僕は僕の出来る限りを尽くします……ここで、改めて誓いましょう」

そういつて本来のキモチを取り戻したセルフィスをみて、彼はもう大丈夫だと悟ったファイリスは仲間達に呼びかける。

「というわけで、明日はこの国を旅立って、色々世界を巡ろうぜ！ んで、いろんな依頼とかこなしてこーぜ！」

「ああ！」

「ええ！」

「はい！」

4人はそうして思いを一つにし、一夜をともにし翌日の朝。

「ファイリス、いつてらっしやい！」

「ああ、いつてくるよ！」

彼らはリツカに見送られて、セントシュタインを旅立っていった。まるで、パーティーを結成して旅に出た、あの日のように。

## 28 「旅を続ける理由」

フィリスの協力のもと、リツカは父の遺志を継ぎ、新たなる宿王となった。その祝宴の翌日、フィリス達は一気に大忙しとなったリツカの宿屋を手伝い、夜になったときにフィリスはリツカと2人きりで話をする。

「今日は手伝ってくれてありがとう、フィリス。 おかげで助かった」

「いいんだよ、リツカの力になれるんだったら、あたしも働いた甲斐があるってもんだ」

宿屋の裏の席でリツカとフィリスは、お茶を口にしながら今日一日を振り返った。 フィリスがやっていたのは、主に客寄せと、失礼を働いた人間に嚴重に注意をすることだ。 時にリツカの話聞いた男達が、リツカに告白をしてきたが、そのものもフィリスが追っ払った。

「にしても、今日あたしがおっぱらったナンパ野郎……マジで腹立ってたな。 リツカも、ああいう奴に流されちゃだけだぜ？ 今後もしそういうことがあつたら、ちゃんとあたしに教えろよ？」

「大丈夫だよ、わたしには心強い味方がいっぱいいるもの。 この宿屋にも、それに、あなたもね！」

「うん、よろしい！」

そう楽しく笑って見せつつ、フィリスは用意された紅茶を一気に飲む。 そんなフィリスの姿を見て、リツカは思ったことを口にする。

「おもえば……初めてあったときから、ずっとそうだよね」

「へっ？」

「……この宿屋をつぐ決心をしたときも、ちよつとした悩みも、ハプニングも……そして、この宿王グランプリでも。 わたし、ずっとフィリスに助けられっぱなしだなあ……て、おもったんだ」

リツカは気付いている。 フィリスはこの宿屋この国だけでなく、広い世界を旅してはそこで起きている問題を解決していることを。

そんな人物が友人であることをリツカは誇りに思うと同時に、自分と違う世界の人間だと感じていた。そんなリツカの心情に気付いたのか、フィリスは目を細めながら口を開く。

「これでも、あたしはあんたに恩返しがしたいと思つてたんだ……」

「恩返し？」

「ああ。さつきあんたはさ、あたしに助けられればなしつて言つたじゃないか。でも、先にあたしを助けてくれたのは……リツカ、あんただよ」

「……」

「恩の大小の問題じゃない。死にそうなくらい傷ついて、ひとりぼっちになっていたあたしを、あんたが助けてくれなかったら……あたしは、今ここにいないんだよ」

そもそものはじまりは、リツカが傷ついたフィリスを見つけて献身的に助けてくれたからだ。あの出来事があつたからこそ、フィリスは同胞かから離れ孤独になつたという、絶望から立ち上がることができたのだ。もう一度、進もうと決めることができたのだ。

「だから、あたしはあんたと……そして、多くの人を助けたいつて強く思つたんだ。助けてくれた恩を、そうやって返していきたくつたんだ。今もリツカはこうやって、あたしを、仲間ともども実家のように迎えてくれるだろ。それも、ありがたいんだよ」

フィリスのその言葉を聞いたリツカは、クスリとわらいながら、今もフィリスに優しくする理由を口にする。

「フィリスって、どこかお人好しな感じがして……わたしもほっとけないんだよ」

「はは、お人好しかあ……。それ、あいつらに言われたよ」

苦笑して頭をぽりぽりかきつつ、仲間について話すフィリス。

「あたしも、仲間はとつても大切なものなんだ。正直あたしの旅つて、あたしの使命という方が正しいものがあつて……ムチャぶりばかりっていうか……普通じゃ経験できないような内容のモンなんだよ。

結構過酷で、難しいことばかりだ」

「……そんな大変な……ううん、大変なんて言葉で片づけられないも

のなんだ」

「そうだな」

本当に、人間が経験できるはずのない旅。そして、当時の自分の正体。そのすべてを信じてもらえないとフィリスは覚悟を決めて打ち明けた。自分のことを信じられなくても仕方ないし、それで離れられても自分にそれを咎める権利はない。一人旅も、覚悟していた。実際に体感してみて、今思うのは、その旅は過酷なものであったのに違いないのだから。

「けど、みんなあたしの過酷な旅に、つきあってくれた。あたしの事情を聞いてくれた。あたしのすべてを知った上で今も、あたしと旅を続けてくれてるんだ……。イアンもセルフェイスもクルーヤも……。ホントに信頼できて、大事な仲間だよ」

「……仲間……」

リツカは、宿王グランプリを通して、ともに働く仲間の大切さに気付いた。きっとそれは、フィリスも同じなのだろう。

「じゃあ、フィリスにとってみんなは宝物なんだよね」

「そうだな！」

リツカの言葉に対し、フィリスはにっこりと笑った。

一方イアンは、宿屋の仕事が一区切りついたところで、次の旅のために店で道具の買い出しをしていた。

「よし……。これだけあれば自分、長旅に耐えられるだろう……。お！」

無事にその買い物も済み、仲間達との合流ポイントである宿屋へ帰ろうとしたイアンだが、そのとき見覚えのある姿を発見し迷わずその男に駆け寄る。

「ハオチュン！ ハオチュンじゃねーか！」

「イアン」

その男というのは、イアンの兄弟弟子である、武道家のハオチュンだった。2人は久しぶりに顔をあせ、言葉を交わす。そのときにハオチュンは最後にイアンと会ったのは、ドミールの里だったと言

「そういえば、ドミールの里で顔を合わせて以来……だったか？ あ  
のときお前は急いでいたようで、まともに会話はおろか挨拶もできな  
かったな」

「ああ、わりい……オレも色々あつて、大変だったからよ……。今  
は、平和になったから、余裕ができてるけどな」

ドミールの里でファイリス達と合流するまで、イアンは帝国にとらわ  
れ牢獄で奴隷として働かされていた。その中で敵兵に変装し里に  
攻める隊の一員として紛れ込み、隙をついて変装を解いてファイリス達  
と合流したのだ。そのとき偶然にも戦線をともししていたハオ  
チュンと、一応は再会をしたのだが、状況が状況だったのでまともな  
会話もしていない。今こうして対話をしているのが、2人にとって  
は本当の再会である。

「でも、オレはまだ旅を続けるよ。そうする理由つてもものもあるし  
な」

「ファイリス達のことか」

「ああ……」

くしや、とイアンは自分の金髪をつかみ、笑みを浮かべながら話を  
続ける。

「オレの贖罪……つっていいのはわかんねえけどよ。あいつらと  
一緒に戦い続けていて、そんで多くの人を助けて守つていつて……自  
分のやつちやったことかと真剣に向かい合うようになったんだよ」  
「……………」

「ま、オレがファイリスに興味を持ったのは成り行きみたいなものだけ  
どな……。そのあとでセルフィスやクルーヤと会って、いまの4人  
で旅をしてるんだけどよ。お前も遭遇したとおもうけど、オレ達の  
旅って普通じゃねーぜ」

「確かに、あのあとも大変だったからな……」

ドミールに帝国の兵士をかたる魔物が攻めてきたときのことを思  
い出すハオチュン。彼は里を守るために魔物と戦い、敵を退けたの  
だが、あんなに激しい戦いは下手をすれば初めてかもしれない。そ  
の後、ガナンが敗れたという話を聞き、ハオチュンは彼らがやったの



だとすぐに気付いた。

「こういうのもなんだが」

「ん？」

「今のお前は……不良時代や私と修行をしていたときよりもずっと、生き生きとしているように見える」

ハオチュンの言葉を聞き、イアンは目を丸くしていたが、やがて柔らかな笑みを浮かべていく。その表情の変化をみたハオチュンは、やはりイアンに変化があると気付いた。

「……そう、なんだろうな……」

「やはり、彼女たちの力か」

「ああ。昔のことはふれたくねーけど……さ」

イアンは腕の装備を直しつつ、目を細めてフィリス達の顔を思い浮かべる。

「修業時代がイヤだったとか、そんなことは全くなかったんだけどよ……でも、今あいつらといるのが、本当に楽しいんだ。オレの居場所はそのこだ、と思えるようになった。今オレは、罪滅ぼしとか己を高める以上に……あいつらのために強くなりたいって思えるようになったんだ」

「そうか」

「だからさ、ハオチュン」

「なんだ」

そして、イアンはハオチュンの方を向いて照れくさそうに笑いながら、彼にある伝言を託す。

「超天老師様に伝えてくれよ。オレは……あいつらと旅が出来て、幸せを覚えてるってさ」

「それは、お前の口から直接伝えろ」

「えっ」

ハオチュンの言葉に対し、イアンは目を点にする。そんなイアンにたいし、ハオチュンはある老人をイアンの前につきだした。その老人をみたイアンは、飛び跳ねて驚く。

「ちよ、ちよーてんろーしさまあ!？」

「ふおつふおつふお。 久しぶりじゃないアンよ」

まさか師匠がそこにいるとは思っていなかったイアンは照れながらも、挨拶と先程ハオチュンに託そうとしていた伝言を、直接本人に伝えることになったのだった。 そのときのイアンは、顔から火がでていたそうなの。

一方、セントシユタインの教会では、セルフィスがお祈りをしていた。

「……今更ながら……この世界をつくりし神は、 はずこにおられるのでしょうか……」

そのお祈りを終え、セルフィスは教会を出てそばのベンチで腰掛けしていた。 神父やシスターには前に倒れたとき、助けてくれたことにたいし礼を言い、穏やかな時間を過ごしていたが、そこでふつとセルフィスは、思ったことを口にする。

「……女神様は、この世界が残っているから死んではないとおっしゃってた……。 しかし、どこにいるのかは未だにわからないまま……神に創られ役目を終えた天使達は星となった……。 なのに、今も世界は残り平和になっても、神はまだ気配すらみせない……」

セルフィスが抱いていた疑問は、この世界を創ったとされる神・グランゼニスのことだった。 元凶もさり女神も目覚め天使が役目を果たしたにも関わらず、未だにその存在を天に見せない神。 死んでいないのなら、どこにいるのだとおもいはじめたのだ。 もしや、その神を見つけたしよみがえらせるのも、自分たちのつとめであり使命だろうか。

「セルフィス、 いた!」

「おや、 クルーヤさん」

今後の旅の方針にセルフィスがひとり、 思いを馳せていると、自分の存在に気付いたクルーヤが駆けつけた。 どうしたのだろうかと首を傾げていると、クルーヤとともに意外な人物が現れたので、セルフィスは驚く。

「あ、 義兄上!?!」

「体調はいかがですか、セルフィス」

それはセルフィスの義兄であるルーフィンだった。何故ここにいるのか理解が出来ないセルフィスに、ルーフィンが事情をかたる。

「実はね、君達に贈り物を預かっていたんですよ」

「贈り物？」

「これです」

そういつて、ルーフィンは黒い布に包まれたものをセルフィスに差し出した。彼に渡された布をセルフィスがといてみると、そこには翼のような装飾が施された美しい弓があった。

「これは……弓、ですか？」

「エルクが、今回の自分の学説を裏付ける手助けをしてくれた礼に、きみに渡してくれとおっしゃってたんです」

「エルクさんが？」

「天使の弓と呼ばれる代物だそうですよ」

その弓をみたクルーヤは、先日リツカにもらった杖を見つめる。そして、ファイリスが持っている形見の剣、イアンがサンデイからお礼としてもらった棍を思い出し、この弓もそれらと同系列だと気付く。

「この杖とおなじものかもしれないわね」

「確かに……ですが、こんないいもの……僕がもらってもいいんでしょうか」

「エルクは、戦う力がない自分が持っていたても価値がさがるだけだと言っていましたよ。だから、戦う力がある君に、託すことを決めたいですよ」

セルフィスは弓を握りしめると、ほほえんだ。

「義兄上……ありがとうございます。この弓を僕は受け取ったと……エルクさんに伝えてください」

「まあ、伝えますよ。また会えたらですけどね……。では帰るとしましょう。クルーヤさんも、ここまでご案内していただき、ありがとうございます」

「いえいえ、お役目はたせてよかったです！」

どうやらクルーヤは、ルーフィンをセルフィスのところまで案内す

るために彼とともにいたようだ。　そう軽く言葉を交わし、ルーフィ  
ンが立ち去ろうとしたとき。

「セルフィス」

「はい？」

「……ぼくは、あの町を……ベクセリアを守るリーダーは、君がふさわ  
しいと思ってるよ。　ぼくよりも、君がふさわしいだろう……と」  
「……………」

それだけをセルフィスに告げ、ルーフィンはキメラの翼を使ってベ  
クセリアに帰っていった。　残されたセルフィスは呆然としていた  
ので、クルーヤがそれに気付いて声をかけてくる。

「なんか、難しいことを考えていたんじゃないの？」

「……そうみえますか？」

「うん、だって眉間にしわの後がのこってるわよ」

クルーヤに指摘され、セルフィスは自分の眉間をさわる。　そんな  
わかりやすい反応に対しクルーヤはクスクス笑いつつ、セルフィスに  
考えすぎはよくないと告げる。

「なにに悩んでいるのかわかんないけど、悩みすぎはよくないわよ。  
ムリしないでほしいわ」

「そういうわりには、僕がなにを考えていたのか、聞かないのですね」  
「……そうね。　だって、あなたの話を聞いても私にはわからないか  
もしれないし……むやみに聞くのは、あなたの負担にもなりそうだも  
の。　だから、あなたが自分から話すまで待つてみようと思うわ」

そう言つて、クルーヤは光の杖をみる。

「私は今ね、あなた達と一緒にいることだけに集中したいの。　その  
ために魔法をもつとうまく使いたいし、この力は正しいことに使いた  
い。　そのキモチは、世界が平和になっても変わらないわ。　平和だ  
からこそ、それを乱す奴は懲らしめなきゃいけない……。　守るため  
の力をたもつたり高めたりするのが、今の私に出来るすべてだもの」  
「……………」

「だからね、セルフィスも頭が良すぎて色々考えすぎちゃうのかもし  
れないけど……今を大事にして、そしてできることをやっていけばい

いと思うの。その積み重ねがきつと、もつと先の悩みを解決させるための力になると思うわ」

途方もなく謎が多すぎることをばかりにとらわれて、簡単なことを見落としてしまう。今日の前にいる大切な存在、自分にとってなにが大事なのか、何故謎に対し頭を抱えていたのかそのきっかけ。それをセルフィスは、神の存在の有無で忘れかけていた。

「……僕は、フィリスさんやみなさんのために、難題を自分に押し掛けていたのですね」

「そうみたいね」

「でも、今このときに……貴方達と正面でむかいあえないのに……貴方達のためだなんていえませんね。言ったら、僕はただの愚者でしょう」

セルフィスは小さく笑いつつ、彼女に宿に帰ろうと提案する。

「クルーヤさん、宿屋へ帰り、フィリスさんやイアンさんと合流しましょう。そして、これからのことをお話ししましょう」

「ええ、そうね！ みんなでちゃんとはなしたほうが、いいことがあるに違いないものね！」

クルーヤも、笑顔でそう答えた。

そうしてリツカの宿屋に集結した一同。リツカが用意してくれた部屋でシャワーをあげ気分もすっきりしたところで、今後の目的を語り合う。

「次は何のために旅をするか、ねえ……」

「はい、僕……そのことでみなさんと改めて、話をしてみたいと思ったのです。今までのように依頼をこなしていくのもよいのですが……あてもなくは少し、今後旅を続けるには厳しいかと……」

「唐突だな」

イアンの率直な言葉に対し、セルフィスはすみませんと返しつつ、ずっと思っていたことを口にする。

「……このままで、いいのか……と、僕は思ってしまったのです。今までは、フィリスさんが天に帰るためとか、女神の果実を探すため、仲

間を捜すため。そして、ガナン帝国の野望を止め、世界を救うため。  
このように、皆で旅をする理由がありました」

「……ああ、そうだな……」

「ですが、今の僕達はそんなに、目的はありません。宝の地図を巡るとか、その宝石を完成させるといふものはありますが、それでは曖昧で、旅の理由にはなりません」

ぎゅ、とセルフィスはくんでいた自分の両手に力を入れた。

「……セルフィス？」

「……情けないと思うかもしれませんが、僕は……このメンバーで旅を続けたい。だけど、どうしてこの4人で旅を続けるのか、その理由や意味がないと……このままでいいものか、と……僕は、不安を覚えるのです」

「不安？」

「はい……今まで神に祈ることで気を落ち着けてきましたが……その神もいまはどこにいるか、わかりません。その神のおられるところを見つけることを使命にするべきか、そのために自分でどうすればいいか、迷うのです。僕はこのままでいいのか……と」

そして、セルフィスは内心でなにを抱えていたかを打ち明ける。

「やるべきこと、目的……それがわからないままにいるのが不安です。だけど、僕は、それでも……貴方達と離れたくない。あてがなくとも、旅を続けたいのです。こんな甘えた考えで……いていいはずはないのにそうしたい。その矛盾を、僕はずっと抱えています」

「なんだ、そんなことだったのね」

「え？」

セルフィスが打ち明けた不安に対し、クルーヤはセルフィスがなにに思い悩んでいたのかに気付いて、そう答えた。

「神様がどこにいるのかわからない、探すべきなのか……それを理由にした方がいいし、それを理由にあたし達と一緒にいたいなら、いつそそうちやえばいいじゃん」

「そうだな、神が関わるなら、いまやオレ達も他人事じゃねーし……目的の一つにするのも悪くない。特にセルフィスは信仰心が強いか

らな、そういうの気にしていると、それを否定する気はねーよ」「でもそれ以上に、あなたが私達と一緒にいたいと思ってくれてるこ  
とがうれしいのよ。 私達も、あなたといたいもの」

フィリス、イアン、クルーヤがそれぞれ、セルフィスの考えに対す  
る答えを口に出していく。そして、フィリスがまた口を開いた。

「あのさ、セルフィス」

「フィリスさん」

「……思えば、あたしがみんなを、あたしのワケわからん事情に巻き込  
んだといつても過言じゃないんだ。 でも、イアンもセルフィスもク  
ルーヤも、あたしを信じて、あたしときて……一緒に旅をして戦って  
くれただろ？ んで、今もあたしのあてのない旅についてきてくれて  
る……。 そこまでの道に、あたしとの旅に……。あんだ……。後悔、し  
てるか？」

「……！」

フィリスのその言葉に対し、セルフィスは首を必死に横に振った。

「していません！ 貴女は、僕の故郷を救ってくださったから……。姉  
上を失い悲しんでいた僕を立ち上がらせてくれたから！ なにより、  
貴女の正しさをこの目でみて、知ったから……。僕は、貴女を信じたい  
と、ともに行きたいと思っただけです！」

「……だろ？ だったら、それでいいんだよ。 これからも」

フィリスはセルフィスと向かい合って、笑って言う。

「神様を捜すもよし、宝石をさがすもよし、いろんな依頼を聞くもよし  
！ まあぶつちやけ、今までとたいして変わんないし、不安にさせた  
り迷わせるだろうけど……はつきりしつかり、約束できることはある  
ぜ」

「……？」

「あたしは絶対に、あんた達を裏切らない！ そして、あんた達があた  
しを裏切らないって信じる！」

「フィリスさん……」

「あたしも賢くねーけど、単純でもやらないよりマシだろ。 だから、  
今はあたし達が曲がらないって信じてくれよ。 今まで、あんたがそ

うしていたように……さ」

その言葉を聞き、仲間達の顔を見たセルフィスは、少し目を潤ませつつ、笑ってうなずいた。

「……そうですね……僕、貴女方や神のことを案じているようであり、実際はなにも見えていなかった……今までも、不満なんてなかったに」

「セルフィス……」

「……みなさん、僕はこれからも貴女方のためにこの力と命を捧げます。僕は僕の出来る限りを尽くします……ここで、改めて誓いましょう」

そういつて本来のキモチを取り戻したセルフィスをみて、彼はもう大丈夫だと悟ったファイリスは仲間達に呼びかける。

「というわけで、明日はこの国を旅立って、色々世界を巡ろうぜ！ んで、いろんな依頼とかこなしてこーぜ！」

「ああ！」

「ええ！」

「はい！」

4人はそうして思いを一つにし、一夜をともにし翌日の朝。

「ファイリス、いつてらっしやい！」

「ああ、いつてくるよ！」

彼らはリツカに見送られて、セントシュタインを旅立っていった。まるで、パーティーを結成して旅に出た、あの日のように。



## 29 「泉にて」

リツカが宿王になるのを見届け、これからともに旅を続けるキモチをあらたにもったフィリス一行は、セントシユタウン城をあとにした。再び、とくにあてもなく旅をするため。

「ナザム村も久しぶりにくるなあ」

「ちよつと立ち寄ってみる？」

「そうですね、いきましよう」

そんな彼女たちが今回立ち寄ったのは、ナザム村だった。この村に対しフィリスはある因縁をたたきつけられたが、それはもう昔の話。村人達が心を入れ替えフィリスに対して行っていた仕打ちを反省したことで、フィリスは彼らを許し、仲間達もフィリスがそう言うのなら、と村の行いを許していた。

「おお、あなたは」

「村長さん」

その村に足を踏み入れると、そこには村長の姿があった。村長はフィリス達にお久しぶりですと軽く挨拶しつつ、あることを訪ねてきた。

「道中でうちの娘を、見かけませんでしたか」

「娘さん？」

このナザム村の村長には、養子として引き取った甥のテイル以外にも、実の一人娘がいたのだ。村長は、その娘の話をフィリス達にした。

「実は娘のミルチャが、勝手に村の外へ出たまま、中々戻ってこないのです」

「なんだって？」

「おそらく、テイルが里帰りしてしまって退屈してしまったのではないかと思うのですが……いったい、どこへ行ってしまったのやら……少々、心配なのです」

「そうなのか……」

「どうか、お願いします。あなた方も、ミルチャを探してくださいませんか？」

そこで村長は、依頼という形で、娘のミルチャを探してほしいとファイリス達に頼んできた。それをきいたファイリスは少し考えた後、彼の

「まあ、その子のことも心配だし……いいよ、引き受けよう！」

「おお、あなたならそうおっしゃってくださいると信じておりましたぞ！」

ミルチャはそう離れたところへは行っていないはずですが、どうかお願いします」

「ああー、まかせてくれー！」

そうして、村長の娘探しをすることになったファイリス達。まずは村の中を一通り手分けをして探してみたものの、その少女を発見することは出来なかった。

「とりあえず村の中を探してみたけど、いなかったわね」

「村の人に聞いてみても、収穫はありませんでした」

そう、仲間達は互いに捜査結果の報告をしあう。そんな中、ファイリスはミルチャがいそうな場所について考えた。

「……このへんで子どもが遊び場にしようなところ……あそこ、とかか？」

「なにか、心当たりがあるんですか？」

「ああ」

記憶を巡って、ファイリスはこの村で知り合った少年のことを思いだし、その場所のことを仲間達に言う。

「ここが、希望の泉って行われる場所か」

「不思議で……綺麗な場所ね……」

「うん。実はテイルが、よくここにきていたみたいなんだ……」

あいつ、村にいる間……イヤなことがあったりさみしかったりしたらすぐに、ここにくるんだってさ……」

「……そうだったのですか……」

フィリスは仲間とはぐれたあと、この泉の近くにかつてあった廃屋の中で休まされた。村の中には入れてもらえなかったが、そのかわりにテイルがそこにつれていって、そこでフィリスの手当をがんばってくれていたのだ。今はその廃屋は村人に焼かれすでに存在しないが、あそこでテイルに助けられた恩と、この泉の存在をフィリスはしっかりと覚えてる。

「ねえ、あそこに女の子がいるわ。もしかしてあの子がミルチャちゃん？」

「どれ……ああ、間違いない！」

そのときクルーヤは、花畑の中に一人の少女がいたことに気付किフィリスに声をかけた。フィリスはわずかにではあるがミルチャの姿をみたことがあるので、その少女がミルチャであるとすぐに気付いた。

「おーい！」

「あ、こんにちは！」

「貴女が、ミルチャさんですね？ ナザム村の」

「そうです！」

声をかけて確認してみると、元気な声とともに少女は自分がミルチャであると認めた。探している人物を無事に発見したことで安心しつつも、フィリスは村長のことをはなす。

「村長さん……お父さんが心配して探してたよ」

「え、そうなの？」

自分の父親が自分を捜していると聞いたミルチャは、少し顔をうつむかせるが、やがて首を横に振る。

「でもでも、まだかえりたくないよう！ だって、おともだちができたんだもん！」

「おともだち？」

「ほら、あの子！」

そういってミルチャは別の花畑を指さす。そのとき、自分のことを言われていると気付いたもう一人の少女が駆けつけて、フィリス達とミルチャとの間に割ってはいってきた。

「だめだよ、ミルチャをつれてつちやだめ！」

「えっ」

「だってあたしたちまだ、あそんでるとちゆうなのよ！　こんなにもおいしいの、ひさしぶりなの！」

そう少女はムツとした顔で言う。　友達がいたのかと普通なら考えるものだが、ファイリス達はこの少女に対し違和感を抱いた。

「おいファイリス、この子」

「ああ」

イアンがこっそりとファイリスに耳打ちをし、それにたいしファイリスはうなずく。　そして少し距離を置いて、セルフィスとクルーヤも話に関わってくる。　彼らがそうしたのは、あの少女の正体に気付いているからだ。

「あの子は紛れもなく幽霊ですが、なにかの力が働いて、普通に誰にでも見えてしまっているようですね……」

「しかも、ミルチャちゃんも、あの子が幽霊だって気付いてないわ」

そう、ミルチャが一緒に遊んでいたあの少女は、幽霊だった。　どいういうわけかあの少女は普通の人間であるはずのミルチャにも見えるくらい、違和感がない。　この違和感に気づけるのは、今まで多くの幽霊をみてきたこの4人ぐらいなものだろう。

「あの子からは悪しき気配は感じません。　単純にミルチャちゃんと遊びたいだけだというのが伝わります……危害は加えない点では安心してよいでしょう」

「……となると、しゃーねえか……こうなったらあの2人、遊び終わらないと帰る気ないぜ。　徹底的につきあうしかねーぞ」

「そうだね」

セルフィスはあの幽霊から邪悪なものがないと言い、イアンはあの2人が満足するように遊び相手になった方がいいと提案し、ファイリスは同意する。　早速クルーヤが2人に声をかけていく。

「2人は今、なにをして遊んでるの？」

「えへへ、あのね。　いまははなたばをつくってるんだあ！」

「へえ、花東ですか。　こういうお花がほしいというのはありますか

？」

女の子らしい遊びだ、と一同は思いつつ、花束が完成すれば満足するだろうとおもい必要な花がないかを問いかけてみる。すると、2人は大きな花がほしいと言ってきたので、4人はそれをさがす。

「そういえば、あそこにゆめみの花さいていますね」

「うん、あのお花を使えば立派で綺麗な花束ができそうね」

そうして彼らが見つけたのは、少し高いところに咲いている大きな、ゆめみの花だった。2人はそれを見上げて、あの花がほしかったのだと言い出した。

「そうなの！」

「あたしたちじゃとどかないの、おにーちゃんたちならとどく？」

「ああ、大丈夫だぜ」

確かに背の高いイアンなら楽に届くかもしれないが、この小さな2人の少女にはムリだろう。イアンは軽く腕を伸ばしてその花を摘み、少女達にあげた。

「ありがとうー！」

「あとね、この花とこの花をあわせて……あまつゆのいとでむすべば、かんせいだよー！」

「こうね」

少女達の言うとおり、クルーヤは花をまとめてあまつゆのいとで縛って、花束を完成させた。その動きは非常に鮮やかで、2人の少女は目を輝かせる。

「わあ、おねーちゃんじよーずー！」

「うわあい、できたできた！」

「ふふっ、とつても綺麗な花束ができたわね！」

まずはひとつ、花束を完成させる。そしてクルーヤはうまくまとめる方法を2人に教え、またひとつ花束が完成した。

「すつごくきれーなものができたね！ たのしーなー！」

「そうだな……っーか、なんか暗いな？」

「え？ あっ」

そこで、空が暗くなっていることに気付いた一同。おもえば依頼

を聞いたのは昼過ぎ、ここまで探しにきて花束作りに協力しはじめてからそれなりの時間が経っているの、日はすっかり傾いている。

「もうすっかりおそくなっちゃったんだ……かえらなくちゃ。ごめんね」

「平気だよ、このくらい」

「帰りも、僕達が一緒だから大丈夫ですよ」

ミルチャは、もう帰らないといけないことを自覚したようだ。ここまでふりまわしたことにたいし謝罪の言葉を口にすると、一同はそれを許した。

「ばいばい、またあそぼうねー!」

「うん、ばいばい」

ミルチャが幽霊の少女に対しそういと、幽霊の少女は寂しそうにしながらも手を振り替えた。そして、立ち去っていくミルチャ達をみて、幽霊の少女は寂しそうに呟いた。

「あーあ……いっちゃったあ。さみしくなるなあ」

「……………」

「あ、そうだ! あたし、はなたばをおそなえしたいんだ! おねえちゃん、きてくれる?」

「え、あたし?」

指名をされて戸惑うが、お供えということは何か意味があるはずだと悟る。

「フィリス、いくぞー!」

「ああ、あたしもすぐに追いかけるから、心配するな!」

だからフィリスはミルチャのことをイアン達にまかせ、自分は少女とともにある場所へ向かった。

そうして、フィリスは幽霊の少女につきあった。この少女は普通なものにふれられるようだ。自分の創った花束を一生懸命に抱え、ある洞窟の中に入った。

「この洞窟は……………」

「よーっよー」

その洞窟の中の様子に、フィリスは見覚えがあった。そんなフィリスをよそに、少女は花束をそこにおく。

「ねえ、おそなえって、こんなふうでいいのかな？」

「うん、いいんじゃないか？　でも……なんであんたは、その花束をお供えしたかったんだ？」

この場所にわざわざ、自分がつくった花束をお供えしたいというのは、よつぼどな理由があるのだろう。そう思ったフィリスは、単刀直入に彼女の行動の理由を尋ねる。すると、少女は眉を下げ顔をうつむかせながら、理由を語る。

「……あのね。　ずーつとずつとむかし……あたし、ここでみてたの。

へいたいさんに、てんしさまがつかまって……それで、おじいちゃんとおねえちゃんがきりつけられて……」

「……………ツ!!」

「でも、あたし……うれしいだったから、なんにもできなかった……」

少女の話に心当たりのあるフィリスは、その身を震わせた。彼女が語っているのは紛れもなく、この村とそして、天使界の悲劇のことだ。　ここが、その悲劇の現場なのだとフィリスは周囲をみる。そんなとき、少女はある情報を口にする。

「でもね、へいたいさんがいなくなつたあとで、へんてこなまじゅうがここにはいつてきたの」

「へんてこな魔獣？」

そんな話は初耳だ、と戸惑うフィリスに少女は話を続ける。　それは、そのへんてこな魔獣と女性の行方についての情報。

「それで、おねえちゃんをさらって、きたのそらへとんでいったのよ」

「……………え……………」

北になにかあるのだろうか。　その魔獣がなにか、大きな関わりを持つているのだろうか。　フィリスの中に次々に疑問が浮かぶ。

そんなフィリスにたいし、少女は満面の笑顔を向けてお礼の言葉を口にした。

「……………ありがとう、おねえちゃん。　きょうはいろんなことができて、うれしかった！　それに、おともだちもできた！」

「……そうか……」

「それでね、あしたも……たくさん、たくさん……」

そう、明日もいっぱい遊ぶんだと楽しそうに笑っていた少女だったが、その体からは淡い光が漏れていた。

「その光は……!」

「あ、あれ?」

その光がなにを示すのか、フィリスはよく知っている。かつて教わったからだ。さまよえる魂の未練をはらし、成仏させることもまた天使の使命だと。そして、幽霊の体からぼろぼろと光がこぼれるのは、その未練がなくなり天に召されるあかしだ。

「おかしいな……だって、あしたもたくさん……あれ、あれ?」

少女はその光がなにをしめしているのか、理解できていないようだ。そのまま少女を包む光はまぶしくなり、やがて強い光を放つと少女は消えた。それをみて、フィリスは悟る。

「……きつと、ラテーナさんとそのおやじさんを弔えなかったのが、あのこの未練だったんだな……」

そして、その未練を天使だった自分がはらしたことで、あの子は成仏することになった。天使でなくなったあとでそのつとめを果たすという、なんともいえない皮肉に対し苦笑しつつ、フィリスはその洞窟を後にした。

「……あの子のはなしてたのは……やっぱり、ラテーナさんとエルギオスのことだ……でも、魔獣って……?」

「フィリス!」

そう、少女の話を思い返していると、声とともにイアンがその姿を現した。ミルチャを護衛する形で先に村に帰っていたはずのイアンがここにいることにフィリスは驚く。

「イアン!　なんであんたがいるんだ!?!」

「なにいつてんだ、お前が一緒に帰らないからだろ!」

そうイアンは返しつつ、なにがあったのかを尋ねる。　フィリスは頭をかきつつ、簡単に事情を説明する。

「……あの子は、もういないよ」



「え」

「この場所に未練があつて、それをはらしたみたいだ……成仏していった」

「……そうか……」

フィリスの説明に対し、イアンはそう短く返したのだった。

「フィリス殿、うちのミルチャを見つけ、呼び戻してくれたようで」

「あ、ああ……まあな」

「なんのことはない。北の泉で遊んでいたのですな。随分と心配してしまいましたよ。見つけてくださり、ありがとうございます。ありがとうございました。お礼といつては何ですが、これを受け取ってください」

そういつて村長がフィリス達にくれたのは、貴重なクスリと言われる、世界樹のしずく人数分だった。こないいいものももらつていいのかと戸惑うフィリス達に、村長は全然かまわないと言つた。

「またあのことあそびたいな！」

と、ミルチャは今日仲良くなつた少女のことをはなすが、それを聞いたフィリスの顔は暗かった。そして、村の宿屋で4人は休むことにし、フィリスは仲間達に幽霊の少女が成仏したことや、彼女から聞いた話をそのまま伝えた。

「そつか……そんなことがあつたのね」

「ああ」

「ミルチャちゃん……また遊びたいとおっしゃってました。あの子がもういないと知つたら、きつとショックでしょうね……どうしたらよいのでしょうか……」

「……それは、わかんねえな……」

真実を伝えることと伝えないこと、果たしてどちらが残酷なのだろうか。

そんな選択に4人は迷いつつ、幽霊の少女が昔みたという天使と兵士、そして魔獣の話になる。

「おねえちゃんというのは、ラテーナさんで間違いないと思う。だけど、ラテーナさんを連れて行って魔獣のことがわからねえ」

へいたいがガナンの帝国兵、つれさられたてんしがエルギオス、きられたおじいさんとおねえさんが当時の村長とラテーナ。この村と天使界の悲劇を知る一同は、幽霊の少女の証言とそれを照らし合わせていく。

「あの2人の話って、ただの悲恋ってだけじゃないみたいね」

「ああ……あの2人の話には、まだまだ隠されたことがあるみたいだ」  
そう言った後、フィリスはこの話を聞いたとき胸の内に芽生えた、ある目的について打ち明ける。

「あたし、どうしてもこの話が気になるんだ。だから、真実を追ってみたい。そこで、だ！」  
「？」

「ここからの旅の目的は、それを解き明かすことにしてみないか？」

それをきいたイアンとセルフィスとクルーヤは、顔を見合わせた後でうなずき、フィリスの提案を受け入れた。

「もちろん、いいぜ」

「異論はありません」

「全然OKよ」

仲間達の返答を聞いたフィリスは、笑顔でうなずいた。そして、天使と人間の悲恋に隠されたもうひとつの物語の真実を追い求めることを、心に誓った。

「それをあかせばエルギオスと、そしてラテーナさんの……吊いになるかもしれない」

### 30 「語り部の語る乙女」

翌日、フィリス達は村長に挨拶をしてから再び旅にしようとしていた。村長は、挨拶にきたフィリス達に娘の一件について、あらためてお礼の言葉をいう。

「昨日は娘のミルチャがまったくお世話になりました」

「いや、いいんだ。んで、そのミルチャちゃんは？」

「早速、希望の泉にでかけましたよ。今日も友達と遊ぶといつて……」

それを聞いて、フィリス達はドキツとした。なぜならミルチャの友達になったというあの少女は、すでにあの場所……もとい、この世にすら存在していないのだから。焦りつつもフィリスは、別の方向に話を運ばせようとする話を持ち上げた。

「そ、それよりも村長さん！ あんたまたなにか悩んでそうな顔をしていたぜ！ またなにか困り事かい!？」

「またなにか、を2回言ったなお前」

「む……わしの顔、そんなにわかりやすいですか？」

「わかりやすいっす！」

フィリスに自分の顔のことを言われた村長は、思い切って自分が今なにに悩んでいるのか、そしてフィリスになにを頼みたいかを正直に打ち明けることにして、口を開いた。

「……実は、折り入ってまたひとつ、お願いしたことがあるのです」「はいきたー！」

村長は、窓越しにナザム村を見渡して、フィリスに依頼の内容を打ち明ける。

「ご存知のとおり、我々は竜の門の守り手という村の使命を長く忘れてきておりました。そして、そのような大事な使命を忘れておきながら、過去の因果……もとい、誤解を恰も村のオキテのようにたててしまっていた」

「……ああ、それであたしは危うく見殺しにされるところだったんだ

よな」

こういうところで釘をさすフィリスに対し、村長は耳が痛いと言きつつ話を続ける。

「このような事が二度と起きぬよう、わしらは語り継いで行くべき事を、石碑として残すことにしたのです」

「へえ、そうなのか」

「そのために、ドミールの里にいるという、竜の語り部をお呼びしたのですが……約束の日を過ぎても、未だにいらっしやる気配がない」

「なるほど、それは心配ですな」

「そこで、フィリス殿。どうかドミールへ行き、竜の語り部をつれてきてはもらえんでしょうか」

ようは、重要な人物をこの村まで護衛してきてほしいというものだった。たいして難しくないであろうこの依頼を、フィリス達は受けることにする。

「まあ、いいけど」

「おお、貴女ならそうおっしゃってくれると思っておりましたぞ」

「……都合いいなおい」

「まあまあ、ドミールの里まで行って、ちゃっちゃとつれてこればいいだけだし、いいだろ！」

そんな話をしながら一同は、村長の家を出てナザム村の外にでて、ルーラの魔法で一瞬でドミールの里へとんだ。高いところにある集落のようなその里で、フィリスは以前にこの村を訪れたときのことをもいだし、つぶやく。

「ドミールの里かあ……最後にきたのは、グレイナル様への報告だったかな？」

「あの人のおうちに、竜の火酒をお供えしにいったときのことね」

フィリス達はここ最近、この里を訪れた。それはガナン帝国との戦いに終止符を打ち、世界に平和が戻ったことを伝えるため。亡きグレイナルのカタキを無事にうてたことを、犠牲を無駄にしなかったことを伝えるためだった。

「さて、竜の語り部って人を捜そうぜ。みんなに聞いていけば、みつ

「かるだろうし」

「そうですね、まいりましょう」

ドミールの里をめぐり、フィリス達は語り部を探す。そして、宿屋の女将から有力な情報を聞くことができた。

「語り部のにいきさんなら、うちの宿屋で休んでいるわよ」

「休んでる？」

「実はケガをしちゃったみたいで……最近うわごとばかりで、様子が変なのよ」

どうやら約束の日にこなかった理由は、ケガをしてしまったからのようだ。それなら理由として納得はいくが、うわごとをいつてうなされるほどにひどいのだろうか。

「そんなにひどいケガなの？」

「うーん……足をくじいたんだって言うけど、本当にそれだけのせいなのかって感じなのよね」

そう宿屋の女将は語り、フィリス達はその語り部の容態を気にする。

「まあナザム村まで来られなかった原因は、判明しましたね」

「そうね、少し話を聞いてみましょう」

そう4人は話し合い、宿屋に入って店主に事情を話し、その語り部と会わせてほしいと相談した。そして面会の許可をもらい、フィリス達は語り部が休んでいる部屋にはいった。

「この人が」

その部屋のベッドで横になっているその男性は、詩人がまとうようなローブをきていて、側には楽器をおいていある。周囲の人々の話が本当であれば、この男性こそが、竜の語り部なのだろう。

「うーん……ううん……ら、て……」

「へ？」

「はー！」

少し何か、うわごとを口にしていた男性は唐突に意識を取り戻し、そこにいたフィリス達に気付く。

「……あなたは？」

「ああ、あたしらはさ……」

ファイリス達は自分たちは、ナザム村からきたことやその村長に頼まれて竜の語り部を護衛しにきたのだとつたえる。話を聞いた男性は自分こそがその語り部であると認めつつ、真つ赤にはれ上がっている自分の足を見せた。

「実は、山道で足をくじいてしまって……それくらい、ずっと寝込んでいたのです」

「まあ、痛そう……」

「約束の日をすぎていたとも知らず、なんととんだご迷惑を……しかし、この足ではとても……」

語り部がそう口にしたので、セルフィスはかがんでその容態を確かめる。

「確かに、無闇に動いたりしたら悪化してしまいますね……」

「お前の回復魔法でもか？」

「あれはあくまで一時的に傷をふさいだり回復をはやめるだけのものです。 こういうのには、あまり効果をみせないのですよ」

そういつつ、これには強力な湿布薬が必要になると、セルフィスは気づき口にする。その話を聞いた語り部は、あることを思い出しファイリス達にたずねる。

「そうだ」

「え？」

「突然ですが、つきのめぐみとどうこんエキス……それからおしやれなバンダナを持っていませんか？ なんでも、特性の湿布薬の材料になるんだそうです。 持っていたら、私にください」

そのアイテムがあればいいのだろうか、ファイリスはすぐに荷物袋を取り出してそのなかを漁る。すると、語り部の言っていたアイテムがそこにちようどあった。

「ちようど、あるといえばあるけど……」

「私にいただけませんか」

「ああ、いいよ」

それで本当によくならぬなら、と言ってファイリスはその3つを語り部にあげた。語り部はありがとうございませんと行って、早速湿布薬をつくりはじめる。

「おしやれなものを選ぶ理由ってあるのか？」

「さあ……それは僕にもわかりません」

そうある疑問についてコソコソと話をしていると、語り部はその湿布薬を足にあてがいしばらくすると、ベッドから起きあがった。

「よつとー！」

「わあー！」

「うん、もう大丈夫です！ さすが特製というだけではありませんね！」

「いや回復はやすぎだろー！ どんだけ効き目あるんだー！」

「すごい薬ですね……僕も初耳です！」

「こんなに効果が出るなんて、と驚き戸惑う一同に語り部はこの湿布薬についてはなした。

「実はこの薬の作り方は、山道で出会ったラテーナって子が、教えてくれたんです」

「えっ!？」

語り部の口からでた、思わぬ名前に対しファイリスは驚き、その名前が正しいのかと語り部に問いかける。

「ラテーナ……!?! その子、本当にラテーナっていうのか!?!」

「ええ。あの子が助けてくれなかったら、今頃魔物のエサでしたよ……本当に、本当にいい子だった……」

「……」

「なんでも、竜のなみだを探して、このドミールにきたとかで。まるで古い歌そのまま……の……」

事情を語っていた語り部は、徐々に顔色を変えていった。

「そ、そうだ！ ナザムへ行く前に、あの子に……ラテーナに会って、お礼を言わなくては！ 確か火山の山頂へいくと言ってたっけ……というわけで、すみません！ 私、ちよつと行ってきます！」

「あ、ちよつとー！」

ファイリス達にそれだけを言い残し、語り部はさっさと宿屋を出て

行ってしまった。語り部があっさり元気になったことやすぐに立ち去って言うってしまったことに対し、宿屋の店主も女将も呆然としていた。ファイリス達も、語り部が口にした名前に対し、戸惑いを隠せなかった。

「い、行っちゃったわ!」

「どういうことだよ、ラテーナさんはもう……!?!」

「色々疑問は残りますが、今はあの語り部を追いかけることが先決です! 至急、あの人を追いかけましょう!」

「あ、ああ!」

セルフェイスに冷静になだめられたファイリスは、彼らとともに語り部を追いかけて火山の山頂へと向かったのだった。

「いたわ、語り部さんよ!」

そして、火山の山頂にはその語り部の姿があった。彼の姿を見つめることができたファイリス達は迷わず彼に近づき、おいと声をかける。それにより語り部は、ファイリス達がここまでできていたことに気付く。

「あ……旅の方」

「まったく……勝手に動くなよな!」

「……すみません……わざわざここまで、追いかけてきてくださったんですね……」

そう語る語り部は元気がなかった。どうしたんだと問いかけてみると、語り部は残念そうな表情と声で、自分のしたかったことができなかつたことを伝える。

「結局、ラテーナには会えませんでした……。きっと、どこかで入れ違ってしまったのでしょうか」

「……」

「……不思議な人でした。青い服を着て竜のなみだを探していて……まるで、子供の頃にきいた歌、そのままなんです」

「歌?」

「せっかくですし、この歌、お聞かせしましょうか……」



そう言うと語り部は、楽器をならしつつその歌の一節を歌ってきかせる。

「青い娘は竜に言う。」

あなたのなみだ、このビンに……竜のなみだをわたしにください。けだかき竜は笑ってこたえる。

我になみだなどはない……。」

その歌を、ファイリス達は黙って聞いていた。そして語り部はこの歌のことについて解説をする。

「ある日、青い服をまとった娘が、グレイナル様の元を訪れた……その時のことを歌う、古い古い歌です」

「そうですね……グレイナル様ももう、ここにはいらつしやいませんし……歌になるくらいなら、大昔のことに決まっていますよね」

そう、セルフィスが歌の歌詞や解説に対する感想を口にする、語り部は少女に対するおもいを口にする。

「出来ることなら、ラテーナに、もう一度お会いしたかった……」

「そつか……そうだよな……」

「……けれど、悔やんでも仕方ありませんね。縁あれば再び出会うこともある。私は私の使命を、果たしましょう」

語り部は一度顔をうつむかせると、すぐに顔を上げて彼女たちに告げる。そのときの彼は、笑みを浮かべていた。

「さあ、おまたせしました。一緒にナザム村へ向かうとしましょうか！」

「ああ、バッチリ護衛するぜ！」

そのときの語り部の表情をみたファイリスは、彼の気持ちの切り替えや自分の使命感にたいする思いに込めるため、彼を無事に目的地へ送り届けることを誓った。

「……じゃあ、またな」

と、かつてこの場所をすみかにしていたある竜に告げて。

ドミールの里からナザム村までの道は、ルーラの魔法で簡単だった。ナザム村にはいり村長の家まで彼を送り届け、村長に事情を説

明したことで、無事に依頼ははたされたのであった。

「貴女達のおかげで、私は無事にたどりつけました……感謝しても仕切れません」

「娘のことだけでなくこうして語り部の方まで……本当にありがとう  
ございますー！」

まさか立て続けにナザム村で、村長の依頼を受けることになろうとは予想だにしていなかった。もっとも、依頼がないかを問いかけたのは自分たちなのだが。 ともかくにも、依頼は完遂したので報酬としてお金をもらえた。 これだけあれば、数日は旅ができるほどのお金を。

「それにしても、こうして歴史を記す石碑を創るために、私の口伝を役立てようとは……この村の村長さんは、とても歴史を重んじる方なのですな」

「重んじすぎたせいでトラブル招いたけどな」  
「フィリスー」

そうからかうように言うフィリスに、クルーヤはあわてて制止をかける。 そんなやりとりをよそに、語り部は自分の使命を果たせることに喜びを覚えていた。

「私にお役目をくれるのは、とても嬉しいことです」

そうして村長に手を貸そうとした語り部だったが、そこでふとあることが気になり語り部は、村長に問いかける。

「……………ところで、村長さん」

「うむっ？」

「ラテーナという娘が……この村に、立ち寄りませんでしたか……？」

その女性の名前に対し、フィリス達もピクリと反応した。 一方、村長はその名前に関する情報を記憶から引つ張り出そうとしたが、そもそも知らない名前だったのでその行動は無意味だった。 なので、語り部にたいして首を横に振った。

「そういう話は、聞いたことがないですな……」

「……………そう、ですか」

ここにラテーナはいない、と知った語り部は残念そうにためいきを

ついで首を横に振る。だが、すぐにシャツキリと顔を上げた。

「まあ、ご縁があればいつかは……」

そう、希望を抱いたようだ。そのことにたいし真実を知っている  
フィリス達はその真実を口にせず、ただ今の彼の姿に対し、呟く。

「もうこの村にいる時点で、縁をつないでるよな……あの人」

「だな」

それだけを口にし、フィリス達は村長の家を後にしたのだった。

### 31 「竜の涙をもとめて」

ナザム村の依頼を二日続けてこなしたフィリス達は今、サンマロウの町を訪れていた。それは、村で受けた3つ目の依頼を果たすためである。

「あれ、フィリスさんだ！」

「ティル！」

その町で彼女達が行ったのは、顔見知りの少年・ティルだった。無邪気に再会を喜ぶティルに、フィリス達は彼に用があると伝える。

「実はさ、あんた宛に手紙を預かってたんだよ」

「ぼくに？」

「ああ。ミルチャからだ」

実はフィリスは、ナザム村を旅立つ前にミルチャから手紙を預かっていたのだ。あの泉にいつても友達がいなくて残念がついていたミルチャは、せめてティルには早く帰ってきてほしい、とおもい彼への手紙をフィリスにたくしたのである。手紙を受け取ったティルはありがとうといいつつ、ミルチャのことを思い出した。

「ミルチャかあ……寂しい思いをさせちゃったかな？ でも……安全だとわからないと、町をでてナザム村までいけないんだよなあ……」  
「安全確認か……」

「うん、町の中までは入ってこられないとはいえ、このあたりに凶暴な魔物がでたこととか、またでるかもしれないんだもん。急なことだったし、ぼくも一度魔物につれさらわれたし……」

「そうだったな」

最近、魔物は強いものが現れるようになったという。現にフィリス達もこの町がその被害にあったところをみたし、ティルがそれに巻き込まれたときも彼を救出したのだ。その原因はおそらく、例の寶石にあるとは思うのだが。

「でもでも、大丈夫だよ！ 前にセルフィスさんがやったお清めのお

かげで、この町は絶対に安全だもん！」

「それならば、僕もお清めをした甲斐がありました」

今は、少なくともこの町の中は安全だ。清めの力が弱くなったことで町に魔物がせめいる事態に発展したが、今はセルフィスが手を貸したお清めのおかげで、同じ事例は起きていない。そんな近状報告をしていたティルは、ふとある話を思い出した。

「そうだ、フィリスさん」

「どうしたんだ？」

「実はね、町長さんが腕の立つ旅人を捜しているっていうんだ！ なんでも、お願いしたいことがあるって言ってるよ」

「お、依頼主か」

「きつと、フィリスさんだったら町長さんのお願いを叶えられるかもしれないね」

ほかにやることもない。そんなときにこの情報は実にお得だ。フィリス達は、その町長のお願いと聞いてみることにした。

「よし、次の依頼として受け取ろうぜ！」

「ああ」

「どうせこのあと、暇なものね」

「やってみましょう」

仲間達も、フィリスのその提案を受けいれ、一同は町長の家へと向かう。ティルに見送られながら。

「がんばれ！」

「ああ、がんばるぜ！」

サンマロウの町長はかつて、男性がつとめていたのだが、最近その妻が力を付けて、彼女が新しい町長となつたらしい。つまり今、サンマロウは新しい町長の元でさらに発展しようとしている、ということのようだ。

「竜の涙、ですか？」

フィリス達は町長に会い、自分の願望を叶えてくれる冒険者になる

うとしていることを伝えた。すると町長は上機嫌になり、自分が探しているのは竜の涙という代物だと伝えた。

「実はこないだ、竜のなみだを探しているという、ラテーナと名乗る旅の娘がたずねてきましたね……」

「!?」

「竜のなみだなど存じてませんので、そう伝えると去っていききました……って、あら? どうなさったの?」

「……いえ、なんでもありません。お話を続けてください」

思わず、ラテーナという名前に反応してしまったが、急いで話を本筋に戻す。自分とその名前の関係を、知られてはいけなからだ。

町長は、かまわず話を続けた。

「それでね、その竜のなみだのことが私も後からその品のこと気がなくなってしまつて……きつと、さぞ美しい宝石の名前に違いありませんわ!」

「は、はあ」

「そこで、私は旅の者をあつめ、お願いしたいの。グビアナにいるという宝石商の元へ行って、竜のなみだを買ってきてほしい……とね!」

「ええ!?」

町長の依頼というのは、宝石を手に入れてこいと言うものだった。

だが、それを買つてこいという内容に対し、ファイリス達は焦る。

なぜなら、自分たちには達成が難しいものだと思つたからだ。

「ほ、宝石なんてバカにたけえだろ!? いくらなんでも買う資金がオレたちにはねえぜ!」

「おっほっほ……心配には及びませんわ!」

特にイアンが、この依頼の難しさを口に出すが、その不安要素はすでに予想済みだといわんばかりに町長は笑みを浮かべつつ、4人の前にある宝石を取り出した。その宝石というのは、巨大なダイヤモンドだった。

「で、でか!」

「おまけにすっごく輝いてるわ!」

「きつとこのキングダイヤモンドなら、その宝石の対価にふさわしいに違いないわ！ だから、その宝石はこの宝石と交換で入手することにしてくれれば、大丈夫なはずですわ！」

金持ちの考えていることがわからない、と4人は思った。

「ふ、太っ腹だ……」

「で、どうかしら？」

「……まあ、話を聞いちゃった以上受けないわけには行かない。と  
いうわけで、引き受けます」

「まあ、ありがとう！ あなた達はやさしい方ね。 気をつけて行つてらっしゃい！」

「は、はい！ じゃあいつて参ります！」

とりあえず、ファイリス達は町長の依頼を引き受けることを決め、一度邸宅をあとにした。

「……竜のなみだって、本当に宝石なのかしら……」

「僕も宝石には詳しくないのですが、そのようなものは聞いたことがないですからね……」

そこをでたクルーヤとセルフィスが、その竜の涙というものにたいしての疑問を口にする。 実在するのかどうか、それは本当に宝石なのか。 何故、ラテーナと名乗るものはそれを探し求めているのか。

「実在しないものを、わざわざ探そうとはしないよな」

「ああ……けど」

そこでイアンは、ファイリスに言う。

「竜の涙って宝石を追えばもしかしたら、みんなが目撃したという、そのラテーナさんに会えるかもしれないねえ。 だから、今は依頼を果たすことにしようぜ」

「そうだな。 何事も動かなきゃわかんねーよな！」

イアンの言葉に動かされ、ファイリスはグビアナの出身であるクルーヤに、その宝石商のことをたずねる。

「というわけで、クルーヤ。 宝石商がどこにいるかわかるか？」

「え、ええ。 宝石店の場所なら知ってるわ。 きつと、宝石商はそこに  
にいると思うわ」

「よし、んじやルーラをつかってきつくりと行ってきちやおうか！  
まってるい、竜の涙よ！」

そう言つてフィリスはルーラを使つて、仲間達とともにグビアナ城  
へ向かったのだった。

ルーラでたどり着いたグビアナは相変わらず、砂に覆われていて気  
温が高い。初めてきたときと比べて、女王の働きのおかげで国全体  
が発展しており、国民は豊かに生活ができているらしい。

「確かグビアナの宝石店はあつちだったわ」

「オーケー、いこうぜ」

クルーヤが指し示す方向にフィリスは歩いていこうとした、その時  
だった。

「わ」

「ぎゃ」

フィリスは前方から歩いてきた女性と、ぶつかってしまった。 2  
人は同時に驚いた声を上げる。

「ご、ごめんなさい！ 私急いでて……」

「いや、こっちこそごめん……!?!」

相手が謝ってきたのでフィリスも迷わず謝り返す。 だがその相  
手の女性の顔を見たフィリスは目を丸くして言葉を失う。

「あなたも旅の人？ 私、竜のなみだを探しているの。 だけど……  
とうとう、見つからなかった……」

「えと、あの」

「もう、アルマトラと行かなくちゃ。 手遅れになってしまう前に  
……」

そう言い残し、女性は立ち去って行ってしまった。 彼女とぶつ  
かったフィリスだけでなく、背後にいた仲間達もその女性の姿に呆然  
としていた。 ようやくセルフイスが口を開くまでは、沈黙してい  
た。

「今の、ラテーナさん……ですよ、ね……?」

「嘘とか見間違いないじゃない限りはな」



「で、でも……だとしたらなんで、私達のこと……とくに、フィリスのことを知らないの……?」

「まるで初対面みたいだったな」

「……………」

それぞれで、先ほどのラテーナにたいする感想を口にする中、フィリスだけが黙っていた。フィリス、とイアンが声をかけるまで黙っていた。

「……………」

「どうした、大丈夫か?」

「……………」いや、だいじょうぶ。ただちよいと、面食らっちゃっただけだ」

「ほんと?」

「ああ。さ、気持ちを切り替えて宝石をかいに行こうぜ」

そう笑顔で仲間達に言うフィリスに、イアン達はあえてなにも言わずについて行った。そうして4人は宝石店に入ってしまった。

「なんだんだあの女は! 人の顔にドロを塗りやがって!」

「!?!」

店内には様々な宝石が売られており、どこをみても煌びやかに光っていたが、店主は不機嫌だったのか大声で机をたたいていた。見に覚えがないにも関わらず…否、ないからこそだろう。フィリス達は店主の怒声に驚く。

「ど、どうしたんですか?」

「おつと……コホン。これは失敬」

フィリス達の存在に気づいたらしい、店主は咳払いをして冷静さを取り戻し、フィリスに接客する。

「もしや、お客さんですか?」

「ああ。あたしら、竜のなみだという宝石を買いにきたんだけど……………」

「おお! そうですかそうですか、確かにこのお店にありますとも!」  
そう言って店主はいそいそと箱を取り出すと、それを机の上に置き箱のふたを開ける。

「これこそ、ドラゴンのなみだです！」

「わあ……！」

箱の中に納められていたのは、深い青色の宝石だった。透き通った青色は静かな光を放っており、それがこの宝石の美しさを引き立てている。

「……キレイ……こんなキレイな宝石、初めてかも……」

「おお、この宝石の価値がわかりますか！」

「確かに、こんなもんみたことねーや」

一同がその宝石に見入っていると、店主はこの宝石の価値がわかってくれる人がいることが嬉しい反面、あることにたいする怒りをよみがえらせる。

「ところが、こいつを偽物呼ばわりする不届き者がでたんですよ！」

「二セモノ？」

「さっきここを訪れた旅の女が、ドラゴンのなみだをみて……こんなのは竜のなみだじゃない……って言ったんだ！ こいつは間違いないドラゴンの涙って宝石ですよ！ 神に誓っていえます！」

その旅の女というのは、おそらくあのラテーナのことだろう。やはりあのラテーナは幽霊などではなく、実体として存在しているというのだ。あの様子からして、ラテーナは竜の涙に求めているのは、宝石としての価値ではないと予想できる。

「しかし、いくら価値がわかっていようと……こいつは相応の対価を払ってもらわねば、売れません」

「これはどうだ？」

商談の話にもどり、店主のその言葉を聞いたフィリスはまっぴりしたといわんばかりに、サンマロウ町長から預かったあのキングダイヤモンドを取り出して彼に見せた。その宝石をみた店主は目を大きく見開かせる。

「こ、これは……キングダイヤモンド!! 何故、旅の方がこのような高級な品を!!」

「なに、オレ達はその宝石をほしがってる人から、おつかいを頼まれたってだけでさ。 いかがなもんかい？」

「こ、これならばドラゴンのなみだと交換でよいでしょう！ 交渉成立です！」

あつさり!? と驚くファイリス達。その言葉通り商談は成立し、店主はキングダイヤモンドを、ファイリスはドラゴンのなみだをそれぞれ手に入れた。

「改めてみてみてください、この輝きを！ たいそうな名前だけあつてすばらしく、美しい宝石でしょう！」

「ええ、そうですね」

「涙を流すのは人間だけでしょう？ 龍のなみだなんてものはつまり存在しない……。だから、このドラゴンのなみだって名は、この世のものとは思えないほどに美しいと。そういう意味で名付けられたそうです」

「そうなのか！ えっと、ありがとうございます！」

ドラゴンのなみだに対してそう解説をする店主に対し、ファイリスは短く札の言葉とともに、この宝石を欲している人のところへ向かうと言つて、店を出ていった。そして、グビアナ城にきたときと同じようにルーラでサンマロウへ引き返す。

「龍のなみだは、実在しない……。か……。か……」

と、ファイリスはポツリと呟いた。

そうして、サンマロウに帰ってきてすぐに町長の邸宅へ向かい、宝石商から無事にドラゴンのなみだを手に入れることができたことを、ファイリス達は報告。同時に、ドラゴンのなみだを町長に差し出す。「まあ！ なんと美しい宝石なのかしら！ 私、気に入りましたわ！ このような宝石をもてるなんて、私夢のようですわ……。！ こんなことなら、もっと早く町長になるべきだったわね！」

町長はドラゴンのなみだを相当気に入ったらしい。その宝石を手を持ちかかけ、うれしそうに笑っていた。

「私の望みを叶えてくれてありがとう、これは報酬よ。遠慮なく受け取ってくださいな」

「あ、ありがとうございます」

そういつて町長はフィリス達に報酬として、大金をよこしてくれた。これは、旅の資金に回せそうだ。これだけあれば、またしばらく旅ができる。

「あ、フィリスさん！」

「テイル」

そして、目的は果たされたので町長の邸宅をあとにしたフィリス達。邸宅を出たところで、フィリス達はテイルと合流する。テイルはあのあと、フィリス達がなにをしていたのか気になっていたらしい。町長からの依頼をうけ、無事に果たしたことを伝えることにする。

「竜のなみだかあ……ふしぎなものがあるんだね」

「そうだな」

「でも、その宝石を見つけてくるなんて、やっぱすごいや！ 世界を旅しているっていうの、伊達じゃないんだね」

フィリスのその話を聞いて、テイルはますますフィリスにあこがれたようだ。目をきらきらさせながら出たテイルのその尊敬の言葉に対し、フィリスはにかつと笑って見せた。そこでテイルはふと、あることを思いだし、フィリス達にその話をする。

「そうだ、そうだ！ あのねあのね、フィリスさん！ この話知ってる!？」

「話?！」

テイルは頷くと、ナザム村にいたところに聞いた話を、フィリス達にもした。

「ナザム村より北のほうにある、高い塔のうえには、竜によく似たアルマトラって生き物が眠ってるんだって！」

「アルマトラ?！」

「うん！ おじさんがそう教えてくれたんだ！ 大昔からいるって言われてるけど、誰もそこに行かないから、ホントかどうか確かめる方法がないんだって。でも、世界を旅してるフィリスさんなら、いけるかもしれないよ！」

「へえ、そうなのか」

「興味があつたら、いつてみて！」

じゃあね、と言つてティルはフィリス達と別れた。フィリス達も彼に手を振り返すと、宿屋に帰り今日の出来事について振り返る。

「結局あのラテーナさんは、何者なんだ？」

今日の依頼は、単純な話で言えばおつかいのようなものだった。

だが、その最中にフィリス達にとって、見過ごすわけには行かない出来事があった。それが、ラテーナのことである。仲間達も先ほどのラテーナと、かつて出会った幽霊のラテーナと照らし合わせてみるが、今日自分たちが遭遇した出来事の答えは見つからない。今日のラテーナと、幽霊のラテーナはどうみても同一人物であることは変わらないから、尚更困惑してしまうのだ。

「なあ、フィリス」

「なんだよ、イアン？」

そんなとき、イアンが何かを思ったらしい。フィリスに、ある話を持ちかけてきた。

「あの幽霊の子がはなしてたことと、ティルの言葉……なんとなく一致しねえか」

「……」

ガナン帝国兵に傷つけられたラテーナを連れて行った魔獣、今日遭遇したラテーナの言葉、竜の語り部の歌、ナザムの北に住むアルマトラという生物、そして竜の涙。

それらの情報がフィリスの中に重なっていき、やがてあることを決心し領く。

「真実を確かめるためにも、いくつきやないね。その塔に」

フィリスの言葉に対し、イアンもセルフィスもクルーヤも頷いた。

### 32 「微睡みの魔獣」

300年前にあった、エルギオスとラテーナの悲恋の秘密を探るため、ファイリス達は様々な手がかりを集めていた。手がかりとさえいば、ナザム村のはずれで出会った幽霊の少女の話。そして、先日テイルから聞いたアルマトラの話。そして、そのアルマトラがいるとされる塔の話。

「以前のあの子の話を思いだして、テイルの話も頼りにして、いぎ村の北の方に来てみれば……」

「まさか、こんな塔がホントにあるなんてな……」

それらの話を照合させ、天の箱船を利用してそこへ向かう。ナザム村の北側に、確かに塔は存在していた。その塔の天辺は地上からでは確認できなかったが、天の箱船を利用したらなんとか確認できた。その非常に高層な塔にこれから、自分達は挑んでいくのだ。

「つてか、なんで今回はサンデイも一緒にいるんだ？」

「確かに。最近ネイルアーティストの仕事がいっぱいあるんだーって言ってたのに」

「久しぶりに数日のオフだし、アタシの好きにしてもいいでしょ」

今回の旅には珍しく、サンデイも同行するようだ。思えばこうして彼女と旅路をともにするのは久しぶりの気がする。まあ問題はないだろうと思いつつサンデイの同行を許可したファイリス達は、意を決して塔の中に入る。

「あれ、だあれ？」

塔に入ると同時に聞こえてきたその声とともに、壁から一匹のスライムが現れた。

「スライム？」

「わ、人間だあ！　ここにこられる人間がいるなんて、ビックリだよ！」

そりゃあ、こんなところまでこられる人間なんてそうそういないだろう。そうおもいつつ、人間に興味津々かつ友好的なスライムは、

ファイリス達にこの塔のことをはなす。

「ここは、アルマの塔。 竜もどきのアルマトラが住む塔さ」

「……アルマトラ……」

「でも、アルマトラのやつ……もうずーっとずっと、300年も塔の上で眠ったきり、目を覚まさないんだ」

「さ、300年」

つくづく、その年数に縁があるものだ。 スライムは、あきれながらアルマトラについて話を続けていく。

「アルマトラったら、魔獣のくせにすごいねぼすけで、お人好しで……。 ずっと昔、アルマトラは天使と仲良くしている女の子を見て、心配ばかりしてさ。 アルマトラの予感当たって、女の子は事件に巻き込まれたんだ」

「そうなのか」

「そのとき見かねたアルマトラは、女の子を助けて、この塔につれてきたんだよ。 でも………」

「でもっ？」

おそらく天使と仲良くしていた女の子というのは、ラテーナのことだろう。 あの悲劇の後でここに彼女は連れてこられたのだろうが、その後ののはなしをしていたとき、スライムは口ごもってしまった。

なにがあつたのだろうかとファイリス達が首を傾げていると、スライムはファイリス達に視線をかわせて、彼女たちにお願い事してきた。

「ねえ。 ぼく、アルマトラが心配なんだ。 あいつのここといい加減、だれかが起こしてあげなきゃいけない。 お願い！ ぼくをアルマトラのところまで連れて行ってくれる？」

「ああ、いいよ」

スライムの頼みに、ファイリスはすんなりとOKを出した。 まさか人間が魔物の願いを聞いてくれるとは思っていなかったらしい、スライムは驚く。

「ほ、ほんと!?!」

「まああたしすらも、そのアルマトラってやつに会いに行かなきゃならないからな。 乗りかかった船だということ、どんと、あたしらに

任せてくれよ」

「ありがとう！」

フィリスの言葉を聞いたスライムは嬉しそうに笑って、フィリスの肩に乗ってきた。

「よし、行こう！ アルマトラの元へ！」

「おーっ！」

そうしてスライムを連れて、塔をのぼっていく一同。内部はだいぶ荒れ果てており、迷宮のようになっていいる上、随所に魔物が潜伏していた。

「はあー！」

「イオナズン！」

「ドルモーアッ！」

「せあー！」

スライムが自分でアルマトラをおこしにいけなかった理由に、なんだか納得してしまう。ここにいる魔物達は強敵ばかりで、スライムではとても太刀打ちできないだろう。おまけにここにいる魔物は皆、人間に対し強い敵意を向けており襲いかかってくる。そんな魔物達に、人間に対し友好的なスライムが入ってきたら、袋叩きにされることは間違いない。

「ここはすでに、魔物の巣窟となっているのですね」

「うん……アルマトラが起きていた頃は、みんなアルマトラが怖くて立ち入れなかったんだ。ホントはもつと、やさしい魔物がいっぱいいたんだけど……」

その先のこととは、だいたいの憶測がつく。このスライムの心をえぐるまねはしたくないので、フィリス達はこの塔のことをそれ以上追求するのをやめた。

「外観からわかっていたけど……随分高いわねこの塔」

「ああ、オレらもだいたいぶあがってきているつもりだけど、全然終わりが見えないぜ」

「おまけに、シヤレにならないくらい魔物がはびこってるし。こ



りや、ラクに上までいけないってカンジ」

と、各々はラクに進めないことに対しての話をする。アルマの塔の難しさをその身に感じているのだ。油断していたら魔物が飛び出してきて、容赦なく彼らに襲いかかってくる。

「ギギギギッ」

「おっと！」

少しでも気を抜けばこのように、塔に棲みついた魔物におそわれる。今もキラーマシンが剣を振り回しながらファイリスに襲いかかってきたが、ファイリスはそれを盾で受け止めはじき返し、それで怯んだところに剣を突き刺して倒した。そうして機能を停止したもののテツクズになったキラーマシンをみて、ファイリスは油断大敵だなどと呟きつつ剣を鞘に戻した。

「あの階段から、風が吹いていますね」

「お、ということは何上階か？」

目の前に見えた階段をのぼっていくと、開けた場所にでた。風が吹いていて、空も地上からみるよりずっと近い。それに、上に続く道はほかにないことから、ここが塔の最上階で間違いないようだ。

「やあ、やっと頂上だね！　ありがとう！　つれてきてくれてー！」

「いいんだけどさ、そのアルマトラってのはどこにいるんだ？」

「あそこ」

「あそこ？」

そういつてスライムは、真上をみた。そこには巨大な鳥の巣のようなものがあり、スライムはびよんぴよんと飛びながらその巣にとびのる。ファイリスもすぐに、その後を追いかける。

「これが……アルマトラ……」

そこにいたのは、一匹の魔獣だった。山吹色の肌には赤いたてがみ、長い耳と尾をもち、その背には大きな翼が生えている。体毛は、青みがかっていた。なんとも不思議な姿をしているその魔獣こそが、アルマトラだというのだ。スライムの言っていたとおり、眠りにについているのか少しも動かない。

「アルマトラ！　アルマトラ!!　おきろ！　おきろつたら!!」

スライムは必死になってアルマトラを大きな声で呼ぶが、アルマトラは少しも動かない。ファイリス達も起こそうとするが同じく無反応。

「ダメか」

「そんな起こし方、ふるいつつーの！」

どこからともなく取り出したフライパンとおたまでガンガンならしても、4人とサンディとスライムには効果抜群だったがアルマトラには効果がなかった。

「ねえ……どうして……？」

そう、目を覚まさないアルマトラに対しスライムは寂しげに、つぶやいた。そして、ぽつぽつとスライムはファイリスたちに向かって言う。

「ダメみたい……ごめんね。せつかくつれてきてくれたのに……」

「……スライム……」

「……アルマトラはね、ねむりにつくまえに、ガナン帝国城に行ったんだ。助けた女の子……ラテーナをつれて……」

スライムは当時のことを思い出しながら、ファイリス達にアルマトラが眠る前の出来事を語る。

「戻ってきたとき、アルマトラはひとりだった。様子も、なんだか違っていた……」

「……」

「ねえ、もうひとつお願い！ アルマトラの目をさまさせて！」

そしてスライムは、ファイリスにもう一つの頼みごとをする。それは、アルマトラの眠りについてしまった

「300年前になにかがあったんだ。ガナン帝国城にいけば、アルマトラを助ける方法がわかるかもしれない……おねがい……」

スライムは、ファイリス達に必死にお願いをしていた。この塔を上っていくだけでも苦労させたのに、さらにアルマトラまで助けてほしいというのは、都合がよすぎるかもしれない。スライムがこの願いを言ったのは、正直言つてダメ元だ。

「よし、みんな！ ガナン帝国へいくぞー！」

「えっ？」

断られても仕方ないと思っていた。だが、フィリスは笑って仲間達にそう言ったのだ。仲間達も、力強く頷いた。

「そうね、ここまでできたのに、肝心のアルマトラが寝たままなのって中途半端でイヤよね！ 解決させてスッキリしましょー！」

「僕たちはアルマトラのことはよくわかりません。ですが、眠り続けるのは、きつとよくないことなのでしょう。300年前のこの真相も、このままわからないままなのも、納得できません」

「たとえば魔物であっても、お前はいいやつだからな。お前のアルマトラにたいする想いもしっかり受け取った。だから、かなえさせてくれよ」

そう、クルーヤとセルフイスとイアンが自分の意見を言葉にしている、全員はガナン帝国へ向かうことを決める。仲間達の言葉を聞いたフィリスは大丈夫だぜ、とスライムに笑っていった。

「……あり、がと……」

スライムは、ボロボロと泣きながらフィリス達にお礼を言った。

「泣くんじゃないの、このパーティは世界中のみんなが呆れかえるほどの、お人好しのあつまりだけなんだから」

と、スライムに語りかけるサンデイの姿もあった。

そうして4人は、アルマトラの秘密を探すために、またガナン帝国城を訪れた。

「いつきても、息苦しい場所だぜ」

そう、フィリスは率直にこの城に対する感想を口にした。このガナン帝国城も平気で歩き回れるようになったが、それでもこの国と自分の因縁は簡単に断ち切れるものではないのだ。ここは薄暗く、いままなお重い空気が包んでいて、誰もいないからなおさらそう強く感じるのだろうか。

「うわあ!?!」

「ゆ、ユーレイ!?!」

そんな因縁をその身に感じながら城の中を探索していると、彼らの目の前に幽霊が現れた。不意打ちで現れたので皆は驚いたが、その幽霊はこちらのリアクションなど無視して、ポツポツとつぶやく。

「栄えあるガナン帝国が滅びを迎えたあの日……青い服の娘が、つばさを持つ男を助けるため、魔獣の背に乗り、この城へやってきたのだ」  
「……え……」

「私が見たのは夢か幻か……あの日の娘によく似た者が、今また、閉ざされし牢獄へ……」

そう呟いた後、幽霊は消えていった。ファイリス達は突然幽霊が現れたことにたいしての戸惑いを残しつつも、幽霊のつぶやきの内容に注目する。

「閉ざされし牢獄って……」

「ああ、天使達と……エルギオスが閉じこめられてた場所だ」

閉ざされし牢獄は、ガナン帝国城の地下に広がる巨大な牢獄だ。

そこに囚われていたのは、かつてのファイリスの同族達だった。そこに、なにがあるのだろうか。ファイリス達はその閉ざされし牢獄に続く階段に進んでいく。

「わ、またでた」

その階段への扉の前に、また幽霊が現れた。今度は身なりのいい男性の幽霊だ。おそらく大臣だろう。大臣の幽霊は、先程の幽霊と同じように、語り出す。

「300年前……私たちは、ここへ来た娘のために、あの牢獄の扉を開いてやったのだ。娘のため、つばさをもつ男のため……ここにいた皆が協力した……。結果、私たちは命を落としたが、悔いはなかった。この手で行えた、最後の人としての行為だったのだから……」  
そう語る大臣の幽霊は、ガナン帝国の行いに対しずっと、罪悪感をつのらせていたのだろう。復活した後に魔物になってしまったことや、かつてのガナン帝国の行い……もう自分達は人間ではないと感じていたのだろうか。

「だが……今の娘は……？」

そう、大臣の幽霊は過去を悔いつつも、先程自分が目撃したものの

ことを気にしていた。そして大臣の幽霊は姿を見せなくなり、フィリス達は疑問を残しつつも、その娘が向かったという閉ざされし牢獄への道を進んでいった。

「ここからが、閉ざされし牢獄ですね」

素晴らしい扉を開け、地下への階段を降りていく。そうしてまづついたのは、かつて天使達がとらえられていた牢獄であり、そこには兵士の幽霊がいた。兵士は、自分がみたものが信じられないと呟いていた。

「この兵士の幽霊さんも、ラテーナさんをみたのね」

「よし、さらに進もうぜ」

そう幽霊の言葉を聞いて、フィリス達は手がかりを追って奥へと進む。少し先にあつた小部屋にいた、学者の幽霊も、ラテーナらしき娘の手がかりと、300年前の事件のことをはなした。

「300年前、魔獣とやってきた娘は兵士の手によって、この先で命を落としました。すると娘をあわれんだ魔獣アルマトラが……竜もどきが、一粒の涙を落としたのです」

「……そうか、ラテーナさんはここで死んでしまったのか……」

「アルマトラの娘を哀れむ心が奇跡を起こしたのか、その涙は竜の涙と変わりました。そして、その竜の涙がつばさを持つ男の魔力を、ひととき解き放つたのです」

「竜の涙は、実在したのですね」

「しかし、男の心はすでに深い憎悪にむしばまれておりました。男は解き放たれたその力で、城の人々を焼き滅ぼし……この地を、無人の荒野に変えたのです」

そうして、学者の幽霊は300年前の真相を彼らに伝えたのだつた。この学者の幽霊の話だけで、ずっと疑問だったことが次々に解消されていった。

「今のが、300年前にガナン帝国が滅んだ原因だな」

「そして、竜の涙の正体と」

「ラテーナさんの、最期……か……」

「ここでラテーナが命を落としたということは、もう少しでエルギオ

スに届きそうだったということ。もしガナンの兵士が彼女に手を下してなければ、おそらくラテーナはエルギオスを救えたかもしれない。たとえ憎しみに飲まれていたとしても、少しの可能性があったかもしれない。

「どれほど、無念だったのでしょうか……」

「……」

「もう少しで、あのエルギオスが捕まっていた場所よ」

「つまりは、最深部だな」

とりあえず、ここまでできたからにはさらに奥へ行くしかない。そうおもい一同はエルギオスが囚われていた牢獄まで進むことを決め、そこへ続く道の入り口に入った。

「!?」

瞬間、ファイリス達は強い光に包まれた。

光の中、この場所で一人の女性が横たわっていた。その細い身体からは血がとめどなく流れていて、止まる気配がない。女性らしい清楚なワンピースも羽織っていたフードつきマントも、その血の色に染まっている。

「アルマトラ……そこにいるの……?」

そんな中、女性は……ラテーナは、ぼんやりとした意識の中で、側にいた魔獣の名前を口にする。必死に手のばして、乱れている呼吸のなかで、魔獣に語りかける。

「ごめんなさい……あなたも、ケガを、したでしょう……?」

ラテーナが魔獣……アルマトラにまず告げたのは、謝罪の言葉だった。彼女は自分が今にも死にそうになっていることより、アルマトラを巻き込んでおきながら目的を果たせなかったことを悔いているのだ。大事な人を救えなかったことを、悔いているのだ。

「竜のなみだを、私が見つけ出せていたら……エルギオスの力を、すぐにでも……解き放つことができたのに……」

もう、自分の命の灯火は消えかかっている。そんな意識のなか、ラテーナは大事な人への誓いをたてた。決してやぶつたりはしな

い、誓いを。

「待つてて……エルギオス。 私は……私は、死んでもあなたを……助け出す。 たどりついてみせる……。 たとえ、どんなになれても……何十年……何百年……かかっても……エルギオス……」

最期に、彼の名前と彼への想いを口にした。 だが、想いのほうは唇は動いていたものの、声とはなっていないかった。 事切れたラテーナに対し、アルマトラは首を横に振り語りかける。  
「つまらぬことを言うな。 人は死んだらそれまでだ、娘。 さあ立て。 背に乗せてやる」

そうアルマトラはいうが、ラテーナは動かない。

「どうした？ 娘。 立て……目を開けろ」

アルマトラの言葉にラテーナは返事をしない。 目を開けない。「いったい何のためにここまで来た。 なんのために……なんの……ここで死んで、どうする……目をあける……ラテーナ……」

そうラテーナに訴えかけるアルマトラの目から、ポタポタと涙がこぼれた。 やがてその涙は強い光を放ち、地面に落ちた。 その瞬間、その場は強い光に包まれる。

「今のは!？」

そして、光がやんだ瞬間。 その場にいたのはラテーナでもアルマトラでもなく、ファイリス達だった。 あのラテーナとアルマトラのいる景色は、ファイリス達がみていた幻覚だったのだろう。

「マボロシ、てヤツかな」

「……」

サンデイもいま自分が目撃したものにたいしての感想を口にし、クルーヤとセルフィスは、ガレキの側になにかが落ちていることに気付いた。

「これ、なにか光ってるわ」

「おそらくそれが、竜のなみだ……なのでしよう」

「そう……これが、ラテーナさんが探し求めていた、竜のなみだなのね

……。確かに、不思議な力を感じるわ」

不思議な色と光を宿した、雫形の宝石。不思議な力を持っているその宝石、それをアルマトラが落としたものだというのなら、その宝石がアルマトラの目を覚ます手がかりなのだろう。

「……」

そんな中、フィリスはずっと黙っていた。それに気付いたイアンはフィリスに声をかける。

「……いけるか、フィリス」

「誰にいつてるんだ、それ？」

イアンの言葉に対し、フィリスはそう返事をした。

「あたしは、やるべきこと……そして、自分がやりたいことを最後まで徹底的にやるだけだ。さあ、その竜のなみだをもって、アルマトラのところへいこうぜ」

そう、深紅の瞳で仲間達を見つめて、このまま目的を果たすことを推奨したのだった。



### 33 「竜もどき・アルマトラ」

ガナン帝国城にて、300年前の真相をしったファイリス達は、竜のなみだをアルマの塔に持ち帰ってきた。

「スライム！」

「あっ！ みんな！」

「おまたせ、てがかりっぽいものを見つけきたよ」

塔のてっぺん、そこにある大きな巢の中で眠るアルマトラ。そこに一緒にいたスライムに、ファイリスは声をかける。そしてアルマトラの前にたち、ガナン帝国城の地下にあった、竜のなみだを差し出す。  
「竜のなみだが……！」

すると、竜のなみだがほのかに光をはなつ。その光は徐々に大きくなっていき、宝石は光の粒となりアルマトラに注がれる。

「……ウウ……」

「アルマトラ？」

光がやんだ瞬間、そこに眠っていたアルマトラはうなり声をあげ、徐々に動き出す。先ほどまではなにをやっても効果がなかったので、大きな変化のように見える。さらに、アルマトラはその鋭い双眼を開いた。

「目を開けたわ」

「みたいだな」

「これで、よいのでしょうか？」

「多分、いいんじゃないの？」

アルマトラを起こすという目的は、これで果たされた。誰もがそう思った、そのときだった。

「……人間が……なぜ、ここに……」

「は、はい？」

アルマトラは、言葉を発した。だが、その声は重々しい。その目もより鋭くなっており、ファイリス達のことを見つめていると言うよりも、にらみつけていると言った方が正解だ。なんだか、イヤな予

感がする。そして、そのイヤな予感を的中させるかのように、アルマトラは口を開いた。

「……長い夢を見た……私は、あの娘の命を奪った人間を、許しはせぬ……」

「え、ちよいヤバインじゃないの?」

「失せる! 人間は嫌いだ!」

アルマトラは怒りに身を任せて、ファイリス達に牙をむく。スライムが制止をかけようとしたが、その声もアルマトラには届かない。

「アルマトラ、だめだ、その人は……!」

「人間は、嫌いだああ!!」

アルマトラがそう叫ぶと、突風が起こった。アルマトラの咆哮によるものだろう。

「うわあー!?!」

その圧にファイリス達は吹っ飛ばされ、巣からたたき落とされた。

それにより、全員にダメージが行き渡る。

「あいたたたた……」

「ぐう……なんつて咆哮だよ……オレらをふきとばすなんて、タダモンじゃねーぞあの魔獣!」

「おまちを……ベホマラーツ!」

すぐにセルフフィスは全員にベホマラーをかけて、皆の傷をいやす。

そこに、アルマトラがつつこんできた。その攻撃はギリギリのところまで回避したが、アルマトラの敵意が消え去ることはない。

「こいつは一度、シメねえとダメみてえだなおい!!」

イアンの言葉に、3人は迷わず頷いて武器を手取る。本来は戦うべきではないかもしれないが、話し合いで済むような相手ではなかったのだ。ここは全力で戦い、勝利する必要がある。

「サンデイはそのスライムをおねがい!」

「わかった!」

「あうっ」

スライムに戦いの飛び火がこないように守るため、スライムのことをサンデイにたくす。これで周りを気にせず、存分に戦える。

「やつぞー！」

「おうー！」

フィリスのかけ声に、仲間達は応じた。

戦うことを決めた4人に対し、アルマトラはその鋭い爪で引き裂きにかかる。

「グアアアアアッ!!」

「おっとー！」

それをイアンは回避し、アルマトラに対し氷結らんげきを繰り出す。それに耐えたアルマトラは突進してイアンを吹っ飛ばし、再び爪で切り裂こうとする。それを、クルーヤのマヒャドが阻止する。

「おらあー！」

そこに、フィリスがぎりかかった。その一撃はアルマトラの身体に切り傷をつけ、そこにさらに攻撃を加えようとするが、そのときアルマトラはこごえるふぶきをフィリスに吹きかける。

「うぐつ……いー！」

「ドルモーアッ！」

そこに、仲間達にスクルトをかけおえたセルフィスが攻撃に加勢してきた。そのドルモーアが思った以上にアルマトラにダメージを与えたらしい、受けたアルマトラは苦しそうな声を上げた。この闇属性の攻撃が弱点なのか、と気付いたセルフィスは、今度はドルマトンを放とうとする。

「うわあー！」

「セルフィス！」

だが、そんなときセルフィスの行動に気付いたアルマトラが、セルフィスに飛びかかってきた。その攻撃を受けたセルフィスは地面にその身体をたたきつけられ、かみつこうとしているアルマトラの顔を盾で必死に押し返していた。そこにイアンが突っ込んでいきアルマトラにキックをかまそうとしていたが、アルマトラの皮膚は硬く、尾を振り回してイアンを吹っ飛ばしてしまった。

「イオナズンッ！」



ファイリス達と合流する。

「無事に技が決まったな！」

「おもつきりやったけど、平気だよな？」

「でも、あれくらいやらないとわたし達も危なかったし……」

「これで、アルマトラも落ち着くといいいのですが……」

そう仲間達は集合し、そこに倒れたアルマトラを見ていた。そして、すぐにアルマトラは起きあがる。

「ウ、ウウウウ……おの……れ……!?!」

アルマトラは起きあがってからファイリス達と戦おうとが、次の瞬間にファイリスが手に持っている剣を視界に入れ、驚く。

「その、剣は……」

「……大切な人から託された、あたしの誇りそのものだ」

剣に気付いたアルマトラにたいしファイリスがそう答えると、アルマトラは確認をとるように彼女に問いかける。

「ファイリス？」

「!?!」

「……お前……ファイリス、か……!?!」

突如、名乗ってもいないはずのファイリスの名前を口にしたアルマトラに、全員が驚く。

「ええ、なんでアンタがファイリスを知ってるの!?!」

「ファイリス、あなたホントはアルマトラと知り合いなんじゃ……」

「ねーよ」

「……よね」

一応ファイリス自身も、天使時代の記憶を漁ってはみるが、やはりアルマトラのごとは存在はおろか名前ですら、記憶にないどころかまったく知らない。ではなぜ、逆にアルマトラはファイリスのことを知っているのだろうか。疑問を募らせる一同に、アルマトラは引き続き話をした。

「お前のことは知っている。ずっと夢の中からみていた……」

「夢……」

「なぜ……私は、お前を……すまない。私は我を失っていたようだ」  
フィリスの存在に気付いたとたんに、おとなしくなつて謝罪をしてきたアルマトラ。思ったよりもあっさりと解決したので拍子抜けだ、と呆然する4人に、アルマトラは長年眠っている間のことを話して説明をした。

「とても長い夢を、見ていた。300年もの間……人間の娘が竜のなみだを探して長い旅を続け……ついにはガナン帝国で、命を落とすまでの夢だ。いつしか娘は、私の夢の中から外の世へと踏み越えて……そうだ、お前にも会ったな、フィリスよ」

「そうか。あたしが出会った、あのラテーナさんは……」

「旅の中で出会った幽霊のラテーナさんとは、同一人物ではあるものの別の存在だったのですね」

竜の語り部やサンマロウの町長、グビアナの宝石商、そして自分達。今まで遭遇していたラテーナは、肉眼で見えるある種の幻影だったのだ。当時の記憶のままだったから、フィリス達のこととも知らないことにも納得がいく。あの彼女のすべての言動は、300年前の本人の行動そのものだったのだ。夢の中の存在が現実にあらわれるなんて不思議なことがあるのか、と思いましたが、その夢を見たのがアルマトラなる魔獣であるのなら、納得がいく。

「あの時、ラテーナとつばさの男を助けられなかったことは、長きにわたって私を苦しめた。だが、あの星ふぶきの夜。立ち上る星々を見て知ったのだ。二人はようやく、救われたのだと……」

アルマトラは、あの時のことを語る。その話を聞いて、思えばあれからだいぶ時間が経過していたのだと感じた。アルマトラは、フィリスと後ろにいるイアン達を見て、夢に彼らがうつっていたことも伝える。

「そして、それがフィリス……さらに、そこにいる人間達によるものだということも、私にはわかっている」

「ああ……そうだな」

あのときアルマトラが目の前にいるのがフィリスだと気付いたとたんに攻撃をやめたのも、フィリスがラテーナとエルギオスを救った

ことを知っていたからだ。そして、正気に戻ったことに気付いたスライムが、アルマトラのそばに寄ってきた。スライムを守る必要がなくなったサンデイも、フィリスの肩に乗る。

「このスライムは、私の古くからの友人なのだ。お前を連れてきた彼にも、感謝をせねばなるまい」

「そうだよっ」

「その子が教えてくれなかったら、アタシ達もここまでこられなかったし、アルマトラもグースカピーと寝たままだったもんね」

「サンデイ、何語しゃべってんの？」

「そう、スライムに関する話もした。」

「とうるか、スライムって300年いきるの？」

「しらね」

そうしてアルマトラと和解を果たしたところでセルフィスは、アルマトラを含めたその場にいたもの達全員にベホマラーをかけ、全員の傷をいやす。そして、自分の身体の傷がなくなったことを確認したアルマトラは、フィリスを見つめる。

「我が目を覚まさせ、あの二人を救ってくれた……心ばかりの礼をしよう。フィリスよ。りゅうせいの剣を、ここに見せるがいい」

「これ？」

アルマトラに言われて、フィリスは鞘ごと剣をぬいて彼の前にそれを差し出した。そしてアルマトラに剣を抜けと言われたので、フィリスは従い鞘から剣を抜いた。

「……」

すると、アルマトラの身体からわずかに光があふれ出し、その光が剣を包み込む。さらに、光の中から銀色のオーブが現れ宙に浮かんだ。

「あ、オーブ！」

宙に浮かんだオーブは、フィリスの持っていたりゅうせいの剣と重なり合い、光の粒子を放つ。その粒子がりゅうせいの剣を包み込み、閃光を放つと、そこにはより美しい剣があった。

「この光景、たしか神の国でセレシア様が……！」

その光景に見覚えのあるセルフィスが、そう口にした。確かあの時女神セレシアは、フィリスのほしくずの剣をりゆうせいの剣に強化してくれた。ということは、今りゆうせいの剣も強化されたのだろう。

「それこそ、すいせいの剣だ」

「彗星の、剣……！」

やはり、強化されたのだ。より美しくより鋭さを増したその剣をフィリスは見つめ、軽くふった後で鞘に戻す。

「……託されていった剣が、どんどん強くなるのは……あたしにとっても嬉しいことだな」

そう言つて、フィリスはその顔に笑みを浮かべていった。そんなフィリスに対し、アルマトラは自分の正体を打ち明ける。

「私もかつては、創造神グランゼニスにより生み出されたのだ……人間を滅ぼすために……」

「なっ!？」

「だが、あの二人の姿を見ているうちに私は絆されたのだ……いつの間にか、私の存在理由も……なんのために生み出されたのかも、忘れていった。思い出したときには、そのようなものはどうでもよくなっていたのだ」

だからこそ、エルギオスもラテーナも救えなかったことを、ずっとずっと後悔していたのだろう。自分の心を変えていった存在。見守っていた時間は長くなかっただろうが、時間の問題ではない。心の変化にどれほど影響を与えるものだったかどうか、である。アルマトラにとって、エルギオスとラテーナの関係は、それほどの影響を与えるものだったに違いない。

「星達がふぶいたあの日、私はようやく解放される思いだった。救えなかった存在が、救われたのだから……」

「……そっか。じゃあ、あたし達が命がけで戦った意味もちゃんとおあったんだな」

ここで改めて、自分達がずっと戦い旅を続けていた意味を実感でき



た。アルマトラの言葉にたいし、フィリスも、他の仲間達も実感がわいてきたのか、その顔に笑みを浮かべる。そしてアルマトラは、目を細めてフィリス達に告げる。

「私はお前を見守っている。この高き塔の上で、いつまでも……な……」

「ありがとう、アルマトラ」

そういつてフィリスは、すいせいの剣を抱きしめつつアルマトラと額をあわせた。もう彼は憎しみや悲しみに囚われず、誰を傷つけたりはしないだろうと、確信を得たのだ。アルマトラも、彼女達は純粹に信頼できると感じたのだ。

「一件落着ですね」

「ああ」

そんなフィリスとアルマトラを見ていたセルフィスはそうつぶやき、イアンも同意した。クルーヤも、微笑みつつアルマトラに対する印象を口にする。

「アルマトラって、不思議な姿をしていてちよつと怖いけど……ホントはとっても優しい魔物なのね」

「人も魔物も、見た目によらないってことか」

クルーヤの言葉に対し、サンデイも同意した。その横でスライムがやれやれと言いながら、アルマトラを見てつぶやく。

「なーが見守るだよ！ 助けてもらってえらそーに！ ねえ！」

「あれ、人にアルマトラを起こしてって必死になって助けを求めているのは、どこのダレだったっけ？」

「あうっ」

サンデイにつっこまれ、スライムは一瞬怯んだものの、皆のほうをむいて自分からもちゃんとお礼の言葉を伝える。

「でも、ありがとう。アルマトラを助けてくれて……。ぼく、よく知らないけどさ。きつとラテーナって人も喜んでるよ」

「きつと、そうですね」

そう語り合いつつ、一同は空を見上げたのだった。

### 34 「グビアナの動乱」

アルマの塔のアルマトラと出会い、協力しあいながら世界をともに支え合うことを誓い合った。そして、アルマトラはフィリス達に、次にいくべき場所を教えてくださいました。

「アルマトラがいうには、砂漠になにか異変が起きつつあるとのことだけど……」

「砂漠と言えば、グビアナ王国ですね」

「グビアナになにかあるのかしら……」

その話を聞いて、一番胸をざわつかせていたのは、グビアナ出身のクルーヤだった。そんな彼女を気にして、イアンはクルーヤに声をかける。

「やっぱり、心配か？」

「当然でしょ……私には血のつながった両親も家族もないけど……一緒に生きてきた人々や友達があつた国にはいるんだもの。厳しい大地でもいいことはいっぱいあるし、思い出だってあるわ」

そうあの国で生きてきたクルーヤは、想いをかたる。それを聞いたイアンはそうだよな、と彼女に同調した。そして、セルフイスは微笑みかけつつ、すぐに行動を起こそうと告げる。

「では、一刻も早くグビアナへ行きましょう」

「ルーラを使えばさつきと行けるし、レッツゴーだぜ」

「……うん、おねがいね！」

2人の気持ちをきいたクルーヤは笑顔を浮かべる。そして、彼女のためにフィリスはルーラを使い、一気にグビアナへ瞬間移動した。

グビアナ砂漠に到着した矢先、サンデイはぼつりとつぶやいた。

「……ねえ、なんかさむくね？」

「確かに……夜とはいえ、この冷え込みは異常ですね……」

「おかしいわね……いくらなんでも、こんなに冷えたことなんて、私が知る限りはなかったわよ……?」

「とりあえず、城へいこうぜ。城下町に行くことさえできれば、なに

かしらの情報は得られるかもしれないし」

「そうだな……」

ルーラを使ってここにきたのだから、自分たちの背後にグビアナ城があるはずだ。そうおもい4人は同時に振り返ったが、そのとき目に入った光景に驚かされる。

「な、なにこれ……!? どういうことなの!?!」

「まるで要塞だな、こりゃ……」

その変貌ぶりにファイリス達は呆然とする。今のグビアナ城の様子は、これまでと全然違うからだ。大砲が装備され、いつでも発射できるようにしてあること、城壁が鉄板で覆われていること。あの明るい声がいつさい聞こえてこないこと。

「少し前までは、明るい声が聞こえてきたはずだ……なにが……」

そうつぶやきつつ、ファイリスは城に近づく。だがそのとき、正面から槍を持った何者かが突っ込んできたので、ファイリスはとっさに剣を抜いて迎え撃つ。

「ファイリス!」

「あなた達は何者?!」

「そういうあんたこそ、誰だ!?!」

ファイリスに突っ込んできたのは、鋼鉄の装備を身にまとった金髪の女性だった。ファイリスは剣で女性の槍をはじくと、女性は名乗りを上げる。

「私の名前はパスリイ」

「パスリイ?」

「先日、このグビアナ城に仕えることになった騎士よ……さあ、私が名乗ったのだから、あなた達も名乗りなさい!」

「あたしはファイリス、そして仲間のイアン、セルフィス、クルーヤだ。

あたし達は旅を続けているんだけど、この城が前にきたときと比べとてもゴツゴツしてるもんだから、ビックリしたんだよ」

そういって、ファイリスは以前もグビアナ城を訪れたことをはなしつつ、今の異変についての感想を口にした。一方、パスリイはファイリスという名前に反応をした。

「フィリス？」

「ん、どうした？」

「もしかして、あなた達は女王様と直接的な知り合いだったりするの？」

「ああ……まあ、知り合いと言えば知り合いだな……」

「そんなんでいいの？ 間違っちゃいないケド」

フィリスがそういうと、パスリイは少し考えた後で顔を上げ、4人に告げた。

「これより、女王様に確認をとるわ。　そこで待っていないさい」

「え、ああ？」

パスリイにいわれ、その場を動かさずしばらく待つ。　そして、確認をとったパスリイはすぐに戻ってきた。

「……女王様がお待ちよ、あなた達、私についてきなさい」

そういつてパスリイが先頭をあるき、フィリス達はその後ろについていった。　ついて行く途中で、城下町の様子を見てみたが、人の気配がなく静まりかえっていた。

「……城下町、静かだな……」

「……ええ……」

「仕方ないのよ、みんな笑いたくても笑えないのだから」

そう口にしながらパスリイは、見張り台の方をみた。　そこは確かに高い見張り台があったことは覚えているが、今そこにあるのはガレキの山だった。　側には、ボロボロの武器や防具が転がっている。

「詳しいことは、女王様に直に聞くといいわ」

この状況にたいし、パスリイはそれだけを言った。

「クルーヤー！」

「ジーラー！」

グビアナ城に入り、クルーヤーは親友のジーラーと再会した。　城下町の様子から、彼女の安否を心配していたクルーヤーは、彼女の顔を見て安堵したのだった。

「ジーラー、無事だったのね……よかったあ……」

「ええ、私も貴女に今あえて、嬉しいわ。今のこの国の状況が状況だから……」

そう再会の喜びも束の間、そこに女王ユリシスが姿を現した。パスリイは彼女に敬礼をし、ファイリス達にもそれを伝えると、ファイリス達もかしこまった態度になる。

「みなさん、きてくれたのね」

「ああ、久しぶりです。ユリシス女王様」

「早速ですが、女王様。なぜこの国は……このような要塞と化してしまつたのですか？ この国は今、なにと戦を繰り広げておいでなのですか？」

セルフェイスが国の現状について質問をしてみると、女王は顔を曇らせながら、事情を説明する。

「反乱者です」

「反乱者？」

「……貴女達もご存じの通り、かつて私は……世界のすべてが自分の敵であると思ひこんで、自分だけを正義と思ひ、好き放題してました。それが、民を苦しめていた……」

「……………」

「貴女達やアノン、そしてジューラの気持ちを知り、私は女王として改めて、自分と向かい合おうと決め……今まで私の我が儘に巻き込んだ民達に償いをする政治を、今まで行ってきました」

まずは乙女の沐浴場の、一般開放。そして、生活用水をさらに増やすため、地下水道を父が作った物を基礎としつつさらに範囲を広げた。また、観光客を呼ぶためにペットのアノンを皆に見せることもしていった。そうして、グビアナは徐々に発展を見せていったのである。

「うまくいっているのに、なんで反乱者が……」

「反乱者は、私のかつての統治により苦しんでいた……私が水を占領したことにより飢餓を経験してきた者達。私に、憎しみを抱いている民が徒党をくみ、反乱を起こしてこの国に戦争を仕掛けてきたのです」

確かに、あのと生活に苦しんでいた者は多くいただろうし、あの状況では彼女を憎んでいたって不思議はないはず。だが、それも昔の話だ。そう思ったクルーヤは焦りつつ、今と昔は違うと言おうとした。

「そんな、もうユリシス様は……」

「残念ながら、連中には対象が改心しようがなにしようが、どうでもいいんだろうよ」

それを、イアンが一刀両断する。そして、反乱者の信条を紐解くかのように淡々とした態度で語っていく。

「相手が改心したくらいで自分の苦い経験や憎悪と言った感情は、簡単には改善しないものなんだ。自分がどれほど辛い目に遭っていたにも関わらず、相手は平気な顔をして良心を振りまいていたんだとしたら、よけいに憎悪が膨らむ。その憎悪は、相手が死ぬまで続くだろうぜ」

「……」

「まあ、相手が一国の主とあれば、簡単にはいかねえだろうけどさ……憎んでいるのがごく一部で、大半が女王様を許して生活をよくする手伝いをしている……そんなところにずっといたくねえだろうよ」

イアンの厳しい言葉に対しユリシスは顔に影を落とす。大臣は、この国の現状を伝える。

「現に、反乱軍は魔物と契約を結んでいるのか、魔物とともにこの国に攻撃を仕掛けてきている。それだけでなく、今やグビアナの各所に攻撃を仕掛け、民は何名か傷つき建物も崩落している」

「ほら、おまけに見境なしときたもんだ」

「なんのために自分たちが反乱を起こしているのか、わからなくなっているのでしょうか……悲しいことです……」

セルフィスは悲しげに眉を下げ、そう口にした。

「……そうだ、今一度、そなたらに頼みたい！ この国のために、女王様をお守りしてくださいませんか！ そなたらほどの実力があれば、この戦いにかてよう！」

「私からもどうか、お願いしますわ。反乱を鎮めてください！ こ

の国のためにも、力を貸してください！」

大臣と女王は、ファイリス達に依頼をする。クルーヤはこの頼みを聞き入れたらしい、ファイリスの方を見て彼女の名前を口にした。すべてを話を聞いていたファイリスは、返事をする。

「そりや、前までの女王様の行いをあたしらはなんもフォローはできない」

「ファイリスッ」

「……だけど、このまま反乱を許すわけには行かないよ」

そういつてファイリスは、クルーヤ達に笑いかけた。ファイリスの返答をきいたイアンも笑みを浮かべつつ、腕をボキボキならす。

「そう、その通りだぜ。その反乱者は今は反乱者じゃねえ、ただの侵略者だ」

「怒りと憎しみに囚われた哀れな人を、ともに救済しましょう」

「……というわけだ、反乱軍をぶっ飛ばして、グビアナを救うぜ！」

この国の防衛及び反乱軍討伐を引き受けてくれたファイリス達に、女王と大臣は感謝の言葉を口にした。

「みんな、ありがとうっ……！」

そして、クルーヤもまた、涙をぼろぼろとこぼしながら仲間達に感謝の言葉をつげたのだった。

ファイリス達が反乱軍を鎮めるための戦いに参加したのは、その翌日のことだった。城をとり囲うのは、魔物を連れた反乱軍。

「我らを苦しめた忌々しい女王の、くびをとれー！」

「絶対に女王を許すな、改心を認めるな！」

「女王の味方をするヤツは皆殺しだ、徹底的にやっちまええー！」

全員、国に対し攻撃を仕掛ける言葉を口に出す。彼らは非常に攻撃的であり、もはや不満を露わにしていると言うよりも、ただ国を一つ滅ぼすために動いてしまっている。真の目的を見失っている。

「攻撃を仕掛けてくる奴らは、私達がくい止めるわ。あなた達は元締めを討つことだけに専念しなさい」

「了解！」

そうパスリイはフィリス達に指示を出すと、愛用の槍を手に持ち、他のグビアナ軍に指示を出して反乱軍と戦い始めた。そのなかでもやはり、パスリイの動きや実力は非常に目立っている。

「人間は気絶させるだけにしましょう、むやみに命を奪う必要はありません」

「おう！」

セルフィスの言葉に返事をしつつ、首謀者の元へ向かうフィリス達。そんな4人の動きに気付いた魔物がいたが、フィリス達は動じることなくそれを迎え撃ち、倒していく。

「ユリシスの味方をするやつは、全部オレ達の敵だあーっ！」

「おおっとー！」

そんな中で人間の兵士が現れ、イアンに攻撃を仕掛けてきた。だが喧嘩を売った相手を見誤ってしまったため、兵士はイアンに鳩尾を殴られたことで一撃で撃沈した。

「いでえよ、いでえよ！」

「動けないように足をうった、それだけです」

一方、セルフィスも狙われはしたが、相手の足を弓矢で射抜いたことで足止めをする。痛みを訴える相手に対しセルフィスは冷たく「素晴らしい放つ。」

「おりゃー！」

「どかないと、やけどするわよっ!!」

フィリスは相手にゲンコツを入れて気絶させ、フィリスは魔法攻撃で脅しを入れていく。そうして紛争地帯を突破し、4人は首謀者が指揮を執っているであろう場所にたどり着いた。

「あなたが、反乱の首謀者ね!？」

「ああ？」

そこにいたのは、それなりの衣服を身にまとった、位の高そうな男だった。ただ、彼の体はその衣服に釣り合わぬ細さであり、血色も悪く瞳も濁っていた。自分の元にたどり着いたフィリス達の顔を見た男は、にたりと不気味に口角をあげる。

「ああ…….そっぴいやなんかいっつけなあ？ 女王が改心するキツカケ



をあたえて国を救ったとかいってる、変な旅人

「変で悪かったな！ 少なくとも、反乱なんてバカげた真似するよかましだろ!!」

そういつてフィリスは相手の男を指さし、動機を聞く。

「だいたいお前は、何様のつもりだ!? ようやくあの国に平和が戻ったんだから、いたずらにそれをブツこわしてんじゃねーよ!!」

「平和だけ帰ってきて、それがなにになるってんだ!」

相手の男は手に持った酒の瓶を、地面に強くたたきつけて割った。

「女王が水を占領していなければ！ オレの息子も妻も、飢え死にせずすんだんだ!!」

「……!」

「女王様は今は、その罪を悔い改めているわ。 みんなの飢えを知って、もう2度とそんなことにならないように……つとめているのよ?」

あれ以降、あの国で生活に苦しんでいる人はいかなかったのよ……?」

「じゃあそこで、聞いたのかよ!? 国の水不足でどれだけの人間が犠牲になっていたのか! 国がよくなって女王が改心したら、改心する前に消えた命は帰ってくるって話は!!」

さらに男は怒声を浴びせてくる。男が反乱軍を立ち上げた動機は理解できてしまう。ありがちではあるが、簡単にはこの男の憎悪は消えることはないのだろう。そんなフィリス達に、男は淡々と語り続ける。

「もう今、女王がどう思っていて、どう国を盛り返そうと……オレには知ったこつちやねえんだよ!! 結局どうあつても、失ったモンはかえってこねえんだからよ!!」

「……」

「そうしたらよお……このグビアナ王国にはまだまだいっぱいいたんだよ。そこでオレは声をかけた……あの国に復讐をしようぜ……オレたちの苦しみを、今から与えてやろうぜ……ってなあ!!」

そういつて、男は宝石を取り出した。その宝石に、フィリス達は見覚えがある。

「あれって、宝石のかけら!?」

「さあ、アウルート様……今一度、グビアナを滅ぼし女王を殺す力を、オレに!」

「よいだろう……」

そこに現れたのは、どこかでみたような姿をした魔物だった。ただものではないその魔物をみたファイリス達は、身構える。

「なにもんだ、てめえは!」

「邪眼皇帝アウルート……魂をくらい、邪眼の力にする」

「はあ?」

「そして、我が今望むのは……この国にはびこる憎悪の念。さらに、この男の持つこの宝石よ……」

そういつてアウルートは男に手を伸ばし、目をカッと見開く。その目を見た男の体からオーラのようなあふれ、そのオーラはアウルートの口に吸い込まれていく。　　どうやらそのオーラのようなものは、魂だったようだ。

「クケカカカカツ」

「うっそ、魔物になっちゃった……!」

「そんなん、ありがあ!」

そして、魂を抜かれた男は、ヴァルハラという魔物に変貌を遂げた。目の前で人間が魔物に変貌を遂げる瞬間を目の当たりにしたファイリス達は、ただただ呆然とする。

「そうだあ……オレは宝石のおかげで、力を得たあ……宝石をくれれば、オレに力をくれるといつてなあ……!ハッハッハッハ!」

「なんという、愚かな……それを、あなたの亡き家族は望んでいるのですか!」

セルフィスは眉間にしわを寄せながらその男に問いかけるが、男はただただ笑い声をあげるだけで、セルフィスの声は少しも届いていない。

「ありやあ、ハイになってんな……」

「……………」

「クルーヤ……?」

そこでファイリスは、クルーヤの様子がおかしいことに気づき、声をかける。クルーヤの目はするどく、目の前の相手を捕らえている。「みんな……私、どんなヤツが相手でも……グビアナを守りたい」「わかってる。一緒にあいつと……戦おうぜ」「うん！」

首謀者ヴァルハラートと、アウルートとの戦いが始まった。早速セルフェイスはヴァルハラートとアウルートのつながりを発見し、仲間達にアドバイスを送る。

「あの男に力を与えているのは、アウルートです！ ヤツを倒し宝石を奪えれば、あの男の暴走はおさまるでしょう！ そのためにまずは、ヴァルハラートの攻撃をくい止めつつも、アウルートを討ちます！」  
「そういうことか、わかったぜ！」

仲間達が自分の作戦を受け入れたことを確認したセルフェイスは、マジックバリアとスキルトで仲間達を補助した後、魔力をためてからのイオナズンを相手に放つ。イアンも、ヴァルハラートの剣を棍ではじき、その腹にけりを入れて吹っ飛ばした。

「はあぁー！」

ファイリスはクルーヤにバイキルトをかけてもらった状態からアウルートにきりかかる。その一撃は決まったものの直後に、アウルートが放ったドルモアを至近距離で受けてしまう。

「クッー！」

「ファイリス！」

「問題はねえ！」

そういつてファイリスは立ち上がり、剣を構えた。アウルートは今度はバギクロスを放ちファイリス達に一斉に攻撃を仕掛けてくる。

それをセルフェイスのマジックバリアでしのいだところ、今度はヴァルハラートがつつこんできたのでファイリスはそれを盾で受け止め、耐えしのぐ。そこにクルーヤがメラゾーマを放ってヴァルハラートをファイリスから遠ざける。

「ほう、おまえたちも例の宝石を持っているようだな？」

「だからなんだ!」

そのとき、アウルートはファイリス達も例の宝石を持っていることに気付いた。

「その宝石の力は強い……私のようなものにこそふさわしい……それを手に入れれば、私は世界の支配だって可能になる……だから、私はそれがほしいのだ!!」

「うわああ!」

「ファイリスっ!」

アウルートはファイリスにつかみかかり、邪眼を開いてファイリスの魂をくらくらおうとしていた。彼女の魂を壊し動けないところで宝石をもらつていこうという算段なのだろうか。

「やめろ……!?!」

「な、なに!?!」

だが、目があったにも関わらず邪眼が発動しなかった。それどころかファイリスと目のあったアウルートが苦しむことになり目を閉じる。それに耐えられなかったアウルートに弾き飛ばされたファイリスは、床にたたきつけられ激しくせきをした。

「ガハッ……!?! はあ、はあ!」

「目が、目が熱い……痛くて痛くてたまらない!! おまえの魂は、ふつうではない……!?! おまえは、いつたい……!」

「よくわかんねえが、今がチャンスみてーだな!」

「アウルートが苦しむと同時に、ヴァルハラーの動きも鈍ったしな!」

確かにファイリスの目を見たアウルートが苦しんだ瞬間、ヴァルハラーも力を失っていた。やはり力を与えていた存在に影響があると、対象もおなじことになるようだ。

「ちようどいいじゃねーか……いまから、一斉攻撃でもやっちゃおうぜ!」

「はい!」

「ええ!」

「おう!」

ファイリスの声に応じ、4人は同時に攻撃を繰り出した。

「ギガスラツシユ！」

「どうこん討ち！」

「イオグランデー！」

「マヒャデドス！」

そうして4人は同時に技を繰り出し、その攻撃を受けたアウルトは、消滅していった。散る間に、あることを口にしながら。

「クオオオ……まさか、私の邪眼が通じないものが、いよう……とは……人間や、魔物なら……邪眼が……」

「……………」

アウルトの最後の言葉が気になったフィリスだったが、その目線と意識はすぐに、残されたヴァルハラーのほうにむいた。ヴァルハラーは剣を振り回したかったが、総攻撃の余波によるものか大ダメージを受けていて、動けなかった。

「もうあんたにや、後ろ盾はねーよ」

「姿も心も、すべて魔に染まってしまった……今あなたは、死ぬ以外に救済の方法はありません」

「し、死ぬ……!? オレも、あいつらみたいに……な、るのか……!?」

あいつら、という単語にフィリス達は眉間にしわを寄せた。そんなとき、クルーヤが前に出てきた。

「私に、この男のトドメをささせてくれるかな」

「……………」

そのクルーヤの願いを、仲間達は受け入れる。そして、男の前にたったクルーヤは、杖を構える。その動きから彼女は魔法を使つて男にとどめをさすつもりらしい、男もそれに気づき命ごいを始める。

「あ、あんたグビアナの人間だろ!? 同じ国の人間を、こ、殺す気か!？」

「他人を痛めつけて国を治めるものになった気であるようなヤツなんて、同国者扱いもしないし人間として扱おうとも思わないわ。第一、今の貴方はもう、魔物だもの……」

す、とクルーヤは杖を高く掲げる。すると魔力がその一転に集まっつていき、巨大は火の玉を作り出した。

「だから、私は貴方にこれをお見舞いするわよ！ メラガイアー！」

「うぎやああああああ!!」

そのメラガイアーを受けたヴァルハラは、悲鳴を上げた。そのなかでヴァルハラは必死になって腕を伸ばしてくる。

「あ、ああ、やだ、やだ……しにたくねえ……たす、たすけ……!」  
「この反乱のなかでそうお願いしていた人たちに、貴方はなにをしたのか……自分で思い出しなさい」

クルーヤのその冷たい言葉に対し、男はまだ必死に助けを求めようとしたが、口は動かなかった。そして、徐々にすべてが動きを停止し、そこには燃え尽きた灰のみが残っていた。

「自身が受けた苦しみを利用して、無関係の人を苦しめようとしていた、報いです……。死後のあなたに相応の対処は、神に委ねましょう」

そうセルフイスは口ザリオを手に、灰となった首謀者にたいし祈りを捧げた。それが、この男に対する情け、といったところだろう。

そうして、グビアナの動乱はこの一夜で終息を迎え、平和が帰ってきたと民達は喜ぶ。

「あなた達、流石は一度この国を救っただけはあるわね。やるじゃない!」

「はは、みんなが無事ならそれでいいよ」

ほかのグビアナ反乱軍は、魔物は殲滅をした中で人間は全員とらえ地下牢に閉じこめた。彼らには処罰は下しながらも命を奪うことはしないとのことだ。ちゃんと反省すればいいなとおもいながら、ファイリス達はユリシス女王からの感謝の言葉を受け取った。

「みなさん……この国を守っていただき、感謝していますわ……こんな私のために戦ってくれて、ありがとう」

「その言葉だけで戦ったかいがあります」  
謙遜するファイリス達にはほほえむ一方、ユリシス女王はクルーヤの方をみた。

「とはいえ、貴女を人殺しにさせてしまったわね」

「人殺しはしてないです、あれはもう……魔物だから」

「……そう、わかったわ」

もう元が人間であったとしても、身も心も魔物と化してしまえば意味はない……いや、たとえ姿形が人間であっても心が闇に堕ちたのであれば、クルーヤは迷いなくこの選択をとっていたのだろう。

「クルーヤ」

「ジーラ。もう大丈夫よ。貴女はこれからも大好きな女王様のところで働けるわ」

「……うん」

自分のことを心配してくれている親友に対し、クルーヤは笑いかける。そんなクルーヤの姿を見て、そして国をみて、イアンとフィリスとセルフィスは語り合う。

「クルーヤの方は、オレ達がいるから大丈夫だろうけど……」

「もうこの国は、ほんとに大丈夫だよな？」

「はい、大丈夫です。これこそが……女王様の犯した罪の、真の贖罪となりましょう。失ったものは確かに帰ってくることはありませんが、憎しみにとらわれてはいけません……同じ悲劇を繰り返さぬよう、戦うべきなのです……自分自身と……」

セルフィスは、民にそう語りかけつつ、女王の方をみた。

「今、己の犯した罪を認識し、償うために罪と戦うあのお方のように」

### 35 「地図をめぐる」

そうして、グビアナの反乱を止めた一同は再び旅をした。宝石のかげらを手でできた上に、ユリシス女王から宝の地図ももらえたからだ。

「宝石も、だいぶ完成に近づいてきたわね」

「ああ」

フィリスの手の中にあるマゼンタカラーの宝石は、最初に見つけたときよりも大きくなっている。地道ながらもカケラを集めていった結果のものだろう。

「あ」

「どうしたの？」

宝石を太陽の光にかざしつつみていたフィリスは、ふっと声を上げた。そして、思ったことをそのまま言葉に出す。

「そういえば、この宝石……女神の祈りって名前だったなって思い出しただけだ」

「忘れてたんですか!？」

「っーかなんでこのタイミングでおもいだした!？」

唐突に宝石の名前を口に出したフィリスに対し、セルフィスとイアンがツツコミを入れた。そんなことは気にせず、フィリスは女神の祈りという宝石のことを語る。

「……あの天使……ラヴィエルさんが言ってたよな。この宝石には……特別な者の願いを叶える宝石だって」

ラヴィエルは確かにそう言っていた。女神の祈りという名前が付けられたこの宝石には、願いを叶えるという奇跡の力を秘めていると。これが完成したとき、願いが叶うという伝承があることを。

「願いが叶う宝石なら、誰だってほしがるのは当然だと思うけど……魔物がねらうのは少し異常だわ。魔物達がかねえたい願いつてなんなのかしら」

「魔物達も、ひとつの軍勢と言うよりバラバラの目的で動いてて、それ



「それで女神の祈りをねらっているということなのでしょう」

「これまでに女神の祈りを狙う魔物は多くいて、フィリス達はそれを相手に戦ってきた。魔物はこれを手に入れてなにをするつもりかは、いつさいわからない。だがそれは、あの天使にも同じことができる。」

「……第一、オレ達がこれを完成させた後、ラヴィエルさんはそれだにを願うつもりなんだ？」

「わかんない。 だけど」

「フィリスはラヴィエルとあつたときのことを思い出す。 彼女にはなぜか、懐かしいものを感じたことも。 その懐かしさから、フィリスはラヴィエルから疑わしいものはないだろうと感じたのだ。」

「たぶん、悪いことには使わないと思う。 あたしはあの人を信じるぜ」

「……そっか、ならいいか」

「いいのか？」

「ああ」

「すんなりと自分の意見を聞き入れたイアンに、フィリスはきよとんとする。 ラヴィエルが悪人ではないという直感をただ伝えただけなのに、あつさり信じてくれたことが意外なのだ。」

「あたしの言葉、すぐに信じるんだな」

「なにを今更」

「……ああ、確かに今更だな」

「フィリスの旅は人間離れしているし現実味がまるでないものだ。 そんな彼女にここまで、イアンもセルフフィスもクルーヤもついてきている。 だから、フィリスがなにをしよう、なにを決めていようと、なにを言おうとも、信じられる。 それに疑問を抱くのは、本当に今更な話だ。」

「ねえ、今は依頼とか特にないでしょ？ だったら女王様からもらった宝の地図の洞窟を攻略してみない？ そこに、なにかすごいものがあるかもしれないわ」

「それは賛成だ」

そして、今回はクルーヤがそう提案をしてきたことで、宝の地図の攻略を挑むことにしたのであった。

「完成したとき、なにが起こるんだらうなあ」

と、女神の祈りに対するつぶやきをしたあと、フィリスはそれを荷物袋に収納した。

そうして女神の祈りに対する疑問を整理したフィリス達は、グビアナを救ったお礼として受け取った宝の地図の攻略に挑むことにした。

「今回は水が多く流れているわね」

「常々思ってるけど、どういう仕掛けなんだろうなあこういう地図って……」

「それ以上考えると、世界の理を乱す可能性があります。なので、ふれない方が得策だと思いますよ」

「……かもな……」

宝の地図の仕組みは気にするだけ時間の無駄なのだろうと、各々は自己完結させて先へ進む。道中は今までの例に漏れず、魔物が数多く生息していて、フィリス達の姿を見かけるなりすぐに襲いかかってくる。

「イオナズン！」

自分達の前に出てきたのは、巨大な女型の魔物・うみうしひめ。

数多く出てきた上でに攻撃力も高くタフなその魔物は、フィリス達の行く手を阻んでくる。相手の攻撃を防ぎつつ、クルーヤは全体に攻撃が行き渡る攻撃魔法を唱えてはなっていく。

「セルフィス、決めてくれ！」

「はい！ イオグランデー！」

そして、セルフィスがその上位魔法を放ったことでうみうしひめの群は消滅し、彼らの前に再び道が現れる。次の間者の群が現れないうちに、そして魔物達が気付かないうちにと、フィリス達は気配を消しつつ先へ進んだ。

「魔物くらいはあたしらの敵じゃないとはいえ、連続でかかってくる」と厄介だしめんどくさいもんな」

と、フィリスは魔物におそわれることについてそう語った。そんなとき、彼女のそんな気持ちに反しているかのように魔物が再び現れて攻撃を仕掛けてきたが、それもやはりというべきだろう。フィリス達はあっさり蹴散らして見せた。

「たあいねえな」

倒れた魔物相手にイアンはそう言つて、手の埃をはらうかのようにパンパンとたたいた。彼にとって今の敵は、暇つぶしにも値しなかったかのようだ。

「今までと同じなら、この洞窟の最奥部にこの洞窟のボスと言うべき魔物がいるはずだ。そいつなら、あんたを満足させる大敵になれるんじゃないか？」

「おう、そうだな。 はやく会いたいぜ」

フィリスの言葉をきいたイアンは、この洞窟の最奥に在るであろう敵に対し期待をして胸を高鳴らせた。 そんなイアンの姿を見たセルフィスとクルーヤは、密かに会話をする。

「なんか最近のイアン、気が高ぶってるわね」

「クルーヤさんも、そうおもいますか？」

「ええ、だって火をみるより明らかだもの。 グビアナでの戦いが、彼の闘争心に火をつけちゃったのかしら？」

彼の闘争心が高ぶった原因らしい原因は、あのグビアナ反乱軍との戦いだらうと、2人は思った。 とりあえず、この洞窟の奥にいるボスを討てば、イアンも落ち着くだろうと推測し、最奥部へ続く階段を降りていく。

「この先にいるんだな？ 早く戦おうぜ」

「ホント、やる気満々だな」

そう会話をしつつ、この洞窟のボスが何者なのかをその目で確認をする。 だが、その目でその姿を拝む前に自分達に影がさしていたので、まずはそちらに向いた。 一同はその不自然に大きな影にたいし疑問を浮かべつつ、ゆっくり顔を上げてその影の正体をみる。

「うおおおーん」

そこには、だいたい色の筋肉質な肌、その手に混紡を持っている、

一つ目の巨人が立っていた。その姿を見た4人は、同時に同じ感想を口に出す。

「でっつか!？」

「うおおーん!」

4人がそのサイズにたいし驚いていると、巨人は泣き声のような声を上げていた。

「アトラス、いうこときかないやつは、ゆるさないぞー! きらいだぞー!!」

「しかも、なんか言ってることがガキだし!!」

どうやらこの巨人はアトラスという名前らしい、巨体に似合わずかなり幼稚な口調と言葉を口に出している。その体のサイズもあって声は大きく、洞窟内に響きわたっている。

「アトラスのいうとおりにならないやつ、こうしてやるー!」

「うおおお!!」

そう言ってアトラスが地面をたたくと、その洞窟内が大きく揺れた。さらに、地面が盛り上がりそれにより4人は吹っ飛ばされてしまふ。

「!」  
「うわああ!!」

「きやあ!」

先手で大ダメージを受けたファイリス達だったが、すぐに体制を立て直し、アトラスを倒す体制に入る。

「おいおいおい! いきなりやってくれたなあ!」

「本気でシメるぞ、てめえ!!」

「大いなる守りを……スクルト!」

「力を与えよ、バイキルト!」

セルフィスは相手がパワータイプであるを見抜き、防御力をあげる補助魔法を仲間たちに重ねてかける。クルーヤも、まずは先頭に立っているイアンとファイリスに対し攻撃力を増加する補助魔法をかけてから、自分も攻撃にでられるようにと、己の魔力を高めるために集中する。

「氷結らんげき！」

「はやぶさ斬り！」

その強化を受けた2人がそれぞれ技を繰り出し、アトラスに特攻をしかける。その一撃を受けたアトラスはまた、うおおんと泣き叫ぶような声を上げつつフィリスに向かって棍棒を振り回してくる。

「いちいち泣き叫ぶんじゃねえようつとおしい!!」

その一撃を盾で受け止めつつ、フィリスはアトラスにたいし怒鳴りつける。自分の体に攻撃が当たるとはなかったがやはりアトラスの攻撃力は高く、フィリスはかなり後方まで吹っ飛ばされた。そこに、クルーヤのメガガイアーが放たれてアトラスを炎の中に閉じこめ、セルフィスはアトラスの中心に向かって矢を放つ。

「いまだ！」

そこにイアンがつつこんでいき、アトラスの喉元に強烈な拳を入れた。それにたいしアトラスは苦しそうな声を上げ、イアンは追い打ちでさらに棍でつくが、直後にアトラスは棍棒でイアンの体を地面にたたきつける。

「ぐああ！」

「イアン！」

その一撃はイアンに効いたが、イアンは地面にたたきつけられてもなお立ち上がってみせる。

「く、そおおっ！ なめんじゃねーよっ!!」

立ち会ったイアンはそこからアトラスにつつこんでいき、再び氷結らんげきを繰り出した。その連続攻撃にひるんだところで、フィリスはミラクルソードを繰り出して切り裂き、クルーヤもマヒヤデドスを繰り出した。その連続攻撃を受けたアトラスは倒れ、土埃がその場に舞い上がる。

「やったか!」

「うおおおーん!!!」

あの連続攻撃に倒れたか、と誰もが思ったそのとき、アトラスは再びあの声を上げながら立ち上がり、棍棒を高く掲げた。

「いやあ!」

「くっ！」

「まだかよ、クソツ！」

アトラスは次の一撃で、自分達を倒すつもりなのだど悟ったイアン達は身構えた、そのときだった。

「ドルマツ！」

突然聞こえた攻撃魔法の名前。それが飛んできてアトラスの目に命中し、それがとどめの一撃だったようでアトラスは再び倒れ、そして消滅した。突然のことにイアンもクルーヤもフィリスも驚き、その魔法を使える人物を一齐にみた。

「セルフィス？」

「みなさん、ご無事ですな……」

その魔法を放った本人は、仲間たちが無事であることを知り安心したのか、ほほえんでいた。フィリス達は一齐にセルフィスに駆け寄って、彼のあの行動の真相を問いかける。

「なんであそこで、ドルマを放ったの？」

「僕もなぜかはわかりません……ですが、脳内にドルマを使うべきだという判断が浮かんできたのです」

「……どういふこと……？」

ドルマは闇の属性をもっており、その属性の攻撃魔法の中では初級……つまり、一番弱いものなのだ。彼の判断に対し疑問は残るが、この地図の攻略は今ボスであるアトラスを倒したことで果たされた。

「まあ無事に倒せたんだし、結果オーライといこうぜ」

「奥に宝箱もあるし、もらっちゃいましょ」

奥にはしっかりと宝箱が置かれていた。この宝箱の中に、これからの旅に関するものがあるかはいっているかもしれない。そんな期待を抱きつつ、今回はとどめを刺したセルフィスに開けさせる。少し照れながらもセルフィスは宝箱をあけて中身を確認した。

「どう、セルフィス？」

「また、地図ですね」

「「地図かぁーい!!」」

宝箱から出てきたものにたいし、そうそろってツツコミを入れたの

だった。

「ふう……とりあえず宝の地図、ひとつクリアだな」

そういうしながら、ファイリス達はその洞窟をでた。そして、宝の地図は用済みと言うことで畳むと、背後にあった自分達の攻略した洞窟は一瞬で消滅した。

「地図をしまおうと洞窟も消えたわ」

「この地図は特別なものなのでしょう。まるで、地図と洞窟が同一のものようです」

「じゃあ、もっかい開くと?」

そういいながらファイリスはもう一度宝の洞窟の地図を開いてみる。すると、さつきと同じ場所に洞窟がでた。それにたいしなるほど、とだけいって再び地図を畳んで洞窟を消す。

「これなら好きなきに、あの洞窟でいつでも修行ができそうだな。

オレは嬉しいぜ」

「それで喜ぶの、貴方くらいのものだと思うわ」

修行好きのイアンがそういうので、クルーヤは軽くツツコミを入れる。若干、ファイリスもイアンと同じ気持ちだったものの、あえて黙っていた。

「じゃあ次は、さつき手に入れた新しい地図の攻略にでも挑んでみる?」

「そうだな……」

次の目的について話し合おうとしたとき。4人に影がさした。顔を上げてみるとそこにはいつの間そこにいたのだろう、白く大きな翼を持った銀髪の天使の女性……ラヴィエルの姿があった。

「ラヴィエルさん?」

「また会えたな……ファイリス……そして、人間たちよ」

ラヴィエルは彼女達にそう声をかけてくる。なにしにきた、とイアンが問いかけてみると、ラヴィエルは彼女達に確認をしにきたのだと答える。

「女神の祈りは徐々に完成に近づいているようだな」

「ああ、まあな」

彼女が確認したいのは、女神の祈りの完成度のようだ。ラヴィエル曰く、宝石の完成はかなり近いようだ。これはそう遠くない未来のことかもしれない、とつぶやくラヴィエルにたいし、フィリスは彼女と最初に出会ったときから抱いていた気持ちをそのまま打ち明ける。

「なあ、ラヴィエルさん」

「なんだ」

「唐突にこんなこと聞くのはヘンだけども……あたしとあなた、どこかで会ったこと……ないか？」

フィリスのその問いに対し、ラヴィエルは一瞬だけ目を見開いたがすぐに目を伏せて、首を横に振った。

「……いや、私と君はあの時が初対面だ」

「……そうか……」

それをきき、フィリスは残念そうな顔をした。自分が感じていた違和感のようなものは、気のせいだったのかと。そんな彼女の表情をみたラヴィエルは、なにを思ったか口を開こうとした。

「……君は……ッ!？」

「どうしたんだ？」

だがそのとき、ラヴィエルは何かの気配を感じ取り目つきを鋭くさせ遠くを見た。突然の豹変にフィリスは驚きつつも、なにかあったのかと問いかける。するとラヴィエルは自分の睨みつけている方向に向かって手を伸ばし、そこから流れる気配を探りながら淡々と語る。

「強い力の気配を、今は感じる……山脈に囲まれたところに存在する、かつて魔物により滅ぼされた村より、気配を感じる」

「魔物に滅ぼされていて、山に囲まれた村っていうと……」

「カズチャ村か!？」

思い当たる場所を口に出すと、ラヴィエルは引き続き気配を探りつつ語り続けた。

「そして、大いなる草原の空は、深い闇のように暗い……このままで



は、草原は業火に包まれるだろう」

「……！」

ラヴィエルの言葉を聞き、フィリスの顔に焦りがでてきた。その顔にたいしラヴィエルは、あの地にすむ人々と彼女達は親交があるのだと気づき、彼女に告げる。

「すぐに急ぐといい！」

「は、はい！」

それだけを伝えると、ラヴィエルは天高く飛び去って行ってしまった。残された4人は、すぐにでもカルバド大草原へ向かうことを決める。

「カルバドの人々の安否が心配ですね……！」

「いそごう！」

そう声を掛け合い、フィリスはルーラの魔法をつかった。

「今起こっている災厄をはらってくれ……頼む、フィリス……！」

### 36 「草原は暗雲に包まれて」

ラヴィエルの預言に従い、カルバドの大草原を訪れたファイリス達。ルーラの魔法で訪れたその場所は、以前訪れた時とまるで様子が違っていた。

「なんだ、これ……」

「真つ暗ね……おまけになんか、焦げ臭いにおいがするわ……」

草原を重い空気が包んでおり、あの穏やかさはいっさい感じられない。この地の草木はどこかくたびれていて、周囲には魔物が溢れかえっており、その数は以前とはけた違いにも見える。一体この草原にいま、なにが起きているというのだろうか。

「とにかく、遊牧民のみんなが心配だわ。集落へ急ぎましょう」

「そうだな」

その声を掛け合い、4人は草原を進んでいく。アイアンクツクの群や、アサシンエミューの群などにおそわれながらも、それらはすべてクルーヤとセルフィスのイオナズンが一掃してくれる。

「グギイ！」

「なんだ!?!」

突然魔物らしき声が聞こえてきたのでファイリスは条件反射で剣を抜き構える。だが、その魔物の姿を見たファイリスは拍子抜けな顔になったと、その魔物の名前を口に出した。

「あんた、もしかして……ポギー!?!」

「グギギギギ！」

「ポギー、無事なんだな！」

魔物、もといマンドリルのポギーも、ファイリス達のこと覚えているようであり、彼女達に敵意を向けず普通に接してきた。ファイリス達も、ポギーが悪い魔物ではないことはわかっていたので、普通に接し無事を喜んだ。

「なあ、今この草原はどうなってるんだ？ 集落は？ ナムジンさんや、みんなは大丈夫なのか？」

そんなとき、フィリスはこのカルバド大草原の異変について現状を理解するべく、ポギーに問いかける。すると、ポギーはグギ、と短くないたあとで歩きだし、ちらちらとフィリス達の方をみてきた。

「ついてこいって、言ってるみたいだな」

「うん、いこう」

他に当てもないので、フィリスはポギーについていった。彼につれてこられたのは位置などからして、カルバドの集落であることはわかかったが、そこもまた以前とは違う風貌になっていた。

「おうちがボロボロだわ」

「なんとひどい……本当に、なにがあつたというのでしょうか」

建物は傷つき、人の気配はない。以前はのどかで穏やかな場所だったのに、この変貌は何事なのだろうか。そこで、最も大きなパオに向かつてみると、そこには人だかりができていた。フィリス達はその中でも最も目立つ男に気づき、彼に声をかける。

「あれは……ラボルチュ様!? おーい!」

「むっ?」

その男は前族長である、ラボルチュだった。ラボルチュはフィリス達の姿を見ると、おおっと声を上げた。

「フィリス! その仲間の者も……よくきてくれた……! よく無事に、ここまでたどりついてくれたな……!!」

「ああ、貴方も無事でよかったです! でも、この状況は一体……?」  
再会の喜びもつかの間、フィリス達はカルバドが今どのような状況なのか気がなりそのことについてラボルチュから情報を得ようとする。フィリス達の質問に対し、ラボルチュは顔を険しくさせつつ族長のパオの中に入って現状を伝える。

「ことは10日ほど前のこと……突如カズチイチイ山のほうから見慣れぬ魔物の大群が現れ、カルバド草原に攻めいつてきたのだ」

「ここでも……ほかの地と同じようなことが起きていたなんて……」

「我々は抵抗するために戦ったが、その中心にいる魔物が他とは桁違いな強さを持っており……今は防戦一方だ。敵の根城はおそらく、カズチャ村だとはおもうのだが……」

「確かに、あそこなら魔物が根城にするにはうってつけだからな……」  
おそらく今は、魔物の嫌うアバキ草も生えてはいないのだろう。  
また新しいものが生えてこないうちに、この草原を滅ぼそうとしているのかもしれない。

「ところで、族長様の姿が見えませんが……またいつものように見回りにでているのですか？」

そこでふと、現族長であるナムジンの姿がないことにセルフィスは気づき、彼の所在について問いかける。すると、ラボルチュの顔は苦々しくなり、4人に彼の現状を伝えた。

「……ナムジンは………」

「？」

「カズチャ村へ偵察にいったきり、戻ってこないのだ」

「なんだって!？」

「唯一、ナムジン様の乗っていた馬だけが帰ってきたんだが、その馬も傷だらけで……帽子もボロボロの血塗れだったんだ」

「ナムジン様は簡単に死ぬタマではねーべ……だけでも……」

帰ってきた馬はかろうじて一命を取り留め、手当を受けているところのようだ。その馬の傷や、今手に持っているナムジンの帽子をみて、彼らも気が気でないらしい。ポギーも、そちらへ向かいたいがナムジンからこの集落を守るよう強く言われてしまったために動けないようだ。

「……お前達になら頼めそうだ。カズチャ村へ赴き、ナムジンを探し出してはくれないか？ 頼む……！ ナムジンを助けてくれ！」

フィリス達の実力を見込み、ラボルチュは息子の救出をフィリス達に頼んできた。それにたいしフィリス達は顔を合わせてうなずきあい、その依頼にたいする答えを出した。

「もちろん！ 頼まれずとも、話を聞いたときからそうすることを決めてましたよ！」

この頼みを引き受けてくれたことに対し、ラボルチュは感謝の言葉を継げたのだった。

魔物たちが根城にしているポイントであり、ナムジンが消息を絶つた場所であるカズチャ村を屈指した。そこはすでに滅んだ地であるため元々暗い空気が包む場所ではあったが、それが悪化しているようだった。

「前きたときよりも、崩落が進んでいるわね……」

「ああ……気を引き締めていこうぜ」

カズチャ村に足を踏み入れた4人は、その変化に対し緊張を覚えていた。ボロボロなのはわかっていたことだが、それに拍車がかかっているようだ。そんな、次はどこが壊れるのかわからない場所を、できるだけ魔物に見つからないように進んでいる。

「真に討つべきは元締めだ。だから無駄な戦いを避けて力を温存させようぜ」

「そして、族長様も助けましょう。誰かが犠牲になることは、僕達にとってもつとも望まないことですから」

「そうだな……」

セルフィスの言葉を聞き、フィリスは剣を握る手に力を込めた。元からそうするつもりではあるが、改めてここにいる魔物を全滅させて彼を助けたいと強く願っているのだ。

「きやあー」

「あぶねっー」

そんなとき、どこからか闇の攻撃が放たれて4人に襲いかかってきた。それを皆でガードをしてダメージを軽減させると、それが発端となったかのように魔物の群が一斉に現れて、フィリスを一斉にとり囲う。

「な、なんだ!?!」

「こんな魔物達、前は住んでなかったわよね!?!」

「ああもう、先を急いでるといふのに!」

「やむをえませんね……!」

魔物の群は自分達に牙をむいている。それに応じるため4人は武器を手に取り魔物の群と向かい合う。

「向かってくるのなら! 道を妨げるのなら! あたしらが一匹残ら

ずぶつ殺してやるから覚悟しな！」

そう叫ぶと同時に、フィリスは魔物にきりかかった。彼女が切り捨てたのは黄色い悪魔の魔物・イエローサタンであり、フィリスの剣にその身を裂かれつつも彼女にかみつこうとしたところ、フィリスの剣によりさらに傷口を開かれたことで息絶えた。

「フツ！」

「はあ！」

「イオナズン！」

イアンは回し蹴りを食らわせ、セルフィスは弓矢で相手の急所を的確に撃ち、クルーヤは攻撃魔法で全体的にダメージを与える。

「おい、こいつらのボス！　でられるもんならでてこいやあーっ！」

数が減ってきた頃、フィリスは魔物の群に向かってそう叫んだ。

すると、その声に応じるかのように、奥からなにか重々しい声が聞こえてきた。

「フウウウウ……」

「……あいつが、そうなのか？」

「そのようです……他の魔物とは何かが違いますから……」

そこに現れたのは、竜のような顔と大きな体を持ち、ぎよろつとした双眼が特徴的な魔物だった。この魔物の気配は、他の魔物とも普通とも違うものを感じるため、ボスであることは間違いない。

「このイデアラゴンに、なんの用だ？」

「イデアラゴン？」

「このようなところに4つ、人間がいるとは……もしや、この間とらえた人間の仲間か何かか？」

「とらえた、人間?!」

その言葉にフィリスは胸がざわつき、繰り返す。

「この草原を根城にしていた遊牧民どもの長、だったか……生意気にも我らを偵察していたから、軽くひねったのだよ」

「なにっ!？」

「我らに降伏すれば、命だけは助けてやろうと言ったのだが……一向

に首を縦に振らないのだ。だから、地下に幽閉してやった!」

「まだ、生きてるのか!」

「ああ……すぐに殺してはつまらんからなあ。ただ、閉じこめてそのままにしてあるから、今どうなってるかはわからんがな!!」

そう言ってイデアラゴンは大笑いをした。彼の言葉を聞いたフィリスは、すいせいの剣を握る手に力を込め、歯ぎしりをたてつつ敵を睨みつける。

「て、めえ……!」

「さあ戯れ言は終わりだ、お前達も捕らえて、我らのエサにしてやろう!!」

「だったらー!」

お前達を全部殺す。そう言おうとしたフィリスは自分に飛びかかったゾンビナイトの攻撃を盾で受け止めてから斬ろうとした。

だがそのとき、イアンの棍による技・黄泉送りがゾンビナイトを瞬殺した。

「イアン!」

「フィリス、聞いたわよね!? 族長様は地下よ!」

「えっ!」

「この敵はすべて、僕達が引き受けます!」

「だから、お前は彼を助けにいけ! 任せるぜ!」

「わかった、必ず助ける!」

仲間達の声に対しフィリスはそううなずいて答え、地下への階段に向かって走っていった。それをイエローサタンやゾンビナイト、グリーンドラゴンなどが追いかけていたが、イアンがそれを妨げる。

「まあまあ、まちなよ。オレらがためえらのお遊戯に付き合っつてやっから……心配すんな」

そういつて、イアンは指をボキボキとならした。

仲間達が魔物を引き受けている間に、フィリスは地下の階層を突き進む。どこかに、自分達の探す者がいるとおもって。

「ッ!？」

そんなとき、血のにおいがした。それにフィリスは気づいた。すぐに血のにおいをたどり、ある牢屋の前にたつ。そこにいたのは、長い黒髪の、フィリスと年の近い青年。傷だらけの彼は今、鎖に両腕を拘束されている。

「ナムジンさんっ!!」

それが誰なのかに気付いたフィリスは、名前を口に出しながら慌てて牢屋をあげようとする。だがそこはしっかりと鍵をかけられていた。一瞬焦りを見せたフィリスだったが、すぐにさいごの鍵のことを思い出しそれで鍵を開け、牢屋の扉を開けて彼に駆け寄る。

「ナムジンさん、ナムジンさん!」

必死に名前を呼ぶが、意識のない彼は返事をしない。まだ死んではいないようだが、このままでは危うい。剣をふって鎖を断ち切ったフィリスはナムジンの身体を受け止めた。その体があまりにもぐったりとしていて軽かったことから焦りを覚えたフィリスは、なんとかして彼を救えないかを考える。

「……そうだ、世界樹のしずく!」

そこでフィリスが思い出したのは、以前にもらった、世界樹のしずく。それを使えば確実に、彼を救えるに違いない。急いでそれを取り出し飲ませようとしたが、意識のない彼の唇は動かない。そこでフィリスはそのしずくを一気に口に含み、そのまま彼の口とあわせ、口移しをすることで彼にしずくを飲ませた。

「……っ……」

「!」

これで彼の体内に世界樹のしずくが流れていったはずだと、フィリスは彼の顔をじつと見つめた。すると、眉と口元がわずかに動き、やがて彼は目を開けた。

「……」

「なあ、あたしがわかるか!？」

「……ファイ、リ……ス……?」

声はかすれていて、途切れ途切れではあるが、ナムジンは視界には



いった少女の名前を口にす。それをきいたフィリスは安堵の笑みを浮かべて、ナムジンに抱きついた。

「フィリス……!?!」

「……………よかった……死ななくて、よかった……」

突然抱きつかれて戸惑うナムジン。その行動で彼の意識は一気に戻り、そのままの体制でフィリスはぽつぽつと言葉を漏らしている。それを聞いたナムジンは、彼女に何かを告げようとした。

「グオオオオオー……!」

そのとき、2人の前にある魔物が現れる。それは全身に甲冑を纏いその手に大型の武器を持った魔物・サタンメイルだった。その一撃を食らいそうになったフィリスは彼を抱えた状態で回避し、攻撃を受けることはなかった。しかしそれにより、フィリスの髪をまとめていた紐は切れ、ポニーテールはバラバラにとかれる。

「なっ……………」

「貴様っ……………」

フィリスは長い空色の髪をなびかせつつ、剣を抜いて構える。サタンメイルは再びフィリスに攻撃を仕掛けようとしたが、それをフィリスは盾で防いでから剣を大きく振るいその身を切り裂く。

「うあああ!?!」

「フィリス!」

サタンメイルを倒した直後、どこからか爆発が起きてフィリスを吹っ飛ばした。すぐに体勢を立て直して自分を攻撃した敵の正体を確かめると、そこにはイデアラゴンの姿があった。

「お前は……………」

「てめ、なんで!」

「あの人間達は今もなお、我がシモベどもと戦っている。お前達はここで、我が手によりその命を絶つのだ!」

「そんなこと……………」

「させるかよ!!」

そのとき、イアンが飛びかかってイデアラゴンに氷結らんげきをイデアラゴンに食らわせた。さらに、ドルモーアとメラゾーマも飛ん

できてイデアラゴンを攻撃する。

「みんな！」

「フィリス、大丈夫!？」

「お、族長さんも無事みたいだな!? とりあえず救出成功か!？」

その場に、イアンもセルフィスもクルーヤも現れた。

「ぐ……おのれえええ!! 我をなめてかかっているのか!？」

「ああ、ナメてんぜ」

立ち上がりながら怒って放たれたイデアラゴンの言葉に対し、イアンはすんなりとそう返した。

「自分だけ助かるため、手柄をとるために下っ端を利用するやつなぎ、ハナからオレらの敵じゃねえよ」

「僕達は、互いに答えるために別行動をとったにすぎませんので、同一視しないようお願いします」

「そして、私達も魔物はそれなりにいっぱい倒したし、フィリスも約束通り族長様を助けられたわよ!？」

クルーヤはフィリスの方を向いて、にっこり笑いながらウインクをした。

「ね、フィリス!？」

「……ああ!？」

そんなクルーヤの言葉に対しフィリスは力強く笑って頷き、剣の切っ先をイデアラゴンに向ける。

「お前に殺される人は……一人も出させないっ!!」

「なまいきをおお!! イオナズン!？」

イデアラゴンはイオナズンを放ったが、それをクルーヤの同じ魔法が妨げる。そしてセルフィスがドルモーアを放ち、イアンがその腹部に拳をいれ、ひるませる。

「ギガ・ブレイクッ!？」

「うぐあああーっ!!」

そうして、フィリスが今の感情のすべてを込めた剣技がイデアラゴンにヒットし、致命傷を受けた。

「う…………ぐお…………」

「さて、もうテメエはなんもできてねえぜ」

「あ…………ぐあ…………ま、まだ、まだ…………死にたく、ないい…………ようやく、ようやく…………この地を我がものにできそうだったのに、死ぬのはイヤだあああ…………ころ、さないでくれえええ…………！」

「はあ？　なに言ってるんだてめえ？」

野望を口にしながら必死に命乞いをしようとするイデアラゴンに対し、イアンはあきれたように言う。だが言っていることはハッキリ言って支離滅裂もいところだし、さつきまで自分達はおろかナムジンのことも殺そうとしていたのに、今更許されるとでも思っているのだろうか。

「…………そ、そうだ！　草原の民の長よ！　お前は以前、草原を征服しようとした魔物を許したのだったな!!」

そんなとき、立ち上がったナムジンの姿が視界に入ったらしい。

イデアラゴンは彼に懇願し始めた。

「その寛容さがあつてこそ、長をかたれるのだろうか!?　であれば、我的命も救ってくれ！　まだ民の屍もでていないし、お前も存命なのだろう!?　そこまでの大罪は我は犯していないはずだ！　そのときの魔物と同様に、その大きな器を持ってして我を許してくれ！　よいだろう!?　お前は一族を統率する長なのだから、これくらいのごときは、許してくれるのだろうか!」

「な、てめ…………」

「…………」

フィリスがトドメをさしてやろうとしたとき、イデアラゴンの額に一本の剣が突き刺さった。そこから奇妙な色の血が流れている。

「な、に…………?」

「他者の器の大小の意味を、はき違えるな!!」

その魔物に対し、ナムジンは激しく怒鳴りつけた。剣をイデアラゴンに突き刺したまま。あの液体を魔物から流させたのは、彼だったのだ。

「元から許しをこうするために他者を苦しめようなど…………許してもらえない

だろうと甘ったれたことをぬかす者に、与える許しなど存在しない！  
簡単に許してすませられる罪など、この世にはない！ そのことをその身に刻んで……消えろ！」

そして剣を抜き取り、そのままイデアラゴンの顔を大きく切り裂いた。それによりイデアラゴンは断末魔すらあげることなく、霧となって消滅していった。

「……ナムジンさん……」

「あくまでも私は、一族を束ねるもの。民を傷つけるものには、牙をむくつもりだ……誰になんと、思われようともな」

そうナムジンは彼らにいつて、剣を鞘に納めたがそのときめまいを起こしてひざを折った。慌てて4人は彼をとり囲う。

「大丈夫か!？」

「ああ……一命は取り留めたとはいえ、まだ少し魔物に囚われていたときのダメージが体にあるようだ……」

「無理もないわ、もう数日間ここに閉じこめられてたんでしょう？  
生きてるのが不思議よ……」

「……すまないが、私とともに集落へ戻ってくれないか。君達に護衛をまかせたい」

「もちろん、そうさせてよ」

「時折、僕も回復の魔法を使います」

そう話をしながら、彼らはナムジンを護衛しつつ帰ることになった。そのとき、フィリスの荷物袋から一個の瓶が落ちたので、セルフィスはそれに気付いて拾い上げる。

「ん、このビンは……」

セルフィスは、フィリスが落とした瓶がなにかに気づき、フィリスとナムジンをみた。

そうして5人は無事に集落に帰り、魔物の群とその元締めは敗れ去りこの草原が攻撃されることはなくなったことと、族長ナムジンが生還したことを伝えた。ラボルチュはフィリス達に礼を言う一方で、無茶なことをしたとナムジンを盛大に怒鳴りつけた。ナムジンは

その怒声で傷をさらに痛めつつもその意味をかみしめていたのだった。

「はあ……父上に久し振りに盛大に怒鳴られたせいかな、頭がグラグラする……」

「グギギツ」

あのあと、ようやく再び平和が訪れたことで安心してある民達をみとどめ無事を伝えたナムジンは、傷の手当を受けた後で自分の寝室に帰ってきた。そこには、自分にかわり草原を守ってもらっていたポギーの姿もあり、2人だけではなしをする。

「わかってるよ、ポギー。父上は、私を心配していたのだということくらい」

「ギギツ」

「……うん、シャルマナにも礼を言わないとな。あれでも、草原のみんなを守ろうとがんばっていたみたいだから」

そして、ナムジンは母のことも思いだしてつぶやく。

「母上も……私がそちらへ向かうことを望んでいないだろうからな……」

そういいながら、ナムジンは包帯まみれの自分の姿を見た。本当に、今生きていることが我ながら不思議に思えるくらいだ。やはり自分は、志半ばで命を絶つべきではないのだろうと、自分の背負うものを通じて感じていた。

「ナムジンさん、いる?」

「その声は……ファイリス?」

そんなとき、この部屋の前でファイリスの声がしたので返事をする。そこにファイリスが入ってきた。今の彼女は装備をはずしており、簡易な姿をしていた。そんな彼女が一人でここにきたことに疑問を抱いたナムジンは、首を傾げつつ用を尋ねる。

「ファイリス、どうかしたのか?」

「もう、平気か?」

「うん、私はもう平気だよ。これも、ファイリス達のおかげだ」

「……」

「ありがとう、フィリス。 本当に……君達には助けてもらってばかりだ。 君達には感謝していて信頼もしているから、ちゃんと礼もしたいとも思っている。 だから、少し待っててくれ……っ」

そうナムジンはフィリスに笑いかけながら告げると、フィリスはなにも言わずにナムジンの胸に顔をうずめてきた。 つまり、フィリスはナムジンに抱きついたことになる。

「えっ、ふい、フィリス!?!」

突然抱きつかれ、ナムジンは赤面しつつ焦る。 まさか彼女はこんな大胆な行動にでる人物だとは思わなかった。 どうしたらいいかわからないナムジンにたいし、フィリスはぼつぼつと告げる。

「……突然で、ごめん……。 ただ、あなたが、ちゃんと生きてることを、知りたかったんだ。 直にこうやって、確かめたかったんだ……」

「……?」

「もう、もう……あたしは、あたしの目の前で誰かが犠牲になるところ、みたくない……。 あのとときも、助けられなかったのかもしれないとおもうと……こわくてこわくて、たまらない」

それをきき、フィリスの心情に気付くナムジン。 そんな彼に、フィリスはあることをお願いしてくる。

「もう少しの時間だけでいい。 ここで、こうやって……あなたが生きていることを、確認させてくれ……」

「……いっよ」

それをきき、フィリスは彼の心臓の音をききながら静かに微笑む。

一方、ナムジンもまたそつと、彼女の背に腕を回したのだった。

### 37 「まだ、すべきこと」

カルバドを手に入れようとしていた魔物を退けたファイリス達は、その翌日には旅立とうとしていた。

「もう、大丈夫？」

「ああ」

旅立つ前、ファイリス達は自分達が旅立った後のことを考え、ナムジンに確認をとった。魔物の攻撃を受けとらわれていた彼はまだ包帯まみれではあったが、顔色もよく自分の足でたち、ファイリス達と向かい合って話ができるようだった。

「私のけがが完治するのはまだ時間はかかるが……もうこの草原に脅威はない。あとは我々の力だけで、乗り越えてみせるさ」

「そうか……けど、無理はしないでくれよ。みんな、あなたを頼りにしているんだ。途中で無理してくたばったら、その思いを無碍にってしまうからな」

「はは……気をつけるよ」

ファイリスの言葉に対し、ナムジンは苦笑して答えると、ふとあるものを思い出す。

「そうだ、ファイリス」

「なに？」

「君が旅立つ前に、君にこれを渡しておきたいと思ったんだ。受け取ってほしい」

そういってナムジンが彼女に手渡したのは、白い大きな羽がついた、髪をまとめるための紐だった。それをみたファイリスは、自分のものであるとすぐに気付き目を丸くした。

「あれ!? これって……!」

「ポギーとシャルマナに頼んで、探してもらったんだ」

「そうだ……戦ってるときに解けたみたいで、なくしてたんだ……」

気付いたのは、集落についた後のことだった。カズチャ村で落としただろうとは思ったが、あのままナムジンの元へ向かいそのまま寝

落ちしてしまつたから、探しにいけなかつた。

「きつと、大事なものだつたんだろう……君が旅立つ前に見つけられて、よかつた」

そうナムジンがほほえむと、フィリスはすぐにその紐を受け取りそれで髪を結び、いつものポニーテールになつた後で顔を上げて笑顔を浮かべる。

「……ありがとな！　あなたが見つ付けてくれたことも含めて、この髪留めはこれからも大事にするよ！」

「そうか。それなら嬉しい。私もこれからも、君達の旅の無事を祈りながら、再会を心待ちにしよう」

「ああ、もちろんまたくるさ！　あなたも、草原をしっかりと守つてよ！」

「ああ」

そうしてカルバドの窮地を救つたフィリス達は、再び旅だったのであつた。

「無事に草原も、みなさんも救えて一安心ですね」

「ああ」

草原を旅立つた4人は、ヤハーン湿地を進んでいた。先日手に入れたあの新しい地図の指し示している場所を探すためだ。その途中で彼らはウドラーの群に襲われるもののそれを退けた。やはり、彼らの敵ではなかつたのである。

「なんででしょう、これ？」

「どうしたんだ、セルフィス？」

そんなとき、セルフィスはウドラーが消滅した場所に何か落ちていることに気付いて、そこに歩いていく。そこに落ちていたのは、木こりが使うようなありふれた斧だつた。

「斧、ですね……おそらく、あのウドラーが持っていたのでしょうか」

「ん？　よくみれば、ヨサツクって名前が彫つてある……武器に名前をかくなんて、その人は律儀だわ」

「ヨサツク……確かエルシオンの先生に、そんな名前の人がいたはず



だ」

「まじか?」

「ああ。あの時はいたかどうかまでは覚えてねーけど……まだ現役ならエルシオン学園にいるんじゃないかな」

「そうなんだ。じゃあ、これをそのヨサツクて人のところに持って行こうぜ」

そうして4人の次の行動は、エルシオン学園へのお届け物に決まった。こここのところ戦いの日々だったのでそれと比べると見劣りがちではあるものの、そんな理由でこの道具を本人に届けることを放置したらダメだろう。そう意気込み4人はエルマニオン雪原に足を踏み入れたが、その直後に吹雪に襲われる。

「つて雪原に入ったとたんに吹雪に見舞われるって、ありがよ!!!」

「これは……き、厳しいですね! 急いで避難をしましょう!」

このままでは吹雪に飲まれてしまう。そう思ったフィリス達は雪原を突き進みつつ避難できそうな場所を探した。すると、視線の先に小屋のようなものを見つけてそちらへ一直線に突き進み、扉を開けて中に入る。中には雪は進入していないようであり、フィリスは安堵しつつもあることを心配した。

「小屋を見つけてそのまま突っ込んで、入ったはいいけど……大丈夫か!」

「あの状況じゃ仕方ないわよ。空き家ならラッキーと思えばいいし、もしもう誰かが使っていたなら事情をはなせばいいわ」

「それもそうか……って、イアン?」

体についた雪を払いつつ、呆然としているイアンに気付いて、フィリスは声をかける。

「ここは……」

「イアン、どうしたんだ?」

その部屋全体をみていたイアンは、ここがどこなのか、その答えを口に出した。

「ここは……オレの実家だ」

「え?」

「とはいえ……おやじもお袋もオレのせいで死んだようなものだし、オレもここには2度と帰らないつもりでいたからな……。事実上、今はここにすむ人間は誰もいないぜ」

「……」

一応家の主が目の前にいるなら、ここに他人である自分達が入っていることを許してくれるだろう。だが、フィリス達は若干気まずい気持ちになってしまう。なので、イアンにある提案をした。

「じゃあ、別の場所で野宿しない？　ここだと……」

「……いや、ここで大丈夫だろう。第一、今外にでるのはムチャだろ？」

「……そう、だな……」

「なあーに、オレなら平気だ。心配は無用だぜ」

そうイアンに言われ、4人は暖炉に当たって食事をとり、この家中で吹雪がやむのを待つことになった。

「今日はここでゆつくりと休んで、明日こそエルシオン学園へ向かうぜ」

「そうだな」

話はまとまり、フィリスは自分の荷物を確認した。そのとき、彼女のはうっかり荷物袋からぽろりと、先日見つけた宝の地図を落とし、床に落ちた地図は、ぱらりと開いた。

「あ、地図」

うっかりしてた、とフィリスがその地図を拾おうとしたそのとき。

家全体が大きく揺れた。

「きゃあ!?　なにになに!?!」

「大きな揺れですね!」

「まさか、さつき地図を落として開いた反動で、どっかに洞窟でもでたのか!?!」

「誤作動でも発動するのかよ、メンドクセーな!　つーかこんなに揺れるってことは、近くに洞窟でも現れたのか!?!」

そう声を掛け合っていると、奥の部屋に階段が現れていることに気付く。

「こんなところに、階段が……まさか、地下室!？」

「はああ!?! 地下室なんて、オレもしらねーよ!？」

とりあえず、突然現れた階段を下ってみると、そこは洞窟のようになっていた。その洞窟の特徴に心当たりがあるフィリスが、ある仮説を口に出す。

「……まさか……この家そのものが、宝の地図の洞窟ってことだったりするの!?!」

「そんな、ばかなああ!?!」

自分の実家の新事実を聞かされて、イアンは絶叫する。そんな彼にいつからいたのかはわからないが、サンデイが彼の肩に手をおいてどんまいと声をかけていた。

「……とにかく、いくぞ」

「大丈夫、イアン?」

「おうよ」

闇の過去が詰まっている自分の実家が実は宝の地図の洞窟とつながっていた。立て続けに起きたショックにイアンは動揺を隠せていないが、仲間達を不安にさせないように振る舞っているのだろう、そう返事をして武器を取り、洞窟の攻略に挑もうと声をかけた。

「早々に攻略をして、イアンさんを休ませましょう」

「ああ」

「ええ」

ああなればイアンは意地になろうとも、洞窟を攻略すると聞かないだろう。彼は戦ったり鍛えたりすることでモヤモヤを吹き飛ばしてストレスを発散する習慣があり、今も宝の地図に潜む魔物を蹴散らしボスを打ち倒すことでこの複雑な気分から脱したいのだろう。

「イアンってホントにバトるのが好きだからな、それこそが鬱憤はらしになるんだろ」

「それ、アンタがいった義理じゃないと思うんですケド」

イアンの実家の地下に現れた宝の地図の洞窟を攻略するフィリス一行。そこは普通に土壁でできた洞窟のようであり、特に違和感は

抱かず魔物と戦いながら奥へ進む。だいぶ深いところまでできたところで、セルフィスはある気配を感じ取る。

「この先に、とてつもなく強い力を感じます」

「ボスがいるのか？」

「間違いないでしょう」

「だったらさっさと、倒しちまおうぜ」

「そうね」

ここは早急に終わらせて、洞窟をでた方がいいだろう。なのでこの攻略はいつもより早かった。全員覚悟を決めて最奥部へ足を踏み入れると、そこには全身が赤に染まり甲冑を身に纏い、不気味な馬にまたがった騎士のような魔物がいた。

「なんだ、てめえは？」

「我こそは、ブラッドナイト」

「ブラッドナイト？」

「多くのものの血をすい、生きる源とするもの……そして、新たな血をもとめ、戦うもの……」

ブラッドナイトはそう語り、ここにこの洞窟がある理由も説明し始めた。

「とくにここには、業の強き血が流れたところ……闇が深く、我が根付くにはちようどいい」

「なに……!?!」

「お前達の血も、我が糧としよう！」

なぜここにブラッドナイトの住まう洞窟が存在していたのか、あの宝の地図は偶然ではなかったのか。すべてを理解したイアンは、ぎり、とはぎしりをたて武器を握りしめつつ敵をにらみつける。

「させるかよ……させてたまるかよ！」

「イアン」

そのイアンの様子からなにかを察したフィリス達もまた、戦うために身構える。まずはクルーヤがメラゾーマを放ってブラッドナイトを攻撃するが、ブラッドナイトはそれをマジックバリアで軽減した。

「弱らせられちゃった！」

「けど炎系の魔法がきたとたんに軽減させたのは、おそらく弱点だったからでしょう！　炎の属性で攻めれば、落とせるかもしれません！」

「よし、そういうことなら話ははいいな！」

そう相手の弱点に気付いたファイリスはファイアフォースを使い、仲間達に炎の属性を与えた。力を与えられたイアンは力をためてから棍の技・黄泉送りをくりだして、ブラッドナイトに大ダメージを与えた。直後にブラッドナイトが槍を連続で突き出す技を繰り出してきたが、それはセルフィスのスクルトにより軽減され、隙をついたセルフィスは弓矢を連続で放って見せた。

「ハアッ！」

「ムンツ」

直後、イアンがブラッドナイトに飛びかかり拳をたたき込もうとしていたが、それをブラッドナイトは槍で防いだ。

「ほう……特にお前の血、この血で流れたものと同じだな……」

「だまれっ!!」

そう吐き捨ててイアンは蹴りを入れて槍をはじきつつ棍で攻撃を入れようとしたがそれよりはやく、ブラッドナイトは槍を振るいいアンを吹っ飛ばす。

「うわあ!!」

「イアン！」

イアンは壁にたたきつけられ、その衝撃で上から土が降ってきて体の一部が埋まる。そのとき、ブラッドナイトはイアンに追撃を加えようとした。

「お前の血……もらっぞー！」

「クッ！」

早く脱出しなければ、とあかくイアンだったが、ブラッドナイトの攻撃がイアンに届くことはなかった。

「ぐあっ……!!」

「ファイリス!!」

イアンをフィリスがかばったのだ。フィリスは盾を使ったのだがブラッドナイトの攻撃により盾は砕け、フィリスの腕にその槍は刺さった。

「……ん、にやろおおおお!!」

しかしフィリスはそれしきではくじけず、ブラッドナイトの槍をつかんでぶんまわした。それにはブラッドナイトも、悲鳴を上げる前に振り回され、落馬させられる。それによりフィリスの腕から槍は離れ、血を流しながらも剣を握り、そこからギガスラッシュを放つ。

「ぐああー!」

「決めてやれ、イアン!」

「うおおおおーっ!!」

イアンは自分の力をためながらブラッドナイトに突っ込んでいく。そのときクルーヤはイアンにバイキルトをかけ、それを受けたイアンは技をブラッドナイトに向かって繰り出した。

「秘伝・黄泉送り」

技を食らわせた直後、イアンは静かにそう言った。そして、ブラッドナイトはそれにより徐々に塵となっていく。

「……アアアアアアアア……」

そして、ブラッドナイトは完全に消滅した。そこから敵がいなくなったことで、イアンはふう、と息をつく。

「勝ったな」

「ああ」

「フィリスさん、腕を見せてください。すぐにいやします」

「ああ、頼むぜセルフイス」

そう声をかけ、セルフイスはフィリスに回復魔法をかける。彼の魔法のおかげでフィリスの傷口はまたたく間に塞がり、再び楽に動かせるようになった。そして、ブラッドナイトが倒れたところになにか盾のようなものが落ちていたので、それももらっていくことにする。

「さっきのトドメは最高だったぜ」

「なに、お前の馬鹿力のおかげだぜ」

そんな掛け合いをして勝利を喜ぶ4人だったが、直後に、洞窟全体が大きく揺れた。

「つて、なんかまた揺れてない!？」

「ええ!?! まさか、このボスを倒して攻略したからか!？」

「今までそんなことなかったのに!?!」

「とりあえず、脱出をしましょう!」

なぜここが突然揺れたのかまではわからない。だが外にはでたほうがいい。そう判断した一同はクルーヤのリレミトで外にでたが、背後の光景に思わず絶叫した。

「「わーわーっ!?!」」

自分たちは確かに洞窟の外にでた。それはすなわち、イアンの実家の外にでることになったのだが、そのイアンの家はつぶれていた。

「イアンさんの実家が……ぺったんこになってしまってます……!」

「ああ、派手にやったからな……」

ブラッドナイト戦のことを思い出しイアンは苦笑しつつ、吹雪がやんでいるうちにエルシオン学園へ行こうと提案する。

「もう、帰らないから……これでいいんだよ……」

「イアン……」

と、つぶれた家にたいしイアンはそう答えたのだった。

幸いにも吹雪がやんでいたことで、フィリス達はそのままエルシオン学園に向かうことができた。学園に入った4人は無事にヨサク先生を発見し斧を返すことができ、彼から吹雪より寒いダジャレを受けつつもお礼を言われたのだった。

「そうだ。図書室の許可を借りて、そこで少し調べ物をしませんか?」

「調べ物?」

「ええ、以前ここを訪れた際……大きな図書室があるのに気付いたのです。そこでなにか、宝の地図に関する手がかりを探してみたいと思っただのです」

「なるほどな……この学園にはあたし達に恩があることだし、ちよっ

と利用しちゃおうぜ」

ついでにヨサック先生の忘れ物のオノも届けた実績もある。早速フィリス達はヨサック先生経由で学園長に会い、話をしたところ図書室を使う許可をもらうことができた。

「にしても、あのモザイオが生徒会長なんて……世の中になががあるかわからねえものだな」

「あいつは間に合ったからな」

そう、この学園で知り合った少年のことも話しつつ、4人は図書室で調べ物をしていた。

「ありました、宝の地図に関する伝承の話です」

「はやっ!？」

「だてに考古学者の義兄がいるわけではないので」

調べ初めてから数分後、セルフィスがあっさりと関係のありそうな本をみつけたので、フィリス達は一齐にツツコミをいれた。セルフィスにはこやかに発見の報告をしていたが、すぐに真剣な面もちになる。

「とはいえ……それについての記載がされているというだけですが。

これが僕達のことと、どこまで深い関係があるかまではわかりません……ですがとりあえず、読んでみますね」

「まあ、やってみないとはじまらないしな」

そう声を掛け合い、4人は席に着き本を開いて内容を読み始める。

その中には、確かに自分たちが探して集めている地図と合致している情報が書かれている文章があったが、本題はそちらではなく、ある人物とある存在の戦いの方だった。

「……古の大賢者はその地図に記されていた洞窟に、異世界から現れこの世界を壊滅させようとしていた破壊神を封印した……と、書かれていますね」

「大賢者って、お前に賢者の資格を与えた、あの本だよな?」

「ええ……一応こう、続きがあります。ただ大賢者は、その封印を持続させるため、己の姿を本に変え……眠りについたと……」

大賢者は自分たちと会ったことがあるし、それは本の姿をしてい



て、話している様子なども眠そうなものだった。この伝承が信実であるなら、あの地図には破壊神がいるということになる。だが、今まで強力なボスにこそ遭遇しているものの、どれも破壊神と呼ぶにはピンとこないものがある。

「その破壊神の言い伝えと、オレ達が宝の地図を巡ること……なにか関係があるのかもな」

「地図を巡り、戦いの旅を続けていけば……いずれはたどり着いてしまふのでしょうか……その、破壊神に」

「……………」

そして、沈黙が訪れる。自分たちは既に、また新たな脅威に自ら、足を踏み入れてしまったのだと気付いたのだろう。

「なんか話、でっかくなってるねーか?」

「うん、あたしもそう思う」

「私も右に同じよ」

「僕も異論はありません」

様々な経験をしてきた以上、こんな疑問を抱くのは今更だ。そんな中、フィリスは一人、自分達が実際にそうなるのではないかと感じ取っていた。

「もしかしたら……本当に、あたし達で破壊神を倒すことになるんじゃないかって、思えてくる……。それが、今あたし達が最終的にすべきことのような……。そんな、気がする……………」

そう、フィリスは女神の祈りが入った荷物袋に手を添えてつぶやいたのだった。

### 38 「伝える思い」

エルシオン学園にて、忘れ物を届けるついでに宝の地図の情報を求め調べ物をしたフィリス一行は、再び旅立つことにした。

「次の地図へいこうぜ」

「カルバドの集落でもらったやつだな」

実はあの戦いの後、フィリス達は集落の人々からお礼として一枚の宝の地図をもらっていたのだ。彼らは当初なにを礼として差し出そうか迷っていたそうなのだが、彼らの持ち物の中にそれがあったので、金品はいらなからそれをくれと言ったのである。

「がめつかったかな、あの時のあたし達の態度」

「問題はなかったんじゃない？ あの人達もこんなものでいいのかと戸惑うほどだったし、安いほうっしょ」

「さ、サンデイ……」

サンデイはそうハッキリ言った後、あるとき目撃した現場を思い出してニヤニヤと笑いながら口を開く。

「それに、フィリスってばあの後族長と2人きりになって……」

「し、しい!!」

「むごお」

フィリスは素早くサンデイをおさえこみ、口をふさいでそのまま荷物袋に押し込んだ。首を傾げる3人にたいしフィリスはなんでもないと返してごまかした。

「なんでもないなら、さっさといくぞ」

「わ、わかってる!」

そう声を掛け合い、4人で学園を旅立とうとしたそのときだった。彼らに、一人の少年が駆け寄ってきた。

「おい、お前達!」

「?」

そこにいたのは、金髪でフィリスと年の変わらないような少年。かつて不良としてこの学園で好き放題をしていたものの、今は更正し

この学校の生徒会長にまでなった、モザイオだった。

「モザイオー！」

「お前達……調べ物をするって言ってたけど……もう終わって旅立つのか？」

「ああ」

モザイオとは図書室を借りる前に少し挨拶をしたただけだ。だが、モザイオとしては授業が始まる前にどうしても、彼らと会話をしたかったらしい。チャイムが鳴ったにも関わらず、モザイオは彼らと向かい合う。

「どうかしたの？」

「いや、ちよつと残念に思ったただけだ。思い出話とか、お前達が学園の外でどんなことをしているのか……お前達の口から直に聞きたかったんだ」

「そっか」

モザイオが自分達に心を許していることが、その言葉だけで伝わってくる。かつて事件に巻き込まれたところを、フィリス達に助けられたこともあるのだろう。そんなモザイオにたいし、イアンが代表して伝える。

「じゃ、また次会ったときにでも話してやるよ」

「……約束しろよ」

「おう、するぜ！ オレはお前の先輩なんだからよ！」

そう言葉を交わし、イアンを筆頭に4人はエルシオン学園を出ていった。モザイオは彼らの姿を、自分が教師に見つかるまでずっと見送っていた。

「よし、次の洞窟も攻略するぜ」

「ああー！」

「はいー！」

「ええー！」

イアンの言葉にたいし、フィリス達は堂々と頷いた。

その宝の地図の洞窟が存在していたのは、ベクセリア近辺だった。

地図を開いたらその場に洞窟が現れたのでそこに入ってみると、そこは溶岩が流れる灼熱の洞窟だった。

「はあ……ここ、やっぱあついわね」

「ファイリス、間違っても脱ぐなよ」

「ぬがねーよ!」

以前に口にしたジョークを掘り返され、ファイリスは羞恥心かられながらツツコミをいれる。そんなとき、彼らに灼熱の炎が襲いかかってきた。

「うわあ!」

「あちっ! なんだ!」

幸いにも、とっさに回避したおかげで誰一人としてダメージを負うことはなかった。すぐに4人は自分達に炎を吹きかけた相手を捜すと、相手の方から姿を見せてきた。そして、4人はその姿にはしっかりと見覚えがある。

「こいつ、ルディアノ城で戦ったヤツだわ!」

「本来はこう言うところにいる魔物なんだな!」

そう声を掛け合い、ファイリス達も戦う体制に入る。エビルフレイルの群は自分の目玉を操り、ファイリス達に攻撃を繰り出す。それをイアンとファイリスは武器ではじいていき、クルーヤは魔法を放つ体制に入る。

「これでいいかしら、マヒヤド!」

クルーヤはエビルフレイル全体にマヒヤドを放ち、一気に大ダメージを与える。そこにファイリスとイアンが突っ込んでいき、攻撃を加えていく。

「はあっ!」

「氷結らんげきっ!!」

その連続攻撃に敵のエビルフレイルは次々に倒れていくが、最後の一匹が現れてファイリス達に炎を吹きかけ動きを封じた。

「ツチ、しぶとい……!」

「ドルマドンツ!」

そのとき、強大な闇の力が飛んできてエビルフレイルを包み込ん

だ。それによりエビルフレイムは跡形もなく消滅し、一同はあの魔法を放った張本人であるセルフィスをみた。セルフィスはその掌に闇の力を宿しつつ、冷ややかな目を閉じた。

「失礼しました。あの姿を見るとつい……」

「そ、そっか」

そう冷静に言い放つセルフィスに対し、フィリス達はなにも言及はしなかった。ではいきましようかと彼が言うので、フィリス達はついていく。

「この洞窟のボスってどんなヤツなんだろうな？」

「マジ気になるね、いままで戦ってきたヤツらとカブったらまじ萎えるって感じだけど」

「あんまり期待はしないでおくか」

そうサンデイと短い会話をしつつ、フィリスは自分に襲いかかってきたようがんまじんの攻撃を盾で受け止めつつ剣で斬って倒した。

そのとき、サンデイはフィリスが持っていた盾に気がつく。

「あれ、フィリスのその盾って今までののちがくない？」

「ああ。この間ブラッドナイトを倒したときに手に入れたヤツなんだ。今までののはそいつに壊されたからな、新しい盾にちようどいいんだよ」

そう、翼の装飾に蛇を描いた不思議な盾をサンデイに見せつつ、フィリスはそう説明をする。それにたいしサンデイはふーんと返した。

「まあ使いやすいいんじゃないんじゃね？ ジャンジャン使っちゃえば」

「ああ、ジャンジャン使っちゃうぜ……おおつとー！」

サンデイの言葉に対しそう返事をする、巨大な赤い戦車に乗った魔物が突っ込んできた。フィリスがそれを間一髪のところ回避すると、真上からイアンが降ってきてその魔物にかかと落としを食らわせ動きを止める。そのかかと落としに脳天をやられたらしい魔物の亡骸の上に立ちつつ、イアンはフィリスに注意を呼びかける。

「おーい、おしやべりもいいけどここは敵陣のまったただ中だつてこと

を忘れてんじやねえぞー」

「はは、わかってるって!」

そう返しつつ、フィリスは剣を抜いて自分に飛びかかってきたにじくじやくを一刀両断する。立て続けにれんごくまちようが現れたが、それはセルフフィスの矢とクルーヤの魔法に一掃された。

「2人とも、大丈夫!」

「奥に次の階層への階段を発見しました、急いでそちらへ向かいましょう」

「わかった!」

そう声を掛け合い、4人はセルフフィスが見つけたという階段を下りていく。だがその部屋は、ある理由から異臭がたちこめていた。

「なんだ、こいつぁ」

「うえ……お酒臭いです……」

「やべえレベルだな、こりやあ……」

「……ただでさえ熱すぎて気が狂いそうなのに、追い打ちがかかるなんて……」

階段を降りたその先の部屋は、酒のにおいで満ちていた。

「ううう……このにおいの正体はなんなのでしょう……」

「セルフフィス、平気か?」

彼は聖職の身ゆえに禁酒をしているのだろう、だがだからといって酒のにおいだけでここまで気分には弊害をもたらすことがありえるだろうか。単純に、セルフフィスは根本から酒が苦手なのだと悟る。

「まあ、飲めるオレでもこのにおいはきついんだ……むりねえ……なぜ?」

そうイアンが口にしたときだった。イアンは自分達の目の前に、見慣れない魔物の姿があることに気付く。巨大な鉄球を持っていて甲冑を纏った魔物だ。イアンはひくりと鼻を動かしつつにおいをたどり、あることに気がつく。

「まさか、この悪臭の根元ってこいつか!」

「まじっ!」

「ああ〜なんだあ、おまえたちはあ〜〜?」

魔物はイアン達に気付くと、口を開く。

「このイボイノスになにか用なのかあ?」

「イボイノス……?」

「ああ、もうよお〜〜ヒツツク! いまじやこんなところに、封じ込められているけどよお……昔は天空のキレイなところで過ごしていたえらい神様だったんだぜ、おれさまはよお」

「え」

「なんだろ、妄想なのか真実なのかわかんねえ……」

このイボイノスは自らを神だと語りだし、4人は戸惑う。

「ああ、おまえ等信じてねえな!? 俺様もこんなところいなけりや、いなけりや……チクシヨ〜!! ぶつとばしてやるううう!!」

「しかも八つ当たりしてきたわよ!!」

「これじゃ神だの魔物だのの前に、ただの酒癖の悪い暴君親父じゃねーか!!」

そう言つてイボイノスが振り回してきた鉄球を回避し、フィリスは剣を抜いて自らにバイキルトをかけ、イボイノスにきりかかった。

「ぬんっ!」

「わあ!」

だがフィリスの剣はイボイノスの鎧の一部にひびを入れただけであり、そのままイボイノスに振り払われてしまった。吹っ飛ばされながらも体制を整えたおかげでダメージは軽減された。

「くそっなんてパワーだよ!」

「パワーなら、オレもまけねえよ!」

そういつてイアンはイボイノスの振り回していた鉄球の鎖をつかんで逆に振り回し、その鉄球をイボイノスにぶつけた。相手に食らわせるはずだった一撃を腹部にくらい、イボイノスは苦しそうなうめき声を上げた。

「いまだ、攻撃するぜ!」

「はい! ドルマドン!」

「いくわよ、イオナズン!」

イアンのかけ声にあわせて、セルフィスとクルーヤがそれぞれ攻撃魔法を放つ。2人の魔法がヒットした直後にフィリスはイボイノスにはやぶさ斬りを繰り出した。

「ぬおおおおお!!」

「うわああっ!!」

「セルフィス!」

体勢を立て直したイボイノスは鉄球を振り回してセルフィスを吹っ飛ばした。彼は壁にたたきつけられ、助けにいかうとしたフィリスたちをイボイノスはけたたましい雄叫びをあげて、動きを封じる。

「ぐおおおお!!」

「うぐー!」

「きやつ!」

その雄叫びの迫力におされたフィリスとクルーヤはしりもちをついてしまった。そんな2人に対しイボイノスは鉄球を振り回して攻撃を加えようとしてくる。

「フィリス、クルーヤ!」

イアンが2人を助けようとした、そのときだった。どこからか矢が飛んできてそれがイボイノスの目に命中したのだ。目をやられたイボイノスはその痛みに絶叫をあげる。

「うおおおお……いでええ!」

「甘く見ないでいただきたいものです」

矢を放ったのは、立ち上がったセルフィスだった。そのすきにフィリスは立ち上がりクルーヤも立ち上がらせる。

「ここは、大技で一気にけりをつけようぜ」

「ええー!」

まずはイアンが敵の鉄球を捕まえ、鎖をしつかりとつかんで攻撃の手段を封じ込める。そこにセルフィスはドルモーアを放ち、それがヒットした直後にフィリスが突っ込んでいってはやぶさ斬りを繰り出した。そして、イアンは鉄球を振り回しもう一度イボイノスに自分の鉄球を命中させる。



「マヒャデドス！」

そこにクルーヤが氷の最上級魔法を放ったことにより、イボイノスは倒れた。　どうやら、氷の属性が弱点だったらしい。　イボイノスは氷に包まれながら、口にする。

「俺様は……神様、だった……」

「でしたら神よ、安らかにおねむりを……あと、お酒はひかえてください。　臭くてたまりませんので」

「なにげにキツイことをいってね？」

そうしてこの地図の洞窟も攻略したフィリスたちは、イボイノスが持っていたあるものを拾ってから洞窟をでて地図を閉じた。　するといつものように洞窟は消えた。

「あいつもかけらを持ってたんだな」

そういいながら、イボイノスが持っていたとされるものを見つめる。　それは、例の宝石……女神の祈りの一部だったのだ。　フィリスは宝石の本体を取り出してそれに近づけると、かけらはその本体にくっついてひとつの宝石になった。

「うん、だいぶ大きくなってるわね」

「もう少しで、その女神の祈りは完成するようだ」  
「！」

全員で今の宝石の状態を確認していた、そのときだった。　バサツ、と大きな翼が羽ばたく音がしたのでそちらをみると、そこには例の天使……ラヴィエルの姿があった。

「ラヴィエルさん！」

「その様子……女神の祈りのかけらはあとひとつというところまで集まってきたな」

「ああ……まあ、この通り」

そういつてフィリスはラヴィエルにその宝石を見せた。　それを見てラヴィエルは頷き、フィリス達にある情報を伝えた。

「あと、宝石を持つ魔物は一体……そして、そのかけらをもつものはここにいる」

そういつてラヴィエルはフィリス達に、一枚の地図を見せた。それは、今まで何度も見てきた、洞窟をしめす宝の地図だった。

「地図?」

「その地図の最奥にひそむ魔物……魔剣神レパルド」

「レパルド?」

「その魔物が、最後のかけらを持っている。だが、この魔物は今まで君たちが戦ってきた奴らとは比にならん強さを持っている……心してかかるといい」

宝石のかけらを持つ魔物の情報を持っていながら、その強さを知っているために手を出さなかった。自分達に宝石のアドバイスを送っていた。それまでに起きていたことをつなげてある答えを見つけたイアンは、それを直接ラヴィエルにぶつけてくる。

「さしずめ、オレ達はそのレパルド、てヤツと対等に戦えるかどうかを高みの見物をして確かめていたということか?」

「イアンツ」

「そんなところだ。私は戦うことは不得意であるため……ヤツと戦えるものを探していた。そして、君達はその条件を満たしている。だから、頼みたい……宝石を完成させるためにも」

そう必死になって、宝石の完成を頼むラヴィエルにフィリスは耐えきれなくなったらしい、彼女の正体に対する疑問をそのまま打ち明けた。

「なあ、ラヴィエルさん……あなたは本当に何者なんだ!」

「……」

「フィリス?」

「ずっとずっと、気になってたんだよ! なんで……天使であるはずのあなたがここにいるのか、なんで、あたしのことを……知ってるのか! なんて、みんなと同じ星にならないでここにどまつてるのか……! あたしには、わけがわからねえよ!」

そう投げかけてくるフィリスに仲間達も口を閉ざし、ラヴィエルもしばらく黙り込んでいた。だがやがて、フィリスの持っているあるものに目を向け、それにたいすることで口を開いてく。

「その剣……」

「この剣？」

「ここにある、目立つ剣と言えば、自分の持つ彗星の剣しかない。そう思いフィリスは剣を手にとった。

「それはかつて、天使エルギオスだったものだな？ エルギオスからその弟子に受け継がれ、今は君に受け継がれたものだな」

「あ、ああ……そうだけど……」

何故唐突にこの剣に注目をしたのだ、と疑問を抱いたフィリスに対しラヴィエルは口を開いた。

「私も、その候補だった」

「えっ!？」

「だが、私は戦いが不得意であったため……剣を受け取れなかった。その剣は別の天使に継承された。もつとも、本人がそれを手にとつて戦う姿は私は見たことがなかったがな……」

そうラヴィエルから説明を受け、フィリスは驚く。この剣を受け取つたのは自分の師匠だった、だがこれを受け取るもう一つの可能性の存在を知つたのだ。その相手は、目の前にいる。

「……すべての真相は、そのレパルドを倒し女神の祈りを完成させたときに打ち明けよう」

「……約束、してくれる？」  
「もちろん」

フィリスは、女神の祈りが完成したらラヴィエルの知る秘密と正体をすべえ打ち明けるよう、彼女に約束をさせた。それにたいし、ラヴィエルは迷わずうなずく。

「……わかった」

「フィリス」

「みんな、宝石の完成まであと一歩だ。そうしたらすべての真実にたどり着ける。だから、一緒にがんばろう」

そう声をかけられたイアンとクルーヤとセルフィスは、うなずく。フィリスとともに戦うという意志はずっと変わらないのだ。

「まあその地図は攻略するけど、まずはさっきの戦いの疲労をとつぱ

らおうぜ」

「いそがはまわれ。十分な成果を得るには十分な休息が必要です。心配せずとも、僕達は貴女とともに戦いますよ」

「これからもいっしょに、がんばりましょう！」

「ああ、わかったぜ！」

そう和気藹々と、4人は休息のために近くの町へと向かった。そんな4人を見たラヴェイエルは翼を大きくはためかせ天高く飛んでいった。

「……………すまない……………」

という、謎の謝罪の言葉を残して。

### 38 「伝える思い」

エルシオン学園にて、忘れ物を届けるついでに宝の地図の情報を求め調べ物をしたフィリス一行は、再び旅立つことにした。

「次の地図へいこうぜ」

「カルバドの集落でもらったやつだな」

実はあの戦いの後、フィリス達は集落の人々からお礼として一枚の宝の地図をもらっていたのだ。彼らは当初なにを礼として差し出そうか迷っていたそうなのだが、彼らの持ち物の中にそれがあったので、金品はいらなからそれをくれと言ったのである。

「がめつかったかな、あの時のあたし達の態度」

「問題はなかったんじゃない？ あの人もこんなものでいいのかと戸惑うほどだったし、安いほうっしょ」

「さ、サンデイ……」

サンデイはそうハッキリ言った後、あるとき目撃した現場を思い出してニヤニヤと笑いながら口を開く。

「それに、フィリスってばあの後族長と2人きりになって……」

「し、しい!!」

「むごお」

フィリスは素早くサンデイをおさえこみ、口をふさいでそのまま荷物袋に押し込んだ。首を傾げる3人にたいしフィリスはなんでもない、と返してごまかした。

「なんでもないなら、さっさといくぞ」

「わ、わかってる!」

そう声を掛け合い、4人で学園を旅立とうとしたそのときだった。彼らに、一人の少年が駆け寄ってきた。

「おい、お前達!」

「?」

そこにいたのは、金髪でフィリスと年の変わらないような少年。かつて不良としてこの学園で好き放題をしていたものの、今は更正し

この学校の生徒会長にまでなった、モザイオだった。

「モザイオ！」

「お前達……調べ物をするって言ってたけど……もう終わって旅立つのか？」

「ああ」

モザイオとは図書室を借りる前に少し挨拶をしたただけだ。だが、モザイオとしては授業が始まる前にどうしても、彼らと会話をしたかったらしい。チャイムが鳴ったにも関わらず、モザイオは彼らと向かい合う。

「どうかしたの？」

「いや、ちよつと残念に思ったただけだ。思い出話とか、お前達が学園の外でどんなことをしているのか……お前達の口から直に聞きたかったんだ」

「そっか」

モザイオが自分達に心を許していることが、その言葉だけで伝わってくる。かつて事件に巻き込まれたところを、フィリス達に助けられたこともあるのだろう。そんなモザイオにたいし、イアンが代表して伝える。

「じゃ、また次会ったときにでも話してやるよ」

「……約束しろよ」

「おう、するぜ！ オレはお前の先輩なんだからよ！」

そう言葉を交わし、イアンを筆頭に4人はエルシオン学園を出ていった。モザイオは彼らの姿を、自分が教師に見つかるまでずっと見送っていた。

「よし、次の洞窟も攻略するぜ」

「ああ！」

「はい！」

「ええ！」

イアンの言葉にたいし、フィリス達は堂々と頷いた。

その宝の地図の洞窟が存在していたのは、ベクセリア近辺だった。

地図を開いたらその場に洞窟が現れたのでそこに入ってみると、そこは溶岩が流れる灼熱の洞窟だった。

「はあ……ここ、やっぱあついわね」

「ファイリス、間違っても脱ぐなよ」

「ぬがねーよ!」

以前に口にしたジョークを掘り返され、ファイリスは羞恥心にかられながらツツコミをいれる。そんなとき、彼らに灼熱の炎が襲いかかってきた。

「うわあ!」

「あちっ! なんだ!」

幸いにも、とっさに回避したおかげで誰一人としてダメージを負うことはなかった。すぐに4人は自分達に炎を吹きかけた相手を捜すと、相手の方から姿を見せてきた。そして、4人はその姿にはしっかりと見覚えがある。

「こいつ、ルディアノ城で戦ったヤツだわ!」

「本来はこう言うところにいる魔物なんだな!」

そう声を掛け合い、ファイリス達も戦う体制に入る。エビルフレイルの群は自分の目玉を操り、ファイリス達に攻撃を繰り返す。それをイアンとファイリスは武器ではじいていき、クルーヤは魔法を放つ体制に入る。

「これでいいかしら、マヒヤド!」

クルーヤはエビルフレイル全体にマヒヤドを放ち、一気に大ダメージを与える。そこにファイリスとイアンが突っ込んでいき、攻撃を加えていく。

「はあっ!」

「氷結らんげきっ!!」

その連続攻撃に敵のエビルフレイルは次々に倒れていくが、最後の一匹が現れてファイリス達に炎を吹きかけ動きを封じた。

「ツチ、しぶとい……」

「ドルマドンツ!」

そのとき、強大な闇の力が飛んできてエビルフレイルを包み込ん

だ。それによりエビルフレイムは跡形もなく消滅し、一同はあの魔法を放った張本人であるセルフィスをみた。セルフィスはその掌に闇の力を宿しつつ、冷ややかな目を閉じた。

「失礼しました。あの姿を見るとつい……」

「そ、そっか」

そう冷静に言い放つセルフィスに対し、フィリス達はなにも言及はしなかった。ではいきましようかと彼が言うので、フィリス達はついていく。

「この洞窟のボスってどんなヤツなんだろうな？」

「マジ気になるね、いままで戦ってきたヤツらとカブったらまじ萎えるって感じだけど」

「あんまり期待はしないでおくか」

そうサンデイと短い会話をしつつ、フィリスは自分に襲いかかってきたようがんまじんの攻撃を盾で受け止めつつ剣で斬って倒した。

そのとき、サンデイはフィリスが持っていた盾に気がつく。

「あれ、フィリスのその盾って今までののちがくない？」

「ああ。この間ブラッドナイトを倒したときに手に入れたヤツなんだ。今までののはそいつに壊されたからな、新しい盾にちようどいいんだよ」

そう、翼の装飾に蛇を描いた不思議な盾をサンデイに見せつつ、フィリスはそう説明をする。それにたいしサンデイはふーんと返した。

「まあ使いやすいいんじゃないんじゃね？ ジャンジャン使っちゃえば」

「ああ、ジャンジャン使っちゃうぜ……おおつとー！」

サンデイの言葉に対しそう返事をする、巨大な赤い戦車に乗った魔物が突っ込んできた。フィリスがそれを間一髪のところ回避すると、真上からイアンが降ってきてその魔物にかかと落としを食らわせ動きを止める。そのかかと落としに脳天をやられたらしい魔物の亡骸の上に立ちつつ、イアンはフィリスに注意を呼びかける。

「おーい、おしやべりもいいけどここは敵陣のまったただ中だつてこと



を忘れてんじやねえぞー」

「はは、わかってるって!」

そう返しつつ、フィリスは剣を抜いて自分に飛びかかってきたにじくじやくを一刀両断する。立て続けにれんごくまちようが現れたが、それはセルフフィスの矢とクルーヤの魔法に一掃された。

「2人とも、大丈夫!」

「奥に次の階層への階段を発見しました、急いでそちらへ向かいましょう」

「わかった!」

そう声を掛け合い、4人はセルフフィスが見つけたという階段を下りていく。だがその部屋は、ある理由から異臭がたちこめていた。

「なんだ、こいつぁ」

「うえ……お酒臭いです……」

「やべえレベルだな、こりやあ……」

「……ただでさえ熱すぎて気が狂いそうなのに、追い打ちがかかるなんて……」

階段を降りたその先の部屋は、酒のにおいで満ちていた。

「ううう……このにおいの正体はなんなのでしょう……」

「セルフフィス、平気か?」

彼は聖職の身ゆえに禁酒をしているのだろう、だがだからといって酒のにおいだけでここまで気分には弊害をもたらすことがありえるだろうか。単純に、セルフフィスは根本から酒が苦手なのだと悟る。

「まあ、飲めるオレでもこのにおいはきついんだ……むりねえ……なぜ?」

そうイアンが口にしたときだった。イアンは自分達の目の前に、見慣れない魔物の姿があることに気付く。巨大な鉄球を持つていて甲冑を纏った魔物だ。イアンはひくりと鼻を動かしつつにおいをたどり、あることに気がつく。

「まさか、この悪臭の根元ってこいつか!」

「まじっ!」

「ああ〜〜なんだあ、おまえたちはあ〜〜〜?」

魔物はイアン達に気付くと、口を開く。

「このイボイノスになにか用なのかあ?」

「イボイノス……?」

「ああ、もうよお〜〜〜ヒツツク! いまじやこんなところに、封じ込められているけどよお……昔は天空のキレイなところで過ごしていたえらい神様だったんだぜ、おれさまはよお」

「え」

「なんだろ、妄想なのか真実なのかわかんねえ……」

このイボイノスは自らを神だと語りだし、4人は戸惑う。

「ああ、おまえ等信じてねえな!? 俺様もこんなところいなけりや、いなけりや……チクシヨ〜!! ぶつとばしてやるううう!!」

「しかも八つ当たりしてきたわよ!!」

「これじゃ神だの魔物だのの前に、ただの酒癖の悪い暴君親父じゃねーか!!」

そう言つてイボイノスが振り回してきた鉄球を回避し、フィリスは剣を抜いて自らにバイキルトをかけ、イボイノスにきりかかった。

「ぬんっ!」

「わあ!」

だがフィリスの剣はイボイノスの鎧の一部にひびを入れただけであり、そのままイボイノスに振り払われてしまった。吹っ飛ばされながらも体制を整えたおかげでダメージは軽減された。

「くそっなんてパワーだよ!」

「パワーなら、オレもまけねえよ!」

そういつてイアンはイボイノスの振り回していた鉄球の鎖をつかんで逆に振り回し、その鉄球をイボイノスにぶつけた。相手に食らわせるはずだった一撃を腹部にくらい、イボイノスは苦しそうなうめき声を上げた。

「いまだ、攻撃するぜ!」

「はい! ドルマドン!」

「いくわよ、イオナズン!」

イアンのかけ声にあわせて、セルフィスとクルーヤがそれぞれ攻撃魔法を放つ。2人の魔法がヒットした直後にフィリスはイボイノスにはやぶさ斬りを繰り出した。

「ぬおおおお!!」

「うわああっ!!」

「セルフィス!」

体勢を立て直したイボイノスは鉄球を振り回してセルフィスを吹っ飛ばした。彼は壁にたたきつけられ、助けにいかうとしたフィリスたちをイボイノスはけたたましい雄叫びをあげて、動きを封じる。

「ぐおおおお!!」

「うぐー!」

「きやつ!」

その雄叫びの迫力におされたフィリスとクルーヤはしりもちをついてしまった。そんな2人に対しイボイノスは鉄球を振り回して攻撃を加えようとしてくる。

「フィリス、クルーヤ!」

イアンが2人を助けようとした、そのときだった。どこからか矢が飛んできてそれがイボイノスの目に命中したのだ。目をやられたイボイノスはその痛みに絶叫をあげる。

「うおおおお……いでええ!」

「甘く見ないでいただきたいものです」

矢を放ったのは、立ち上がったセルフィスだった。そのすきにフィリスは立ち上がりクルーヤも立ち上がらせる。

「ここは、大技で一気にけりをつけようぜ」

「ええー!」

まずはイアンが敵の鉄球を捕まえ、鎖をしつかりとつかんで攻撃の手段を封じ込める。そこにセルフィスはドルモーアを放ち、それがヒットした直後にフィリスが突っ込んでいってはやぶさ斬りを繰り出した。そして、イアンは鉄球を振り回しもう一度イボイノスに自分の鉄球を命中させる。

「マヒャデドス！」

そこにクルーヤが氷の最上級魔法を放ったことにより、イボイノスは倒れた。　どうやら、氷の属性が弱点だったらしい。　イボイノスは氷に包まれながら、口にする。

「俺様は……神様、だった……」

「でしたら神よ、安らかにおねむりを……あと、お酒はひかえてください。　臭くてたまりませんので」

「なにげにキツイことをいってね？」

そうしてこの地図の洞窟も攻略したフィリスたちは、イボイノスが持っていたあるものを拾ってから洞窟をでて地図を閉じた。　するといつものように洞窟は消えた。

「あいつもかけらを持ってたんだな」

そういいながら、イボイノスが持っていたとされるものを見つめる。　それは、例の宝石……女神の祈りの一部だったのだ。　フィリスは宝石の本体を取り出してそれに近づけると、かけらはその本体にくっついてひとつの宝石になった。

「うん、だいぶ大きくなってるわね」

「もう少しで、その女神の祈りは完成するようだ」

「！」

全員で今の宝石の状態を確認していた、そのときだった。　バサツ、と大きな翼が羽ばたく音がしたのでそちらをみると、そこには例の天使……ラヴィエルの姿があった。

「ラヴィエルさん！」

「その様子……女神の祈りのかけらはあとひとつというところまで集まってきたな」

「ああ……まあ、この通り」

そういつてフィリスはラヴィエルにその宝石を見せた。　それを見てラヴィエルは頷き、フィリス達にある情報を伝えた。

「あと、宝石を持つ魔物は一体……そして、そのかけらをもつものはここにいる」

そういつてラヴィエルはフィリス達に、一枚の地図を見せた。それは、今まで何度も見てきた、洞窟をしめす宝の地図だった。

「地図？」

「その地図の最奥にひそむ魔物……魔剣神レパルド」

「レパルド？」

「その魔物が、最後のかけらを持っている。だが、この魔物は今まで君たちが戦ってきた奴らとは比にならん強さを持っている……心してかかるといい」

宝石のかけらを持つ魔物の情報を持っていながら、その強さを知っているために手を出さなかった。自分達に宝石のアドバイスを送っていた。それまでに起きていたことをつなげてある答えを見つけたイアンは、それを直接ラヴィエルにぶつけてくる。

「さしずめ、オレ達はそのレパルド、てヤツと対等に戦えるかどうかを高みの見物をして確かめていたということか？」

「イアンツ」

「そんなところだ。私は戦うことは不得意であるため……ヤツと戦えるものを探していた。そして、君達はその条件を満たしている。だから、頼みたい……宝石を完成させるためにも」

そう必死になって、宝石の完成を頼むラヴィエルにフィリスは耐えきれなくなったらしい、彼女の正体に対する疑問をそのまま打ち明けた。

「なあ、ラヴィエルさん……あなたは本当に何者なんだ!？」

「……」

「フィリス？」

「ずっとずっと、気になってたんだよ！　なんで……天使であるはずのあなたがここにいいのか、なんで、あたしのことを……知ってるのか！　なんで、みんなと同じ星にならないでここにどまつてるのか……！　あたしには、わけがわからねえよ！」

そう投げかけてくるフィリスに仲間達も口を閉ざし、ラヴィエルもしばらく黙り込んでいた。だがやがて、フィリスの持っているあるものに目を向け、それにたいすることで口を開いてく。

「その剣……」

「この剣？」

「ここにある、目立つ剣と言えば、自分の持つ彗星の剣しかない。そう思いフィリスは剣を手にとった。

「それはかつて、天使エルギオスだったものだな？ エルギオスからその弟子に受け継がれ、今は君に受け継がれたものだな」

「あ、ああ……そうだけど……」

何故唐突にこの剣に注目をしたのだ、と疑問を抱いたフィリスに対しラヴィエルは口を開いた。

「私も、その候補だった」

「えっ!？」

「だが、私は戦いが不得意であったため……剣を受け取れなかった。その剣は別の天使に継承された。もつとも、本人がそれを手にとつて戦う姿は私は見たことがなかったがな……」

そうラヴィエルから説明を受け、フィリスは驚く。この剣を受け取つたのは自分の師匠だった、だがこれを受け取るもう一つの可能性の存在を知つたのだ。その相手は、目の前にいる。

「……すべての真相は、そのレパルドを倒し女神の祈りを完成させたときに打ち明けよう」

「……約束、してくれる？」

「もちろん」

フィリスは、女神の祈りが完成したらラヴィエルの知る秘密と正体をすべえ打ち明けるよう、彼女に約束をさせた。それにたいし、ラヴィエルは迷わずうなずく。

「……わかった」

「フィリス」

「みんな、宝石の完成まであと一歩だ。そうしたらすべての真実にたどり着ける。だから、一緒にがんばろう」

そう声をかけられたイアンとクルーヤとセルフィスは、うなずく。フィリスとともに戦うという意志はずっと変わらないのだ。

「まあその地図は攻略するけど、まずはさっきの戦いの疲労をとつぱ

らおうぜ」

「いそがはまわれ。十分な成果を得るには十分な休息が必要です。心配せずとも、僕達は貴女とともに戦いますよ」

「これからもいっしょに、がんばりましょう！」

「ああ、わかったぜ！」

そう和気藹々と、4人は休息のために近くの町へと向かった。そんな4人をみたラヴェイエルは翼を大きくはためかせ天高く飛んでいった。

「……………すまない……………」

という、謎の謝罪の言葉を残して。

### 39 「女神の祈りと破壊の神」

めがみのいのりという宝石は、あと一つのかけらで完成する。めがみのいのりを完成させた暁には自分の正体を含めすべてを打ち明ける。ラヴィエルはファイリス達にそう約束し、自分の知るかけらのありかを示す地図を、ファイリス達に手渡した。

「そのレパルドってやつを、倒せばいいんだな」

「みたいね」

その洞窟は水が流れており、中にいる魔物達も強敵揃いだ。いくら戦いなれていて、世界を救った実績を持つ強者ぞろいのファイリスのパーティとはいえど、高いレベルの魔物を複数相手させられるのは、苦勞がたたるというものだ。

「確かにこの強さの魔物がそろっている洞窟には、洞窟の経験がないと厳しいでしょう。僕達が洞窟の経験を積むまで見計らっていたラヴィエルさんの判断は、間違っていないかったですね……」

「洞窟の経験って言葉、初めて聞いたぞ」

そうツツコミをいれつつ、イアンは自分に襲いかかってきたイエローサタンの腹部にせいけんづきを放ち吹っ飛ばした。

「まあ、オレ達ならこのくらいは突破できるけどな」

「でも、油断しちゃダメだぜ。この奥にいるボス……ラヴィエルさんのいうところによれば、今まで戦ってきた洞窟のボスとはけた違いの力を持っているらしいからな」

「わかってるよ。そのためにも道中の魔物と戦いつつ、闘争心を高ぶらせるんじゃないか」

そう説明をするイアンに対し、ファイリスはふつと眉を下げた。

「……本当なのか？」

「ファイリス？」

「……本当に、ここを攻略できるのか……？ 突破して、宝石を完成させられるのか？」

「なにを今更」



珍しく弱気になるフィリスに対し、イアンは彼女の頭に手を置いて口を開く。

「今までオレ達はそうしてきた、だからここまで強くなれた。なのに、お前がそんなに不安を抱えてどうするんだよ。らしくねえぜ」  
「不安なんてあるもんか。あたしははずつと間違つてない……それを証明するための強さもちゃんと持つている。今回の戦いにだって絶対に勝てるという、絶対の自信がある」

フィリス自身も、このような弱気な姿は自分らしくないことも、そのような感情を抱く理由もないことはわかっている。自分には、そんな余裕もなければここで負ける起因などないことも。だが、それでも口にしてしまったのは、自分の考えていることが表に出てこようとしているからだ。

「ただ、あたしにはわからないんだよ」

「わからない?」

「やっぱり、ラヴィエルさんはあたしになにかを隠してるし、実際にあたしに関係する大事なことを隠していた。この剣を、あの人も受け取る権利を持っていたという話だ」

そういつて、フィリスは自分が今握っている剣をみた。自分が大事な人から託されてから進化していった、彗星の剣を。

「つまりそれって、ラヴィエルさんがエルギオスやイザヤール様と近しい存在だったということじゃないか」

「……確かに、そうですね……」

「一体あの3人になにかあったのか……あたしは、知らないやいけな  
いんじゃないかって思えてきた」

「フィリス……」

「……それが、この剣を継いできた意味だとおもうし、知ることこそが受け継ぐ権利なんじゃないか……と、考えられずに入られない。だからこそ」

「だからこそ?」

「ラヴィエルさんが、偶然宝石を手にしたからとはいえ……あたしに目を付け宝石を完成させようとしている心理が……あたしにはわか

んない」

その不可解な部分が、フィリスの中に不安を与えてしまったのだろう。自分らしくない、と頭を抱えてくしゃりと自分の髪を乱したフィリスにたいし、イアンは肩を組ませてきた。

「だったらなおさら、だな」

「わっ」

「ここでオレ達が、くたばるわけにはいかねえ。絶対にレパルドつて魔物を倒して宝石のかげらを手に入れて、宝石を完成させて！あのラヴィエルっていう天使から全部の話を聞きだしてやろうぜ！」

「貴女とともにあえる以上、僕達も逃げるわけには参りません。中途半端で投げることは、己に対する冒瀆ですから。そのような者を守る資格などない……僕はそうなりたくありません。だから、貴女のご意志にを尊重しついでに行きます」

「大丈夫よ。どんな結果でも……どんな真実でも、私たちはフィリスの味方だから。絶対にあなたから離れたりはしないわ。なにがあっても、ついてくわよ」

そう当たり前のように言う仲間達に対し、フィリスは自分が何故弱気になったのかを悟った。彼らは自分がそんな態度を見せたとしても受け入れて、一緒にあがいて先へ進もうとしてくれると信じていたからだ。

「ああ、そうだな！」

だから、彼らの言葉を聞いて改めて前を向く。だから、元気な顔で笑ってみせる。

いつものペースで洞窟を進んだフィリス達は、いつものように無事に洞窟の最奥部にたどり着いた。そこには定例どおりと言うべきだろうか、今まで戦ってきた魔物とはまた別の気配を身にまとった、強い魔物がいる。

「それらしき存在がいます、お気をつけて」

「ああ」

彼らの視線の先に、剣を持った獣型の大柄の魔物がいた。あれこ

それが、自分たちが探し求めていた魔物なのだろうか。　フィリスは、ぽつりとつぶやいた。

「あれが……魔剣神レパルド？」

「いかにも、我こそはレパルド……すべてを破壊する腕……魔剣を操るもの……」

「わ、こたえた」

名乗りを上げたレパルドは剣を構え、フィリス達をにらみつける。

「我が前に現れし人間どもよ！　この魔剣の生け贄となるがいい！」  
「生け贄になるのは、お前だ！」

レパルドの言葉に対しフィリスは堂々とした態度でそう応え、剣を大きく構えた。　自分と同じ剣術の使い手であると気付いたレパルドは、まずはとフィリスに切りかかってきた。　フィリスは、それを正面から迎え撃つ。

「ハアアツ！」

「せえあーっ！」

キン、キン、と剣の衝突する鋭い金属音が響きわたる。　激しい剣同士の衝突から互いに強く相手をはじいたことにより双方に距離が生じた直後、イアンは棍を振り回し氷結らんげきを繰り出してレパルドを攻撃したが、レパルドは剣を振るいイアンの足を切って動きを封じてくる。

「スクルトツ！」

次の一撃がくる前にセルフイスは、スクルトの魔法を使ってダメージを軽減させる。　そしてイアンやフィリスの体についた傷を癒し、フィリスは再びレパルドに切りかかるものの、レパルドは素早い動きで回避し逆にフィリスに傷を与えた。

「マヒャデドス！」

そこでクルーヤは、氷の魔法を放ちレパルドの動きを封じる策にでる。　相手は氷の属性に弱いようだ、氷の魔法を受けたときに動きが鈍り、ダメージも通つたらしい。　そこにフィリスがこんしんのはやぶさ斬りをたたき込み、レパルドを切り裂いた。

「どうだ！」

「なめるな！」

「チツ！」

だがそれではレパルドは倒れず、そのまま剣を大きく振るいフィリスを攻撃した。その攻撃はギリギリで回避したと思っただが、彼女の腕に切り傷ができてしまった。そこにイアンが飛び込んで拳をたたき込もうとしたが、そのときにレパルドは彼のことも斬る。

「このまま、八つ裂きにしてくれる……」

「させませんっ！」

そのままイアンに連続で切りかかろうとしていたレパルドに対し、セルフィスは矢を放って牽制する。だが、それはレパルドの剣によりはじかれてしまい、レパルドはそのまま方向を素早く切り替えてセルフィスにつっこんでいき彼も斬る。

「ハアアツ！」

「うわああっ!!」

「セルフィス……！」

それを受けたセルフィスは体を裂かれ壁にたたきつけられる。

そんな彼にとどめを刺そうとレパルドが剣を振りかざしたとき、爆発が起こってレパルドは吹っ飛ばされる。

「近づけさせないわ！」

「おのれっ！」

「きやあー！」

自分の妨害をしたのがクルーヤだと気付いたレパルドは、クルーヤにたいしても剣を向けてきた。それにより、その柔肌にはいくつもの傷が付いてしまった。すぐにフィリスとイアンが反撃に出てクルーヤからレパルドを遠ざける。

「フィリス、イアン……」

「クルーヤ、こいつの相手はオレ達がやる！ お前は自分の傷をいやせ！」

「回復したら、次はあたしらを頼むぜ！」

「……うん……！」

そういつてフィリスとイアンがレパルドをしのいでいる間に、ク

ルーヤは祝福の杖で自分の傷を癒す。　すぐに、彼らを助けるために。

「ぐうっ……い！」

セルフィスは傷口を押さえながら起きあがった。　スクルトを予めかけていたおかげで深い傷は負わなかった、それが不幸中の幸いといったところだろう。　だが、セルフィスが傷を負いながらも起きあがれたのは、それだけではない。

「このままでは……皆が傷つき続け、いずれ力つきてしまう……！！  
ベホイムツ！」

そこでセルフィスは自分の腹部にむかって強力な回復魔法を放ち、その傷を塞いだところで魔力を再び集中させ、解き放つ。

「ドルマドンツ!!」

「うぐあぁーっ!!」

その巨大な闇の魔力はレパルドに襲いかかり、大きな傷を負わせた。　ファイリス達はその攻撃の正体に気付き、一斉にセルフィスをみた。

「セルフィス!？」

「みなさん、今です！」

セルフィスの声にあわせて3人はうなずくと、まずはルーヤが魔力を集中させて解き放つ。

「もう一度！　マヒャデドス！」

それは、相手がおそらくもつとも苦手としているであろう氷の魔法だった。　それによりダメージを受けつつ動きを制限されたレパルドに、イアンが氷結らんげきを放つ。　レパルドは怒りを覚えてイアンに切りかかる。　避けると読んでよけたところに一撃を加えるために。

「ふんっ！」

だが、それをイアンはなんと、自分の腕でくい止めた。　剣はイアンの腕に食い込み彼の腕からは血が流れるが、イアンは構わず刀身を握りしめつつにやりと笑う。

「残念だったな、お前の負けだ！」

「なっ!?!」

「フィリス!」

「うおおーっ!!」

そこにフィリスが飛びかかって、レパルドに向かつてはやぶさ斬りを繰り返した。その技により、レパルドの体は大きく切り裂かれた。

「ぐあああ……」

切り裂かれた部分からレパルドは消滅していき、そこには小さなマゼンタカラーの破片が残っていた。

「これが、最後のかけらだな」

そういつてフィリスは破片をひろい、自分の持っていた宝石とくっつける。すると宝石は光を放ち、かけらがかけた部分に入り込みひとつとなった。それにより、宝石…女神の祈りが完成したのだった。

そうして洞窟を出た4人は、そこで4人の帰りを待っていたラヴィエルと会った。

「ラヴィエルさん」

「待っていた。目的は果たしたようだな」

「はい、もちろんです!」

「色々察しはしているが、まずは君達の疲弊をいやそう。特に、この君は大怪我を負ったようだからな」

「あはは……セルフィスのおかげで傷口はふさがったけどな」

「怪我の功名だな」

そうラヴィエルは語りつつ、その手から光を放つとそれを天に向かつて解き放った。すると光が雨のように降りそそぎ、それを浴びたフィリス達は自分の体から疲れが洗い流され元の活気を取り戻していくような感覚を覚えた。

「これで、女神の祈りは完成した……よくやってくれた……ありがとう」

そして、全員の疲れが消えた頃ラヴィエルは、フィリスから完成し

た女神の祈りを受け取った。確かにそれが女神の祈りであることを確認したラヴィエルは礼を告げてうなづく。

「この宝石を使う前に、私の正体を打ち明けておこう」

「教えてくれるのか!？」

「そういう約束だったからな」

ラヴィエルは、宝石が完成したら自分の正体をフィリス達に打ち明けるといふ約束をしっかりと覚えていた。それを、今果たそうとしている。

「私は」

ラヴィエルが自分の正体を打ち明けようとした、そのときだった。

どこからか黒い陰が現れてラヴィエルの肩に刃のような腕を突き刺してきた。

「うああ!」

「ラヴィエルさんっ!!」

ラヴィエルは血を大量に流しながら地面に強くたたきつけられ、その衝撃で彼女の手から女神の祈りが離れる。彼女を攻撃した黒い陰は、それをキャッチした。

「誰だ、てめえは……!？」

「愚かなり大賢者……この破壊神フォロボスを永遠に封じ込められていると思うなよ……」

「破壊神!？」

自らを破壊神と名乗る漆黒の魔物・フォロボスは自分の手の中にある女神の祈りをみる。

「この女神の祈り……ここに封じられた力。どのような願いもかなえるほどの強い力さえ手に入れば、私の力は完全に復活し……今度こそ、この世界を滅ぼせよう!!」

「……そうか……! 魔物のねらいは願いを叶えることではなく、それを実現するほどの、宝石の中の力……ということか!」

「確かに多くの魔物が狙ってはいたようだが……他のザコが持っていたところで、宝の持ち腐れよ。この力は我にこそ、相応しい」

魔物がなぜこの宝石を狙っていたのか、その理由を知り納得した一

方で、フオロボスはこれを我がものにしようとしていた。

「この力をすべて体内に取り込めば、もうあのような狭き場所に永遠にいる必要もあるまい！　さらばだ！」

「まてっ……うわああ!?!」

フオロボスを捕まえようとしたフィリスだったが、その時フオロボスはイオナズンを唱えて妨げる。その爆風は4人に同時に襲いかかり、吹っ飛ばされてしまう。そして、爆風がやみ全員が顔を上げて立ち上がったときには、すでにフオロボスの姿はなかった。

「あつたまきた！」

「あいつ……絶対にぶつとばすぞ！」

「ああ、横取りたあい度胸じゃねえか！　シメあげてやる！」

「まずはガナン帝国城へいつてみましょう！　確かそこに、大賢者の本があつたはずです！　その本に眠る大賢者から、かの破壊神の居場所を聞き出しましょう！」

「そうだな！　みんな、いくぜ！」

次の目的地を、本のある城へと決めた一同は安全な場所にラヴィエルを連れて行きそこで彼女の傷をいやす。

「ラヴィエルさん、ここで待っていてくれ……」

「あのようなものに、決して渡してはいけない……力を、与えてはいけない！　女神の祈りを、取り戻してくれ……頼む！」

「わかってる！　あたし達に任せてくれ！」

そうして宝石の奪還をラヴィエルからたくされたフィリス達は、速攻でルーラを使ってガナン帝国城へ向かったのだった。

ガナン帝国城に到着したフィリス達は、城の中に入りかつて賢者の本があつた本棚へと向かう。あの本はセルフィスが賢者の権利を得たあとで、ここに返されたのだ。

「ありました！」

同じ本棚には、確かに大賢者の本があつた。セルフィスは素早くそれを開いて話しかける。フィリス達にも賢者の声は聞こえるものの、ちゃんと意志疎通が出来るのは、セルフィスだけのようだ。



「ううううううううん……むにやむにやむにや……」

「大賢者様、目を覚ましてください！　どうか、あなたのお力をおかしてください！」

セルフェイスが必死に声をかける横で、破壊神と聞いて驚きついてきたサンデイがあきれる。

「ねえねえ、ホントにこの本があいつをかつて封印した、大賢者なワケ？　本である以前に眠そうで、やる気が微塵も感じられないんですケド」

「うーん……でも、ほかに手がかりもないしなあ。　というか、なんでサンデイも一緒にきたんだ？」

「だって気になるじゃん。　もしかしたらその破壊神ってヤツ、前にアタシが間違っつてよんじやったアイツと関係あるかもしれないし……もしそうだったら、マジヤバじゃん。　ファイリスらのことも心配だしね」

「そっか」

以前にサンデイが間違っつて扉を開いたことで呼び寄せてしまい部屋に閉じこめていた魔物も、破壊の女神だった。　なにか関係があるかもしれないと思ったサンデイはこの目で確かめつつ、同じようにファイリスが相手を出来るかを知りたかったようだ。

「……ああ……よくねた……あれ、またきみだよねえ？　ぼくが賢者の資格を与えた……」

「はい、賢者の資格を得たセルフェイスです。　今回、破壊神フォロボスがよみがえるという宣言を聞いたことで、以前にかのものを封印したという貴方の力をお借りしたいと考え、ここにきました」

「あ………がんばって封印していたのに、その効力が切れちゃったのかあ……どおりで本の中で眠っていたような、ずっと起きていたような、変な錯覚に襲われるはずだよお」

「錯覚？」

意識を取り戻した大賢者は、大昔に自分が破壊神を封印したときの話をする。

「ぼくはね、破壊神というおつそろしいヤツ宝の地図の中にある洞窟

に封印していたんだ。その封印を永いこと続けるために、ぼくはこの身を本に変えて、本の中に地図を入れていた……そして、その封印に自分の力をそそぎ込み続けていたせいで、ぼくは眠くなっちゃうんだよ」

「マジの話だったんだ!」

「だけど、封印している時間が余りにも永かったせいもあるけど……最近世界に色々起きてしまったせいかな。それで破壊神も影響を受けて……力がみなぎったりなんかして、本気ではないとはいえ封印を打ち破っちゃったみたいなんだよね」

「影響……」

「ぼくがここに長年、数多くある本の中の一冊として納められてしまっていたせいだろうね。皇帝の野心がヤツに力を与え、天使の憎悪が封印を弱めた。あの日の出来事が決定打となって、宝石の存在を知ったヤツは、自ら封印を破り宝石を狙って、きみ達の前に現れた。まあ天使が憎悪を抱いた原因が皇帝だから、皇帝がすべて悪いってことにしとくね」

「ザックリしすぎているけど否定できない!!」

大賢者が、封印が解けてしまっている原因についてかいつまむように説明をした。やはりこれもまた、あの出来事がキツカケだったようだ。となれば、とフィリス達は意を決する。

「だったら、もう答えは一つだな」

「ええ、ここにもガナン帝国が結局絡んでいた以上……私達が立ち向かわないわけにはいかないわ」

「やれやれ、この帝国も根が深いぜ……。だったら徹底的に根っこから、引っ張り出して処分しねえとな!」

「大賢者様の御意志を継ぎ、僕達で再び破壊神を封印しましょう」

4人は、破壊神フォロボスと戦うことを決めた。フィリス達の意志を聞いた大賢者は、フィリス達に告げた。

「じゃあ、ぼくのなかにある宝の地図を使ってその洞窟にはいって。

そして、ぼくをつれてヤツと戦い、この本を使って封印するんだ。

封印するまで徹底的に戦い力を弱らせてくれ。お願いね」

「ああ、やってやるさー！」

大賢者の言葉に対しうなずくと、ファイリスはぐつ、と拳を強く握りしめる。

「もう何度目かはわかんないけど……世界を滅ぼそうとする奴らから、世界を守るぜ！」

## 40 「破壊の神を討て」

封印を破り地上に現れた破壊神フォロボスが、フィリス達から女神の祈りを奪っていった。その女神の祈りを取り戻し、フォロボスの野望をくい止めるため、フィリス達は大賢者の協力を得て戦いの地へ足を踏み入れた。

「この地図の奥に、その破壊神はいるよ」

「そういえばこういう地図の洞窟って、なっがーい道があるし途中で魔物がわんさかと出てくるけど……これはヤツのところ直でいけるのか？」

「うん。 僕のでそうしておいた」

「すげえ」

道中の魔物と戦わなければ体力を消耗せずに全力で大ボス…フォロボスに挑める。 なんともありがたいことである。

「でも、ようやく外に出られたのに、なんでわざわざ自分が封印されていた洞窟まで戻ってきているのかしら？」

「きつと、宝石を奪ったんならその宝石を自分の中に取り込むまでに時間が必要なんだろうね」

「皮肉にも、その洞窟は地図でもない限り誰かに侵入させることもないから、ひっそりと力を蓄えるにはうってつけだったわけか」

「本当に双方にとっても、皮肉ですね……」

大賢者にとっては自分が封じ込めるために用意した地図の洞窟がフォロボスにとって力を蓄える隠れ蓑に最適だったという皮肉。

フォロボスにとっては自分を封じ込めるために用意された牢獄ともいえる洞窟こそが力を蓄える隠れ蓑に最適だったという皮肉。

イアンやセルフイスの言うとおり、二つの皮肉が重なっている。

「多分、前にあんた達が倒してくれたあのフォロボシータ？というヤツと関係があるよね？」

「ええ、同族だと思うわ……あれも、相当に強かったわね……」

「そこから推測できるに、おそらくは」

「今までとはケタ違いだろうな……エルギオスとか、よりも強いかもしれないねえ。やばいかもな」

サンデイ、クルーヤ、セルフィス、イアンがそう語っていき、フォロボスは今までとはまた違うレベルの大物であると予感をさせる。

だが、フィリスは自分の剣を強く握りしめていた。

「だけど、あたしは戦いたい。そして、必ずかって世界を救って、宝石を取り戻したい」

「そうよね、あなたなら……そういつてくれると思ったわ」

「ええ。僕も、戦いたいと考えているのが僕だけだったら、どうしようって思っていました」

「んじや、選択も答えも、一択のみってことでもいいよな!」

「ああ!」

そう4人はフォロボスと戦うため、大賢者の本に入っていた地図を広げ、そこに現れた洞窟を見つめる。そのとき、フィリスは自分についてこようとしていたサンデイを横目でみて、彼女に告げる。

「サンデイはアギロさんと、待つてくれ」

「え、だけど」

「あんたにもしものことがあれば、あたしは女神様に顔向けができないし……あたしがイヤなんだよ。だから、サンデイはあたしの帰りを信じて、待つていてほしい」

サンデイとしてはフィリスと破壊神の戦いを、最後までしつかりと見届けたかったのだろう。だが、自分がそこにおいても足手まといなのもまた事実。ここは、フィリスの言葉を受け入れるしかなかった。その気持ちを込めて、フィリスに向かって言い放つ。

「あんたが絶対に気を使わない、爪のお手入れ! 帰ってきたときには徹底的にやってやるんだから覚悟しなさいよっ!」

「あつははは、そいつは手厳しいな……でも、受けるために必ず帰ってくるから、予約を一ついれえおくよ!」

そうして天の箱船に帰って行ったサンデイを見送ったフィリス達は、洞窟に足を踏み入れる。

「よし、いくぞみんな!」

「ああ！」

「ええ！」

「はい！」

宝の地図の洞窟は、大賢者の言うとおり短いものだった。少し進んだ先に、自分たちが追いかけてきた破壊神が存在していた。

「破壊神フォロボス！ 女神の祈りを返してもらおうぞ！」

「大賢者の息がかけられていたか……」

フォロボスは、彼らがここにいる理由が大賢者の導きであることを見抜きながら、自分の胸に埋め込まれたあのマゼンタの宝石をフィリス達に見せつける。

「その女神の祈りは、ここにある！」

「ああ?」

「一体化には成功した……だが、まだ完全には力を吸収できてはいない……だというのに、貴様等！ じゃまをしにきおって!!」

そう、ここにきて自分の野望を邪魔しようとしてきたフィリス達に怒りを見せたが、急に余裕が生まれたのか落ち着き始めた。

「だが、まあよい。これは、我の力をさらに強める絶好の機会ともとれる。貴様等の生命力もまた、わが破壊の力の糧にしてくれよう！」

「誰もお前なんかの力の糧になんてならねえよ！ あたしらがお前を屠って、世界の滅亡をくい止めてみせる！」

そう言つてフィリスが剣を構えると、それを合図としていたかのよううに3人は動き出した。クルーヤがイアンにバイキルトをかけるのと、ためていた力と共にその攻撃力を解放してフォロボスに先制ダメージを与える。

「フアア！」

「くっ……！」

フォロボスはその一撃を受けながらも耐え抜きイアンを弾き飛ばすと、両腕についた刃でフィリスに攻撃を加えようとした。それをフィリスは盾で防ぐがそれが精一杯で攻撃の隙をつけなかった。

「はああっ！」

「ファッ！」

「そこだ！」

そこにイアンが飛びかかり蹴りを入れるとフォロボスはイアンに反撃をし、その隙についてファイリスが剣を振るいフォロボスに一撃を食らわせる。直後、フォロボスはイオナズンを放って二人を同時に吹っ飛ばす。

「ドルマドン！」

「ドルマドン！」

そして、今度はドルマドンを放とうとしたがそれをセルフイスのドルマドンが相殺した。そしてセルフイスはシャイニングボウを、続けてクルーヤがイオナズンを放ってフォロボスにダメージを与える。「メラゾーマッ！」

「ぎやあっ！」

フォロボスは反撃でメラゾーマを放ちクルーヤを攻撃した直後、セルフイスに接近して刃の腕で攻撃をした。その攻撃をセルフイスは盾で防いだが、その一撃により壁にたたきつけられる。

「イオナズン！」

「うあああ!!！」

立て続けにファイリスたちは、強力な爆裂呪文を浴びせられ大ダメージを負ってしまった。

「く……うう…………！」

特にファイリスは、打ち所が悪かったようであり肩を痛めてしまった。剣は意地で握っているようなものであり、力はあまり入っていない。それに気付いたフォロボスは一気にファイリスに接近し、刃の腕を振るいファイリスの痛めた肩を切り裂いた。

「うああっ！」

「ファイリスッ」

「てめえっ！」

そこにイアンが飛びかかりフォロボスに氷結らんげきを食らわせて、フォロボスを壁にたたきつける。追撃で拳を打ち込むイアン

だったが、至近距離で反撃のドルモーアを受けてしまった。

「ぐああ！」

「これで殺す……ドルマドン！」

「マホカンタツ！」

立て続けにドルマドンがイアンをおそおうとしていたが、そこに自身にマホカンタをかけたクルーヤが飛び込んできて、イアンをかばい相手のドルマドンをそのまま跳ね返した。

「ムンツ！」

そのドルマドンに耐え抜いたフォロボスは、いてつく波動を放ってクルーヤたちにかかっていた補助魔法をかき消してしまった。それによりマホカンタを消されたクルーヤに向かって、フォロボスは再びドルモーアを放ちクルーヤに傷を負わせる。

「うう……い！」

その魔法攻撃により体に激痛を与えられたクルーヤは座り込み、杖を支えに立ち上がろうとする。そして、遠目で地面に倒れているイアンやセルフィス、肩から流れる血を必死に押さえつけるフィリスをみて、蔑みの目を向ける。

「貴様等も哀れなものだなものだな、このような天使に味方していなければ、死に急ぐこともなかったはずだというのに！」

「な……てめ……あいつが天使だったことを知っていたというのか!?!」

「この女神の祈りが教えてくれたのだ、この娘は人間ではない……人にも天使にもなれず、ただこの世界を漂うのみのこの者を」

「……」

人にも天使にも属さないもの。そういわれフィリスは歯ぎしりをたてる。そんな彼女にフォロボスが歩み寄り、彼女の首に腕の刃を突き立ててきた。

「この存在がともにあるものに災厄をまねき、このような惨劇をうむのであれば、我がその命をもらい、災厄を世界にはびこらせよう」

「なに?!」

「どうせこのものは天使と違い短命だ、普通の人間と同じ時間しかい



きられまい。であれば、我が力となれば幸福であろう」

「そんなこと……させるかあ！」

それをきいたフィリスは力づくで剣を突き上げ、フォロボスの腹部にそれを刺した。

「ぐあー!」

「あたしはてめえなんかの力にならねえよ、ヴァーカ！」

突然の攻撃にひるんだフォロボスをフィリスは投げ飛ばしつつ、フォロボスをにらみつけてそう吐き捨てた。

「かは、はあ……!」

地面に倒れていたセルフィスは、意識を取り戻し起きあがる。体の節々は痛むが、命があるから立ち上がった。そして、自分の視線の先でフォロボスが大賢者の本に気づいてそちらに向かって魔力を放とうとしていた。

「我を封印したにくき大賢者も、本となれば力もだせまい! ここで燃やしてくれよう!」

「させない!」

そこにセルフィスが飛び込んで大賢者の本を胸に抱えた。直後、フォロボスの放ったメラゾーマがセルフィスの体を包み込む。あらかじめマジックバリアをかけていたが、それは先ほどの凍てつく波動にかき消されてしまったので効果がない。そのため、魔法は直の力でセルフィスに襲いかかっていることになる。

「うわああああー!」

灼熱の炎がセルフィスの体をおそい、その熱と痛みが彼をむしばんでいく。この状況をなんとかせねば、自分だけでなく本まで灰と成ってしまう。

「このままでは、ほん、まで……も……!」

「本ごと、燃え尽きるがいい!」

「させ……ないっ……!」

そこでセルフィスは自分の魔力を練りフォロボスの魔法を止めようとした。そのときだった。

「メラガイアーツ！」

「うがああ!!？」

立ち上がったクルーヤが、フォロボスに向かって巨大な火の玉を放ったのだ。それにより今度はフォロボスが火達磨となり、セルフィスは一命を取り留めた。

「焼かれる気持ち、理解できたかしら!？」

「貴様っ」

「次は極寒を味わせてあげる！ マヒャデドス！」

そういつてクルーヤは、先ほどの煉獄の魔法と打って変わって極寒の魔法をフォロボスにぶつける。相反する二つの力を受けたことによりフォロボスの体は安定感をなくしており、そこにイアンが飛びかかってくる。

「ぐほお!？」

「オレの拳の威力を思い知ったか!？」

「小癩な!？」

せいけんづきを放ったイアンにフォロボスは腕の刃で反撃をしようとしたが、イアンはそれを棍の技を使い受け流しつつ反撃を加えた。天地の構えを使用したのだ。

「ベホマラーツ!？」

イアンとクルーヤがフォロボスの相手をしている隙に、セルフィスは立ち上がって仲間全員に回復魔法をかけた。これによりセルフィス自身も体の自由が利くようになり、弓矢を構えてある技を放つ。

「さらに……これを受けてもらいます！ シャイニングボウツ!？」

「うぐああああ！ にくい、光がにくい!？」

「やっぱり光が苦手だったのね……!？」

先ほどもシャイニングボウを受けたときも、フォロボスは激痛のリアクションを見せていた。それにより、フォロボスの弱点は光だと気付いたのだ。それにより弱ったフォロボスに対し、イアンとクルーヤがおいうちをかけていく。

「フィリスさん！ 今お助けします……ベホイムツ!？」

「さんきゅ、セルフェイス」

セルフェイスはもつとも傷が深そうなフィリスのところへいき、彼女に強力な回復魔法をかける。それによりフィリスの体の傷は完全に消え、それにより動けるようになったフィリスはセルフェイスにかつと笑いかけると立ち上がる。

「おいその破壊の神とやらあ！ さっきはよく好き放題いってくれたな！ 適当なことを言っただけじゃねーよクソが！」

フィリスは真紅の瞳でフォロボスをにらみつけ、さきほどはあまりできなかった言葉の反撃にでる。激しく大きな怒声は、引き続き彼女の口からでてくる。

「あたしは、災厄なんか呼ばない！ 向こうから勝手にやってくるんだったら、全部ぶつつぶしてやるだけだ!!」

フィリスは剣を握り技を繰り出す体制に入る。それを妨げようとフォロボスが攻撃を仕掛けようとしたが、それをセルフェイスがイオグランデで防ぐ。

「あたしは……天使でも人でもどつちでもいい！ ただ、今あたしが人としての運命を歩んでいるんだたら！ 人として生きて、人として死にたい！ ただ、それだけだ！」

彗星の剣の刀身は、光を放っている。その光はやがて稲妻へと変わっていき、フィリスの腕を包むほどに放電した。

「人として与えられた……限られた時間しかないのなら、その時間のギリギリまで……生きていたいんだ！ あたしは自分の生死は自分で決めるんだよ！ ほかの誰かに生死を決められて！ たまるかあーっ!!」

その声に剣が答えるように、まばゆいほどの雷光がはなたれフィリスの体を包み込んだ。そして、フィリスは技の名前を叫びながらそれを放つ。

「ギガ・ブレイク!!!」

「ぐあああーっ!!」

フィリスの最後の剣技が、決まった。フォロボスは雷撃につつま

れ腹部を大きく裂かれ、その胸に埋まっていた女神の祈りが地面に落ちる。

「いまだよ、ぼくを……本を開いて！」

「はいー！」

今こそ破壊神封印のチャンスだと悟った大賢者は、セルフイスにこの本を開くよう頼む。セルフイスはその本を開き、そこにかかれていた呪文を口にした。

「人の世をほろぼさんとする破壊の神よ、汝の存在を否定し我らが世を守らんとするため、ここに封印する！ 破壊の神よ、この地にて永き眠りにつきたまえ!!」

「ぐあああーっ!!」

セルフイスがそのページに書かれていた呪文を読み上げると、本は力を発揮したようでありそこに光の渦が発生してフォロボスを吸い込んでいく。それにフォロボスは吸い込まれていき本の中に入りそうになるが、そのとき自分の腕を伸ばして、イアンとクルーヤの腕をつかむ。

「なんだあつ!？」

「きやー、なになに!？」

「このまま封印はされん！ 貴様等も、道づれにしてくれるわあああ!!」

「させてたまるかああつ!」

仲間達を巻き込んでいこうとしたフォロボスの両腕を、フィリスは彗星の剣を振るい切り落とした。それによりフォロボスは、両腕を失う。

「なっ」

「無駄にあがくな、とつとと封じられる。そして二度と表に出るな。」

破壊しか能のない悪党は……この世に不要だ」

そうフィリスは冷酷に破壊神に吐き捨てると、フォロボスは本の中に吸い込まれていった。そして、光はやみそのページには、封印の印が描かれていた。

「消えたか……!」

「無事に封印はできたよ……大成功だね……」

どうやら破壊神フォロボスの封印には、成功したようだ。フィリスたちもやや満身創痍ではあるが、本の大賢者の声も少し小さい。心配したセルフィスは声をかける。

「どうなさったんですか?」

「うくん……平気だよお。ただ、また破壊神が出てこないようにつて、封印を守る力を与えなきゃいけないから、また眠くなっちゃっただけだよお」

どうやらまた、睡魔におそわれてしまったようだ。前と同じ調子に戻った大賢者にたいし4人は苦笑をしていたが、大賢者は思い出したようにセルフィスにお願いをする。

「その前に、セルフィス」

「はい」

「きみにお願いがあるんだ。ぼくをガナン帝国じゃない、もっと安全な場所に保管してよお。あそこは誰もいないけど、いろんな力がうずまいて……あそこにいたらいつまた、封印が解けるかわかんないんだあ……。だから、きみが……ぼくを、守っていつて封印が解けないようにみはってほしいんだあ」

それを聞いたセルフィスは、自分の家系と将来を考えればそれが実現できるかもしれないとおもい、大賢者に向かって力強くうなずいた。その瞳には確かな決意が、やどっていた。

「はい、貴方のことは僕の血族が代々を持ってして、受け継いでいきますよ……。ベクセリアの長の一族として、貴方の封印が破れぬよう、お守りいたします……!」

「うん、ありが……。とう……。じゃあ、ぼくもう眠るから……。あとは、よろしくねえ……。おやすみなさい……」

そっとうい残して、大賢者は眠りについてしまった。セルフィスはそっとおやすみなさいと声をかけ、本を胸に抱く。

「重要なお役目ね」

「ええ。ですが、果たして見せましょう。僕とて、賢者になったのは伊達ではないですから」

そう語るセルフフィスの表情は、いつものように穏やかなほほえみを携えながらもどこか力強さがあった。そんなセルフフィスの表情をみたフィリスは、仲間たちに言う。

「もう一度、世界を救えてよかったな」

「ああ」

「ええ」

「はい」

イアンとクルーヤとセルフフィスの返事を聞いたフィリスは、地面に落ちていたマゼンタの宝石を拾い上げる。

「さて、この宝石も帰ってきたことだし……ラヴィエルさんのところへいこうよ」

「だな」

そうして、破壊神の封印に成功したフィリス達は、すでになにも存在しない洞窟を出て行ったのだった。

#### 41 「星は、またたく」

破壊神フォロボスはファイリスたちにより倒され、本の中に再び封印された。大賢者はそのときにまた力を使ったらしく眠ってしまったが、もうしばらくは目覚めることはないだろう。大賢者の本は、セルフェイスがこれからベクセリアの町と共に守ることを決めた。

「ラヴィエルさん！」

「みんな、無事だったようだな……よかった」

洞窟をでたファイリス達は、ラヴィエルの元に帰ってきた。ラヴィエルは、若干戦いの痕跡を残し消耗をしながらも、ファイリス達が無事に全員そろって帰ってきたことにたいし、喜びつつも彼女達の体を心配した。

「ひどい傷を負ったようだが……大丈夫か」

「ああ、ここにいる賢者さんのおかげだぜ！」

「そ、そんな」

セルフェイスが仲間達の傷が癒えるまで必死に回復魔法をかけたおかげで動けると言うことを、ファイリスは素直に告げた。それにたいしセルフェイスは照れ、イアンとクルーヤが笑いながら彼をからかう。そんな3人を横目に、ファイリスはフォロボスから奪い返した例の宝石を彼女に手渡す。

「女神の祈りも、無事に取り戻したぜ！」

「……ああ……。この輝きはまごうことなく、女神の祈り。取り返してくれて、ありがとう」

女神の祈りを手にしたラヴィエルは微笑みかけると、その宝石の力を使うことを決める。

「さて……早速で悪いが、私の願いをこの宝石でかなえることとしよう」

「ラヴィエルさんの、お願い？」

確かにその宝石は天使の願いだけを叶える力があるらしいし、この世界を探してみてもその願いを叶える権利がありそうなのは、ここに

いるラヴィエルくらいのものだ。

「かまわないな」

「まあ、いいけど……」

フィリス達は息をのんだ。果たしてラヴィエルはこの宝石になにを願うつもりなのだろうと。4人は彼女が願いを叶える様子を最後まで見届けることを決め、じつくりとラヴィエルをみる。

「……女神の祈りよ……私の願いを聞き入れて……」

そう、ラヴィエルは女神の祈りをその胸にだき、自分の中にある願い事を思い描いた。すると女神の祈りは強い光を放ち、その光は天にのぼっていった。

「え?」

その光がやんだと思ったら、今度は天から光が柱となって降りてきた。そして、その光の中から一人の翼を持った男性が現れ、一同は驚く。中でも特に驚きが大きかったのは、その男性をよく知っているフィリスだった。フィリスは、男性の名前を口にする。

「い……イザヤール、様!」

「フィリス」

「げ、幻影じゃない……!? 会話もできてて肉眼で見えてる!? なんで!? あたしだけ!」

「オレ達も見えるぜ、どうなってるんだ!」

フィリスの声に返事をしたことで、ここにいるのはイザヤール本人であることを悟るフィリスは戸惑う。その姿は、やはりイアン達にも見えているようだ。そんな4人に対し、ラヴィエルは解説をする。

「いくら女神の祈りを使えども、死した存在をよみがえらせるのは不可能……天使もまた、例外ではない。だが、せめて……もう一目だけでも、君と彼を会わせてあげたかったのだ。私も、彼と話したかった……だから、一時的に魂を、ここに呼び寄せたのだ……」

「……ラヴィエルさん……あなたは、いったい……」

ラヴィエルにたいし抱いていたそもそもの疑問を本人にぶつけてみると、彼女は話す約束をしていたことを思い出し、自分の正体を



ファイリス達にはなし聞かせた。

「私は、運命を見守る役目を与えられ地上に残された、天使の一人。

そして、大天使エルギオスのもう一人の弟子にして、この天使……イザヤールは時を同じくして生まれた兄妹である」

「きよ、きよーだい!？」

その発言に対し、ファイリス達はさらに驚く。特にファイリスは、天使の中のきよようだいの概念に対しある話をきいていたので、それも口にした。

「え、でも天使のきよようだいはレアケースって100年くらい前に聞いたことがあるんだけどおっ!」

「そうなの?」

「うん! しかもあたし、イザヤール様から少しも聞いたことなかったし! 兄妹の存在なんて……今が初耳だ!」

「当然だ……お前には話さなかったからな……」

イザヤールは、かつて自分が彼女と共にエルギオスに師事していたときのことを思い出し、兄妹がなぜ別々の道を進んだのかを説明する。

「かつて我らが師・エルギオスは……人を愛し、人を間近で守るため、地上に降りていく決断をした。私は、それに異を申し立て天使界に残り」

「私はエルギオス様の教えに従い、ともに地上に降りた……あとは、君達がしる通りだ」

「……………」

エルギオスの悲劇の前に、そのようなことがあったとは。ファイリス達は呆然とし、突然明らかになった真実を受け入れるしかないと思わざるを得なかった。その傍ら、イザヤールはラヴィエルと、会話をする。もう何百年ぶりかの、兄妹の会話だ。

「まさか、お前が私とファイリスを再会させるとは思わなかったぞ……ラヴィエル。お前とも、また会えるとは思っていなかった」

「ふふっ……イザヤールこそ、ファイリスが己の願いを叶えてくれていることを知りながらも、心残りがあっただろう。私は星をみて、

知っているのだぞ」

「……確かにな……」

そのとき、イザヤールの心残りに関する話題が出てきたので、フィリスは首を傾げる。

「師匠の、心残り？」

「なんだ？」

フィリス達がイザヤールの心残りにたいして疑問を抱いていると、イザヤールは剣を手に取りその辺の草をなぎ払った。

「一時的ではあるが、ものにふれられるようにもなっている……私も長いことはここにはいられんだろう。その前に、どうしてもやりたいことがある」

そういつて、イザヤールはフィリスの方を向いた。

「フィリス」

「はい」

「私と、一騎打ちをしてほしい」

「!？」

イザヤールの申し出に対し、フィリスは驚く。彼の願いというのは自分と剣をあわせることだったのだ。イザヤールは、フィリスに話を続ける。

「お前があのときから、どれほど強くなったのか……私は我が身をもってして、確かめたい。お前から感じた戦いの才、それが正しく導かれたのかを知りたい。私の未練は、お前が確かに成長したのかどうか気がかり……といったところだろう」

「……」

「守護天使フィリスよ、このイザヤールの未練をはらし成仏させてみようよ！」

「望むところです！ あたし、全力でいきますよ！」

さまよえる魂の未練をはらし、成仏させることもまた天使の役目だと、フィリスは教わっていた。そして、今ここにいる魂は目の前のイザヤールのみだ。役目を果たす以上に、師匠に自分の強さをみせ

たいと感じたフィリスは、彼の申し出を受けるために剣を抜いた。

「みんな、みていてくれ！」

「おう、バツチリ見守るぜ！」

「貴女達の強さ、僕もこの目で見て心に刻みます」

「いつもの強さ、全力を見せちゃって！」

フィリスはこの一騎打ちを見届けてほしいと、仲間達に伝える。

すると彼らは笑顔で、フィリスに激励を送り出した。それにフィリスも笑顔でこたえる。

「彼らにも見せるのか」

「あたしが強くなって、いくつもの戦いをかいくぐり……世界を、人々を守る事ができたのは、一緒にいてくれた彼らのおかげなんです！」

だから……共に戦ってきたからこそ、今！あたしの強さを改めてみてほしいんです！」

そう、仲間達にたいする素直な思いを真剣に語るフィリスにたいし、イザヤールは少しだけ口角をあげて

「ではいくぞー！」

「はいー！」

この一騎打ちのルールとしては、相手の剣をその手から離させた方が勝ち、らしい。フィリスは素早く動いてイザヤールに剣を突き立てようとしたがイザヤールは自分の剣でそれを防ぎ、唾競り合いの末にフィリスをはじきとばした。だがフィリスはすぐに体制を立て直し再びイザヤールにつっこんでいき、彼の剣に激しい一撃を入れた。イザヤールは耐えるが、受け止めるのが精一杯と言った様子だった。

「激しい剣のうちあい、ですね」

「ああ……スピードも攻撃力もハンパなもんじゃねえ……二人とも本気の全力だぜ」

「でもなによりも……二人とも、とつても楽しそう」

セルフィスもイアンもクルーヤも、2人の剣試合に釘付けになっていた。以前に聞いた話によれば、天使は自分より格上の相手には逆らえないのが掟であり理であるそうだ。だから、天使だった頃はこ

んな風に剣を打ち合わせる試合形式の稽古すらできなかつたのかも  
しれない。だから、この瞬間はまさに双方が待ち望んだものなの  
だろう。

「そこだあぁー！！」

「はっ！」

そして、今。 その一騎打ちには終止符が打たれようとしていた。

イザヤールの強い一撃に弾き飛ばされそうになったフィリスだっ  
たが、そこでふんばりをきかせ剣を大きく逆手もちでふり、イザヤ  
ールの剣に命中させた。 その一撃は大きく、彼の手から剣が離れてい  
き、その剣は地面に刺さった。

「フィリスが勝った！」

「勝負があつたな」

イアン達はフィリスが勝ったことに対しまるで自分のことのように  
喜び、ラヴィエルも静かに笑う。 一方、イザヤールも自分の敗北  
を素直に認め、達成感に満ちたフィリスに声をかける。

「見事だ、フィリス……お前は、この師をまことに、越えた」

「イザヤール……様……！」

「七つの果実を集め女神を目覚めさせ、我が師・エルギオスを墮天使の  
呪縛から救い……さらに幾多もの邪悪なる存在から世界を救った  
……まさに、守り人にふさわしい存在になったな」

イザヤールの言葉にたいし、フィリスは額の汗を拭いつつ思ってい  
たことをそのまま口に出した。

「あの時間……あたし、ずっと続けばいい、終わらせたくないなんて考  
えてしまいました。 それほどまでにあの試合は、あたしを満たした  
んです」

「……やはりお前は、天使と言うよりは戦士だな」

彼女を弟子にとることを決め、以降教育していたときのことを思い  
出し、イザヤールはずっと感じていたことをそのまま口に出した。

彼女は天使としての生を授かるよりは人間として生まれ、戦士として  
弱き者を守るものになったほうが幸福ではないかと思っていたこと  
を。

「だが、私も同じことを考えていた……お前の強さを、あの距離で感じられたらからな。力だけでなく、心も……強くなった」

「ははっ」

そしてイザヤールは改めて、彼女が握っている剣にも目を向けた。一度も振るったことはなかったが、それでもかつての所有者は自分だったからだ。

「かつて私がエルギオス様よりたくされた剣を、今私の弟子であったファイリスが引き継ぎ……進化させている。大切に、してくれていたのだな」

「当たり前です。この髪飾り同様、あなたの形見ですから。簡単には手放したりなんてしません」

ファイリスは、当たり前のようにイザヤールにそう告げた。

「ファイリスー！」

「わっ」

2人で語り合っていたファイリスの元に仲間達が駆けつけた。3人ともファイリスに賞賛の言葉を贈り、ともに笑いあっていた。そんな彼らの姿をしばらく見守っていたラヴィエルも、彼らの輪の中にはいつてきた。

「君達がわかりあえてよかった」

「ラヴィエルさん」

「……私はただみているだけだった。エルギオス様の時も、先の件の時も、今までただただこの世界のすべての運命を、役目に従ってみているだけで、なにも出来なかった……」

そう語るラヴィエルは、寂しげだった。今までの後悔が募っていたのだろう。自分は干渉できなかったのではない、干渉しようとしなかっただけなのだといいたいようだ。そして、今回この願いを叶えたのは、兄や師匠、そして生き残りの天使に対する贖罪のつもりだったようだ。そして、ひとつの選択をファイリスに与えようとする。

「……君も……君が望むのであれば女神様に願い、ほかの天使と同じ

ように今からでも星となれる。もう残された天使でなくてもいい……救済を得られる。孤独でなくなるはずだ」

「え、だけどそれじゃあ……!」

「いや、その申し出はあたしは受けないよ」

「?」

仲間達がラヴィエルの言葉に対しある予感を覚え反発をしようとしたとき、ファイリスがすぐに口を開いて彼女の提案を否定した。

「もうあたしは、天使にも神にもなれなくていいんだよ。今すぐ星にもならない。人間としての生を授かったことを後悔していないし、する必要もない……孤独も感じないしな」

ファイリスは、ほかの天使が星となった夜……あの、ほしふぶきの夜を思い出しそのときから胸に秘めていたものを口に出した。

「星になるのはあたしが、人間として最後の一瞬まで生きてあと……そのあとでいい。あたしは、今生きているこの意味を無駄にしたくない。だから、みんなにはあたしが星になる時まで……その星の一つになれるかどうかを、見守っていてほしいんだ」

「……」

「そして、人として精一杯生きて、生まれ変わって星になれたら……世界を見守っていききたい」

自分が羽と翼を失い地上に落とされ、世界を救うために旅立ち戦ったこと。そして人間になったこと。ファイリスはそれが悪かったなんて少しも感じていない。一緒に戦ってきた仲間をみて、改めてそうおもう。

「そのおかげで、彼らと出会えた。これを無駄にするわけにはいかないよ」

「ファイリス……」

「だからさ、あたしは人となれてよかつたと思うよ。生きてほしいというのがイザヤール様の真の望みなら、あたしはずっと生きることのでかなくてあげたい。それこそが、あたしが今できる……星になって天使達や、イザヤール様にできる、一番の恩返しなんだと信じるよ」

「そうか……それが、君にとってもつともな救済なんだな」

ラヴィエルは、彼女の気持ちを尊重し穏やかに笑う。そして、イザヤールの方をみた。

「……ファイリス……」

「イザヤール、様」

「確かにお前に生きろと言ったのは私だ。だから、お前が私の願いを聞き入れるというのなら……私はお前を見守ろう。エルギオス様やオムイ様、ラフェット……多くの星々となり、いつまでも……お前の生涯を見届ける」

「……はい」

「だから、遠くに感じる心配はない。私達はあの天に輝く星なのだから。いつだって、ファイリスのすぐ近くにいる」

「はい！」

「そして……私の力をいま、お前に託そう。守り人としての力を……」

そういうと、イザヤールは自分が持っていた剣に手をかぎす。すると剣は光となり粒子となり、ファイリスの持っていた彗星の剣をまとう。

「剣が……」

すると、彗星の剣はその色を徐々に変えていった。青かった刀身は深い夜空の色となりその中を光の粒子が星屑のように舞い、刃の部分も鋭い銀色となり、宝石も穏やかな緑色から鮮やかな真紅の色となる。

「今までより、ずっとずっと美しい剣だわ！」

「このような剣、どのような書でもみただけがありません」

「ああ、切れ味も抜群なのがみただけでわかるぜ」

その剣の変化には、仲間達も驚いていた。ファイリスはまじまじと自分の剣を見つめ、イザヤールが剣についての説明をする。

「それこそ、星空の守り人にふさわしき剣……銀河の剣だ」

「銀河の剣……！」

彼女の剣には新しい名前が、与えられた。

自分の剣が師匠の手により最後の姿になったことにより、フィリスは自分が守り人として認められたことに喜びを覚えていた。

「……あ……からだか……!」

「……そうか、もう時間切れのようだな……」

そのとき、イザヤールの体が透けてきてその体から光が散つていつていることに気付いた。女神の祈りの効力がきれてきて、彼はまた星に還るのだらう。ガナン帝国城での光景を思い出し、それを悟る。

「お別れなのですね……」

「ああ……だが、あの時よりはずっといい……志半ばで倒れ、悲しい顔をさせるより、ずっといい……平和で、穏やかな最期だ」

あのときイザヤールは、フィリスに悲しい顔をさせたことを覚えていた。自分の遺志を継ごうと、無念をはらそうと必死になっていたことにも気付いていた。だから、今こうしてなんの柵もなく互いの思いを確認しあい認め合った……そのような最期をおくることが、イザヤールにとつて幸福であった。そして、消えゆく中でイザヤールはフィリスに告げる。

「フィリス、私はお前に同じことを願ひ続ける。お前が自分で願ったことをかなえてほしいと思つている。最後まで、人としての天命を生きろ……」

「もちろんです」

「星となり輝き続け、お前が我々と同じ星となった……その先のずつとずつと未来で、皆と共に人として生まれ変わればいい……私は、そう願おう」

「はい! あたしもそう思います! ……今までご指導いただき、ありがとうございます!」

そうフィリスはしっかりとイザヤールに礼をした。仲間達も、フィリスと同じ行動をとる。それをみてイザヤールは、彼らはなんにも言わなくても問題はないと悟り、目を閉じる。

「お前が私の弟子で、よかった……」

それだけを言い残し、イザヤールはほほえみながら光の粒子となつ



て消え、天にのぼっていった。

「いっちゃったな……」

「ああ……」

その様子を、フィリス達は空を仰いで眺めていた。これでもう、本当に2度と会うことはないと感じた。そこに、ラヴィエルは話を続けてくる。

「……本当なら天使は、人間の霊のように魂が帰ってくることはない……だから、星になった後は誰とも言葉を交わしたり姿を見ることはできない。女神の祈りなら、短時間とはいえそれを可能にできるんだ。本当に奇跡の出来事といえる」

「うん、そうだね……」

ラヴィエルは自分のためでありながら、フィリスやイザヤールのためにあの宝石の力を使ったのだ。役目を終えた女神の祈りは再び砕け散ったらしい。もう、そこにはなかった。

「ありがとう、ラヴィエルさん。あなたのおかげであたしは、もう一度……大切な人に出会えた」

「……満たされたのなら、よかった」

フィリスが笑顔でそう礼を告げると、ラヴィエルも満足げに微笑みながら翼を広げて旅立とうとする。

「ラヴィエルさんはどうするの?」

「……私は、これからも多くの運命を見つめ、見守り続ける。……独りになろうとも、変わらない」

「……」

そう語るラヴィエルにたいし、フィリスは告げる。

「あたしでいいなら、いつでも対話の相手になるよ! さみしがらなくっていいよー!」

「……ありがとう……」

その言葉を受けたラヴィエルは、小さく笑ってそう告げてから、旅立っていった。ラヴィエルの姿が見えなくなった後、フィリスは座り込んで息を吐く。

「……はあああ~~~~~!」

色々なことがゴリ押しでくるから、疲

れたああ〜〜〜！」

「そうだよなあ……宝石がそろったと思ったら復活した破壊神に奪われて、城に行つて手がかりつかんで洞窟はいつて、そのままその破壊神と戦うし、さいごに天使達とやりとり！」

「疲れない方がどうかしているわね……私達、よくやったわよ！」

「僕に至っては、まだやるべきこともありますし……」

セルフィスのやるべきことというのは、大賢者の本をひとまずベクセリアまで持って帰りそこにおさめることだ。まだ仕事はあるが、今はイベント目白押しの修羅場をかいぐつた達成感を、4人は味わっていた。

「おーいー！」

「ん？」

そんなとき、真上から声が出たと思つたら、天の箱船がこちらに向かってくるのが見えた。そして自分達の目の前で停車すると、そこからサンデイとアギロが姿を見せた。

「サンデイ、アギロさん」

「わあい！ 全員無事に破壊神ぶちのめして、生還したねーっ！ 嬉しくてテンションアゲアゲで、むかえにきたよ！」

「ああ！ 当然だろー！」

サンデイは、フィリス達が破壊神との戦いに生き残り帰ってくるのをアギロとともに待っていたようだ。そして、天の箱船を操っているときに4人の姿を見かけ、迎えにきたらしい。フィリスはサンデイを抱き留めつつ、歩み寄ってきたアギロに声をかける。

「ひとつ、山場を越えたと言うべきか……やるべきことは終わったな？」

「うん」

「そうか。じゃまずは天の箱船にのりな！ 行きたい場所に連れて行くついでに、食堂席でお祝いだ！」

「やったー！」

そういえば戦い続けの疲労により、空腹を覚えていたのだ。また新しい冒険にいく前に、思い切り食卓で食事をして元気を回復した方

がいいだろう。

「さあ、いこうか」

「ああ」

「はい」

「ええ」

フィリスの言葉に対し、イアンもセルフィスもクルーヤも頷いた。3人とも、これからの旅路をフィリスと共に歩むために、天の箱船に乗りこんだ。

この日もまた、夜空で星はひとつひとつ輝いていた。

まるで、地上にいきる人々の命の輝きを、鏡のようにうつしているかのようだ。

星は、いまもこの世界でまたたいているのである。